

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 685 集

あし が さわ  
芦ヶ沢 I・II 遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路関連遺跡発掘調査

芦ヶ沢 I・II 遺跡発掘調査報告書

2018

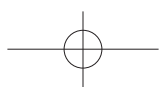
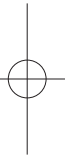
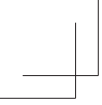
国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
(公財)岩手県文化振興事業団

2018

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
(公財)岩手県文化振興事業団

# 芦ヶ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路関連遺跡発掘調査





遺跡遠景（東から）



芦ヶ沢 I 遺跡（直上）



芦ヶ沢 I 遺跡基本層序 A' (T o - C u 堆積層) 地点 (東から)



T o - C u を截る陥し穴状遺構

## 序

岩手県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越える遺跡や埋蔵文化財包蔵地が残されています。それらは、先人達が創造し歴史が生み出した遺産であり、歴史や文化を正しく理解するうえで欠くことのできない歴史資料といえます。それらは県民のみならず国民的財産であり、これらの貴重な文化遺産を大切に保存し、後世に伝えていくことは、私達に課せられた重大な責務でもあります。

当事業団埋蔵文化財センターは、創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について緊急発掘調査を行い、その記録を保存する処置をとってまいりました。

また、東日本大震災から6年が過ぎ、一日も早い復興が望まれる中、埋蔵文化財センターとしても復興と埋蔵文化財保護の両立を念頭に限られた時間の中で、調査の完遂と迅速化に努めているところでもあります。

本書は、三陸沿岸道路関連整備事業に関連して、平成28年度に発掘調査を行った久慈市に所在する芦ヶ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査結果を収録したものであります。今回の調査により、沿岸地域における縄文時代前期前葉の集落跡と狩猟場等の新たな資料の発見がありました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究に寄与するとともに、埋蔵文化財に対する関心やご理解につながれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成にご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、久慈市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、心より深く感謝申し上げます。

平成30年2月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 菅野洋樹

## 例 言

- 1 本報告書は、岩手県久慈市長内町第 17 地割ほかに所在する芦ヶ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、三陸沿岸道路関連遺跡に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡台帳における遺跡番号と遺跡略号は以下の通りである。  
遺跡番号 J F 49 - 1313・J F 49 - 1304  
遺跡略号 芦ヶ沢Ⅰ遺跡 A S W I - 16  
芦ヶ沢Ⅱ遺跡 A S W II - 16
- 4 発掘調査期間と調査面積は、以下の通りである。  
発掘調査期間 平成 28 年 4 月 6 日～9 月 8 日  
調査面積 芦ヶ沢Ⅰ遺跡 7,000 m<sup>2</sup>  
芦ヶ沢Ⅱ遺跡 4,250 m<sup>2</sup>
- 5 野外調査は、菊池貴広・高橋義介・河村美佳の 3 名が担当した。
- 6 室内整理期間と担当者は、以下の通りである。  
平成 28 年 9 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日／菊池貴広・高橋義介
- 7 報告書の執筆は、Ⅰ章を国土交通省東北地方整備局、Ⅱ章を菊池貴広・高橋義介、Ⅲ章を高橋義介、その他の章を菊池貴広が担当した。
- 8 基準点測量は、株式会社ダイヤに委託した。
- 9 航空写真撮影は、東邦航空株式会社に委託した。
- 10 石器実測は、株式会社ラングに委託した。
- 11 各試料の分析・鑑定は次の機関に委託した。  
火山灰分析／火山灰考古学研究所  
放射性炭素 14 年代測定／パリノ・サーヴェイ株式会社  
石材・石質鑑定／花崗岩研究会
- 12 報告書の作成にあたり、下記の方々ならびに機関からご教示とご協力をいただいた。(敬称略)  
千葉啓蔵・中野敦夫(久慈市教育委員会)、鈴木博之(平泉町教育委員会)、  
千田政博(洋野町教育委員会)
- 13 調査成果は、『平成 28 年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 676 集に公表しているが、内容については本書が優先する。
- 14 各調査に関わる諸記録及び出土遺物は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

## 目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の位置と環境	1
1	遺跡の位置	1
2	遺跡周辺の地形と地質	1
3	基本層序	5
4	周辺の遺跡	6
III	野外調査と室内整理の方法	9
1	野外調査	9
2	室内整理	10
IV	芦ヶ沢Ⅰ遺跡で検出された遺構と遺物	15
1	概要	15
2	検出遺構	15
(1)	竪穴住居跡	15
(2)	住居状遺構	39
(3)	陥し穴状遺構	44
(4)	土坑	64
(5)	焼土遺構	65
(6)	柱穴状土坑	66
3	遺構外出土遺物	90
(1)	遺物の実測掲載基準について	90
(2)	出土状況について	90
(3)	遺物観察表の表記について	90
(4)	土器について	90
(5)	石器について	92
V	芦ヶ沢Ⅱ遺跡で検出された遺構と遺物	112
1	概要	112
2	検出遺構	112
3	出土遺物	112
VI	総括	114
1	遺構	114
(1)	竪穴住居跡	114



(2) 住居状遺構	116
(3) 陥し穴状遺構	116
(4) 焼土遺構	117
(5) テフラ	117
2 遺物	123
(1) 縄文時代早期の土器	123
(2) 縄文時代前期前葉の土器	123
まとめ	130
<b>VII 自然科学分析</b>	132
1 芦ヶ沢 I 遺跡から出土した火山灰同定	132
2 芦ヶ沢 I 遺跡から検出した竪穴住居跡の放射性炭素 14 年代測定	142
報告書抄録	205

## 図版目次

第1図 遺跡位置図	2	第26図 10号竪穴住居跡、	
第2図 遺跡周辺の段丘区分図	3	1・2号住居状遺構	40
第3図 地質分類図	4	第27図 8号竪穴住居跡出土遺物(3)、	
第4図 芦ヶ沢 I 遺跡の基本層序	5	9・10号竪穴住居跡出土遺物、	
第5図 周辺の遺跡	8	1・2号住居状遺構出土遺物	41
第6図 芦ヶ沢 I・II 遺跡全体図	11	第28図 陥し穴状遺構配置図	42
第7図 芦ヶ沢 I 遺跡遺構配置図	12	第29図 1～4号陥し穴状遺構	67
第8図 竪穴住居跡・住居状遺構配置図	14	第30図 5～7号陥し穴状遺構	68
第9図 1・2号竪穴住居跡	17	第31図 8～11号陥し穴状遺構	69
第10図 1号竪穴住居跡出土遺物	18	第32図 12～15号陥し穴状遺構	70
第11図 2号竪穴住居跡出土遺物(1)	19	第33図 16～19号陥し穴状遺構	71
第12図 2号竪穴住居跡出土遺物(2)	20	第34図 20～23号陥し穴状遺構	72
第13図 3・4・9号竪穴住居跡	22	第35図 24～26号陥し穴状遺構	73
第14図 3号竪穴住居跡出土遺物	23	第36図 27～29号陥し穴状遺構	74
第15図 5号竪穴住居跡(1)	25	第37図 30～33号陥し穴状遺構	75
第16図 5号竪穴住居跡(2)	26	第38図 34～37号陥し穴状遺構	76
第17図 5号竪穴住居跡(3)、		第39図 38～41号陥し穴状遺構	77
6号竪穴住居跡	28	第40図 42～45号陥し穴状遺構	78
第18図 4・5号竪穴住居跡出土遺物(1)	29	第41図 46～49号陥し穴状遺構	79
第19図 5号竪穴住居跡出土遺物(2)	30	第42図 50～53号陥し穴状遺構	80
第20図 5号竪穴住居跡出土遺物(3)	31	第43図 54～57号陥し穴状遺構	81
第21図 5号竪穴住居跡出土遺物(4)	32	第44図 58～61号陥し穴状遺構	82
第22図 5号竪穴住居跡出土遺物(5)	33	第45図 62～65号陥し穴状遺構	83
第23図 5号竪穴住居跡出土遺物(6)、		第46図 66～71号陥し穴状遺構	84
6～8号竪穴住居跡出土遺物(1)	34	第47図 陥し穴状遺構・土坑出土遺物	85
第24図 7・8号竪穴住居跡	36	第48図 焼土遺構配置図	86
第25図 8号竪穴住居跡出土遺物(2)	38	第49図 1～3号土坑、A区焼土遺構群	87

第50図	B・C区焼土遺構群	88	第63図	岩手県内の縄文時代前期前葉の 竪穴住居跡(3)	120
第51図	D・E区焼土遺構群、7号焼土遺構	89	第64図	岩手県内の縄文時代前期前葉の 竪穴住居跡(4)・陥し穴状遺構	121
第52図	遺構外出土遺物(1)	94	第65図	陥し穴状遺構の形態分類(模式図)	122
第53図	遺構外出土遺物(2)	95	第66図	陥し穴状遺構主軸グラフ	122
第54図	遺構外出土遺物(3)	96	第67図	多段結節回転文土器	124
第55図	遺構外出土遺物(4)	97	第68図	久慈市・軽米町(大向II遺跡)出土の 縄文時代早期遺物集成図	126
第56図	遺構外出土遺物(5)	98	第69図	土器集成図(1)	127
第57図	遺構外出土遺物(6)	99	第70図	土器集成図(2)	128
第58図	遺構外出土遺物(7)	100	第71図	土器口唇部断面形A～B(1)	129
第59図	芦ヶ沢II遺跡の基本層序	112	第72図	土器口唇部断面形A～B(2)	130
第60図	芦ヶ沢II遺跡遺構配置図	113			
第61図	岩手県内の縄文時代前期前葉の 竪穴住居跡(1)	118			
第62図	岩手県内の縄文時代前期前葉の 竪穴住居跡(2)	119			

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	7	第8表	土器観察表(4)	106
第2表	竪穴住居跡・住居状遺構一覧	101	第9表	土器観察表(5)	107
第3表	陥し穴状遺構・土坑一覧(1)	101	第10表	土器観察表(6)	108
第4表	陥し穴状遺構・土坑一覧(2)	102	第11表	石器観察表(1)	109
第5表	土器観察表(1)	103	第12表	石器観察表(2)	110
第6表	土器観察表(2)	104	第13表	石器観察表(3)	111
第7表	土器観察表(3)	105			

## 巻頭カラー写真図版目次

巻頭カラー写真図版1 遺跡遠景

巻頭カラー写真図版2 基本層序、  
To-Cuを截る陥し穴状遺構

## 写真図版目次

写真図版 1	芦ヶ沢 I・II 遺跡調査区現況……………147	写真図版33	65～68号陥し穴状遺構……………179
写真図版 2	芦ヶ沢 I 遺跡基本層序……………148	写真図版34	69～71号陥し穴状遺構……………180
写真図版 3	1号竪穴住居跡……………149	写真図版35	陥し穴状遺構群……………181
写真図版 4	2号竪穴住居跡……………150	写真図版36	1～3号土坑……………182
写真図版 5	3号竪穴住居跡……………151	写真図版37	A区焼土遺構群……………183
写真図版 6	4号竪穴住居跡……………152	写真図版38	8号焼土遺構、1・2号柱穴状土坑、 現地説明会（1）……………184
写真図版 7	5号竪穴住居跡（1）……………153	写真図版39	現地説明会（2）、作業風景……………185
写真図版 8	5号竪穴住居跡（2）……………154	写真図版40	芦ヶ沢 II 遺跡検出状況……………186
写真図版 9	5号竪穴住居跡（3）……………155	写真図版41	芦ヶ沢 II 遺跡基本層序……………187
写真図版10	5号竪穴住居跡（4）、 6号竪穴住居跡（1）……………156	写真図版42	1号竪穴住居跡出土遺物、 2号竪穴住居跡出土遺物（1）……………188
写真図版11	6号竪穴住居跡（2）、 7号竪穴住居跡……………157	写真図版43	2号竪穴住居跡出土遺物（2）……………189
写真図版12	8号竪穴住居跡……………158	写真図版44	3・4号竪穴住居跡出土遺物、 5号竪穴住居跡出土遺物（1）……………190
写真図版13	9号竪穴住居跡……………159	写真図版45	5号竪穴住居跡出土遺物（2）……………191
写真図版14	10号竪穴住居跡……………160	写真図版46	5号竪穴住居跡出土遺物（3）……………192
写真図版15	1号住居状遺構……………161	写真図版47	5号竪穴住居跡出土遺物（4）……………193
写真図版16	2号住居状遺構……………162	写真図版48	5号竪穴住居跡出土遺物（5）……………194
写真図版17	1～4号陥し穴状遺構……………163	写真図版49	5号竪穴住居跡出土遺物（6）、 6・7号竪穴住居跡出土遺物、 8号竪穴住居跡出土遺物（1）……………195
写真図版18	5～8号陥し穴状遺構……………164	写真図版50	8号竪穴住居跡出土遺物（2）……………196
写真図版19	9～12号陥し穴状遺構……………165	写真図版51	8～10号竪穴住居跡、 1・2号住居状遺構出土遺物、 陥し穴状遺構出土遺物（1）……………197
写真図版20	13～16号陥し穴状遺構……………166	写真図版52	土坑、 陥し穴状遺構出土遺物（2）……………198
写真図版21	17～20号陥し穴状遺構……………167	写真図版53	遺構外出土遺物（1）……………199
写真図版22	21～24号陥し穴状遺構……………168	写真図版54	遺構外出土遺物（2）……………200
写真図版23	25～28号陥し穴状遺構……………169	写真図版55	遺構外出土遺物（3）……………201
写真図版24	29～32号陥し穴状遺構……………170	写真図版56	遺構外出土遺物（4）……………202
写真図版25	33～36号陥し穴状遺構……………171	写真図版57	遺構外出土遺物（5）……………203
写真図版26	37～40号陥し穴状遺構……………172	写真図版58	遺構外出土遺物（6）……………204
写真図版27	41～44号陥し穴状遺構……………173		
写真図版28	45～48号陥し穴状遺構……………174		
写真図版29	49～52号陥し穴状遺構……………175		
写真図版30	53～56号陥し穴状遺構……………176		
写真図版31	57～60号陥し穴状遺構……………177		
写真図版32	61～64号陥し穴状遺構……………178		

## I 調査に至る経過

芦ヶ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（普代～久慈）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災から早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取扱いについては、平成24年12月18日付け国東整陸二調第853号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年1月24日～25日にわたり試掘調査を行い、平成25年2月4日付け教生第1564号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成28年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)

## II 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の位置

芦ヶ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡が所在する久慈市は、岩手県北部の太平洋側に立地しており、西側が葛巻町・九戸村、南側が岩泉町・野田村、北側が洋野町・軽米町の4町2村と隣接する。

遺跡はJR八戸線久慈駅より南方へ約4.6kmに位置しており、現況は山林で占められている。国土地理院発行の5万分の1地形図「陸中野田」NK-54-18-4（八戸4号）の図幅に含まれる。芦ヶ沢Ⅰ遺跡は北緯40度9分4秒、東経141度45分42秒、芦ヶ沢Ⅱ遺跡が北緯40度9分7秒、東経141度45分41秒付近にあたる。

### 2 遺跡周辺の地形と地質

久慈市は北上山地の北東部に位置する。陸部の大半を占めるのは、海成段丘が解析されて帯状に延びる丘陵地で、特に市域の北東部で顕著である。一方、久慈市市街地付近では、久慈川、夏井川、長内川によって形成された氾濫平野が広がっており、海成段丘を侵食する形で内陸部に延びている。

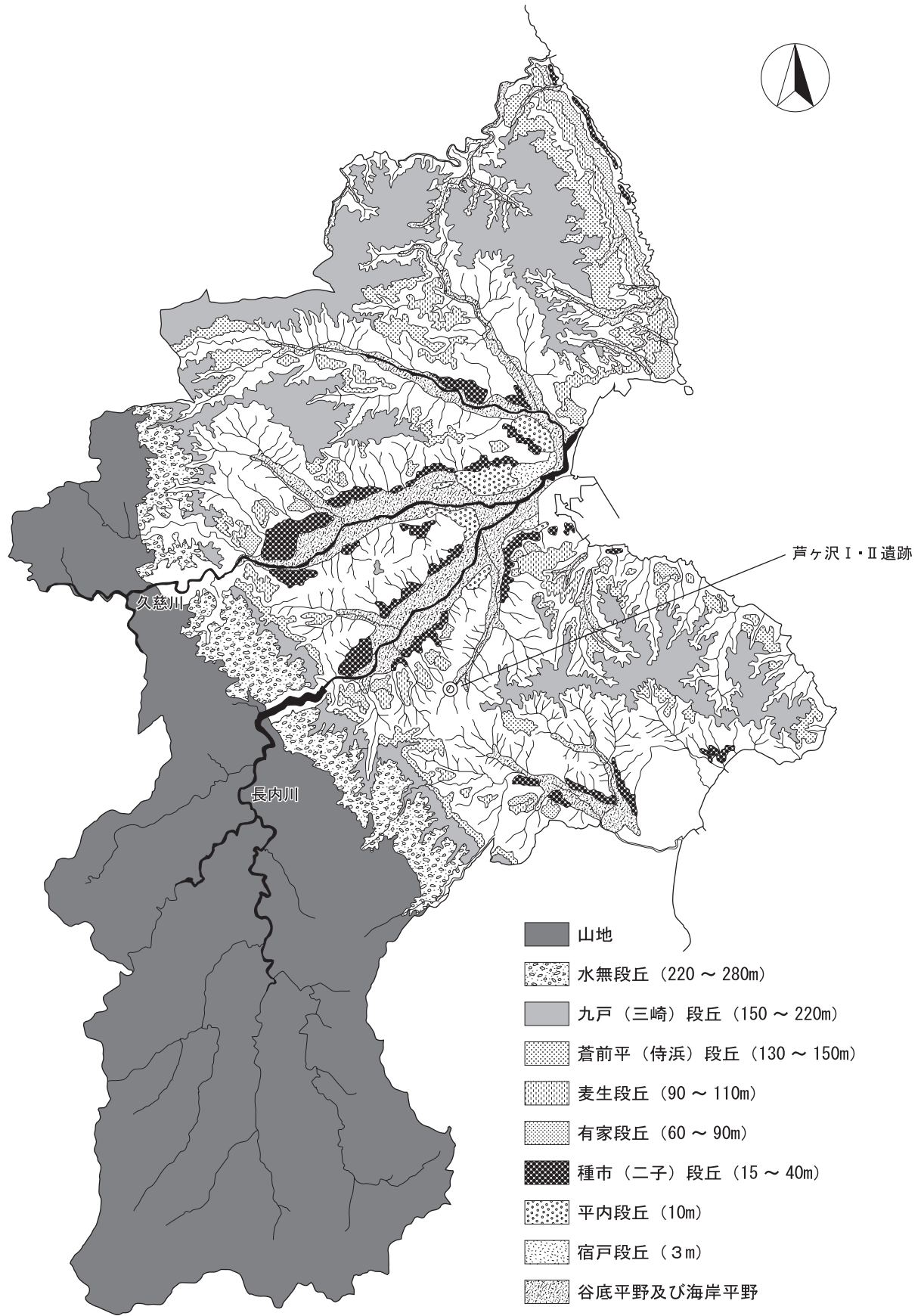
本遺跡は長内川とその支流である小屋畑川の分水嶺をなす丘陵地東側緩斜面に立地する。遺跡付近の表層地質は更新世～完新世の海成または非海成堆積物岩類である。

### 参考文献

(公財)岩手県文化振興事業団 2015 『外屋敷XⅥ遺跡発掘調査報告書』

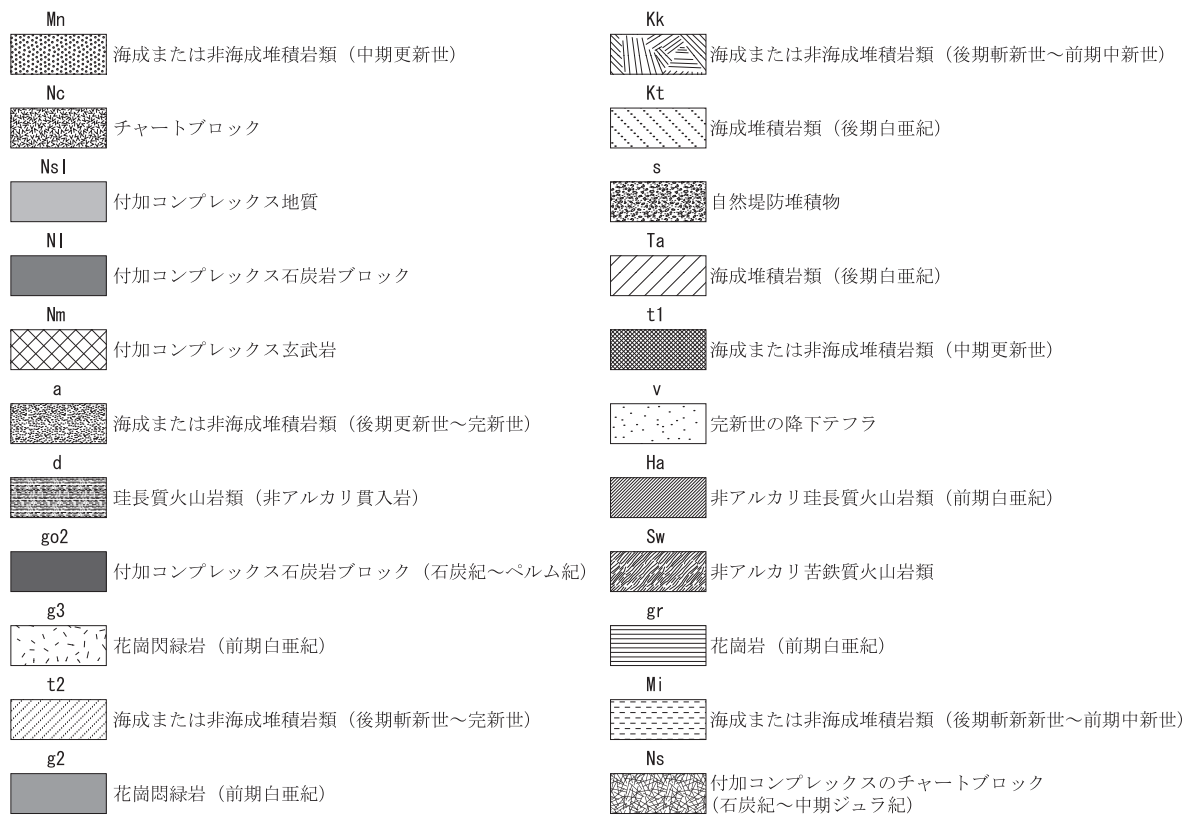
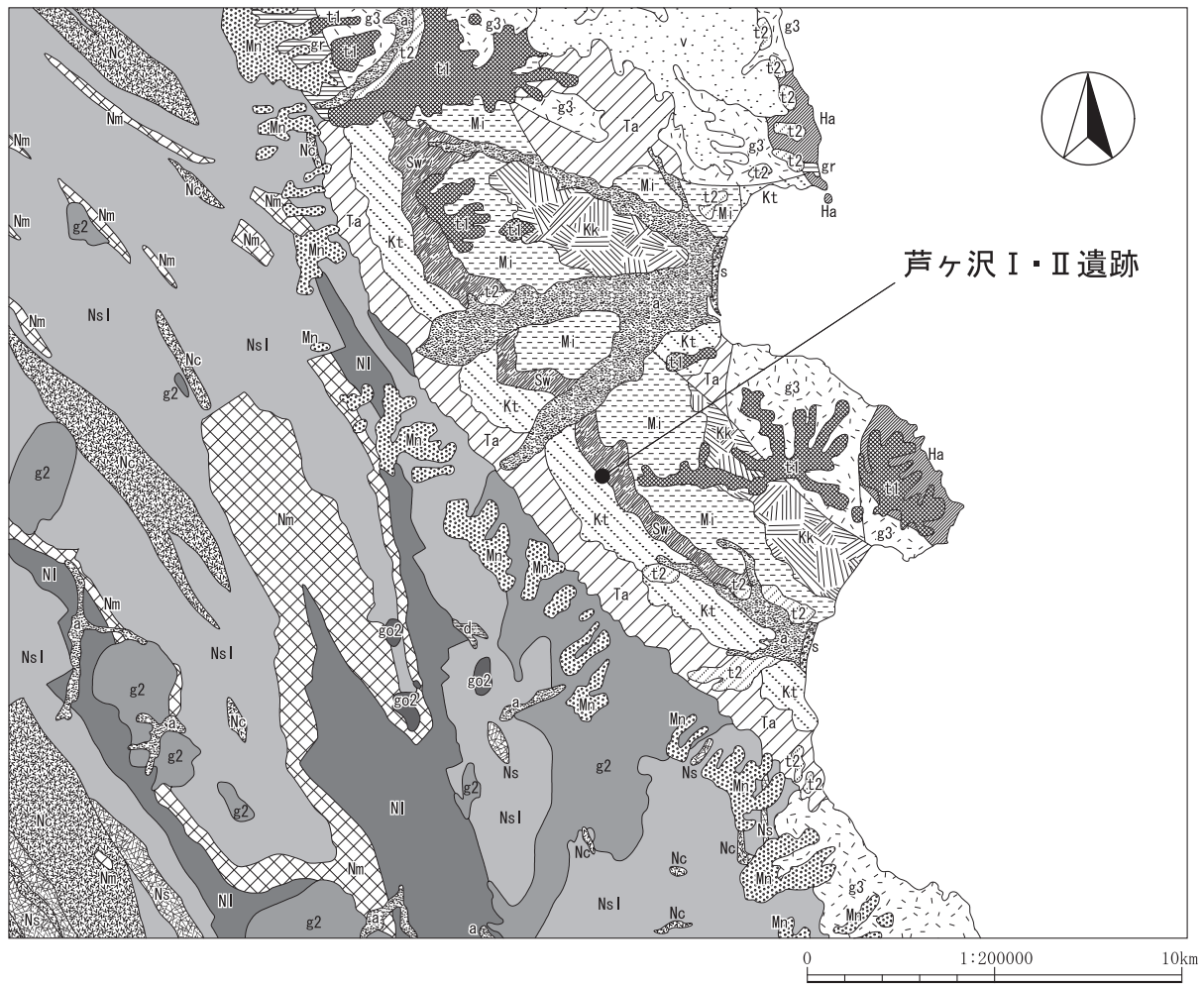


第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺の段丘区分図

2 遺跡周辺の地形と地質

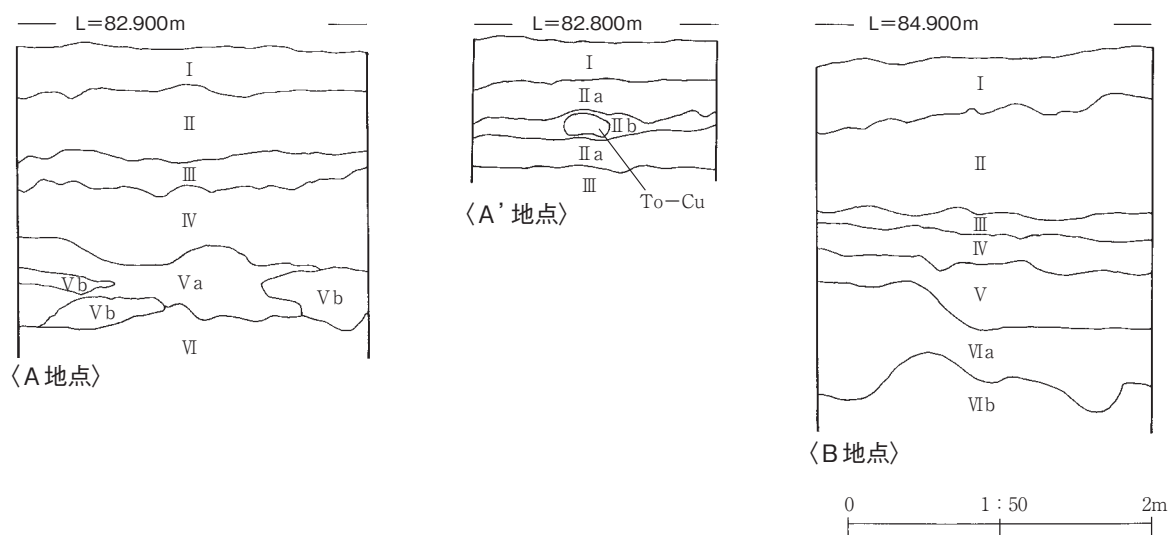


第3図 地質分類図

### 3 基本層序

第4図は、芦ヶ沢I遺跡調査区丘陵部西側のII A 9 a・II B 3 b・III A 2 jグリッドで観察された土層断面で、層序は上位からI～VI層に大別される。大部分の遺構は、III層下位からIV層上位にかけて検出されている。

- I層：黒褐色シルト (10YR2/2) 表土層 層厚 14～45 cm 粘性弱 しまり密
  - II層：黒色シルト (10YR1.7/1) 層厚 38～72 cm 粘性やや強 しまりやや粗
  - III層：褐色シルト (10YR4/6) 層厚 14～24 cm 粘性やや強 しまり密 径1 mm以下のパミスを含む 漸移層
  - IV層：黄褐色粘土質シルト (10YR5/6) 層厚 26～52 cm 粘性やや強 しまり密
  - V層：褐色粘土質シルト (10YR4/6) 層厚 18～42 cm 粘性やや強 しまり密 径1 mm～2 cm大の浮石を含む
  - V a層：にぶい黄褐色砂質シルト (10YR5/4) 層厚 22～46 cm 粘性弱 しまり密
  - V b層：にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 礫層 層厚 10～40 cm 粘性弱 しまり密
  - VI層：黄褐色砂質シルト (10YR5/6) 層厚は不明 粘性弱 しまり密
  - VI a層：にぶい黄褐色砂質シルト (10YR5/4) 層厚は 32～78 cm 粘性弱 しまり密 径1 mm～2 cm大の浮石を含む
  - VI b層：にぶい黄褐色砂質シルト (10YR5/4) 層厚は不明 粘性弱 しまり密 多量の礫を含む
- 基本層序のテフラ分析（テフラ検出分析・組成分析・火山ガラス及び鉱物の屈折率測定）を実施しており、III層中に十和田中楸テフラ（To - Cu）が、V層基底部付近に十和田八戸テフラ（To - H）が堆積している可能性が高いとの結果報告である（第VII章第2節）。



第4図 芦ヶ沢I遺跡の基本層序



## 4 周辺の遺跡

久慈市内の遺跡は、平成 27 年版の岩手県遺跡情報検索システムによると 624 箇所余が登録されている。第 5 図は周辺遺跡の分布図である。時代を見ると縄文時代、弥生時代、古代、中世、近世～近代まで多岐にわたっている。縄文時代は早期～晩期まで幅広くあり、散布地が多くを占め、集落跡や貝塚が散見される。

上野山遺跡 (38) では、昭和 58 年の久慈市教育委員会の調査で、縄文時代晩期中葉～後葉の竪穴住居跡が 1 棟と奈良時代の竪穴住居跡 2 棟等が検出されている。

平沢 I 遺跡 (43) では、平成 6 年の市道改良事業に伴う調査で、縄文時代の陥し穴状遺構 9 基と縄文時代早期中葉の遺物集中区が検出されている。これまでの調査で、縄文時代前期・後期と古代の竪穴住居跡も検出されており、複合遺跡であることが確認された。

二子貝塚 (51) では、標高約 40 m の海岸段丘に立地している。貝塚の形成時期は、縄文時代後期後葉～晩期中葉にかけてである。昭和 24 年に道路改修の際に大形遮光器土偶が出土している。平成元年に久慈市教育委員会の調査が行われ、埋甕 2 基 (縄文時代後期前葉と晩期)、土壙 3 基 (縄文時代後期 1 基、晩期 2 基)、埋葬人骨 4 体 (縄文時代後期 1 体、晩期 3 体) が検出されている。遺物は縄文土器、石器、骨角器、貝製品、琥珀、糞石等が出土している。

大尻 I 遺跡 (57) では、昭和 61 年の集落道に伴う調査で、縄文時代前期後半を主体とする遺物包含層であることが確認された。縄文土器は前期の円筒下層 b・c・d<sub>1</sub>・d<sub>2</sub> 式土器、中期の円筒上層 a・b 式がある。他に石器、石製品、玉髓製の垂飾品、ニホンジカ・イノシシの動物遺存体、人骨破片 (縄文時代前期末葉頃) が出土している。

弥生時代は、外里山上遺跡 (3)、中長内 I 遺跡 (37)、上野山遺跡 (38)、平沢 I 遺跡 (43)、二子 II 遺跡 (53)、大尻 VIII 遺跡 (63) 等で土器の出土が見られる。遺構は確認されていない。

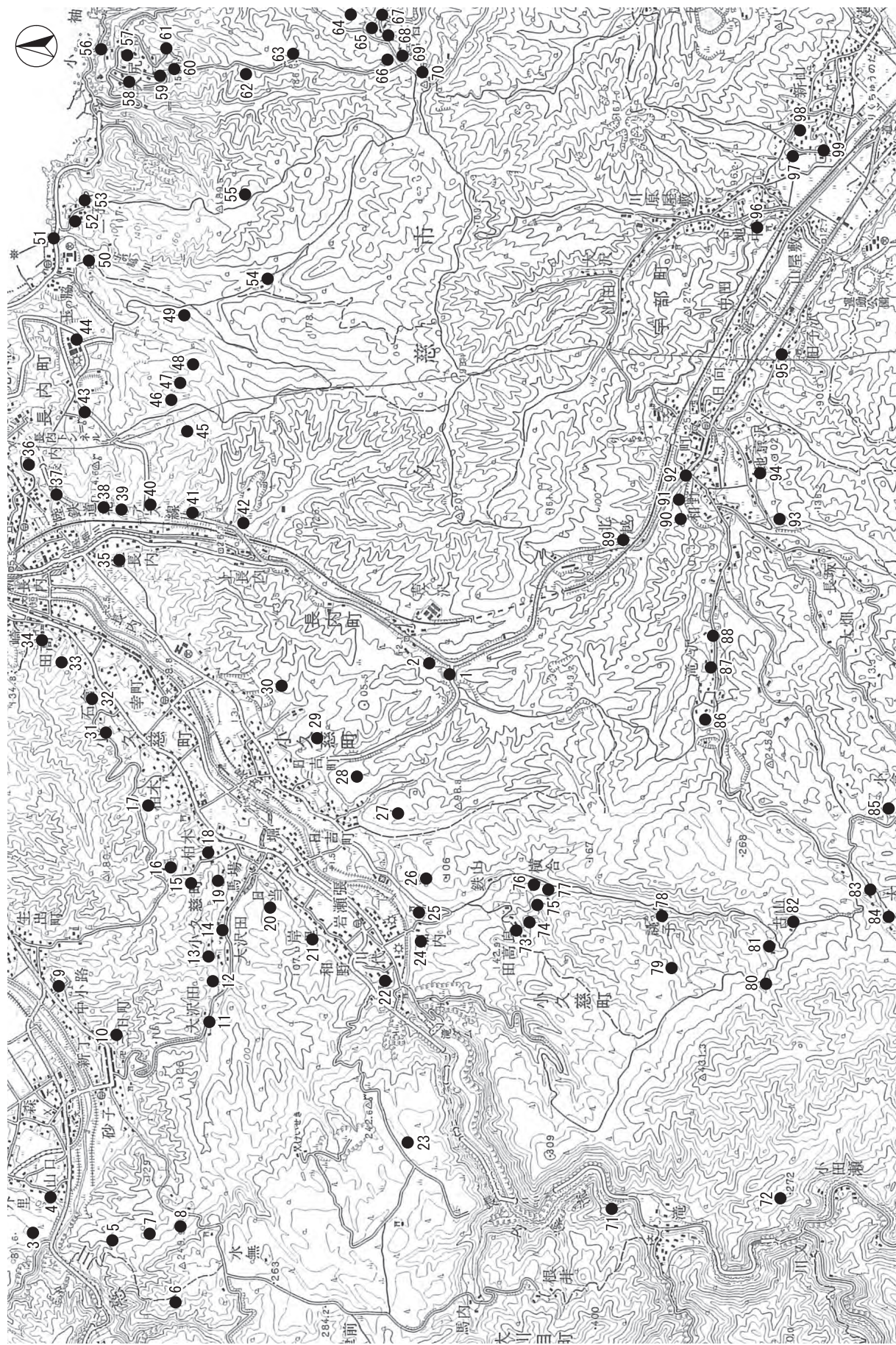
古代 (奈良～平安時代) は、外里山上遺跡 (3)、荒津前遺跡 (8)、仲小路遺跡 (9)、大沢田 I 遺跡 (12)、兼田農場遺跡 (26)、日陰遺跡 (30)、田高 I 遺跡 (33)、中長内 II 遺跡 (36)、中長内 I 遺跡 (37)、上野山遺跡 (38)、小屋畑遺跡 (39)、上長内 III 遺跡 (40)、上長内 I 遺跡 (42)、平沢 I 遺跡 (43)、平沢 II 遺跡 (44)、詔子遺跡 (78)、大渡 I 遺跡 (83)、山屋敷遺跡 (96)、中新山遺跡 (98) 等がある。竪穴住居跡が確認された遺跡は、兼田農場遺跡、中長内 I 遺跡、上野山遺跡、小屋畑遺跡、上長内 III 遺跡、平沢 I 遺跡、平沢 II 遺跡である。

中世城館は、久慈市内 (旧山形村を含む) で 29 城余確認されているものの城主や沿革の不明なものが多い。周辺では複郭式平山城の小久慈館 (20)・上日陰館 (29)、宇部館 (91) がある。宇部館は、宇部川と北ノ越川に挟まれた比高 25 m 前後の丘陵部突端に造られた単郭式の平山城で、二重堀・土塁・郭・腰郭が残っている。城主は一戸南部氏の野田氏と伝承されている。

近世では、旧街道沿いに平沢一里塚 (54) と新山一里塚 (99)、野田通代官所跡 (92) がある。また、鉄山はそで山鉄山 (72)、小久慈鉄山 (76)、詔子鉄山 (79)、滝山鉄山 (80) があげられるが、調査が行われていないため詳細は不明である。

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	出土遺構・遺物	番号	遺跡名	種別	時代	出土遺構・遺物
1	芦ヶ沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(前期前半)	51	二子貝塚	貝塚	縄文	縄文土器(前・後・晩期)、石器、骨角器、遮光器土偶、埋葬人骨、埋壘、土墳
2	芦ヶ沢Ⅱ	集落跡	縄文	陥し穴状遺構	52	二子Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器(前・後・晩期)
3	外里山上	散布地	縄文・弥生・古代	縄文土器(前・後・晩期)、弥生土器、土師器	53	二子Ⅱ	集落跡	縄文・弥生	縄文土器(前・後・晩期)、弥生土器
4	外里	集落跡	縄文	縄文土器(前・中・晩期)	54	平沢一里塚	一里塚	江戸時代	二基一対の内一基残存
5	荒津前平Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(後・晩期)	55	二子Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器
6	水無	散布地	古代	土師器	56	大尻Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器
7	荒津前平Ⅰ	集落跡	古代	土師器	57	大尻Ⅰ	貝塚・包含層	縄文	縄文土器(前・中期)、動物遺存体
8	荒津前	散布地	縄文・古代	縄文土器(前期)、土師器(平安)	58	大尻Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器(前期)、石器
9	仲小路	散布地	古代	土師器(平安)	59	大尻Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器
10	三日館	城館跡	中世	空堀、土塁、単郭	60	大尻Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器
11	大沢田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	61	大尻Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器
12	大沢田Ⅰ	散布地	縄文・古代	縄文土器(中期)、土師器	62	大尻Ⅶ	散布地	縄文	縄文土器
13	大沢田Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器(中期)、土師器	63	大尻Ⅷ	散布地	弥生	弥生土器、敲石、磨石、凹石
14	大沢田Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	64	館石Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)、石鏃、石斧、斧
15	秋葉Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	65	館石Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)、石鏃、石斧
16	秋葉Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	66	館石Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器(前・後期)
17	丹内神社	散布地	縄文	縄文土器	67	館石Ⅶ	散布地	縄文	縄文土器(中期)、石鏃、石匙
18	秋葉Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	68	館石Ⅳ	散布地	縄文	石鏃
19	秋葉Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	69	館石Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器(後期)
20	小久慈館(下日当館)	集落跡・城館跡	縄文・古代・中世	土師器、縄文土器(晩期)、空堀	70	館石Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器(前・後期)
21	岸里	散布地	縄文	縄文土器、石鏃	71	滝	散布地	縄文	縄文土器(前期)、石器
22	川代	集落跡	縄文	縄文土器(前期)、フレイク	72	そで山鉄山	製鉄跡	近世～近代	鉄滓
23	白山	散布地	縄文	縄文土器	73	田高良Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
24	堀内Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	74	田高良Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
25	堀内Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	75	横合Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
26	兼田農場	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器、陥し穴状遺構、古代堅穴住居跡	76	小久慈鉄山	製鉄跡	近世～近代	鉄滓
27	兼田農場東	集落跡	縄文	縄文土器	77	横合Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
28	日吉	散布地	縄文	縄文土器	78	誂子	散布地	古代	土師器
29	上日陰館(館の台館)	城館跡	縄文・中世	空堀、土塁、複郭、縄文土器	79	誂子鉄山	製鉄跡	近世～近代	鉄滓
30	日陰	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	80	滝山鉄山	製鉄跡	近世～近代	鉄滓
31	下柏木	散布地	古代	須恵器	81	古山Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
32	田高Ⅱ	散布地	古代	土師器	82	古山Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器(前・後期)
33	田高Ⅰ	集落跡	縄文・古代	縄文土器(前・後期)、土師器、堅穴住居跡	83	大渡Ⅰ	散布地	古代	土師器
34	白山神社	散布地	古代	土師器	84	大渡Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(後期)、石鏃
35	上長内Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	85	小倉Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(後期)、磨製石斧、石器
36	中長内Ⅱ	集落跡	古代	土師器	86	滝ノ沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器(前期)、石鏃
37	中長内Ⅰ	集落跡	縄文・弥生・古代	縄文土器(前・後期)、弥生土器、土師器、須恵器、古代堅穴住居跡	87	滝ノ沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(後期)
38	上野山	集落跡	縄文・古代	縄文土器(後期)、土師器、古代堅穴住居跡	88	滝ノ沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(後期)、石器
39	小屋畑	集落跡	縄文・古代	縄文土器(後期)、古代堅穴住居跡	89	十三塚	散布地	縄文	縄文土器(後期)、塚
40	上長内Ⅲ	散布地	縄文・古代	縄文土器(後期)、土師器、古代堅穴住居跡	90	北ノ越	集落跡	縄文・平安・中世	陥し穴、堅穴住居跡(縄文・平安)、堅穴建物跡(中世)、掘立柱建物跡(中世)
41	上長内Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	91	宇部館(八幡館)	城館跡	中世	二重堀切、土塁、単郭、腰郭
42	上長内Ⅰ	集落跡	縄文・古代	縄文土器(後期)、土師器、フレイク	92	野田通代官所跡	中世居館跡・代官所跡	中世・近世	土塁
43	平沢Ⅰ	集落跡	縄文・弥生・古代・近世	縄文土器(早・前・中・後・晩期)、弥生土器、土師器、堅穴住居跡、陥し穴状遺構	93	地京沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(後期)
44	平沢Ⅱ	集落跡	縄文・古代	縄文土器(早・前・中・後期)、土師器、古代堅穴住居跡	94	地京沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(後期)
45	平沢Ⅶ	散布地	縄文	縄文土器	95	田子沢	散布地	縄文	縄文土器(前・後期)、石器
46	平沢Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器	96	山屋敷	集落跡	縄文・弥生・古代	縄文土器、弥生土器、土師器、堅穴住居跡
47	平沢Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器	97	上新山	集落跡	古代	土師器、堅穴住居跡
48	平沢Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	98	中新山	散布地	縄文・古代	土師器、縄文土器、蕨手刀
49	平沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	99	新山一里塚西塚	一里塚	江戸時代	塚
50	玉の脇	散布地	縄文	縄文土器					



第5図 周辺の遺跡

0 1000m 2000m  
1:50000 地形図「久慈・陸中野田」を改変

### Ⅲ 野外調査と室内整理の方法

#### 1 野外調査

##### (1) 調査区の区割り設定

調査区画の設定は、芦ヶ沢Ⅰ遺跡が平面直角座標第Ⅹ系の $X = 17,220,000$ 、 $Y = 79,000,000$ 、芦ヶ沢Ⅱ遺跡が $X = 17,340,000$ 、 $Y = 79,040,000$ を遺跡の原点とした。これらの座標原点を起点として、遺跡全体を一辺 $40 \times 40$  mの大区画に区割りをを行い、さらに大区画を $4 \times 4$  mの100小区画に細分した。

芦ヶ沢Ⅰ遺跡の大区画は、西から東側にアルファベットの大文字A～C、北から南側にローマ数字のⅠ～Ⅳを付した。小区画は西から東側にアルファベットのa～j、北から南側に数字の1～10を与えている。

芦ヶ沢Ⅱ遺跡の大区画は、西から東側にアルファベットの大文字A～D、北から南側にローマ数字のⅠ～Ⅲを付した。小区画は芦ヶ沢Ⅰ遺跡と同様である。調査区の名称は、大区画と小区画の組み合わせでIA1a、IA10aというように呼称した。

遺跡の基準点1・2と補点1の平面直角座標値と杭高（標高）は以下のとおりである。

基準点1（芦ヶ沢Ⅱ遺跡）	$X = 17,287.816$	$Y = 79,090.562$	$H = 88.044$ m
基準点2（芦ヶ沢Ⅰ遺跡）	$X = 17,207.374$	$Y = 79,098.039$	$H = 83.134$ m
補点1（芦ヶ沢Ⅰ遺跡）	$X = 17,126.058$	$Y = 79,064.367$	$H = 79.258$ m

##### (2) 粗掘りと遺構検出

最初に調査区域内に散乱している丸太材や枝類の雑物撤去を人手と機械で行い、終了後に試掘（トレンチ掘り）に着手した。粗掘りは重機を使用して表土と遺構検出面上層まで掘り下げ、その後に人力で遺構検出を行った。

##### (3) 遺構の命名

遺構名は検出された遺構ごとに順に通し番号を付して、1号竪穴住居跡、1号住居状遺構、1号陥し穴状遺構、1号土坑のように命名した。精査の過程で遺構でないと判断したものについては、登録を抹消し遺構番号の繰り上げを行った。

##### (4) 遺構の精査と実測

精査は竪穴住居跡が4分法、他の遺構が2分法を原則としているが、必要に応じて適宜併用した。遺構内出土遺物は埋土の分層で取り上げ、床面や底面出土のものは図面の作成を行った。遺構外出土遺物は、地点と層位を記入してグリッドごとに取り上げた。

竪穴住居跡をはじめとする平面実測は、CUBIC社製遺構実測支援システム「遺構くん」と光波トランシットを使用して行った。断面実測は、基準杭の標高値を使用し作図を行った。

##### (5) 写真撮影

野外調査における写真撮影は、デジタル一眼カメラ1台と中判カメラ1台（ $6 \times 7$  cm判）を使用し、

## 2 室内整理

遺構の断面・完掘状況、遺物出土状況を調査員が行った。撮影に際しては年月日、天候、遺跡名、遺構名、状況、方向等の情報を撮影カードに記録した。また、調査終了時にあわせて小型飛行機（セスナ）による遺跡全域の空中写真撮影を実施した。

### （6）広 報 活 動

遺跡調査や埋蔵文化財に対する啓蒙活動の一環として、平成28年7月23日（土）午後1時30分から一般の方々を対象に現地説明会を開催した。久慈市をはじめとする県内から110名の参加者があった。

## 2 室 内 整 理

室内整理は、平成28年9月1日～平成29年3月31日の期間に、出土遺物・実測図・写真等の整理作業を実施した。また、これらの作業と並行して、各種の鑑定・分析依頼と原稿執筆を行った。

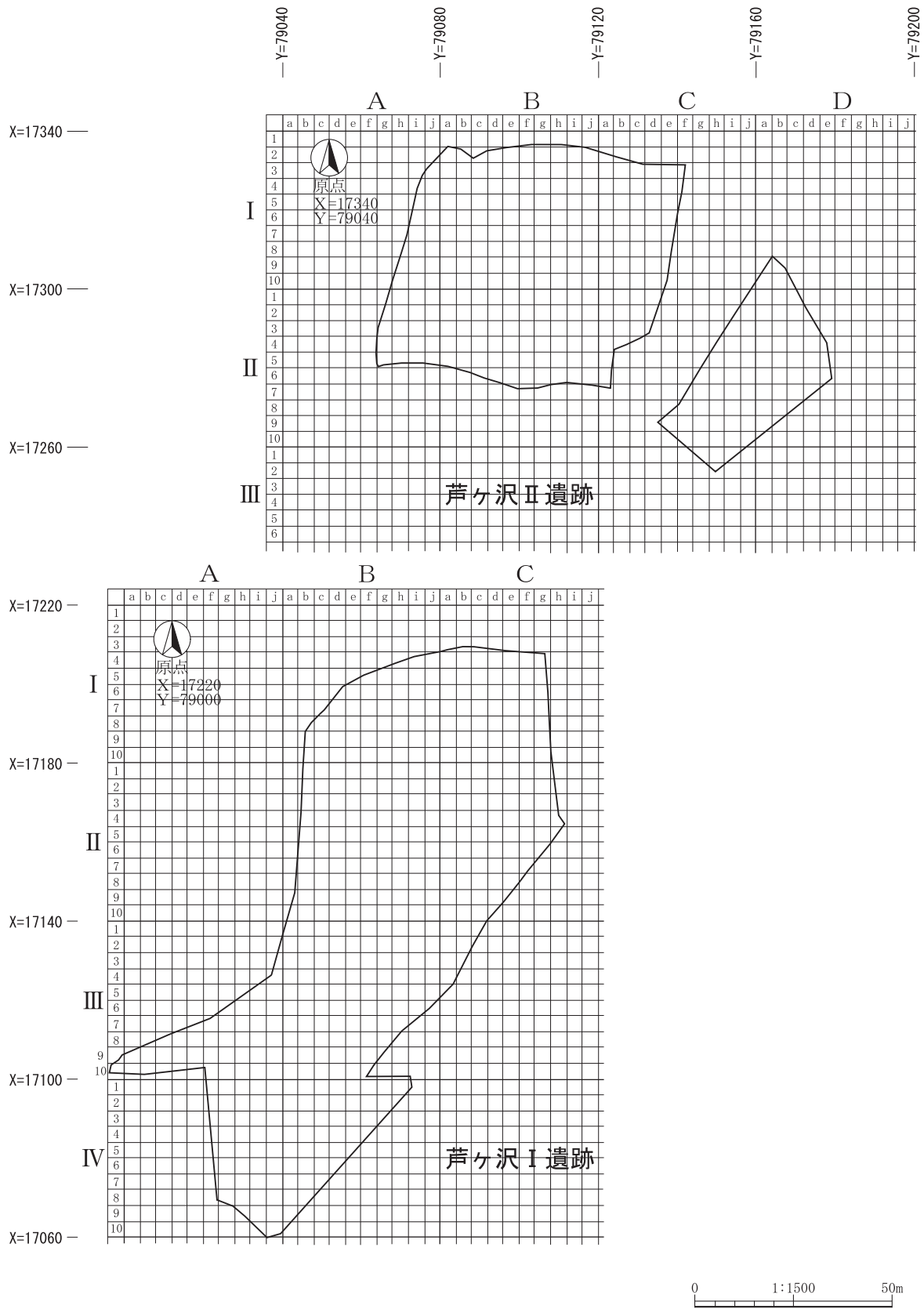
### （1）遺 構 の 整 理

野外調査で作成した実測図は、遺構ごとに分類、点検、修正後に第二原図（修正図面）の作成、トレース、図版作成の順に作業を行った。遺構図版の縮尺は、竪穴住居跡 1/50・1/60（大型竪穴住居）、住居状遺構 1/50、陥し穴状遺構 1/50、土坑 1/50、焼土遺構 1/60、柱穴状土坑 1/50 である。中にスケールと縮尺を付している。

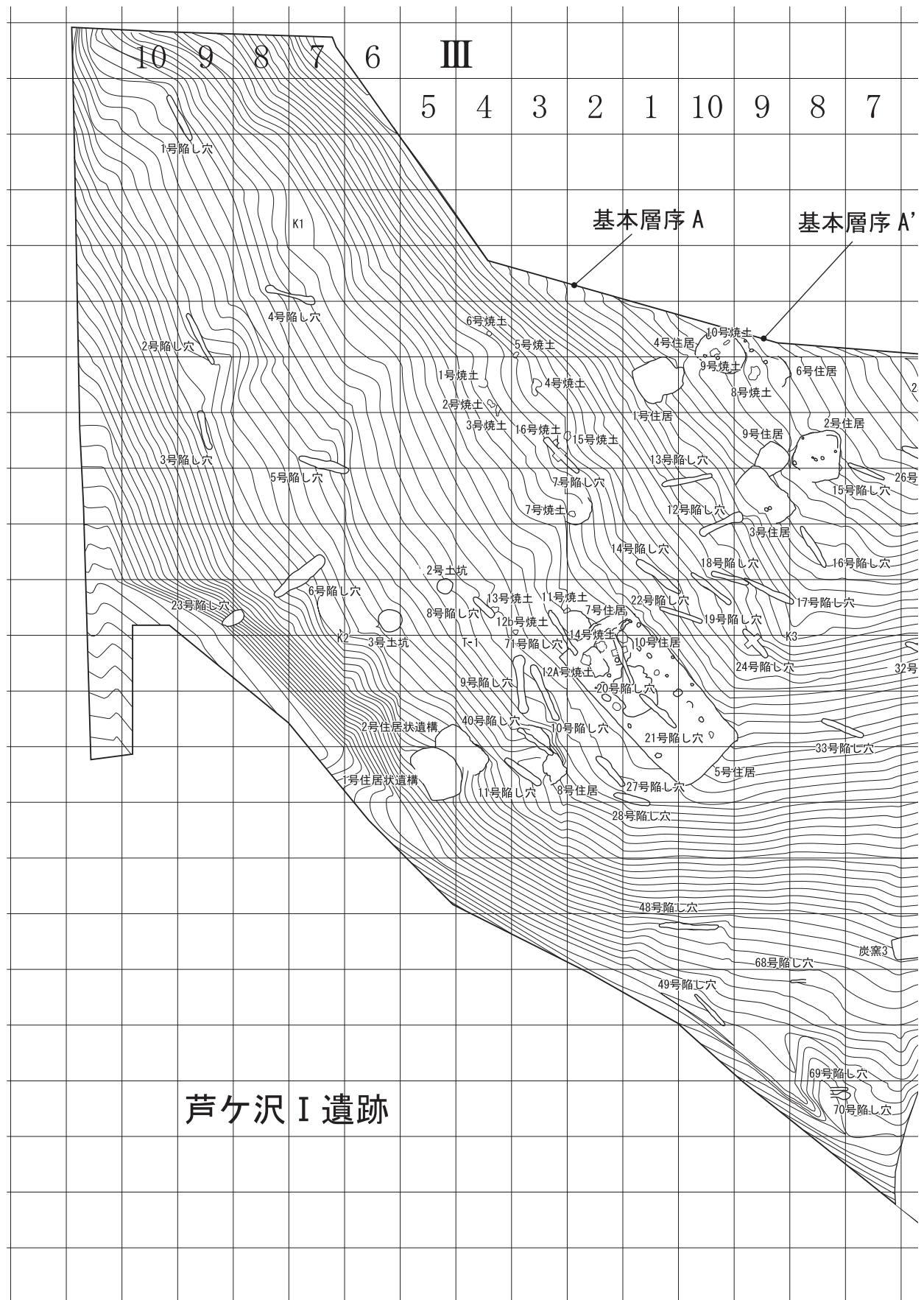
野外で撮影した遺構写真は、遺構ごとに分類・整理を行い、その中から代表的な写真を選んで写真図版を作成した。

### （2）遺 物 の 整 理

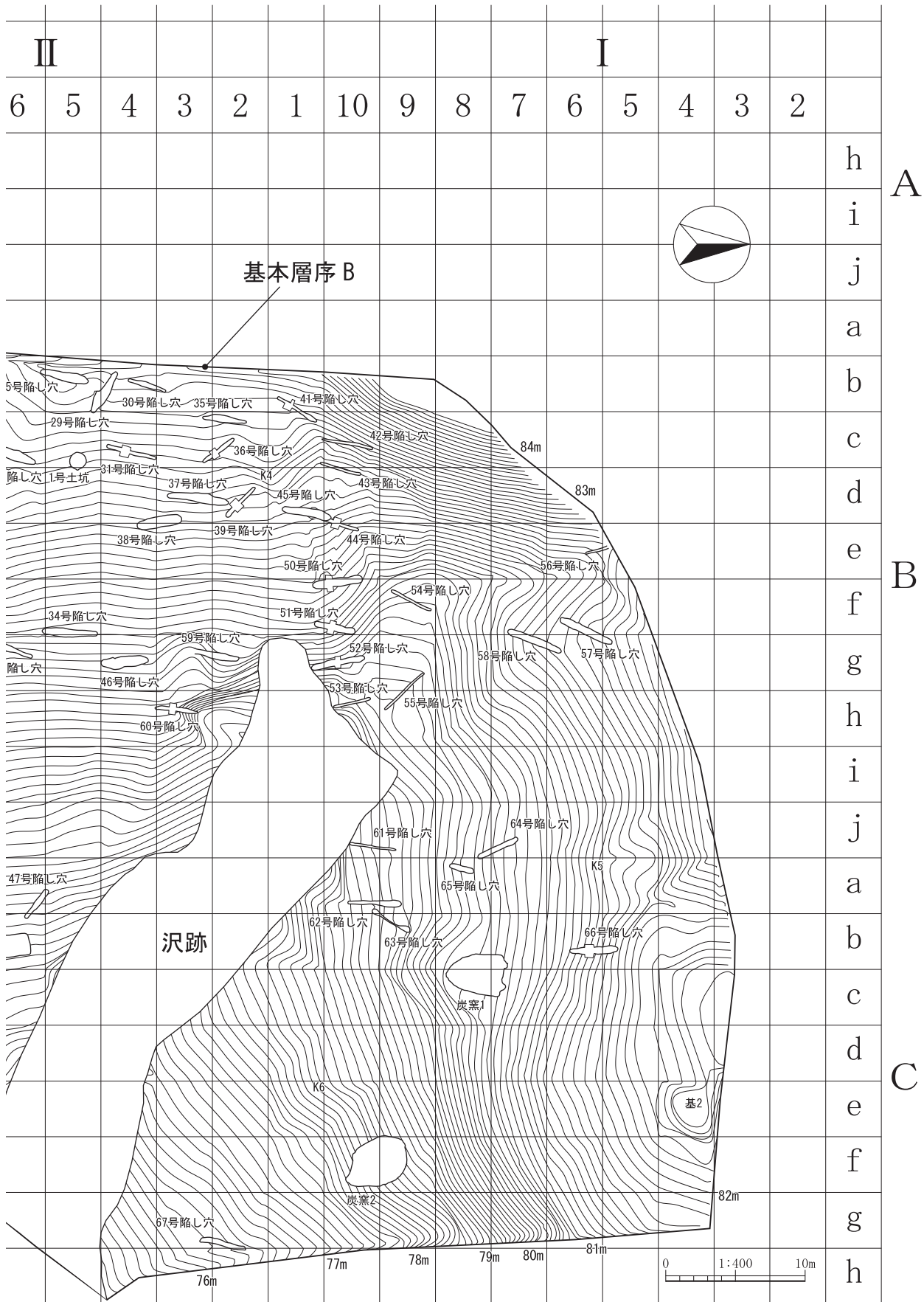
遺物は、洗浄・注記から開始し、仕分け・登録、接合・復元、実測、土器拓影、トレース、写真撮影、遺物図版・写真図版作成の順に整理作業を行った。報告書に掲載した遺物は、全てではなく選別した資料である。遺物の掲載縮尺は、土器が 1/3、石器が 1/2・1/3・1/4 で、中にスケールと縮尺を付している。



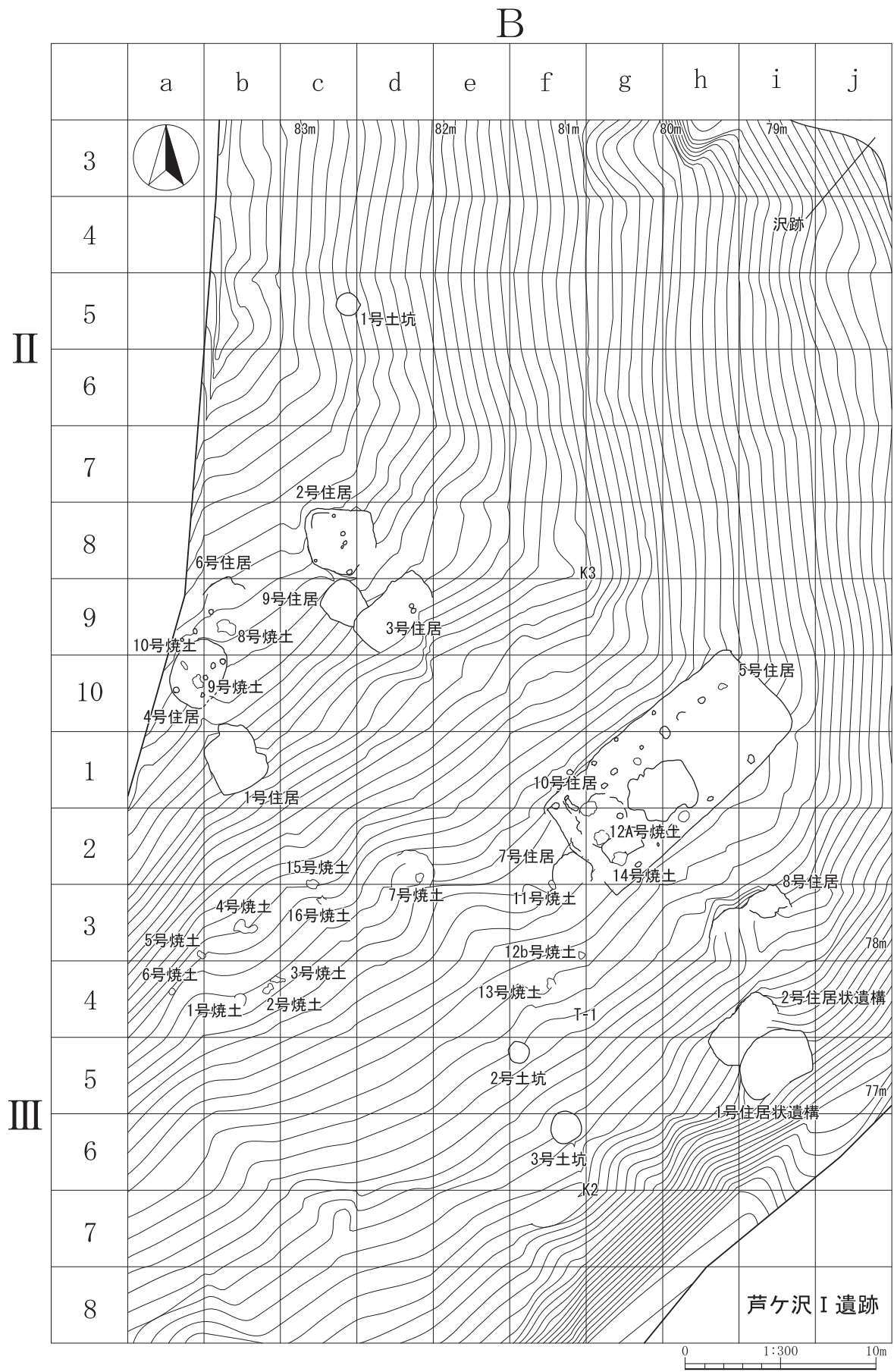
第6図 芦ヶ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡全体図



第7図 芦ヶ沢 I 遺跡遺構配置図







第8図 竪穴住居跡・住居状遺構配置図

## IV 芦ヶ沢 I 遺跡で検出された遺構と遺物

### 1 概 要

本調査前に雑物撤去を行った後、芦ヶ沢 I・II 遺跡それぞれの地形に応じて 20 箇所程の試掘溝を設定した。芦ヶ沢 I 遺跡は試掘の結果、II 層下位・III 層上面から出土遺物が確認されたことから、遺構が明瞭に把握できる III 層上面で検出した。検出された遺構は竪穴住居跡 10 棟、住居状遺構 2 棟、陥し穴状遺構 71 基、土坑 3 基、焼土遺構 17 基、柱穴状土坑 2 基、炭窯 3 基である。竪穴住居跡については、To-Cu テフラ下位から検出され（竪穴住居跡埋土内に To-Cu テフラが認められるものもある）、いずれの竪穴住居跡も To-Cu テフラ降下以前に構築・使用された遺構である。陥し穴状遺構は To-Cu テフラ堆積層及び竪穴住居跡を截ることから、To-Cu テフラ降下以降に構築された遺構である。

住居状遺構は竪穴住居跡と形状が類似するが、炉・柱穴・貼床等の床面施設が確認されなかったことから、竪穴住居跡とは分離して住居状遺構として扱った。

焼土遺構は To-Cu テフラを鍵層として、To-Cu テフラ降下以降に形成されたもの、または To-Cu テフラ降下以前に形成されたものとおおまかに二つの時期区分を可能にする事ができた。土坑は縄文時代の遺構で埋土や形状が異なり、それぞれ時期差があるものと考えられたが、詳細な時期を判別する事ができなかった。近現代の遺構として炭窯 3 基が検出された。遺構配置図のみの掲載とした。

基本層序は、第 7 図に表記した A・A' 地点と B 地点とで異なる。それぞれ検出状況について「基本層序 A の III 層で検出」などと記載している。

### 2 検 出 遺 構

#### (1) 竪 穴 住 居 跡

検出された 10 棟の竪穴住居跡のうち、規模が径 2 m 強程度のものについても床面施設（炉・柱穴・貼床）が伴うものを竪穴住居跡として扱った。

##### 1 号竪穴住居跡（第 9 図、写真図版 3）

〔位置・検出状況〕 II B 10 b、III B 1 b グリッドに位置し、北側に 4 号竪穴住居跡が隣接する。調査は遺構が明確に確認できる III 層上面からジョレンを用いて検出する方針で行っていたが、重機による表土除去中に II 層下位で To-Cu テフラ堆積層を確認したことから、重機による表土除去を停止し To-Cu テフラ堆積層上面でジョレンを用いて検出を行った。しかし、明確な遺構プランの把握ができず、最終的に基本層序 A の III 層上面で黒褐色土の方形状プランとして確認された。

〔重複関係・形状・規模〕 重複する遺構はない。方形状を呈する。壁面 4 つの屈曲部は弧状を呈する。北西・東側壁面に張り出しを持つ。北西側の張り出し部は床面より 10 cm 程高い階段状を呈し、本遺構に重複する他遺構の可能性も考慮したが、張り出し部の埋土は床面を覆う土層と区別できないことから、本遺構に伴うものと判断した。規模は径 3.12 × 2.70 m である。

〔埋土〕 2 層に細分した。黒褐色土を主体に構成される。南側壁面沿いに黒褐色土と地山ブロックを含む壁面崩落土が確認される。自然堆積と思われる。

〔壁〕 IV 層を壁とし床面から外傾する。II 層下位から掘り込んで構築された可能性があることから、

## 2 検出遺構

壁高は検出面より高かったものと思われる。床面までの残存深度は25 cmである。

[床面] 遺構構築時にIV層まで掘り込み、全面に貼床が施されている。貼床は黒褐色土とIV層起源の黄褐色土で構築され、若干の凹凸が見られるがほぼ平坦で固く締まる。

[柱穴] 貼床を除去して確認につとめたが検出されなかった。

[炉] 検出されなかった。

[出土遺物] 第10図、写真図版42

[出土状況] 縄文土器が644.7 g、石器・剥片が107.6 g出土した。床面から多段結節回転文が施される1、結束羽状縄文が施される2が出土している。石器は床面からいわゆる縦型の石匙11、埋土から石鏃9・10が出土している。

[性格と年代] 柱穴・炉は検出されなかったが、形状・貼床を施す点から竪穴住居跡と判断した。検出状況及び床面から1・2の土器が出土していることから、縄文時代前期前葉に構築・使用されたと考えられる。

### 2号竪穴住居跡（第9図、写真図版4）

[位置・検出状況] II B 8 c・8 dグリッドに位置し、南側に3・9号竪穴住居跡、北側に15号陥し穴状遺構が隣接する。基本層序AのⅢ層上面で黒褐色土の方形状プランとして確認された。

[重複関係・形状・規模] 重複する遺構はない。五角形状を呈する。壁面4つの屈曲部は弧状を呈する。南東の壁面を確認することができなかった。出入口の可能性も考えられるが、明確に判断することはできなかった。南側が他の壁面よりやや張り出す。規模は径3.53×3.36 mである。

[埋土] 7層に細分した。黒褐色土を主体に構成される。南・西側壁面沿いに褐色土と黄褐色土の壁面崩落土が確認される。自然堆積と思われる。

[壁] IV層を壁とし直立ぎみに立ち上がる。床面までの残存深度は39 cmである。

[床面] 遺構構築時にIV層まで掘り込み、全面に貼床が施されている。貼床は褐色土とIV層起源の黄褐色土で構築され、若干の凹凸が見られるがほぼ平坦で固く締まる。

[柱穴] 貼床除去前にPP1・PP2を検出した。土層観察用ベルトにPP1の柱痕跡が認められたことから、柱（PP1）を抜かない状態で住居跡が廃絶されたと考えられる。貼床除去後、床面中央付近（PP5・PP6）、壁面沿い（PP4）、壁面屈曲部（PP3）でそれぞれ検出された。

規模は、PP1径24×22 cm、深さ69 cm。PP2径12×11 cm、深さ12 cm。PP3径29×22 cm、深さ13 cm。PP4径18×16 cm、深さ28 cm。PP5径24×12 cm、深さ43 cm。PP6径16×9 cm、深さ13 cmである。床面中央部のPP1が最も深い。

[炉] 検出されなかった。

[その他] 住居跡北側壁沿いにL字状の浅い溝が確認された。住居跡に伴う付属施設の痕跡と思われる。

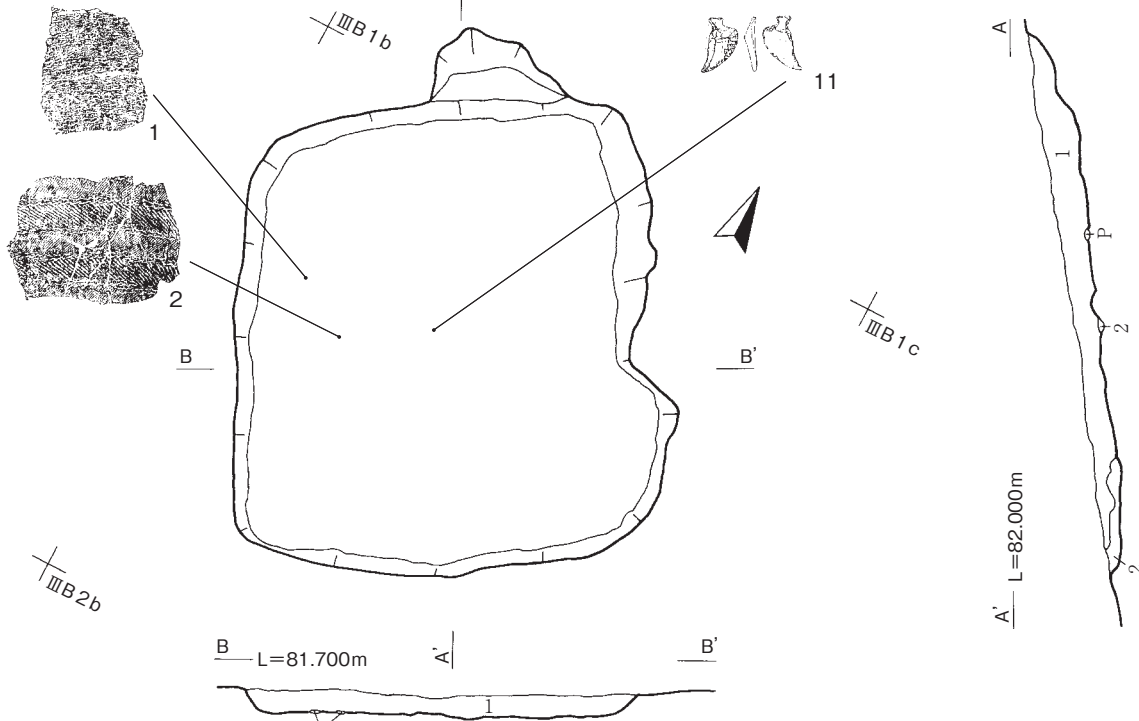
[出土遺物] 第11・12図、写真図版42・43

[出土状況] 縄文土器が3506.9 g、石器・剥片が1620 g出土した。埋土から出土したものが大半を占める。全体器形がわかるまで復元できた土器は12・13・15である。21は縄文時代早期の尖底土器底部片である。流れ込みによるものと思われる。

石器は埋土から石鏃22・23、石篋24、石匙25、搔・削器26・27、敲石28・磨石29が出土している。

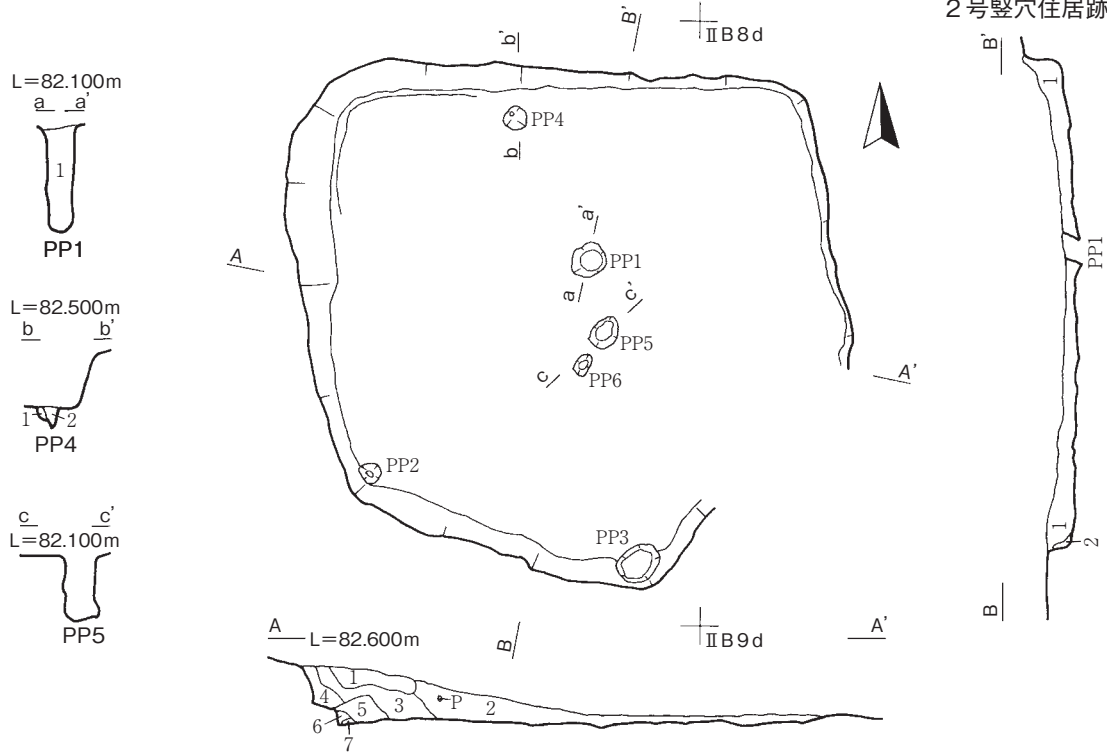
[性格と年代] 炉は検出されなかったが、形状・柱穴・貼床を施す点から竪穴住居跡と判断した。検出状況・出土遺物から、縄文時代前期前葉に構築・使用されたと考えられる。

1号竪穴住居跡



- 1号住  
 1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性弱しまり密  
 2. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性中しまり密 (地山ブロックを多量に含む)

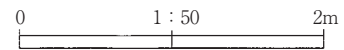
2号竪穴住居跡



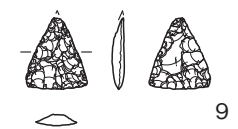
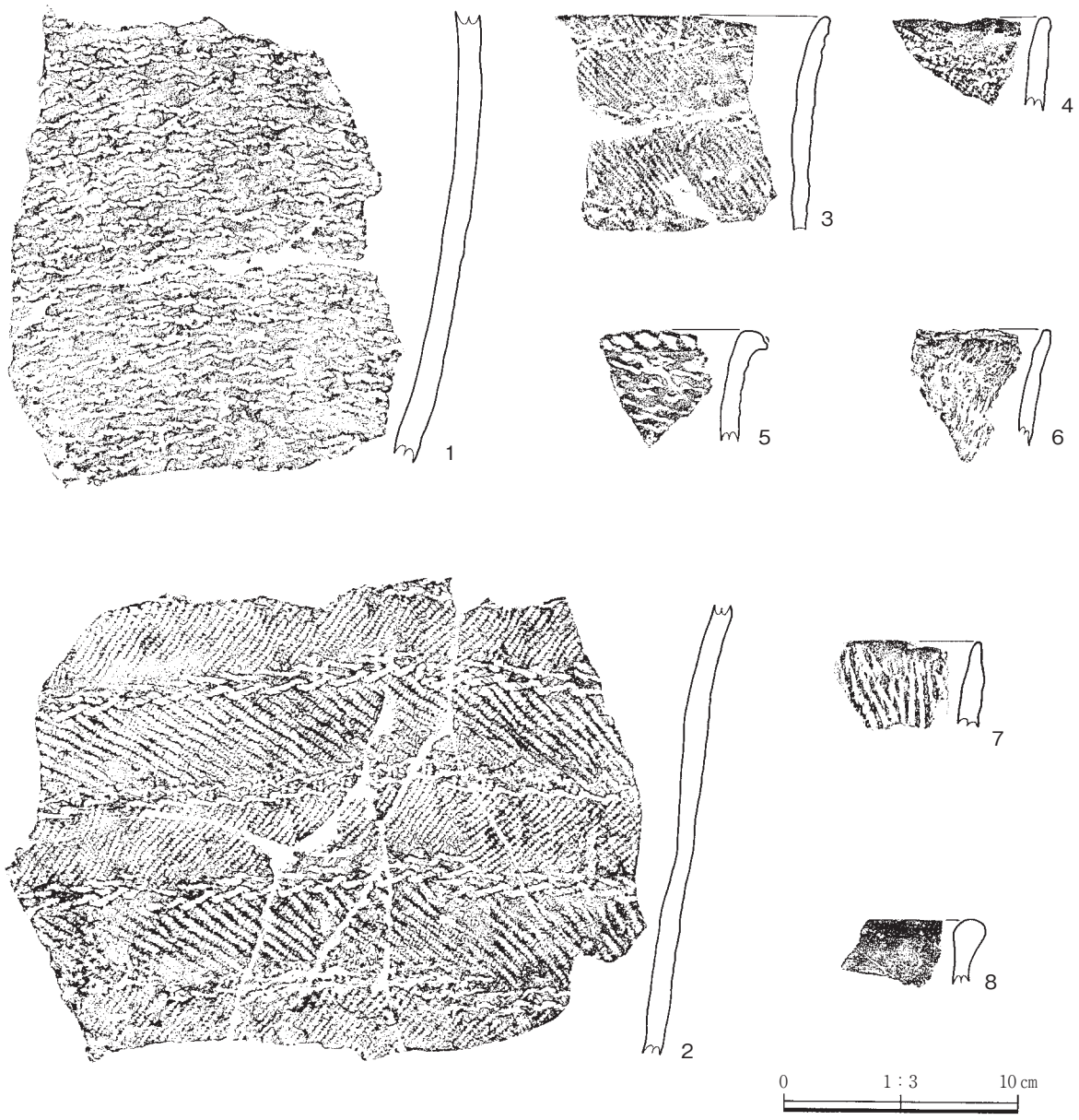
- 2号住  
 1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱しまり密  
 2. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性弱しまり密 (To-Cu? 粒上位に粒状に含む)  
 3. 10YR4/4 褐色シルト 粘性弱しまり密  
 4. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱しまり密  
 5. 7.5YR2/3 極暗褐色シルト 粘性弱しまり密  
 6. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性やや弱しまり密  
 7. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや強しまり密

- 2号住PP1  
 1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中しまり中 (地山粒少量含む 炭化物少量含む)

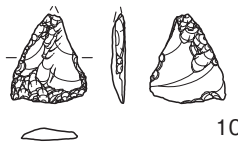
- 2号住PP4  
 1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性強しまり中 (地山粒多量に含む 掘り方)  
 2. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性強しまり中



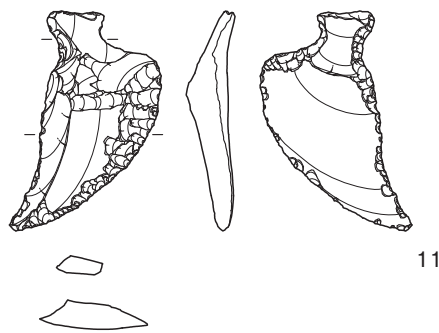
第9図 1・2号竪穴住居跡



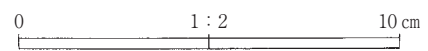
9



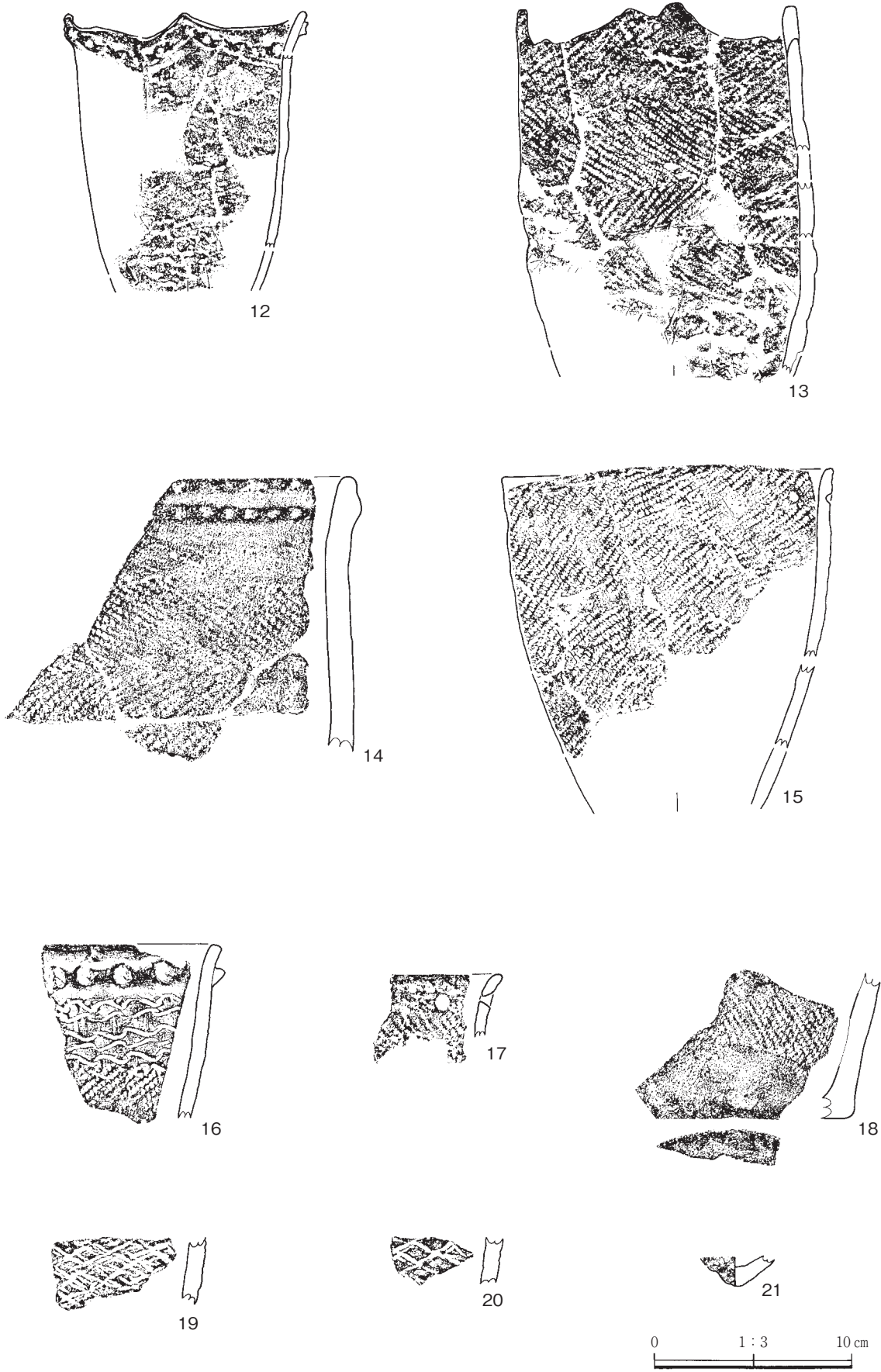
10



11

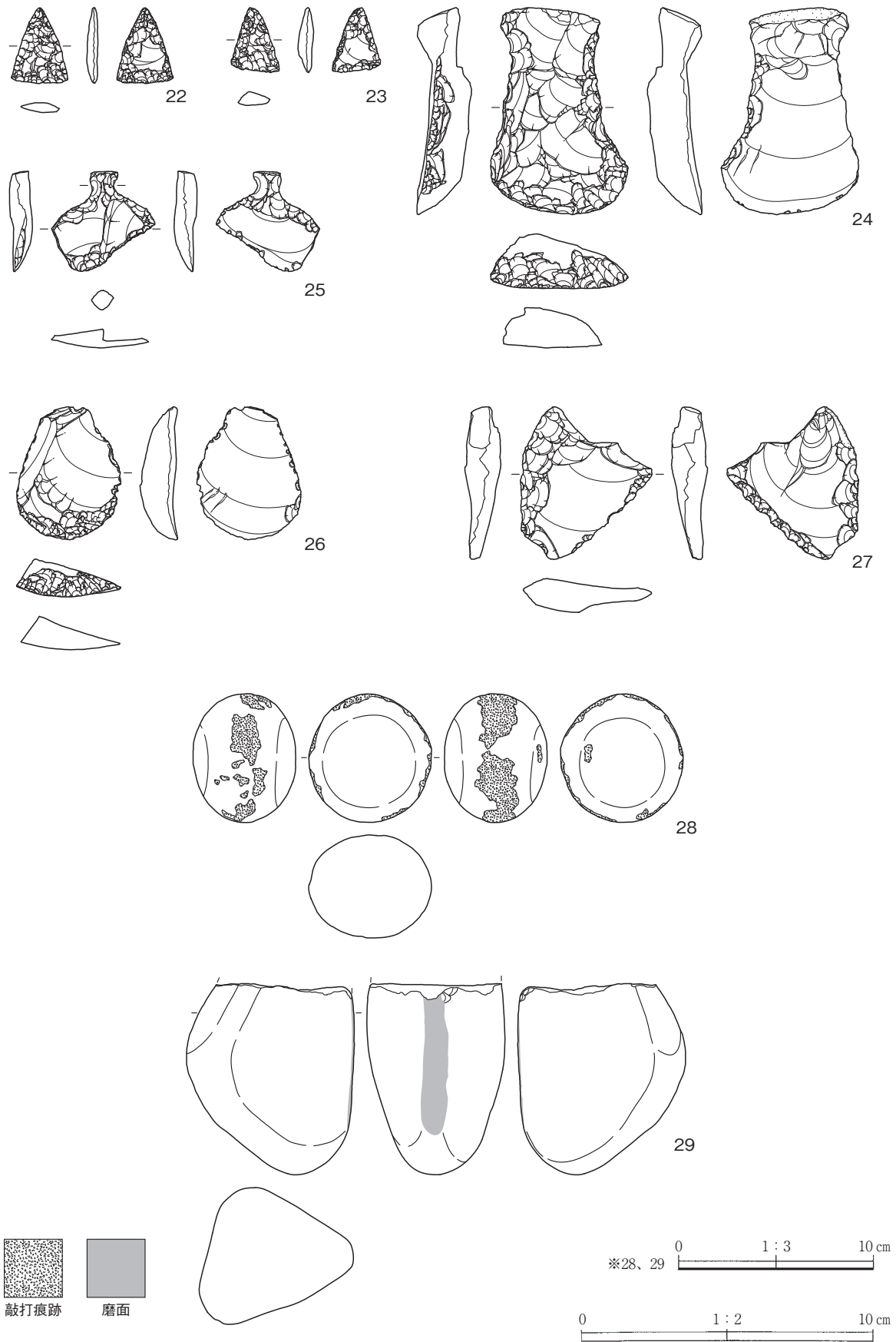


第10図 1号竪穴住居跡出土遺物



第11図 2号竖穴住居跡出土遺物(1)

2 検出遺構



第12図 2号竖穴住居跡出土遺物(2)

### 3号竪穴住居跡（第13図、写真図版5）

〔位置・検出状況〕ⅡB9c・8d・9dグリッドに位置し、北西側に2・9号竪穴住居跡、北東側に16号陥し穴状遺構、南東側に12・13号陥し穴状遺構が隣接する。基本層序AのⅢ層で暗褐色土の方形状プランとして確認された。

〔重複関係・形状・規模〕9号竪穴住居跡を截る。南東側壁面は確認することができなかった。残存する壁面から方形状を呈するものと思われる。壁面二つの屈曲部は弧状を呈する。規模は残在直径4.4mである。

〔埋土〕暗褐色土の単層で構成される。自然堆積と思われる。

〔壁〕Ⅳ層を壁とし直立ぎみに外傾する。床面までの残存深度は14cmである。

〔床面〕遺構構築時にⅣ層まで掘り込み、全面に貼床が施されている。貼床はにぶい黄褐色土とⅣ層起源の黄褐色土で構築され、若干の凹凸が見られるがほぼ平坦で固く締まる。

〔柱穴〕貼床除去後に南東壁面寄りにPP1を検出した。規模は径26×19cm、深さ53cmである。

〔炉〕焼土を形成する炉は検出されなかった。

〔その他〕貼床除去後、PP1南東側に円形状の炭化物プランが認められた。当初は柱穴と判断し半裁したが、断面観察では厚さ5～8cmの炭化物と灰の堆積を確認した。焼土を伴わないが炉の可能性が考えられる。

〔出土遺物〕第14図、写真図版44

〔出土状況〕縄文土器が519.6g、石器・剥片が261g出土した。埋土から口唇部刺突・隆帯に刺突が施される30、床面から多段結節回転文が施される33が出土した。埋土から石鏃35～38・42、石匙39・40、搔・削器41が出土している。

〔性格と年代〕炉は検出されなかったが形状・柱穴・貼床を施す点から竪穴住居跡と判断した。検出面・出土遺物から、縄文時代前期前葉に構築・使用されたと考えられる。

### 4号竪穴住居跡（第13図、写真図版6）

〔位置・検出状況〕ⅡB9a・9b・10a・10bグリッドに位置し、北側に1・2号柱穴状土坑、8号焼土遺構、南東側に1号竪穴住居跡が隣接する。基本層序AのⅢ層上面で黒色土の小判形状プランとして確認された。

〔重複関係・形状・規模〕埋土上面で9・10号焼土が検出された。小判形を呈する。東側壁面は明瞭に確認することが出来なかったことから、貼床の範囲を住居跡の範囲として図面上に記録した。規模は径3.55×2.66mである。

〔埋土〕黒色土の単層で構成される。埋土上位にTo-Cuテフラ粒・ブロックが含まれる。

〔壁〕Ⅳ層を壁とし緩やかに立ち上がる。床面までの残存深度は20cmである。

〔床面〕遺構構築時にⅣ層まで掘り込み、ほぼ全面に貼床が施されている。貼床はにぶい黄褐色土・黒色土・Ⅳ層起源の黄褐色土で構築され、若干の凹凸が見られるがほぼ平坦で固く締まる。住居跡中央部付近は皿状に落ち込み固く締まる。

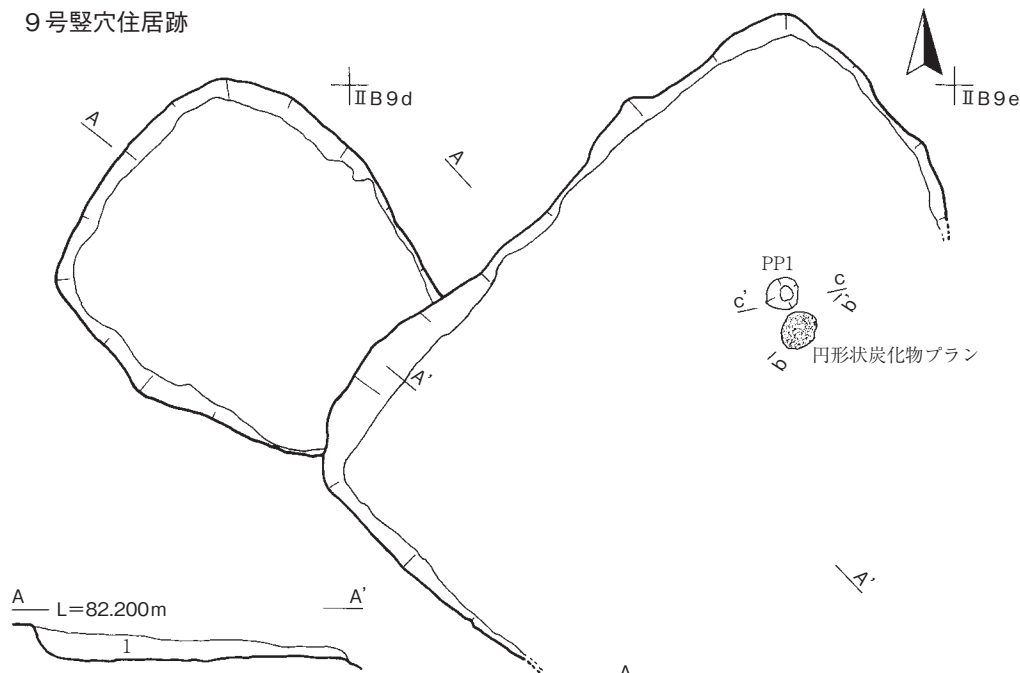
〔柱穴〕対になるようにPP1・PP2を検出した。貼床除去後PP3～PP5を検出した。規模はPP1径30×29cm、深さ53cm。PP2径26×26cm、深さ38cm。PP3径24×24cm、深さ47cm。PP4径33×24cm、深さ34cm。PP5径22×18cm、深さ23cmである。

〔炉〕検出されなかった。

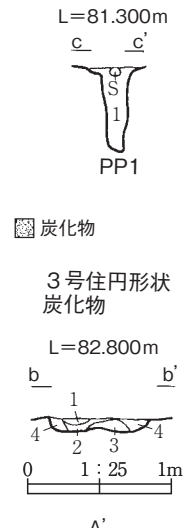


2 検出遺構

9号竪穴住居跡

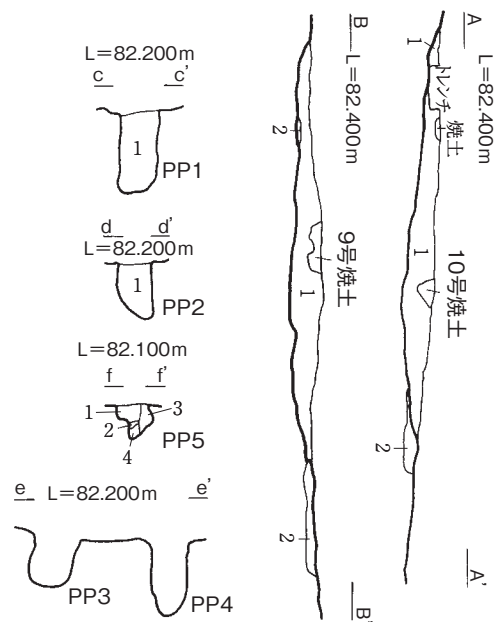


3号竪穴住居跡

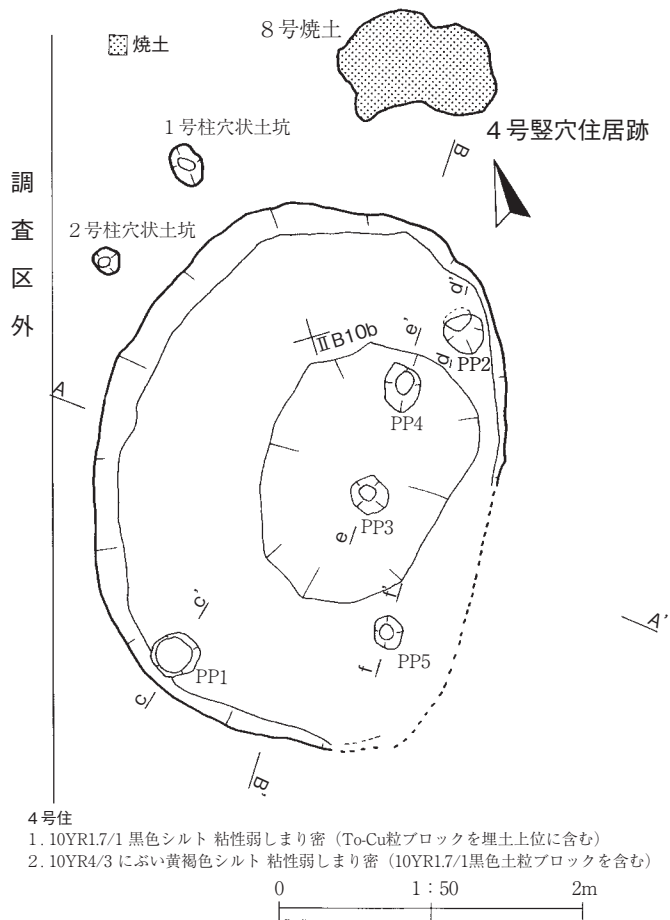


- 9号住
1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱しまり密 (埋土下位に地山ブロック少量含む)
- 3号住円形状炭化物プラン
1. 10YR1.7/1 黒色シルト 粘性弱しまり密 (炭化物多量に含む)
  2. 10YR7/1 灰白色 (灰)
  3. 10YR5/8 黄褐色粘土質シルト 粘性強しまり密 (黒褐色土含む)
  4. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性強しまり密
- 3号住PP1
1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中しまり中 (地山粒ブロックを多量に含む)

- 3号住
1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性弱しまり密

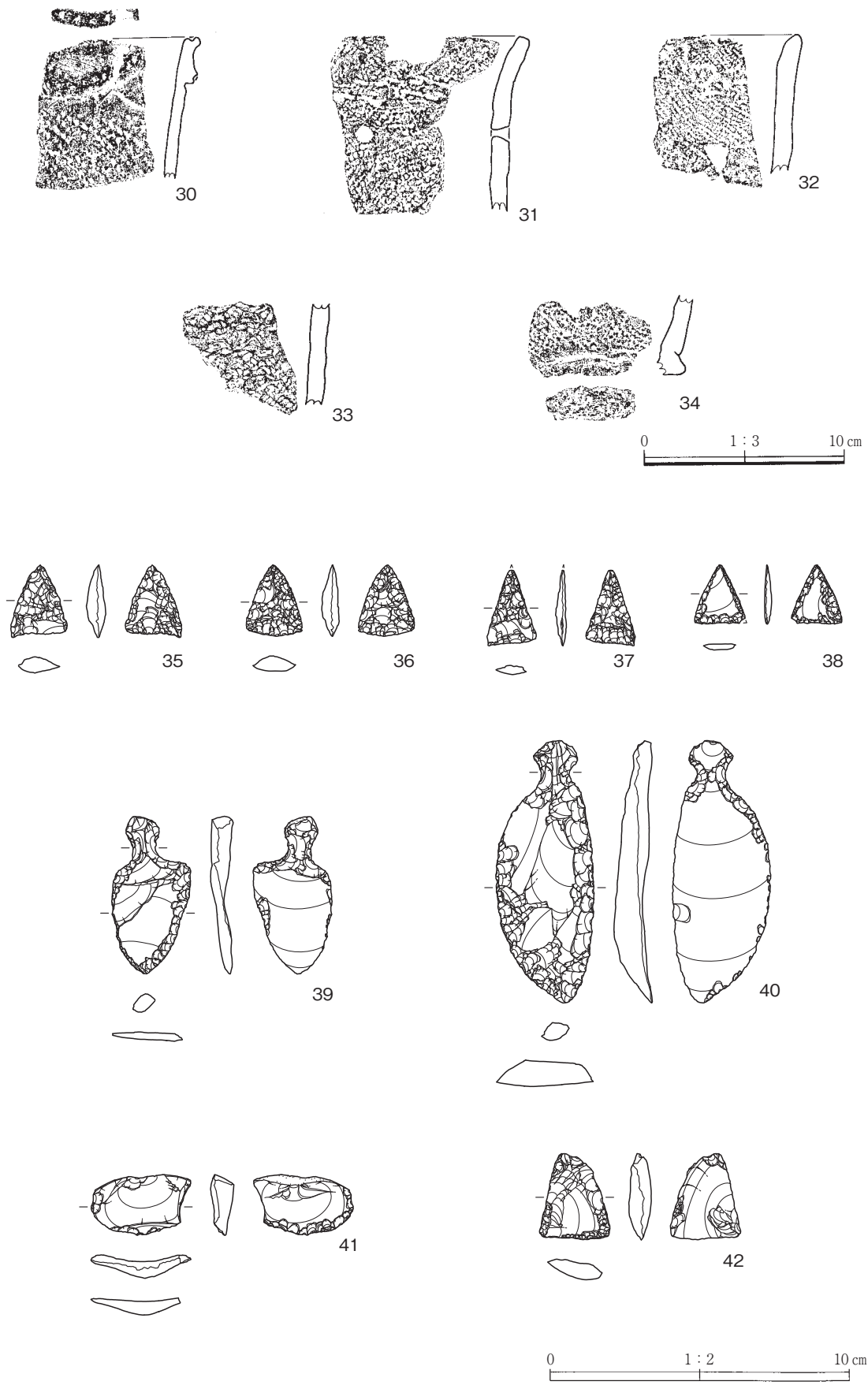


- 4号住PP1
1. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性中しまり密 (地山粒ブロックを多量に含む)
- 4号住PP2
1. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性弱しまり粗 (炭化物、地山粒多量に含む)
- 4号住PP5
1. 10YR1.7/1 黒色シルト 粘性弱しまり密
  2. 10YR4/4 褐色シルト 粘性弱しまり密 (地山ブロック含む)
  3. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや強密 (地山粒多量に含む)
  4. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや弱しまり密



- 4号住
1. 10YR1.7/1 黒色シルト 粘性弱しまり密 (To-Cu粒ブロックを埋土上位に含む)
  2. 10YR4/3 におい黄褐色シルト 粘性弱しまり密 (10YR1.7/1黒色土粒ブロックを含む)

第13図 3・4・9号竪穴住居跡



第14図 3号竪穴住居跡出土遺物

## 2 検出遺構

[出土遺物] 第 18 図、写真図版 44

[出土状況] 縄文土器が 318.1 g、石器・剥片が 55 g 出土した。すべて埋土からの出土である。土器は結節回転文が施される 43、無文部をもつ底部 45、石器は埋土から搔・削器 47 が出土している。

[性格と年代] 炉は検出されなかったが形状・柱穴・貼床を施す点から竪穴住居跡と判断した。検出面・出土遺物から、縄文時代前期前葉に構築・使用されたと考えられる。

### 5号竪穴住居跡（第 15～17 図、写真図版 7～10）

[位置・検出状況] II B 9 h・10 h・10 i、III B 1 f～1 i、III B 2 f～2 h、III B 3 f グリッドに位置し、北西側に 14・22 号陥し穴状遺構、南東側に 9・10・27・28・40 号陥し穴状遺構、南西側に 7 号竪穴住居跡・71 号陥し穴状遺構が隣接する。当初は基本層序 A の III 層上面で To-Cu テフラ堆積層の方形状プランと黒色土の方形状プランの 2 棟の竪穴住居跡と想定し精査を進めた。精査を進めていく段階で 1 棟の大型住居跡と判明した。

[重複関係・形状・規模] 7 号竪穴住居跡を本住居跡の周溝が截る。20・21 号陥し穴状遺構に截られる。14・15 号焼土が埋土上面で検出された。本住居跡は長方形を呈するいわゆるロングハウスである。住居跡北西側壁面は明瞭に把握することが出来たが、北東・南東・南西の壁面は確認することが出来なかった。南西側は周溝によって、北東・南東側は貼床の範囲を図面上に記録した。規模は推定で 13.2 × 6.2 m である。

[埋土] 大きく 5 層に細分した。大別すると埋土上位は To-Cu テフラ、埋土下位は黒色土で構成される。更に埋土上位の To-Cu テフラについては 1 a～1 e の 5 層に細分した。To-Cu テフラの細分は、以下の通りである。

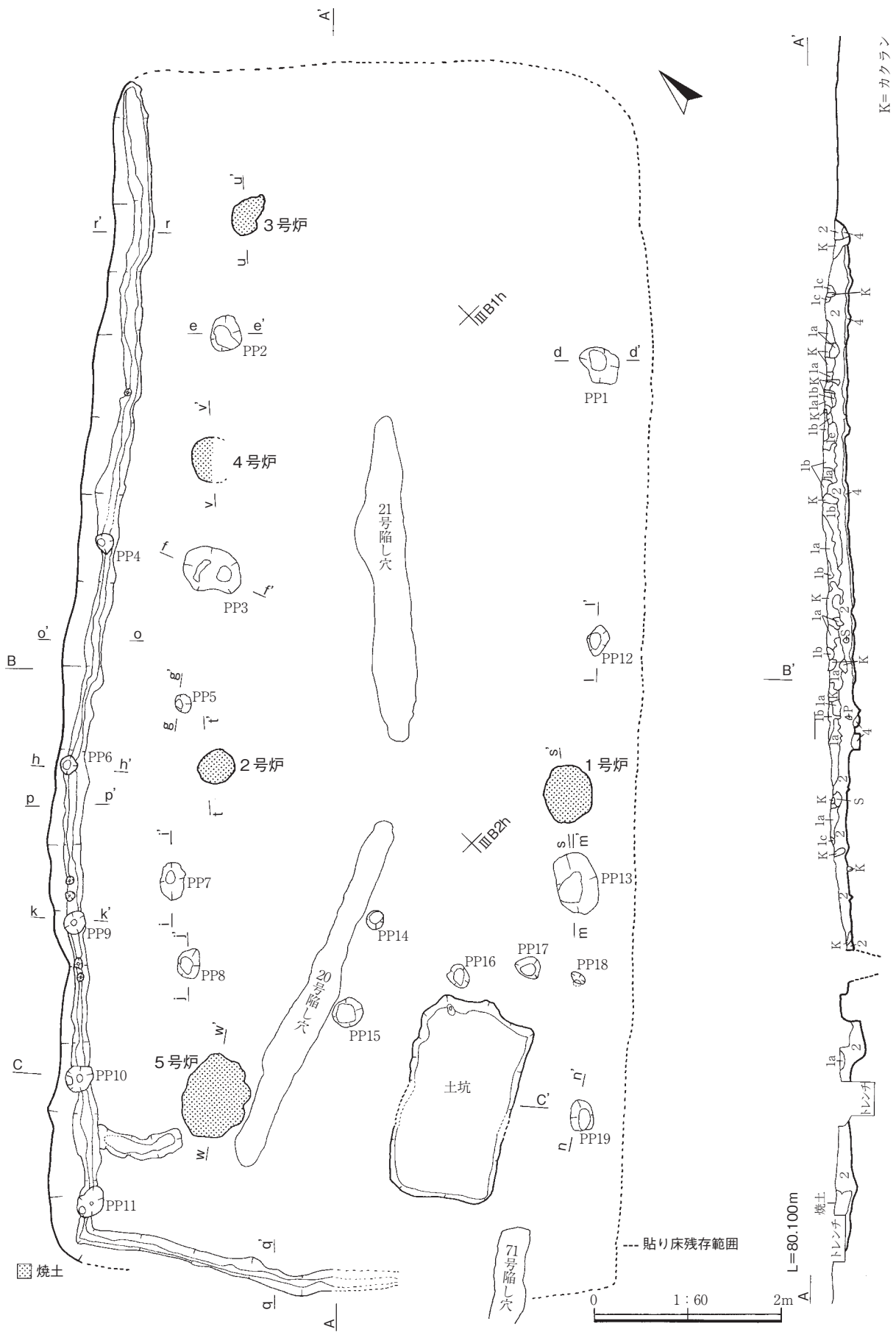
- 1 a 層 To-Cu テフラ二次堆積層。黄橙色を呈する。沿岸の遺跡で散見されるテフラと同相である。最下部に粒径 1 mm 程度の粒径の大きい部分が認められ、一次堆積層の可能性もある。
- 1 b 層 灰黄褐色を呈する砂状の To-Cu テフラ二次堆積層。黄橙色の To-Cu テフラ粒子が部分的に散在する。
- 1 c 層 黒褐色シルト層をベースとして To-Cu テフラが砂状に含まれる。
- 1 d 層 1 a 層・1 b 層の混在層。全体に明黄褐色を呈する。
- 1 e 層 1 a 層・1 b 層の混在層。ブロック状に含まれる。

To-Cu テフラは木根による攪乱が著しく上記した層位のうち、1 c 層～1 e 層は木根の攪乱によるものと考えている。1 a・1 b 層は 1 a 層が上位で 1 b 層が下位、または 1 b 層が上位で 1 a 層が下位と逆転する堆積状況が認められた（攪乱によるものではない）。火山灰分析によると両者とも To-Cu テフラという結果であった。

[壁] IV 層を壁とし直立ぎみに外傾する。床面までの残存深度は 24 cm である。

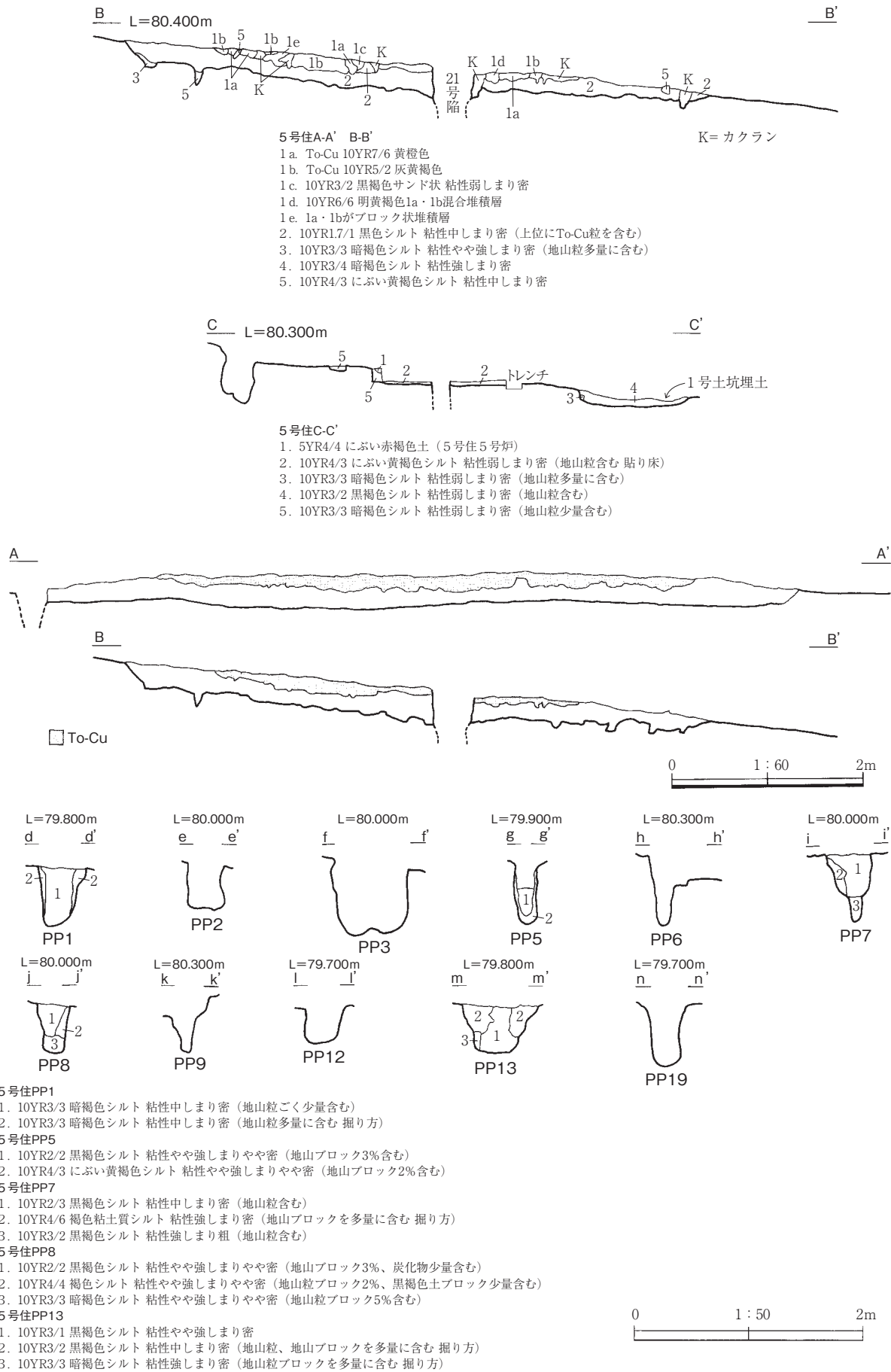
[床面] 遺構構築時に IV 層まで掘り込み、住居跡中央部から南西寄り以外は貼床が施される。貼床が施されていない部分では住居跡構築時の掘削痕跡が確認された。貼床は暗褐色土と IV 層起源の黄褐色土で構築され、床面は住居跡北西側がやや高く南東側に向かって傾斜する。他はほぼ平坦で固く締まる。

[柱穴] 19 個検出された。P P 1 と P P 2、P P 3 と P P 12、P P 7 と P P 13 がそれぞれ対となる主柱穴と捉えられる。P P 3 は他の柱穴より深く、底面に二つの柱痕跡が認められた。2 本同時に立てられていたものか、立て替えをしたものか判断することはできなかった。周溝内の柱穴（P P 10・11）の底面にも同様の痕跡が認められた。



第15図 5号竪穴住居跡 (1)

2 検出遺構



第16図 5号竪穴住居跡 (2)

規模は P P 1 径 46 × 32 cm、深さ 51 cm。P P 2 径 37 × 32 cm、深さ 38 cm。P P 3 径 61 × 45 cm、深さ 72 cm。P P 4 径 19 × 18 cm、深さ 59 cm。P P 5 径 19 × 17 cm、深さ 56 cm。P P 6 径 21 × 18 cm、42 cm。P P 7 径 40 × 25 cm、深さ 58 cm。P P 8 径 30 × 23 cm、深さ 44 cm。P P 9 径 26 × 21 cm、深さ 20 cm。P P 10 径 32 × 27 cm、深さ 50 cm。P P 11 径 36 × 26 cm、深さ 56 cm。P P 12 径 37 × 22 cm、深さ 30 cm。P P 13 径 32 × 31 cm、深さ 26 cm。P P 14 径 19 × 18 cm、深さ 27 cm。P P 15 径 26 × 24 cm、深さ 22 cm。P P 16 径 26 × 23 cm、深さ 44 cm。P P 17 径 27 × 24 cm、深さ 38 cm。P P 18 径 16 × 9 cm、深さ 23 cm。P P 19 径 24 × 23 cm、深さ 31 cm である。

[炉] 5 基検出された。地床炉である。P P 12・P P 13 の間 (1 号炉)、P P 3・P P 7 の間 (2 号炉)、P P 3・P P 2 の間 (4 号炉) の 3 基、住居跡北側 (3 号炉)、南西側 (5 号炉) に付設されている。北東側から南西側の 2～5 号炉が直線上に配列される。比較的焼成が良好な炉は 2 号炉と 5 号炉である。各炉の規模は以下のとおりである。

- 1 号炉 径 60 × 40 cm、厚さ 8 cm。 2 号炉 径 44 × 39 cm、厚さ 6 cm。  
 3 号炉 径 38 × 31 cm、厚さ 4 cm。 4 号炉 長軸 41 cm、厚さ 10 cm。  
 5 号炉 径 89 × 63 cm、厚さ 9 cm。

[土坑] 住居跡南西側に土坑が検出された。形状は長方形を呈する。規模は開口部径 2.14 × 1.16 m、底部径 1.94 × 1.06 m、深さ 0.21 m である。住居跡に伴わない遺構の可能性も考えられる。

[周溝] 住居跡北西側・南西側壁に構築される。西側に柱穴 5 個が伴う (P P 4・6・9～11)。また図示できなかったが、周溝底面際に柱穴状の小さな窪みがいくつか確認された。

断面形は U 字状・V 字状を呈する。規模は上端幅 10～28 cm、深さ 10～22 cm である。

[出土遺物] 第 18～23 図、写真図版 44～49

[出土状況] 縄文土器が 3506.9 g、石器・剥片 7114 g が出土した。床面から羽状縄文が施される 61、単軸絡条体・補修孔が施される 78 が出土している。大半が埋土からの出土で、多段結節回転文・S 字状連鎖沈文・口唇部に刻目が施される大木 2 a 式～白座式相当の土器が出土している。79 は縄文時代早期前葉に位置づけられる押型文土器である。流れ込みによるものと思われる。石器は石鏃 84～92、石匙 93～96、搔・削器 97、石核 98 等が出土している。1 号土坑からは間隔のある結節回転文が施される 82、口唇部に刻目が施される 83 が出土している。

[性格と年代] 形状・炉・柱穴・貼床を施す点から竪穴住居跡と判断した。出土遺物・埋土に To-Cu テフラを含むことから、縄文時代前期前葉に構築・使用されたと考えられる。

#### 6 号竪穴住居跡 (第 17 図、写真図版 10・11)

[位置・検出状況] II B 9 b グリッドに位置し、南側に 8 号焼土遺構・1・2 号柱穴状土坑・4 号竪穴住居跡が隣接する。基本層序 A の III 層上面で黒色の方形状プランとして確認された。

[重複関係・形状・規模] 位置関係から 4 号住居跡に截られる可能性も考えられるが、明確に判断することは出来なかった。

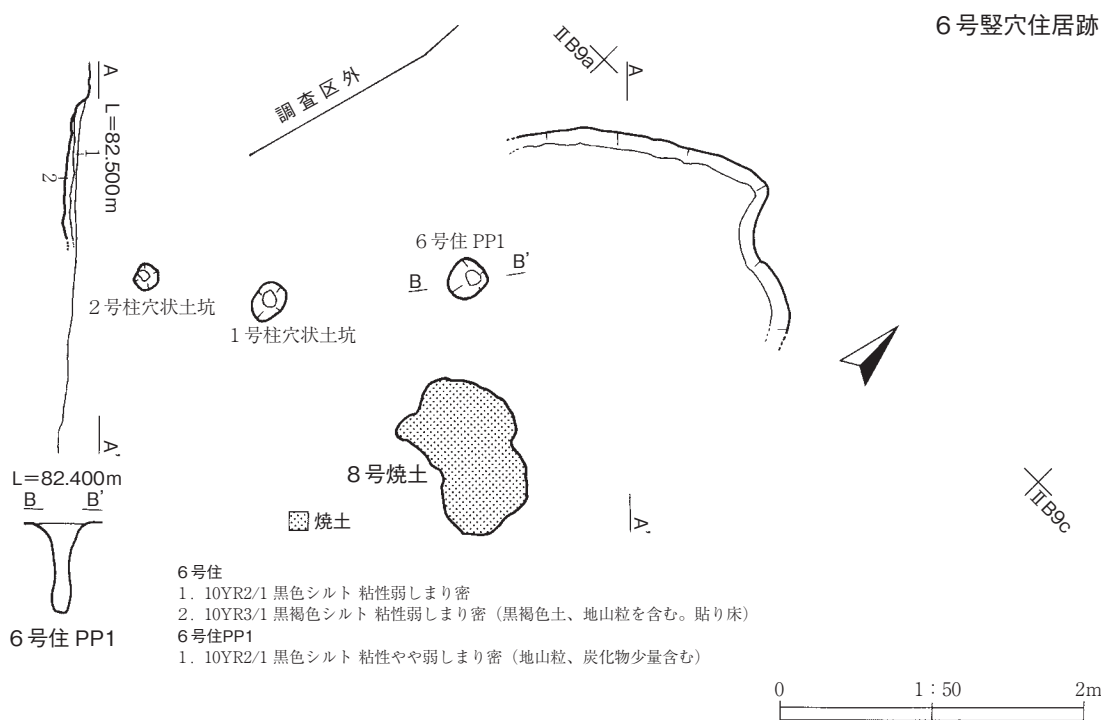
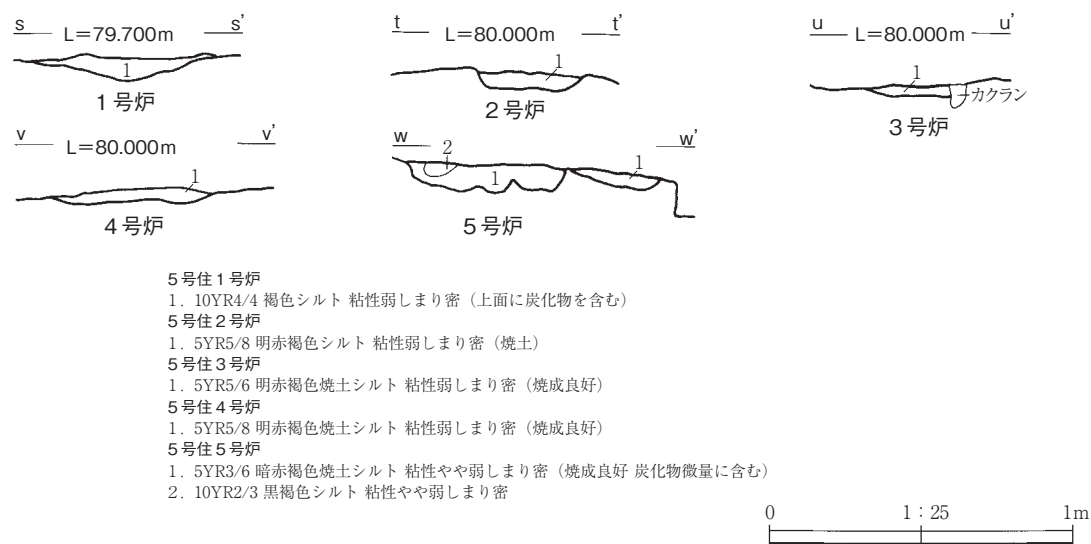
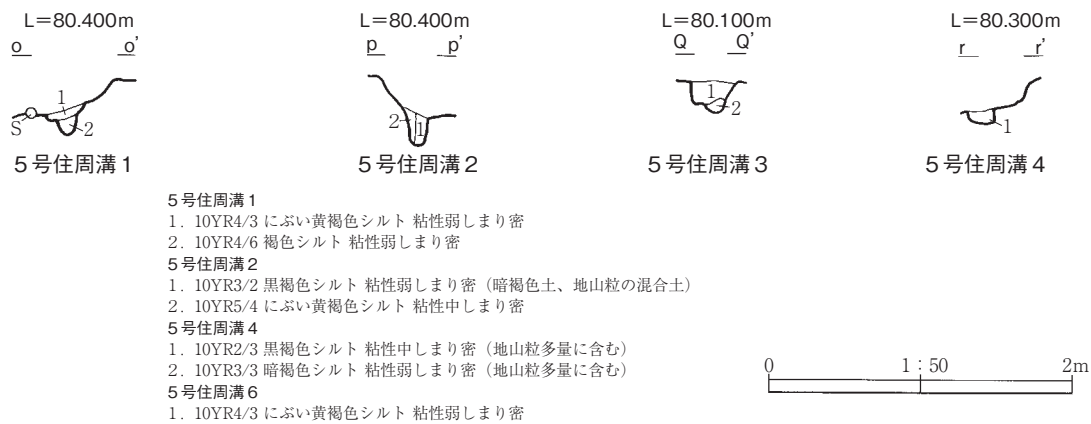
L 字状の壁のみの検出で全形は不明である。残存している壁から 1～3 号住居跡と同様な方形状を呈するものと思われる。

[埋土] 2 層に細分した。黒色土・黒褐色土で構成される。自然堆積と思われる。

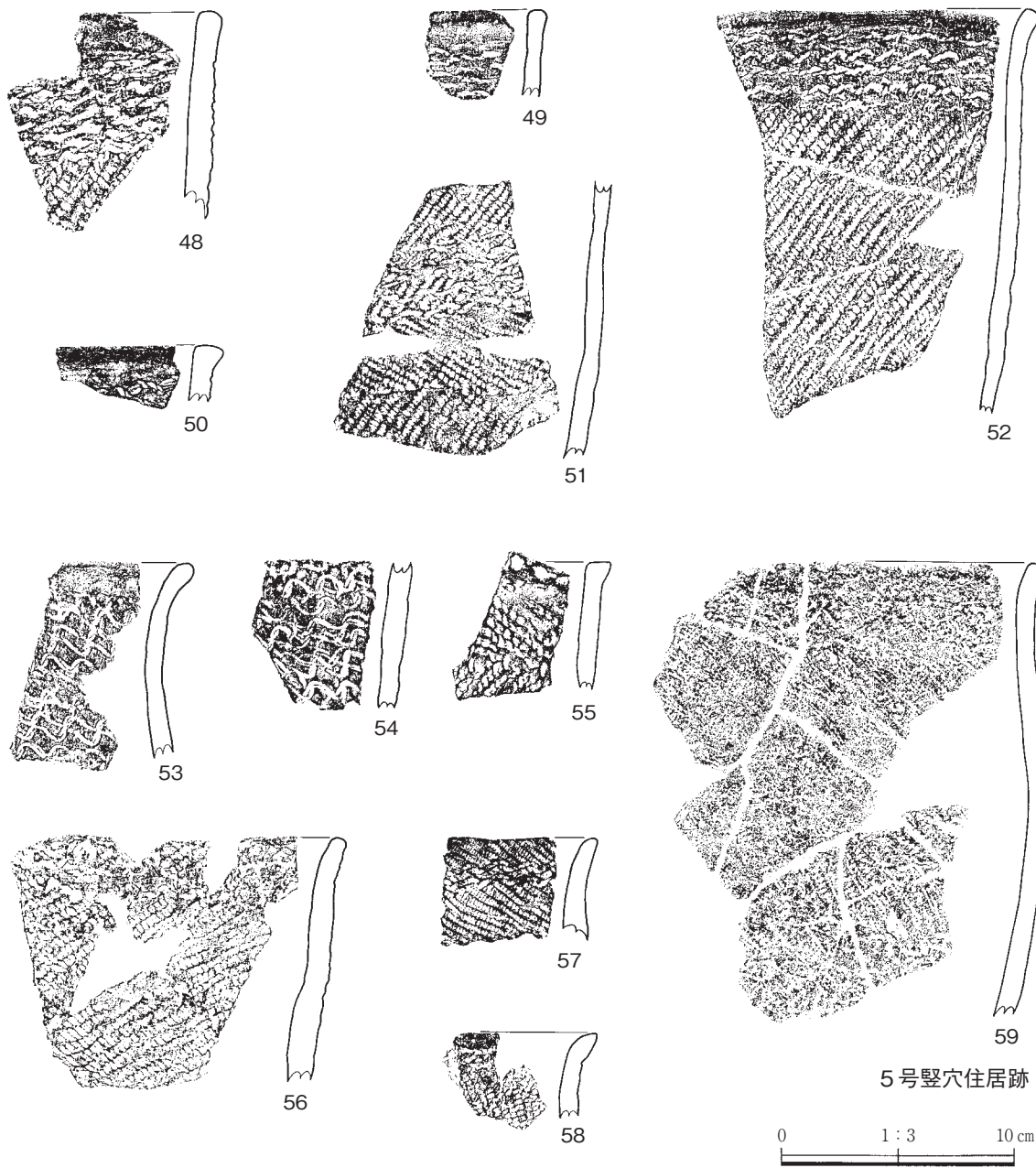
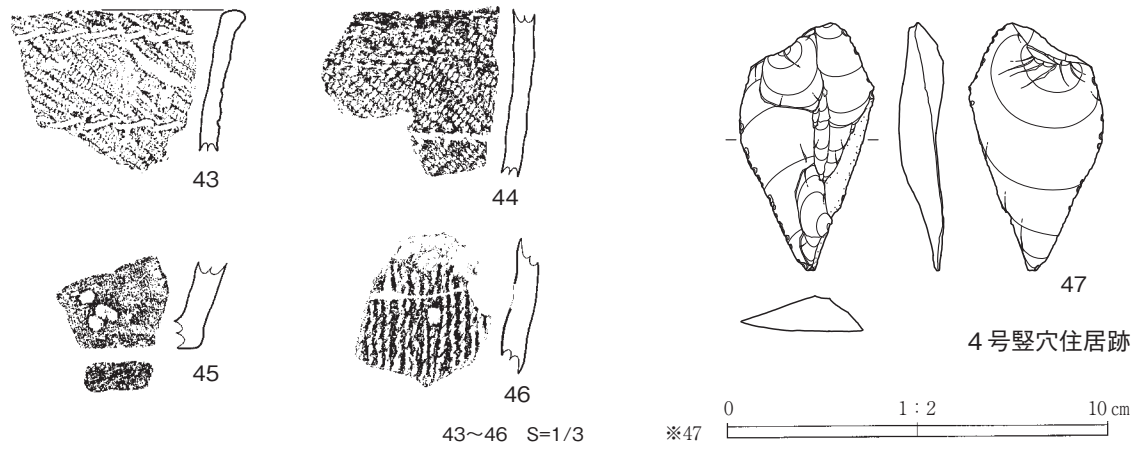
[壁] IV 層を壁とし緩やかに外傾する。床面までの残存深度は 9 cm である。

[床面] 遺構構築時に IV 層まで掘り込み構築される。貼床は確認されなかった。若干の凹凸はあるがほぼ平坦で固く締まる。

2 検出遺構

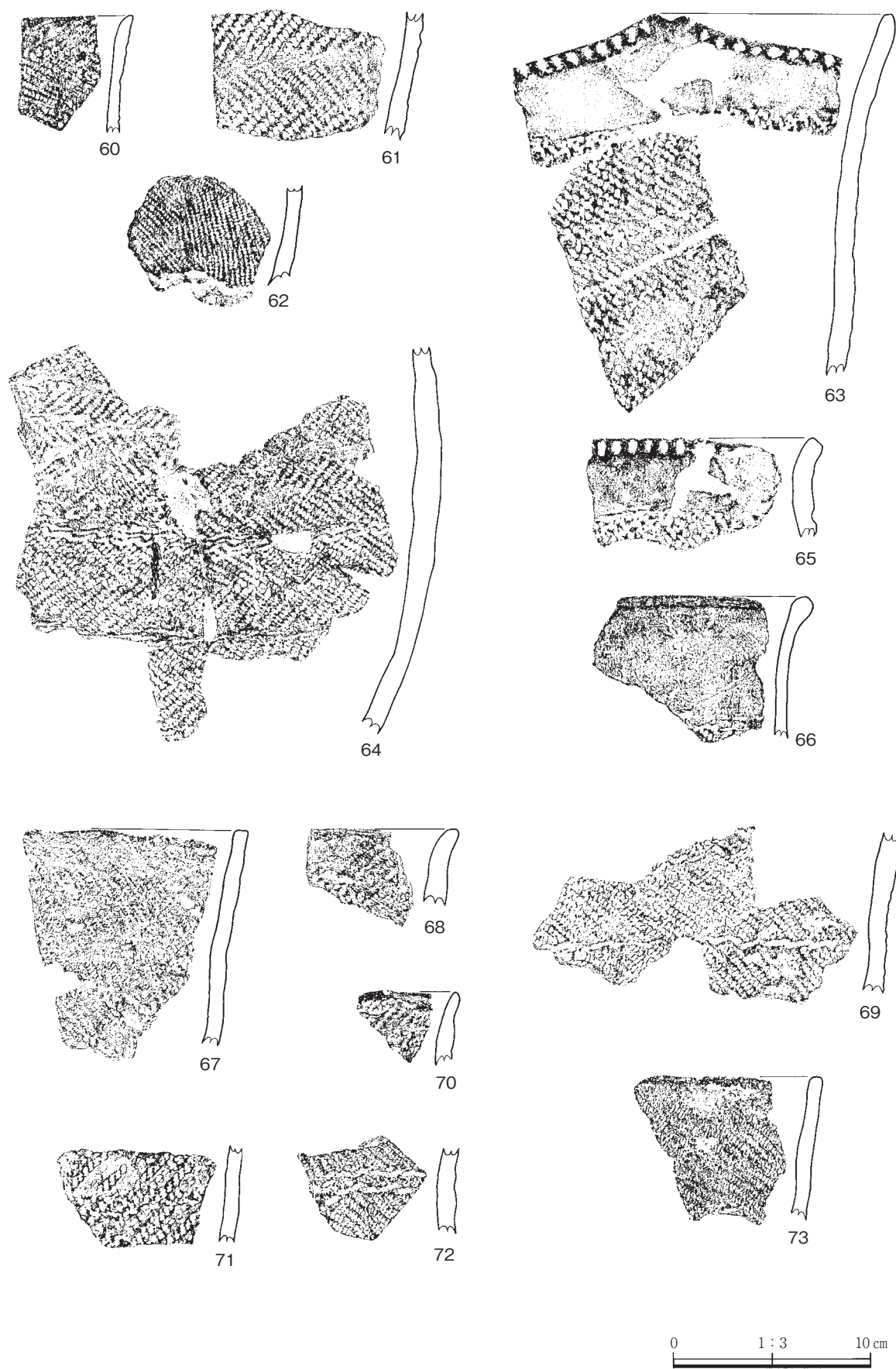


第17図 5号竪穴住居跡 (3)、6号竪穴住居跡

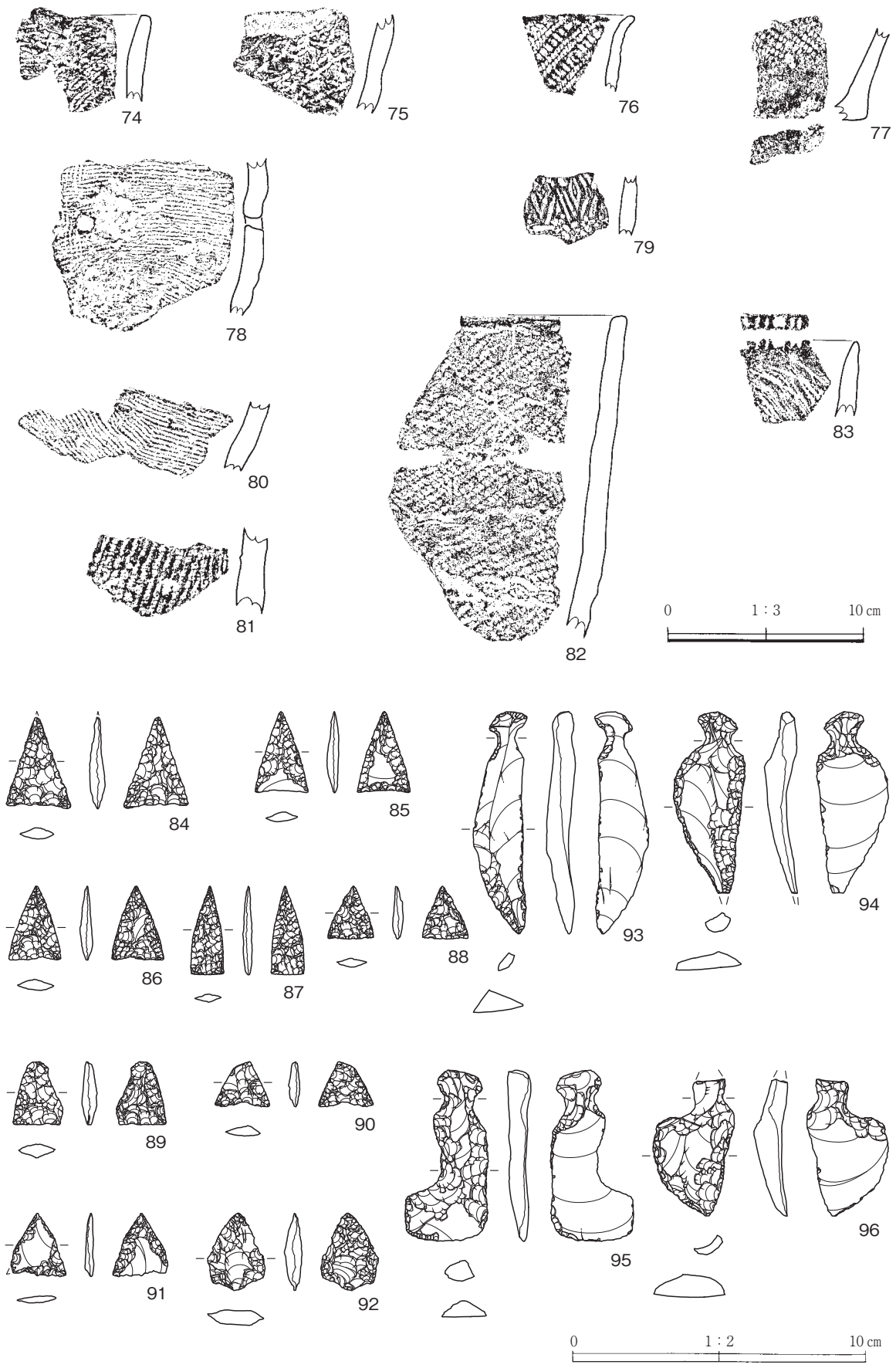


第18図 4・5号竪穴住居跡出土遺物(1)



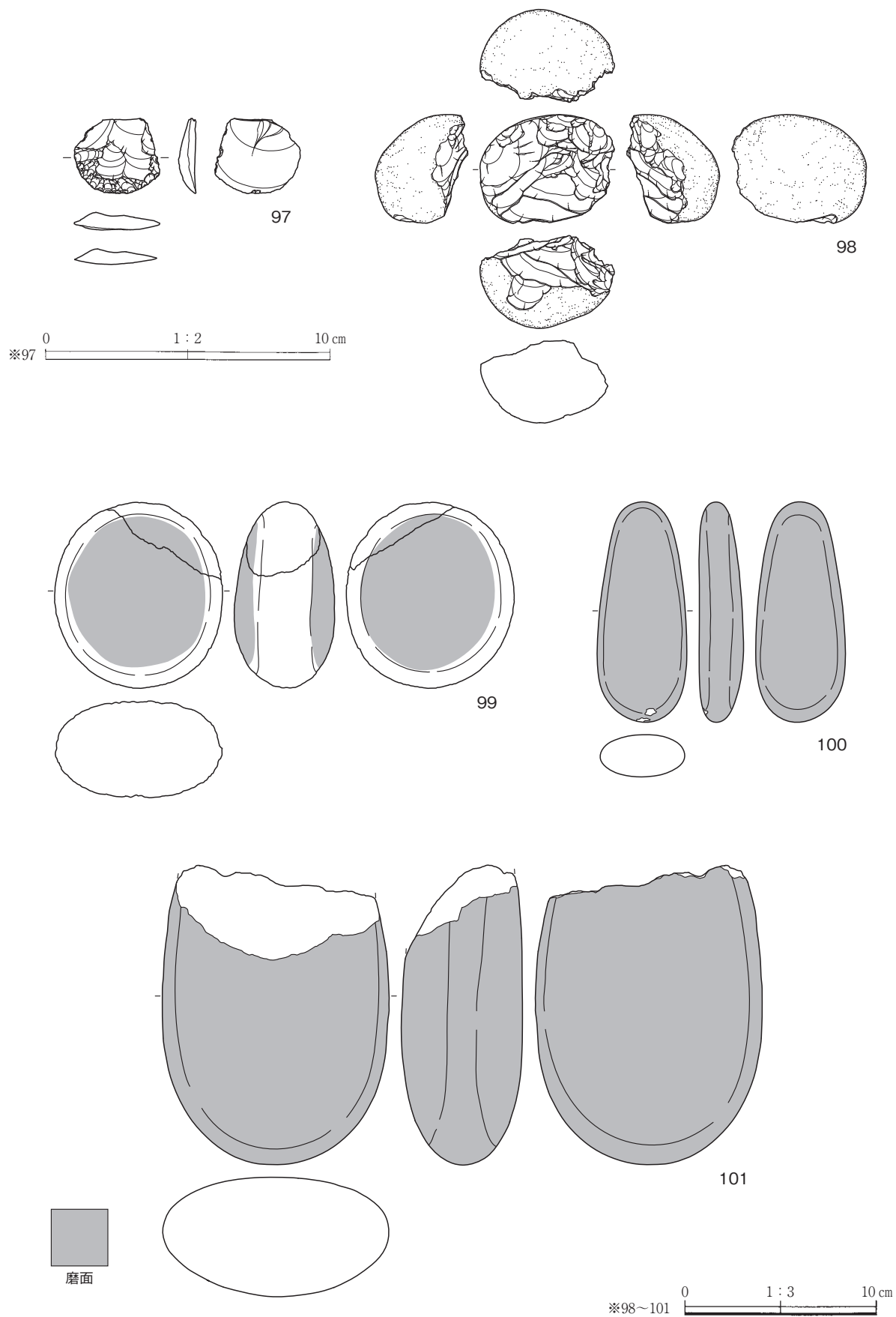


第19図 5号竖穴住居跡出土遺物(2)

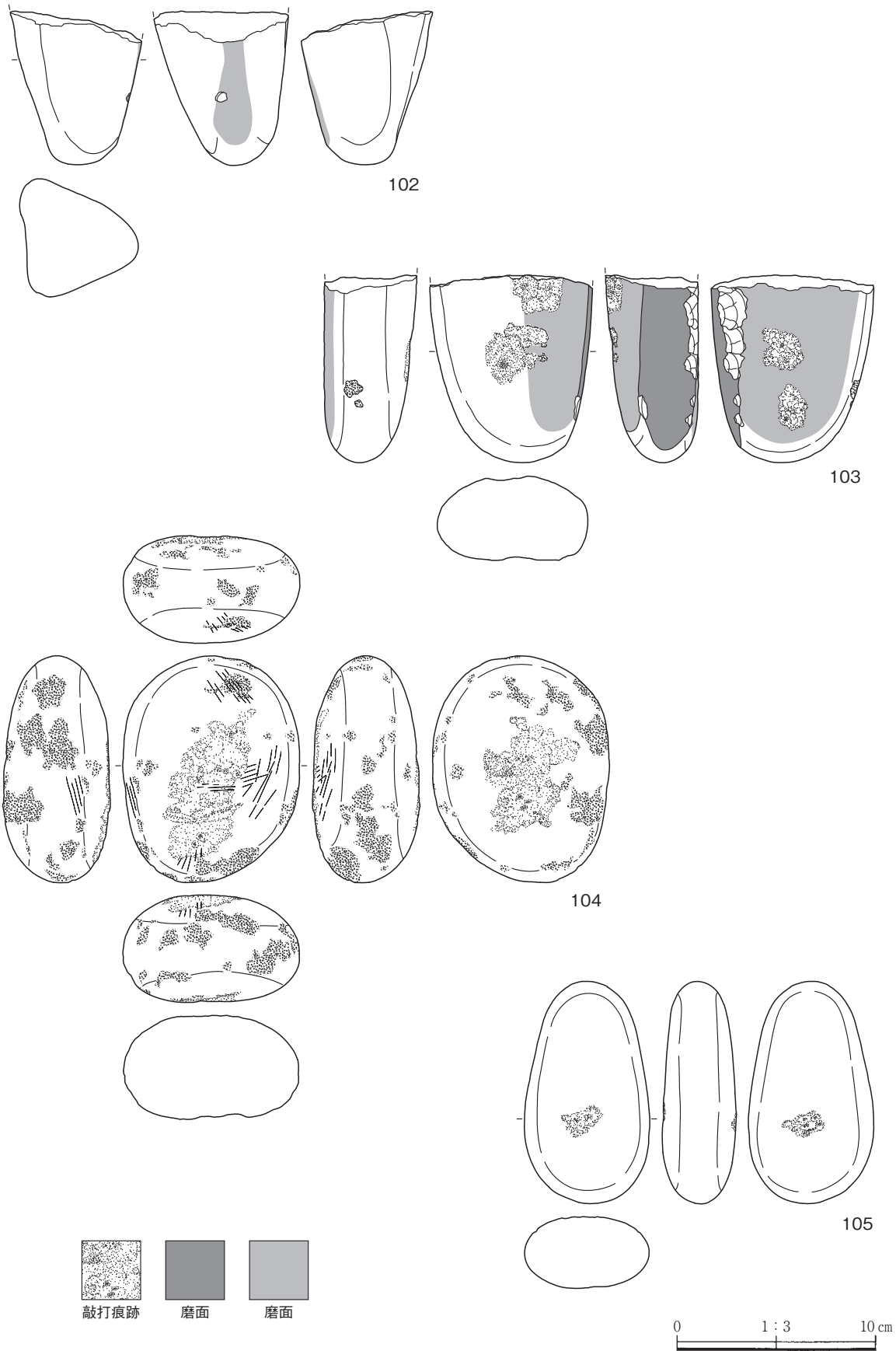


第20図 5号竪穴住居跡出土遺物(3)

2 検出遺構

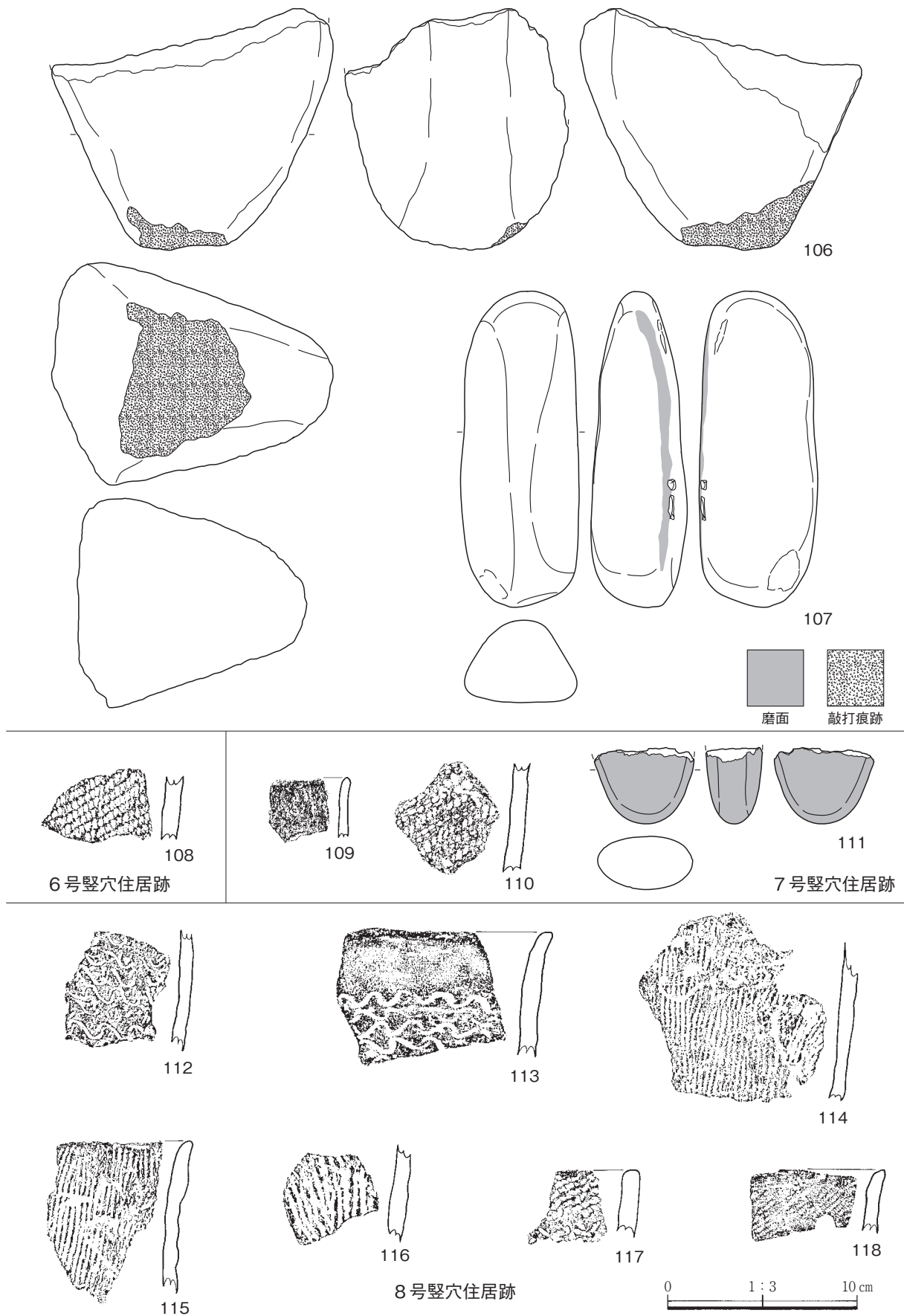


第21図 5号竖穴住居跡出土遺物(4)



第22図 5号竖穴住居跡出土遺物(5)

2 検出遺構



第23図 5号豎穴住居跡出土遺物(6)、6~8号豎穴住居跡出土遺物(1)

[柱穴] 1個検出された。規模は径27×26cm、深さ59cmである。南西側に柱穴状土坑が2個検出され、本遺構に伴う可能性も考えられるが断定できなかった。

[炉] 隣接する8号焼土遺構は、本住居跡床面と同レベルであり、6号住居跡の炉であった可能性も考えられる。

[出土遺物] 第23図、写真図版49

[出土状況] PP1から繊維を含む土器片1点(108)が出土した。

[性格と年代] 形状・柱穴の有無から竪穴住居跡と判断した。検出面・出土遺物から、縄文時代前期前葉に構築・使用されたと考えられる。

#### 7号竪穴住居跡 (第24図、写真図版11)

[位置・検出状況] III B 2 f・2 g・3 f グリッドに位置し、北東側に5号竪穴住居跡、20・21号陥し穴状遺構、南西側に71号陥し穴状遺構が隣接する。基本層序AのIII層上面で、黒色土の楕円形状のプランとして確認された。

[重複関係・形状・規模] 壁面北東側を5号住居跡周溝に、壁面南東側を71号陥し穴状遺構に截られ、全形は不明であるが、残存した壁から南北に長軸を持つ楕円形を呈するものと思われる。規模は残存値径2.18mである。

[埋土] 4層に細分した。黒色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁] IV層を壁とし緩やかに外傾する。床面までの残存深度は20cmである。

[床面] 遺構構築時にIV層まで掘り込み、全面に貼床が施されている。貼床は褐色土とIV層起源の黄褐色土で構築され凹凸で固く締まる。

[柱穴] 検出されなかった。

[炉] 検出されなかった。

[出土遺物] 第23図、写真図版49

[出土状況] 縄文土器が45.4g、石器・剥片が95.2g出土した。床面からの出土遺物はない。埋土から口縁部無文の109、複節斜縄文が施される110、磨石111が出土している。

[性格と年代] 炉は検出されなかったが、形状・貼床を施す点から竪穴住居跡と判断した。検出面・出土遺物から、縄文時代前期前葉に構築・使用されたと考えられる。

#### 8号竪穴住居跡 (第24図、写真図版12)

[位置・検出状況] III B 3 h・3 i グリッドに位置し、北側に27・28号陥し穴状遺構、南東側に11号陥し穴状遺構、西側に9・10号陥し穴状遺構が隣接する。基本層序AのIII層上面でTo-Cuテフラが点在する暗褐色土の方形状プランとして確認された。

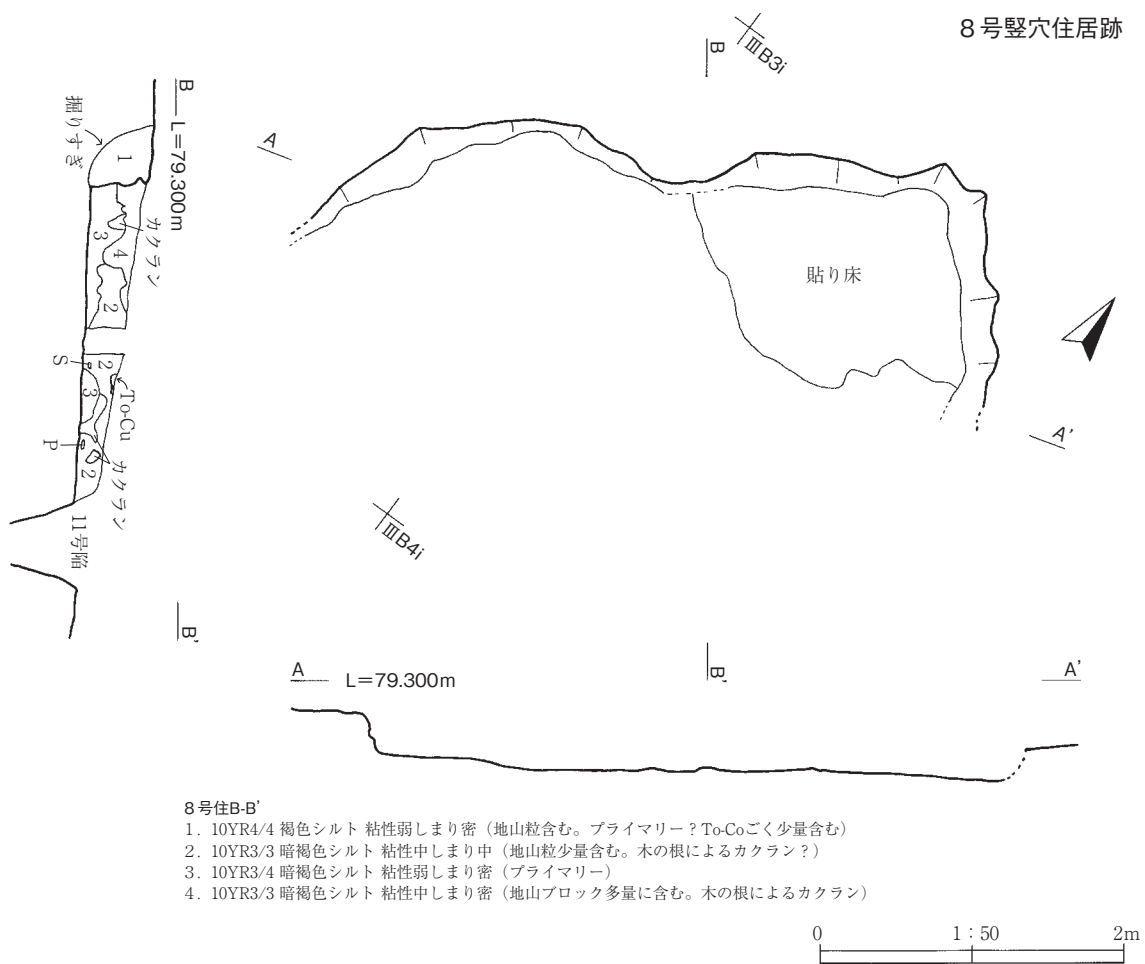
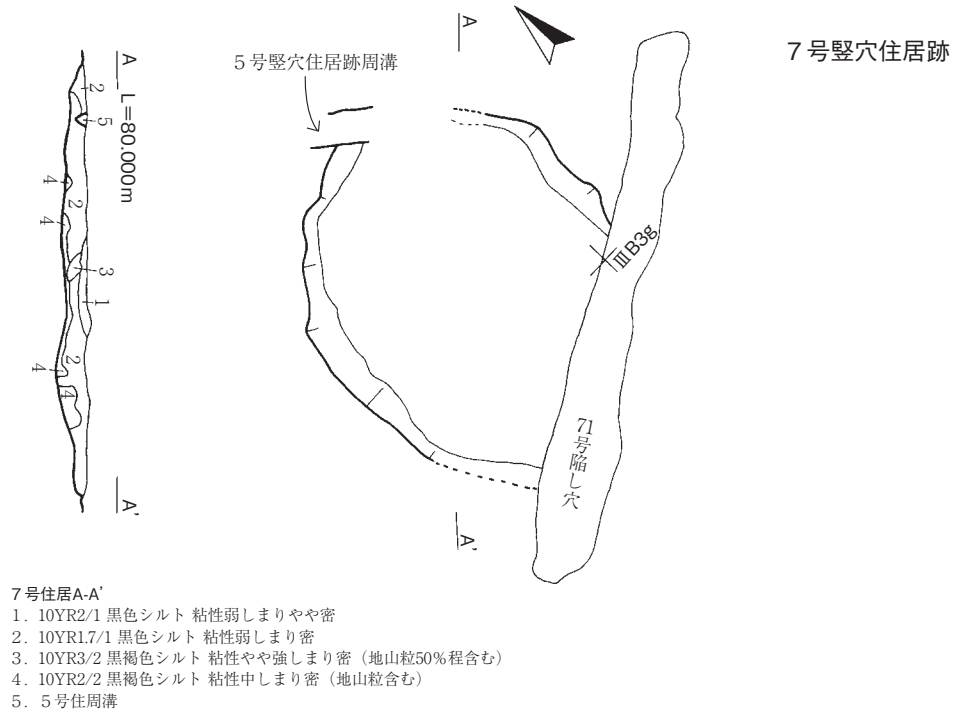
[重複関係・形状・規模] 40号陥し穴状遺構に截られる。木根による攪乱で南東壁を確認することができなかった。全形は不明である。残存する壁から方形状を呈するものと思われる。壁屈曲部は弧状を呈する。規模は残存値径4.3mである。

[埋土] 4層に細分した。暗褐色土を主体に構成され、埋土上部にTo-Cuテフラブロックが確認された。1層は木根による攪乱。2層は自然堆積もしくは木根による攪乱か判断することはできなかった。3層・4層は自然堆積である。

[壁] IV層を壁とし直立ぎみに立ち上がる。床面までの残存深度は39cmである。

[床面] 遺構構築時にIV層まで掘り込み、床面北側に貼床が施されている。貼床は褐色土とIV層起源

2 検出遺構



第24図 7・8号竪穴住居跡

の黄褐色土で構築されほぼ平坦で固く締まる。

[柱穴] 検出されなかった。

[炉] 検出されなかった。

[出土遺物] 第 23・25・27 図、写真図版 49～51

[出土状況] 縄文土器が 413.7 g、石器・剥片が 7870.4 g 出土した。床面からの出土遺物はない。埋土から S 字状連鎖沈文が施される 112・113、単軸絡条体が施される 114～116、単節縄文が施される 117・118 が出土している。石器は埋土から石皿 119・磨石 120・凹石 121 が出土している。

[性格と年代] 炉は検出されなかったが、形状・貼床を施す点から竪穴住居跡と判断した。検出面・埋土・出土遺物から、縄文時代前期前葉に構築・使用されたと考えられる。

### 9号竪穴住居跡（第 13 図、写真図版 13）

[位置・検出状況] II B 9 c・9 d グリッドに位置し、北側に 2 号竪穴住居跡、南東側に 3 号竪穴住居跡が隣接する。暗褐色の方形状プランとして確認された。

[重複関係・形状・規模] 南東壁が 3 号竪穴住居跡に截られる。全形は不明であるが残存する壁から方形状を呈するものと思われる。壁屈曲部は弧状を呈する。規模は残存直径 2.1 m である。

[埋土] 暗褐色土の単層で構成される。自然堆積と思われる。

[壁] IV 層を壁とし皿状に外傾する。床面までの残存深度は 23 cm である。

[床面] 遺構構築時に IV 層まで掘り込み、全面に貼床が施されている。貼床は暗褐色土と IV 層起源の黄褐色土で構築されほぼ平坦で固く締まる。

[柱穴] 検出されなかった。

[炉] 検出されなかった。

[出土遺物] 第 27 図、写真図版 51

[出土状況] 縄文土器が 413.7 g、石器・剥片が 48.9 g 出土した。床面からの出土遺物はない。単軸絡条体が施される 122、剥落により詳細は不明であるが、口縁部に隆帯・結節回転文が施される 123、底部直上の無文部をもつ 125、石器は石鏃 126・127 が出土している。

[性格と年代] 炉は検出されなかったが、形状・貼床を施す点から竪穴住居跡と判断した。検出面・出土遺物から縄文時代前期前葉に構築・使用されたと考えられる。

### 10号竪穴住居跡（第 26 図、写真図版 14）

[位置・検出状況] III B 1 f・2 f、III B 1 g・2 g グリッドに位置し、5 号竪穴住居跡床面で円形の暗褐色土プランとして確認された。

[重複関係・形状・規模] 5 号竪穴住居跡 5 号炉下位で検出された。明確に壁面を確認することができなかった部分があり、全形は不明であるが、残存する壁から円形状を呈するものと思われる。規模は径 2.71 × 2.55 m である。

[埋土] 6 層に細分した。暗褐色土・黒褐色土で構成される。自然堆積と思われる。

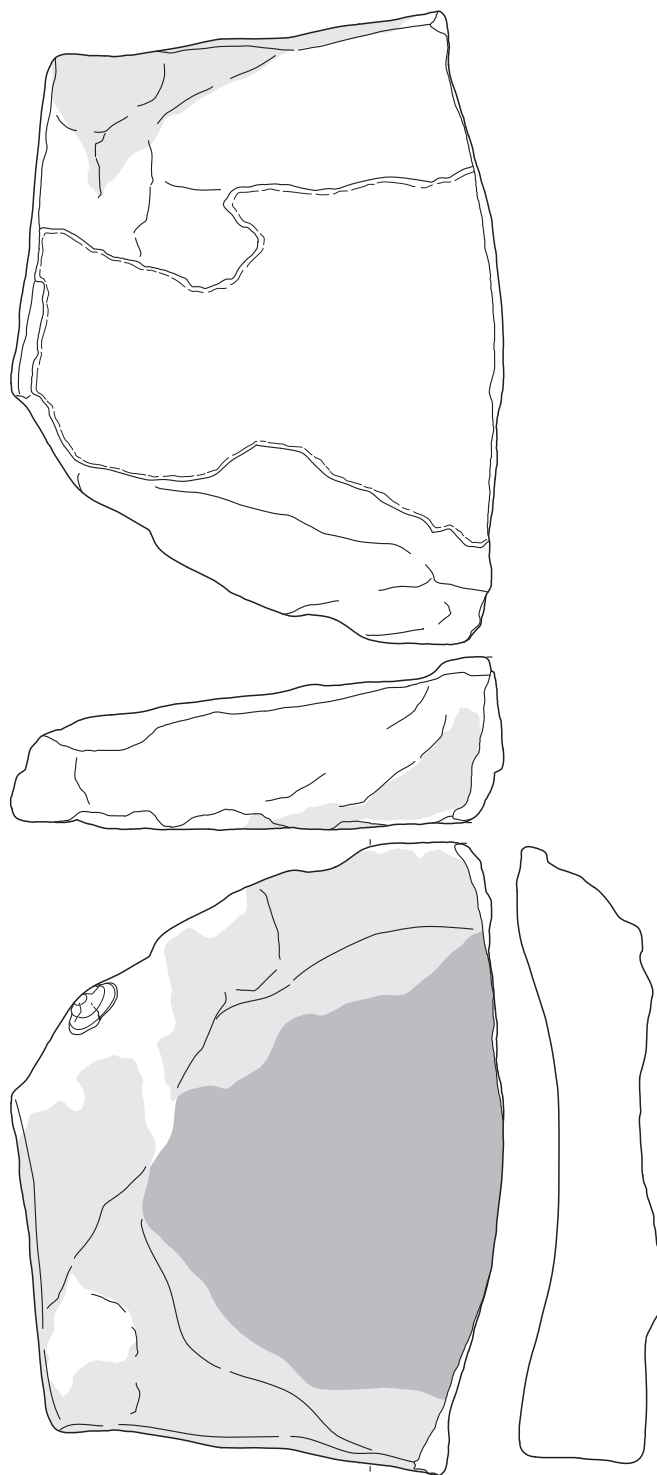
[壁] IV 層を壁とし皿状に外傾する。床面までの残存深度は 18 cm である。

[床面] 遺構構築時に IV 層まで掘り込み、部分的に貼床が施されている。貼床は暗褐色土と IV 層起源の黄褐色土で構築されほぼ平坦で固く締まる。

[柱穴] 検出されなかった。

[炉] 検出されなかった。





磨面

119

0 1:4 10 cm

第25図 8号竖穴住居跡出土遺物(2)

〔出土遺物〕 第 27 図、写真図版 51

〔出土状況〕 縄文土器が 56.9 g 出土した。床面からの出土遺物はない。埋土から口縁部に結節回転文が施される 128 が出土している。

〔性格と年代〕 炉は検出されなかったが、形状・貼床を施す点から竪穴住居跡と判断した。検出面・出土遺物から縄文時代前期前葉に構築・使用されたと考えられる。

## (2) 住居状遺構

### 1号住居状遺構 (第 26 図・写真図版 15)

〔位置・検出状況〕 III B 4 i・5 i グリッドに位置し、基本層序 A の IV 層で黒褐色土の方形状プランとして確認した。

〔重複関係〕 2号住居状遺構を截る。

〔形状・規模〕 方形状を呈する。規模は上端 4.16 × 2.84 m、下端 3.96 m × 2.48 m である。深さは最深部で 0.25 m である。

〔埋土〕 3層に細分した。黒褐色土を主体に構成される。

〔壁面・底面〕 IV 層を壁とし V 層の礫層を底面とする。西壁は垂直ぎみに立ち上がり外反する。東壁は垂直に立ち上がる。底面は北側から南側に向かってやや傾斜する。

〔出土遺物〕 第 27 図、写真図版 51

〔出土状況〕 埋土から繊維を含む土器 2 点が出土している (129)。内 1 点は摩滅が著しいことから割愛した。

〔性格と年代〕 貼床が施されていないため、住居状遺構として取り扱っているが、平面形・規模・埋土といった諸要素は他の竪穴住居跡と概ね共通する。

### 2号住居状遺構 (第 26 図・写真図版 16)

〔位置・検出状況〕 III B 4 h・4 i・5 h グリッドに位置し、基本層序 A の III 層で黒褐色土の方形状プランとして確認した。

〔重複関係〕 1号住居状遺構に截られる。

〔形状・規模〕 方形状を呈する。規模は北東軸上端 4.12 m、下端 3.93 m である。深さは最深部で 0.15 m である。

〔埋土〕 黒褐色土の単層で構成される。

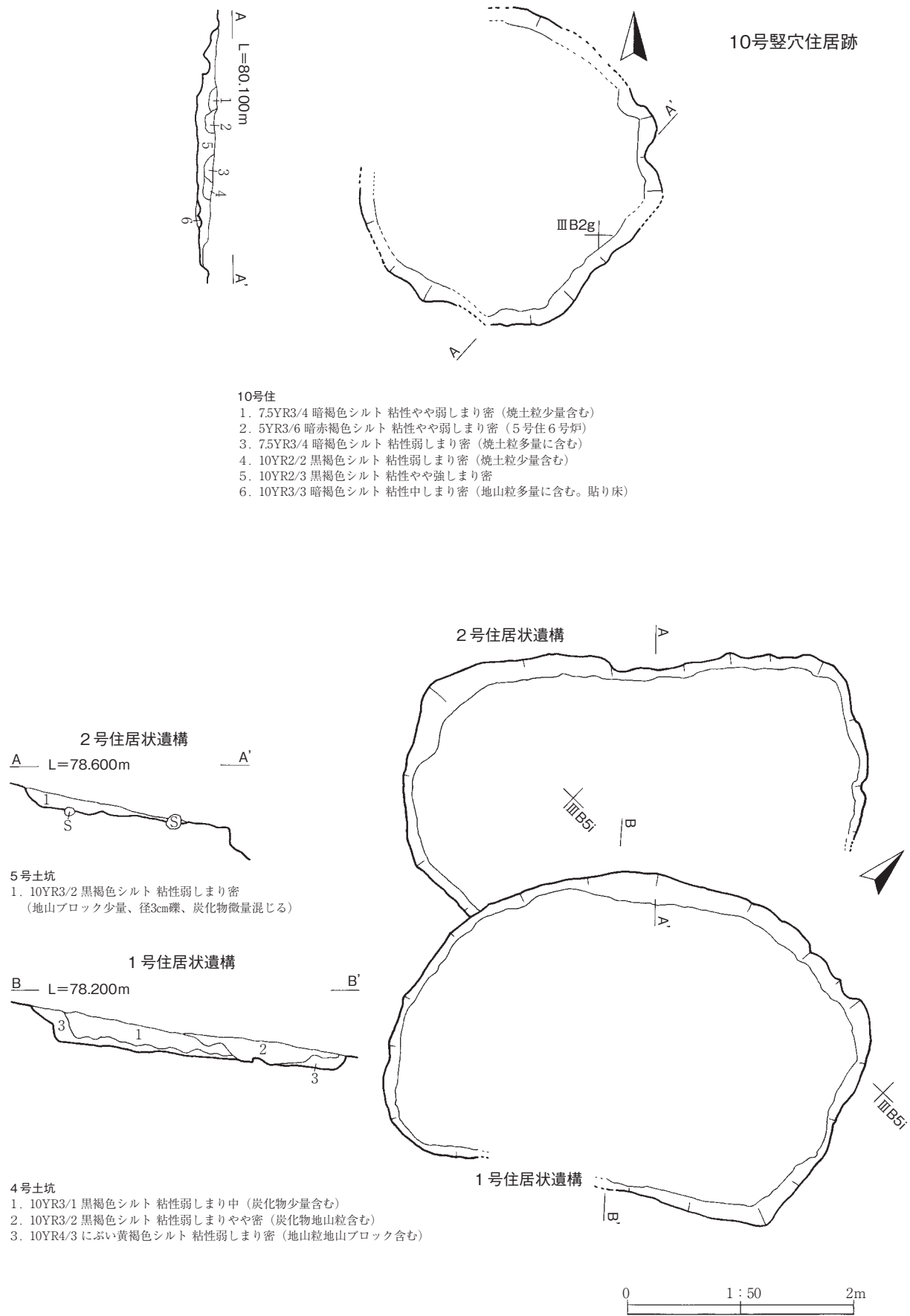
〔壁面・底面〕 III～V 層を壁とし V 層礫層を底面とする。東壁は 1号住居状遺構に截られ詳細は不明である。壁は皿状に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 第 27 図、写真図版 51

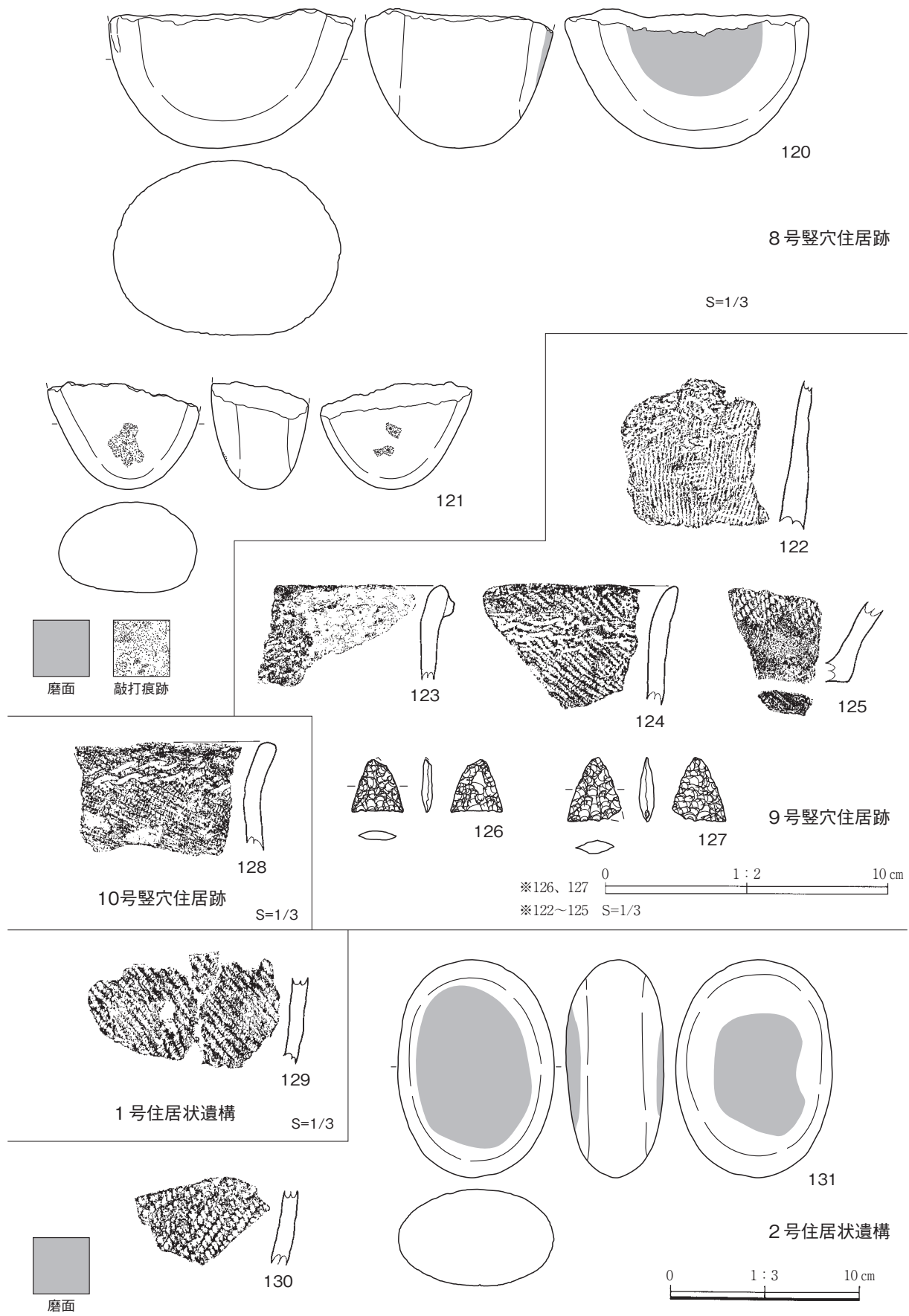
〔出土状況〕 埋土から繊維を含む複節斜縄文が施される 130、磨石 131 が出土している。

〔性格と年代〕 貼床が施されていないため、住居状遺構として取り扱っているが、平面形・規模・埋土といった諸要素は他の竪穴住居跡と概ね共通する。

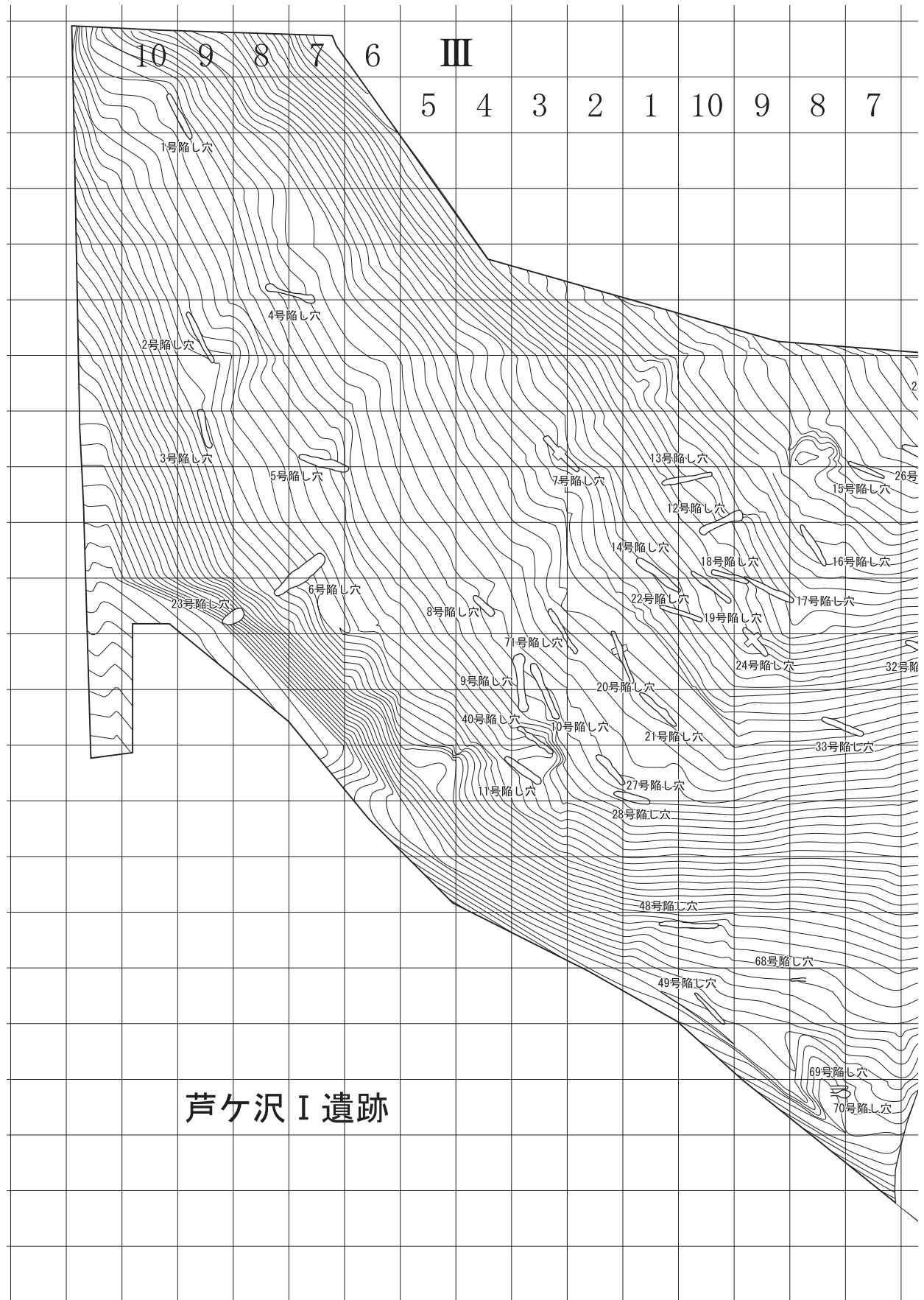
2 検出遺構



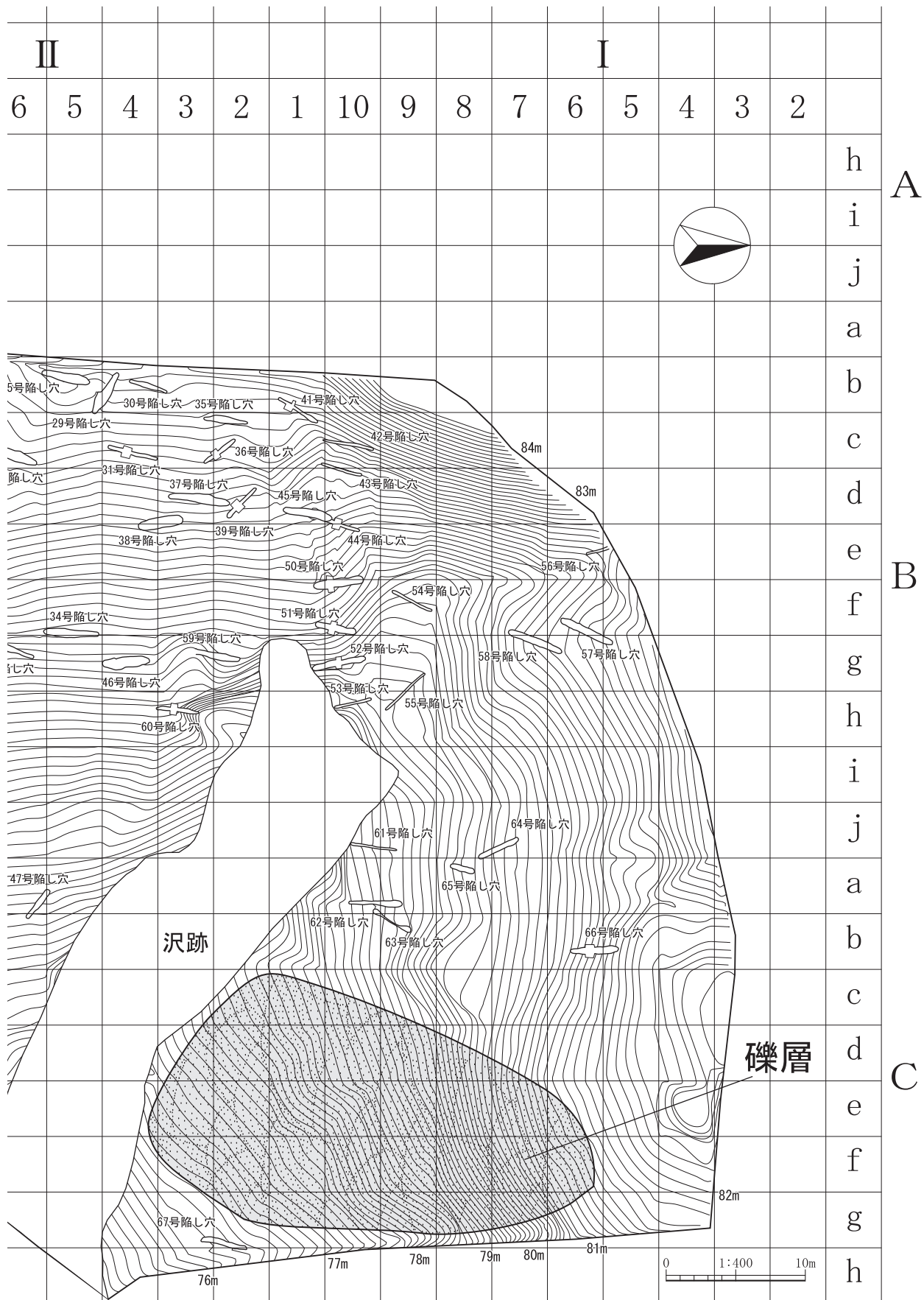
第26図 10号竪穴住居跡、1・2号住居状遺構



第27図 8号竖穴住居跡出土遺物(3)、9・10号竖穴住居跡出土遺物、1・2号住居状遺構出土遺物



第28図 陥し穴状遺構配置図



## 2 検出遺構

### (3) 陥し穴状遺構

#### 1号陥し穴状遺構（第29図、写真図版17）

〔位置・検出状況〕ⅢA9g・9hグリッドに位置する。基本層序AのⅢ層で検出した。

〔形状・規模〕平面形はN-63°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は3.58×0.50mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形は壁面の両端部はオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で0.76mである。

〔埋土〕4層に細分した。黒褐色土・壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕Ⅲ～V層を壁としV層を底面とする。底面は若干の凹凸があるがほぼ平坦である。

〔出土遺物〕なし。

〔性格と年代〕構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 2号陥し穴状遺構（第29図、写真図版17）

〔位置・検出状況〕ⅢB9a・9bグリッドに位置する。基本層序AのⅢ層で検出した。

〔形状・規模〕平面形はN-62°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は4.02×0.42mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で0.64mである。

〔埋土〕4層に細分した。黒褐色土・壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕Ⅲ～Ⅵ層を壁としⅥ層を底面とする。底面は若干の凹凸があるがほぼ平坦である。

〔出土遺物〕なし。

〔性格と年代〕構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 3号陥し穴状遺構（第29図、写真図版17）

〔位置・検出状況〕ⅢB9b・9cグリッドに位置する。基本層序AのⅣ層で検出した。

〔形状・規模〕平面形はN-75°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は2.88×0.42mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形は東壁が内湾して立ち上がり、西壁はやや外傾して立ち上がる。深さは最深部で0.48mである。

〔埋土〕4層に細分した。黒褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕Ⅳ～Ⅵ層を壁としⅥ層を底面とする。底面は若干の凹凸があり西壁から東壁に向かって傾斜する。

〔出土遺物〕なし。

〔性格と年代〕構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 4号陥し穴状遺構（第29図、写真図版17）

〔位置・検出状況〕ⅢA7j・8j、ⅢB7aグリッドに位置する。基本層序AのⅢ層で検出した。

〔形状・規模〕平面形はN-15°-Eに長軸をとる両端が広がる溝状で、上面規模は3.70×0.20mである。横断面形はV字形を呈する。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深

さは最深部で 0.66 m である。

〔埋土〕 2 層に細分した。黒色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 Ⅲ～Ⅴ層を壁としⅤ層を底面とする。底面は中央部付近から南壁・北壁に向かって傾斜する。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 5号陥し穴状遺構（第30図、写真図版18）

〔位置・検出状況〕 Ⅲ B 6 c・6 d、Ⅲ B 7 c・7 d グリッドに位置する。基本層序 A のⅢ層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 14° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.70 × 0.6 m である。横断面形は逆台形を呈する。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で 0.57 m である。

〔埋土〕 3 層に細分した。黒色土・黒褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 Ⅲ～Ⅴ層を壁としⅤ層を底面とする。底面は凹凸があり中央部から南壁・北壁に向かって傾斜する。

〔出土遺物〕 第 47 図、写真図版 51

〔出土状況〕 埋土から繊維を含む付加条（羽状縄文）が施される 132、縄文時代早期白浜式相当の格子状沈線文が施される 133、磨石 134 が出土している。流れ込みによるものと思われる。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 6号陥し穴状遺構（第30図、写真図版18）

〔位置・検出状況〕 Ⅲ B 7 e・7 f・8 e・8 f グリッドに位置する。基本層序 A のⅢ層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 39° - W に長軸をとる溝状で、上面規模は 4.46 × 1.1 m である。横断面形は Y 字形だが、本来は V 字形であったと考えられる。縦断面形は南東壁がやや外傾して立ち上がり、北西壁は内湾して立ち上がる。深さは最深部で 0.97 m である。

〔埋土〕 6 層に細分した。黒色土・黒褐色土・壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 Ⅲ～Ⅴ層を壁としⅤ層を底面とする。底面は凹凸があり西壁から東壁に向かって傾斜する。

〔出土遺物〕 第 47 図、写真図版 52

〔出土状況〕 埋土から繊維を含む合捺に沈線が施される 135、結節回転文が施される 136、磨石 137 が出土している。流れ込みによるものと思われる。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 7号陥し穴状遺構（第30図、写真図版18）

〔位置・検出状況〕 Ⅲ B 2 c・2 d・3 c グリッドに位置する。基本層序 A のⅢ層で検出した。16号焼土遺構を截る。



## 2 検出遺構

[形状・規模] 平面形はN - 45° - Eに長軸をとる溝状で、上面規模は3.45 × 0.46 mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で1.17 mである。

[埋土] 5層に細分した。黒色土・黒褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] Ⅲ～Ⅵ層を壁としⅥ層を底面とする。底面は中央付近で窪む。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 8号陥し穴状遺構（第31図、写真図版18）

[位置・検出状況] ⅢB4fグリッドに位置する。基本層序AのⅢ層で検出した。13号焼土を截る。

[形状・規模] 平面形はN - 44° - Eに長軸をとる溝状で、上面規模は1.90 × 0.54 mである。横断面形はV字形を呈する。縦断面形は南西壁が垂直に立ち上がり、北東壁はやや外傾して立ち上がる。深さは最深部で0.67 mである。

[埋土] 3層に細分した。黒褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] Ⅲ～Ⅴ層を壁としⅤ層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 第47図、写真図版52

[出土状況] 埋土から隆帯に刻目・多段結節回転文が施される138が出土している。流れ込みによるものと思われる。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 9号陥し穴状遺構（第31図、写真図版19）

[位置・検出状況] ⅢB3g・3hグリッドに位置する。基本層序AのⅢ層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN - 83° - Eに長軸をとる両端が広がる溝状で、縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。上面規模は4.16 × 0.54 mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形は東壁が垂直に立ち上がり、西壁がやや外傾して立ち上がる。深さは最深部で0.71 mである。

[埋土] 3層に細分した。暗褐色土・黒褐色土・壁面崩落土で構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] Ⅲ～Ⅵ層を壁としⅥ層を底面とする。底面は西壁から東壁に向かって傾斜する。

[出土遺物] 摩滅が著しいことから割愛した。流れ込みによるものと思われる。

[出土状況] 埋土から繊維を含む羽状縄文が施される土器が出土している。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 10号陥し穴状遺構（第31図、写真図版19）

[位置・検出状況] ⅢB3g・3hグリッドに位置する。基本層序AのⅢ層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN - 65° - Eに長軸をとる溝状で、上面規模は4.40 × 0.4 mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形は西壁が内湾して立ち上がり、東壁はやや外傾して立ち上がる。深さは最深部で0.65 mである。

〔埋土〕 4層に細分した。黒褐色土・にぶい黄褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 Ⅲ～Ⅴ層を壁としⅤ層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 第47図、写真図版52

〔出土状況〕 埋土から口唇部に刻目・平行沈線が施される縄文時代早期前葉の土器139が出土している。流れ込みによるものと思われる。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 11号陥し穴状遺構（第31図、写真図版19）

〔位置・検出状況〕 ⅢB3i・4iグリッドに位置する。基本層序AのⅢ層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形はN-35°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は3.12×0.58mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形は南西壁が内湾して立ち上がり、北東壁は外傾して立ち上がる。深さは最深部で0.66mである。

〔埋土〕 4層に細分した。暗褐色土・壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 Ⅲ～Ⅴ層を壁としⅤ層を底面とする。底面は凹凸がある。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 12号陥し穴状遺構（第32図、写真図版19）

〔位置・検出状況〕 ⅡB9d・10d・10eグリッドに位置する。基本層序AのⅢ層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形はN-25°-Wに長軸をとる両端が広がる溝状で、上面規模は3.34×0.46mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形は碗状に立ち上がる。深さは最深部で0.66mである。

〔埋土〕 4層に細分した。壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 Ⅲ～Ⅴ層を壁としⅤ層を底面とする。底面は凹凸があり南壁から北壁に向かって傾斜する。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 13号陥し穴状遺構（第32図、写真図版20）

〔位置・検出状況〕 ⅡB10d・ⅢB1dグリッドに位置する。基本層序AのⅣ層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形はN-10°-Wに長軸をとる溝状で、上面規模は推定3.16×0.31mである。横断面形は逆台形を呈する。縦断面形は南壁がやや外傾して立ち上がる。北壁は確認することが出来なかった。深さは最深部で0.28mである。

〔埋土〕 暗褐色土の単層で構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 Ⅳ～Ⅴ層を壁としⅤ層を底面とする。底面は礫層となっておりほぼ平坦で北側から南壁に向かって傾斜する。

〔出土遺物〕 なし。

## 2 検出遺構

[性格と年代] 他の陥し穴状遺構と比較して、浅いことから構造的に陥し穴として機能していたのか疑問がある。底面が礫層となっていることから、遺構構築が困難で掘削の途中で放棄した可能性が考えられる。検出面・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 14号陥し穴状遺構（第32図、写真図版20）

[位置・検出状況] II B 10 f・III B 1 e・1 fグリッドに位置する。基本層序AのⅢ層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-38°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は3.9×0.58 mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形は南西壁が外傾し、北東壁は内湾して立ち上がる。深さは最深部で1.0 mである。

[埋土] 3層に細分した。暗褐色土・壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] Ⅲ～Ⅴ層を壁としⅤ層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 15号陥し穴状遺構（第32図、写真図版20）

[位置・検出状況] II B 7 c・7 dグリッドに位置する。基本層序AのⅢ層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-22°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は2.8×0.34 mである。横断面形はV字形を呈する。縦断面形は南壁がほぼ垂直に立ち上がり、北壁は外傾して立ち上がる。深さは最深部で0.62 mである。

[埋土] 4層に細分した。黒褐色土・黄褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] Ⅲ～Ⅳ層を壁としⅣ層を底面とする。底面はほぼ平坦で、北東から南西に向かって傾斜する。

[出土遺物] 第47図、写真図版52

[出土状況] 埋土から石匙140が出土している。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 16号陥し穴状遺構（第33図、写真図版20）

[位置・検出状況] II B 8 eグリッドに位置する。基本層序AのⅢ層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-60°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は3.7×0.48 mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最深部で0.95 mである。

[埋土] 8層に細分した。黒褐色土・壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] Ⅲ～Ⅴ層を壁としⅤ層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 17号陥し穴状遺構（第33図、写真図版21）

[位置・検出状況] II B 8 f・9 f グリッドに位置する。基本層序 A の III 層で検出した。

[形状・規模] 平面形は N - 26° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.94 × 0.46 m である。横断面形は V 字形を呈する。縦断面形はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。深さは最深部で 0.86 m である。

[埋土] 5 層に細分した。黒褐色土・壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] III ~ VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 18 号陥し穴状遺構 (第 33 図、写真図版 21)

[位置・検出状況] II B 9 e・9 f・10 e グリッドに位置する。基本層序 A の III 層で検出した。

[形状・規模] 平面形は N - 60° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 2.78 × 0.34 m である。横断面形は V 字形を呈する。縦断面形はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最深部で 0.73 m である。

[埋土] 4 層に細分した。黒褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] III ~ VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面は若干の凹凸があるがほぼ平坦である。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 19 号陥し穴状遺構 (第 33 図、写真図版 21)

[位置・検出状況] II B 10 e・10 f グリッドに位置する。基本層序 A の III 層で検出した。

[形状・規模] 平面形は N - 37° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.58 × 0.28 m である。横断面形は Y 字形を呈する。縦断面形はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最深部で 0.72 m である。

[埋土] 3 層に細分した。黒褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] III ~ V 層を壁とし V 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 20 号陥し穴状遺構 (第 34 図、写真図版 21)

[位置・検出状況] III B 1 g・2 f・2 g グリッドに位置する。基本層序 A の To-Cu テフラ堆積層で検出した。To-Cu テフラ堆積層を掘削し 5 号竪穴住居跡床面を載る。

[形状・規模] 平面形は N - 60° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.98 × 0.36 m である。横断面形は Y 字形だが、本来は V 字形であったと考えられる。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で 0.85 m である。

[埋土] 4 層に細分した。黒褐色土・壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] To-Cu テフラ堆積層 ~ VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と

## 2 検出遺構

考えられる。

### 21 号陥し穴状遺構（第 34 図、写真図版 22）

〔位置・検出状況〕Ⅲ B 1 h グリッドに位置する。基本層序 A の To-Cu テフラ堆積層で検出した。To-Cu テフラを掘削し 5 号竪穴住居跡床面を截る。

〔形状・規模〕平面形は N - 43° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.39 × 0.36 m である。横断面形は V 字形を呈する。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で 0.82 m である。

〔埋土〕8 層に細分した。黒色土・壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕To-Cu 堆積層～V 層を壁とし V 層を底面とする。底面は北東壁から南西に向かって傾斜する。

〔出土遺物〕なし。

〔性格と年代〕構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 22 号陥し穴状遺構（第 34 図、写真図版 22）

〔位置・検出状況〕Ⅱ B 10 f、Ⅲ B 1 f グリッドに位置する。基本層序 A のⅢ層で検出した。

〔形状・規模〕平面形は N - 19° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.16 × 0.32 m である。横断面形は U 字形を呈する。縦断面形はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最深部で 0.82 m である。

〔埋土〕4 層に細分した。黒褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕Ⅲ～Ⅵ層を壁としⅥ層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕なし。

〔性格と年代〕構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 23 号陥し穴状遺構（第 34 図、写真図版 22）

〔位置・検出状況〕Ⅲ B 8 f・9 f グリッドに位置する。基本層序 A のⅣ層で検出した。

〔形状・規模〕平面形は N - 33° - W に長軸をとる溝状で、上面規模は 1.69 × 0.84 m である。横断面形は U 字形を呈する。縦断面形は北西壁が内湾して立ち上がり、南東壁はやや外傾して立ち上がる。深さは最深部で 0.75 m である。

〔埋土〕3 層に細分した。黒色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕Ⅳ～Ⅵ層を壁としⅥ層を底面とする。底面は若干の凹凸があり、北壁から東壁に向かって傾斜する。

〔出土遺物〕なし。

〔性格と年代〕構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 24 号陥し穴状遺構（第 35 図、写真図版 22）

〔位置・検出状況〕Ⅱ B 9 f・9 g グリッドに位置する。基本層序 A のⅣ層で検出した。

〔形状・規模〕平面形は N - 50° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 2.52 × 0.5 m である。横断

面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形は掘りすぎにより詳細は不明であるが、ほぼ垂直に立ち上がるものと思われる。深さは最深部で1.26 mである。

[埋土] 9層に細分した。黒褐色土・壁面崩落土で構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] IV～VI層を壁としVI層を底面とする。底面は若干の凹凸があるがほぼ平坦である。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 25号陥し穴状遺構（第35図、写真図版23）

[位置・検出状況] II B 5 b・6 bグリッドに位置する。基本層序BのIV層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-12°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は3.46 × 0.64 mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で0.99 mである。

[埋土] 5層に細分した。黒褐色土・壁面崩落土で構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] IV～VI層を壁としVI層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 26号陥し穴状遺構（第35図、写真図版23）

[位置・検出状況] II B 6 cグリッドに位置する。基本層序AのIII層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-20°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は3.4 × 0.7 mである。横断面形は逆台形を呈する。縦断面形は南壁が内湾して立ち上がり、北壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最深部で0.94 mである。

[埋土] 5層に細分した。黒褐色土・黄褐色土で構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] III～VI層を壁としVI層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 第47図、写真図版52

[出土状況] 磨石+敲石141が出土している。流れ込みによるものと思われる。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 27号陥し穴状遺構（第36図、写真図版23）

[位置・検出状況] III B 1 i・2 iグリッドに位置する。基本層序AのIV層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-48°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は2.84 × 0.4 mである。横断面形は不整なU字形だが、本来はY字形もしくはV字形であったと考えられる。縦断面形はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最深部で0.86 mである。

[埋土] 5層に細分した。壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] IV～V層を壁としV層を底面とする。底面は凹凸があり南西壁から北東壁に向かって傾斜する。

[出土遺物] なし。

## 2 検出遺構

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 28号陥し穴状遺構（第36図、写真図版23）

[位置・検出状況] III B 1 i・1 j・2 i グリッドに位置する。基本層序AのIII層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-28°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は2.7×0.56 mである。横断面形はY字形を呈する。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で0.96 mである。

[埋土] 3層に細分した。黒褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] III～V層を壁としV層を底面とする。底面は凹凸がある。

[出土遺物] 埋土からの出土遺物は無いが、本遺構東側（III層中）より縄文前期前葉の土器片（147）が出土している。ただし、遺構の構築時期より古い時代の遺物の流入であろう。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 29号陥し穴状遺構（第36図、写真図版24）

[位置・検出状況] II B 4 b・5 b・5 c グリッドに位置する。基本層序BのIII層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-58°-Wに長軸をとる溝状で、上面規模は推定3.39×0.9 mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形は南東壁の一部が崩落しているが、オーバーハングして立ち上がるものと思われる。深さは最深部で1.34 mである。

[埋土] 4層に細分した。黒色土・壁面崩落土・黒褐色土で構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] III～VI層を壁としVI層を底面とする。底面はほぼ平坦で西壁から東壁に向かって傾斜する。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 30号陥し穴状遺構（第37図、写真図版24）

[位置・検出状況] II B 3 b・4 b グリッドに位置する。基本層序BのIII層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-17°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は2.8×0.4 mである。横断面形はV字形を呈する。縦断面形は北壁の一部が崩落しているが、ほぼ垂直に立ち上がるものと思われる。深さは最深部で0.84 mである。

[壁面・底面] III～VI層を壁としVI層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

[埋土] 5層に細分した。黒色土・壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] III～VI層を壁としVI層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 31号陥し穴状遺構（第37図、写真図版24）

〔位置・検出状況〕 II B 3 c・4 c グリッドに位置する。基本層序 B の IV 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 16° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.64 × 0.24 m である。横断面形は V 字形を呈する。縦断面形は北壁に崩落の痕跡が認められるが、南壁・北壁共にほぼ垂直に立ち上がる。深さは最深部で 0.9 m である。

〔埋土〕 3 層に細分した。黒色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 IV ~ VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 32 号陥し穴状遺構（第 37 図、写真図版 24）

〔位置・検出状況〕 II B 6 g グリッドに位置する。基本層序 A の IV 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 21° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 2.9 × 0.39 m である。横断面形は Y 字形を呈する。縦断面形はやや外傾して立ち上がる。深さは最深部で 0.74 m である。

〔埋土〕 4 層に細分した。黒褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 IV ~ VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 33 号陥し穴状遺構（第 37 図、写真図版 25）

〔位置・検出状況〕 II B 7 h・8 h グリッドに位置する。基本層序 B の IV 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 27° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.16 × 0.41 m である。横断面形は U 字形を呈する。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で 0.98 m である。

〔埋土〕 3 層に細分した。黒色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 IV ~ VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 34 号陥し穴状遺構（第 38 図、写真図版 25）

〔位置・検出状況〕 II B 5 f・5 g グリッドに位置する。基本層序 B の IV 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 2° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.98 × 0.52 m である。横断面形は Y 字形だが、本来は V 字形であったと考えられる。縦断面形はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最深部で 0.88 m である。

〔埋土〕 6 層に細分した。黒褐色土・壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 IV ~ VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と



## 2 検出遺構

考えられる。

### 35号陥し穴状遺構（第38図、写真図版25）

〔位置・検出状況〕ⅡB2c・3cグリッドに位置する。基本層序BのV層で検出した。

〔形状・規模〕平面形はN-6°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は3.18×0.48mである。横断面形はU字形を呈する。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で0.93mである。

〔埋土〕10層に細分した。黒色土・褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕V～VI層を壁としVI層を底面とする。底面は若干の凹凸があるがほぼ平坦である。

〔出土遺物〕第47図、写真図版52

〔出土状況〕埋土から単節縄文が施される142が出土している。流れ込みによるものと思われる。

〔性格と年代〕構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 36号陥し穴状遺構（第38図、写真図版25）

〔位置・検出状況〕ⅡB2c・3cグリッドに位置する。基本層序BのV層で検出した。

〔形状・規模〕平面形はN-37°-Wに長軸をとる溝状で、上面規模は2.79×0.24mである。横断面形はV字形を呈する。縦断面形はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最深部で0.85mである。

〔埋土〕4層に細分した。黒色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕V～VI層を壁としVI層を底面とする。底面はほぼ平坦で北西壁から南東壁に向かって傾斜する。

〔出土遺物〕なし。

〔性格と年代〕構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 37号陥し穴状遺構（第38図、写真図版26）

〔位置・検出状況〕ⅡB2d・3dグリッドに位置する。基本層序BのV層で検出した。

〔形状・規模〕平面形はN-7°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は4.42×0.66mである。横断面形は逆台形を呈する。縦断面形は南壁が内湾して立ち上がり、北壁は段を有す。深さは最深部で0.60mである。

〔埋土〕6層に細分した。黒褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕V～VI層を壁としVI層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕なし。

〔性格と年代〕構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 38号陥し穴状遺構（第39図、写真図版26）

〔位置・検出状況〕ⅡB3d・3e・4d・4eグリッドに位置する。基本層序BのIV層で検出した。

〔形状・規模〕平面形はN-9°-Wに長軸をとる溝状で、上面規模は3.18×0.75mである。横断面形は逆台形を呈する。縦断面形はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最深部で1.16mである。

[埋土] 5層に細分した。黒褐色土・褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] IV～VI層を壁としVI層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 39号陥し穴状遺構（第39図、写真図版26）

[位置・検出状況] II B 2 d グリッドに位置する。基本層序BのV層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-46°-Wに長軸をとる溝状で、上面規模は2.9×0.28mである。横断面形はV字形を呈する。縦断面形は西壁がやや外傾して立ち上がり、東壁はやや内湾して立ち上がる。深さは最深部で1.14mである。

[埋土] 5層に細分した。黒色土・壁面崩落土で構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] V～VI層を壁としVI層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 40号陥し穴状遺構（第39図、写真図版26）

[位置・検出状況] III B 3 h・3 i グリッドに位置する。8号竪穴住居跡床面で検出された（基本層序AのIV層）。8号竪穴住居跡を截る。

[形状・規模] 平面形はN-39°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は推定3.1×0.28mである。横断面形は碗状を呈する。縦断面形は南壁が外傾して立ち上がり、北壁は碗状に立ち上がる。南壁は木根による攪乱が著しい。8号竪穴住居跡床面からの深さは最深部で0.29mである。

[埋土] 3層に細分した。黒褐色土を主体に構成される。

[壁面・底面] IV～VI層を壁としVI層を底面とする。底面は木根の攪乱により南壁側が窪む。ほぼ平坦な底面であったと思われる。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 41号陥し穴状遺構（第39図、写真図版27）

[位置・検出状況] II B 1 b・1 c グリッドに位置する。基本層序BのIV層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-32°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は3.28×0.2mである。横断面形はV字形を呈する。縦断面形はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最深部で0.92mである。

[埋土] 6層に細分した。黒色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] IV～VI層を壁としVI層を底面とする。底面は凹凸で南西壁から北東壁に向かって傾斜する。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

42号陥し穴状遺構（第40図、写真図版27）

〔位置・検出状況〕 I B 10 c グリッドに位置する。基本層序BのIV層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形はN-10°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は3.72×0.2mである。横断面形はV字形を呈する。縦断面形は南壁がほぼ垂直に立ち上がり、北壁がやや外傾して立ち上がる。深さは最深部で0.59mである。

〔埋土〕 2層に細分した。黒色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 IV～V層を壁としV層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

43号陥し穴状遺構（第40図、写真図版27）

〔位置・検出状況〕 I B 10 c・10 d、II B 1 c グリッドに位置する。基本層序BのIV層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形はN-16°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は3.01×0.19mである。横断面形はU字形を呈する。縦断面形はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最深部で0.56mである。

〔埋土〕 3層に細分した。黒色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 IV～V層を壁としV層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

44号陥し穴状遺構（第40図、写真図版27）

〔位置・検出状況〕 I B 10 d・10 e、II B 1 d グリッドに位置する。基本層序BのIV層で検出した。

45号陥し穴状遺構に截られる。

〔形状・規模〕 平面形はN-21°-Eに長軸をとる溝状で、短軸0.18mである。横断面形はU字形を呈する。縦断面形は北壁がほぼ垂直に立ち上がる。南壁は45号陥し穴状遺構に截られ不明である。深さは最深部で0.67mである。

〔埋土〕 3層に細分した。黒色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 IV～V層を壁としV層を底面とする。底面は若干の凹凸があるがほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

45号陥し穴状遺構（第40図、写真図版28）

〔位置・検出状況〕 I B 10 d、II B 1 d グリッドに位置する。基本層序BのIV層で検出した。44号陥し穴状遺構を截る。

〔形状・規模〕 平面形はN-18°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は3.51×0.56mである。横断面形はY字形を呈する。縦断面形はやや外傾して立ち上がる。深さは最深部で0.92mである。

〔埋土〕 3層に細分した。黒色土・壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕IV～V層を壁としV層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕なし。

〔性格と年代〕構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 46号陥し穴状遺構（第41図、写真図版28）

〔位置・検出状況〕II B 4 g グリッドに位置する。基本層序AのIV層で検出した。

〔形状・規模〕平面形はN-5°-Wに長軸をとる溝状で、上面規模は3.54 × 0.72 mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形は南壁が内湾して立ち上がり、北壁はやや外傾して立ち上がる。深さは最深部で1.0 mである。

〔埋土〕6層に細分した。上位が黒褐色土・中位が褐色土・下位が黄褐色土で構成される。埋土中位～下位は壁面崩落土である。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕IV～VI層を壁としVI層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕なし。

〔性格と年代〕構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 47号陥し穴状遺構（第41図、写真図版28）

〔位置・検出状況〕II C 5 a・6 a・6 b グリッドに位置する。基本層序AのIV層で検出した。

〔形状・規模〕平面形はN-55°-Wに長軸をとる溝状で、上面規模は2.06 × 0.34 mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で0.73 mである。

〔埋土〕5層に細分した。黒色土・黒褐色土を主体に構成される。

〔壁面・底面〕IV～VI層を壁としVI層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕なし。

〔性格と年代〕構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 48号陥し穴状遺構（第41図、写真図版28）

〔位置・検出状況〕II C 10 b、III C 1 b グリッドに位置する。基本層序AのIV層で検出した。

〔形状・規模〕平面形はN-1°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は4.28 × 0.32 mである。横断面形はU字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で0.45 mである。

〔埋土〕3層に細分した。黒色土を主体に構成される。埋土下位は壁面崩落土である。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕IV～V層を壁としV層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕なし。

〔性格と年代〕構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

## 2 検出遺構

### 49 号陥し穴状遺構（第 41 図、写真図版 29）

〔位置・検出状況〕 II C 10 c・10 d グリッドに位置する。基本層序 A の IV 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 47° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.06 × 0.26 m である。横断面形は U 字形を呈する。縦断面形はやや外傾して立ち上がる。深さは最深部で 0.72 m である。

〔埋土〕 5 層に細分した。黒色土・壁面崩落土で構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 IV～VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 50 号陥し穴状遺構（第 42 図、写真図版 29）

〔位置・検出状況〕 I B 10 e・10 f、II B 1 f グリッドに位置する。基本層序 B の V 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 8° - W に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.58 × 0.62 m である。横断面形は Y 字形だが、本来は V 字形であったと考えられる。縦断面形は南壁がほぼ垂直に立ち上がり、北壁はやや外傾して立ち上がる。深さは最深部で 1.08 m である。

〔埋土〕 7 層に細分した。黒色土と壁面崩落土で構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 V～VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 51 号陥し穴状遺構（第 42 図、写真図版 29）

〔位置・検出状況〕 I B 10 f、II B 1 f グリッドに位置する。基本層序 B の V 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 14° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 2.96 × 0.5 m である。横断面形は Y 字形を呈する。縦断面形はやや外傾して立ち上がる。深さは最深部で 0.81 m である。

〔埋土〕 4 層に細分した。黒色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 V～VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面は中央部で皿状に窪む。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 52 号陥し穴状遺構（第 42 図、写真図版 29）

〔位置・検出状況〕 I B 10 g、II B 1 g グリッドに位置する。基本層序 B の V 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 19° - W に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.86 × 0.38 m である。横断面形は Y 字形を呈する。縦断面形は南壁が碗状に立ち上がり、北壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最深部で 0.71 m である。

〔埋土〕 3 層に細分した。黒色土と黒褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 V～VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と

考えられる。

#### 53 号陥し穴状遺構（第 42 図、写真図版 30）

〔位置・検出状況〕 I B 10 h グリッドに位置する。基本層序 B の V 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 14° - W に長軸をとる溝状で、上面規模は 2.71 × 0.14 m である。横断面形は U 字形を呈する。縦断面形は南壁が内湾して立ち上がり、北壁は外傾して立ち上がる。深さは最深部で 0.31 m である。

〔埋土〕 黒色土の単層で構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 V ~ VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 54 号陥し穴状遺構（第 43 図、写真図版 30）

〔位置・検出状況〕 I B 9 f グリッドに位置する。基本層序 B の III 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 27° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.20 × 0.19 m である。横断面形は U 字形だが、本来は Y 字形であったと考えられる。縦断面形はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最深部で 0.64 m である。

〔埋土〕 黒色土の単層で構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 III 層 ~ V 層を壁とし V 層を底面とする。底面は凹凸があり南壁が最深部となる。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状からの縄文時代の遺構と考えられる。

#### 55 号陥し穴状遺構（第 43 図、写真図版 30）

〔位置・検出状況〕 I B 9 g · 9 h グリッドに位置する。基本層序 B の V 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 43° - W に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.84 × 0.16 m である。横断面形は U 字形を呈する。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で 0.24 m である。

〔埋土〕 2 層に細分した。黒色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 V ~ VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

#### 56 号陥し穴状遺構（第 43 図、写真図版 30）

〔位置・検出状況〕 I B 5 e · 6 e グリッドに位置する。基本層序 B の V 層で検出した。調査区境界の断面観察で II 層中位から掘削された遺構と確認された。

〔形状・規模〕 平面形は N - 15° - W に長軸をとる溝状で、上面規模は短軸 0.14 m である。横断面形は Y 字形を呈する。縦断面形は垂直に立ち上がる。深さは最深部で 0.68 m である。

## 2 検出遺構

[埋土] 3層に細分した。Ⅱ層の黒色土を主体に構成される。埋土下位は壁面崩落土で構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] Ⅱ～Ⅵ層を壁としⅥ層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 57号陥し穴状遺構（第43図、写真図版31）

[位置・検出状況] I B 5 f・5 g・6 f・6 gグリッドに位置する。基本層序BのV層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-26°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は4.07×0.56mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形はやや内湾して立ち上がる。深さは最深部で0.92mである。

[埋土] 4層に細分した。黒色土と壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] V～Ⅵ層を壁としⅥ層を底面とする。底面は若干の凹凸がある。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 58号陥し穴状遺構（第44図、写真図版31）

[位置・検出状況] I B 7 f・6 g・7 gグリッドに位置する。基本層序BのV層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-21°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は4.07×0.5mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形であったと考えられる。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で0.96mである。

[埋土] 5層に細分した。黒色土と壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] Ⅳ～Ⅵ層を壁としⅥ層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 59号陥し穴状遺構（第44図、写真図版31）

[位置・検出状況] II B 2 g・3 gグリッドに位置する。基本層序BのV層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-11°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は推測で3.5×0.5mである。横断面形は逆台形を呈する。北壁は内湾して立ち上がる。南壁は攪乱により不明である。深さは最深部で0.28mである。

[埋土] 2層に細分した。黒色土・黒褐色土で構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] V層を壁・底面とする。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

## 60 号陥し穴状遺構（第 44 図、写真図版 31）

〔位置・検出状況〕 II B 3 h グリッドに位置する。基本層序 B の V 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 7° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.06 × 0.18 m である。横断面形は Y 字形だが、本来は U 字形もしくは V 字形であったと考えられる。縦断面形は南壁がほぼ垂直に立ち上がり、北壁は内湾して立ち上がる。深さは最深部で 0.93 m である。

〔埋土〕 5 層に細分した。黒色土を主体に構成される。埋土下位は壁面崩落土である。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 V ~ VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

## 61 号陥し穴状遺構（第 44 図、写真図版 32）

〔位置・検出状況〕 I B 9 j ・ 10 j グリッドに位置する。基本層序 B の V 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 9° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.34 × 0.16 m である。横断面形は U 字形を呈する。縦断面形はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最深部で 0.24 m である。

〔埋土〕 2 層に細分した。埋土は黒色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 V 層を壁とし V 層を底面とする。底面はほぼ平坦で北壁から南壁に向かって傾斜する。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

## 62 号陥し穴状遺構（第 45 図、写真図版 32）

〔位置・検出状況〕 I C 9 a ・ 10 a グリッドに位置する。基本層序 B の V 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 0° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.84 × 0.26 m である。横断面形は Y 字形を呈する。縦断面形は南壁が碗状に立ち上がり、北壁は垂直に立ち上がる。深さは最深部で 0.8 m である。

〔埋土〕 3 層に細分した。黒色土と黒褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 V 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

## 63 号陥し穴状遺構（第 45 図、写真図版 32）

〔位置・検出状況〕 I C 9 a ・ 9 b ・ 10 a ・ 10 b グリッドに位置する。基本層序 B の V 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 27° - W に長軸をとる両端が広がる溝状で、上面規模は 3.0 × 0.06 m である。横断面形は V 字形を呈する。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で 0.53 m である。

〔埋土〕 黒色土の単層で構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 V ~ VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面は中央部から南壁・北壁に向かって傾斜する。



## 2 検出遺構

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 64号陥し穴状遺構（第45図、写真図版32）

[位置・検出状況] I B 7 j・8 j グリッドに位置する。基本層序BのV層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-27°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は3.16×0.36 mである。横断面形はY字形を呈する。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で0.71 mである。

[埋土] 3層に細分した。黒色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] V～VI層を壁としVI層を底面とする。底面は若干の凹凸があるがほぼ平坦で北壁から南壁に向かって傾斜する。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 65号陥し穴状遺構（第45図、写真図版33）

[位置・検出状況] I C 8 a グリッドに位置する。基本層序BのIV層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-16°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は1.78×0.4 mである。横断面形は逆台形を呈する。縦断面形は南壁がほぼ垂直に立ち上がり、北壁が外傾して立ち上がる。深さは最深部で0.45 mである。

[埋土] 2層に細分した。黒色土・黒褐色土で構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] IV層・V層を壁としV層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 他の陥し穴状遺構と比較して浅いことから構造的に陥し穴として機能していたのか疑問がある。底面が礫層で、遺構構築が困難であることから掘削の途中で放棄した可能性が考えられる。検出面・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 66号陥し穴状遺構（第46図、写真図版33）

[位置・検出状況] I C 5 b・6 b グリッドに位置する。基本層序BのV層で検出した。

[形状・規模] 平面形はN-3°-Wに長軸をとる溝状で、上面規模は3.46×0.48 mである。横断面形はY字形だが、本来はV字形と考えられる。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で1.13 mである。

[埋土] 3層に細分した。壁面崩落土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] V層～VI層を壁としVI層を底面とする。底面はほぼ平坦である。南壁から北壁に向かって傾斜する。

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

## 67号陥し穴状遺構（第46図、写真図版33）

〔位置・検出状況〕 II C 2 g・3 g グリッドに位置する。基本層序 B の V 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 18° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は 3.22 × 0.34 m である。横断面形は U 字形を呈する。縦断面形は碗状に立ち上がる。最深部で 0.45 m である。

〔埋土〕 2 層に細分した。黒色土・黒褐色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 V 層～VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦で北壁から南壁に向かって傾斜する。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

## 68号陥し穴状遺構（第46図、写真図版33）

〔位置・検出状況〕 II C 8 c グリッドに位置する。基本層序 A の V 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 0° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は短軸 0.2 m である。横断面形は U 字形を呈する。縦断面形は南壁が碗状に立ち上がる。北壁は攪乱により不明である。最深部で 0.29 m である。

〔埋土〕 2 層に細分した。黒色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 V 層～VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

## 69号陥し穴状遺構（第46図、写真図版34）

〔位置・検出状況〕 II C 7 e・8 e グリッドに位置する。基本層序 A の IV 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 0° - E に長軸をとる溝状で、上面規模は短軸 0.20 m である。横断面形は U 字形を呈する。北壁は内湾して立ち上がり、南壁は攪乱により不明である。深さは最深部で 0.58 m である。

〔埋土〕 2 層に細分した。黒色土を主体に構成される。

〔壁面・底面〕 IV 層～VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔性格と年代〕 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

## 70号陥し穴状遺構（第46図、写真図版34）

〔位置・検出状況〕 II C 7 e・8 e グリッドに位置する。基本層序 A の IV 層で検出した。

〔形状・規模〕 平面形は N - 3° - W に長軸をとる溝状で、上面規模は短軸 0.2 m である。横断面形は U 字形を呈する。北壁は内湾して立ち上がり、南壁は攪乱により不明である。深さは最深部で 0.69 m である。

〔埋土〕 2 層に細分した。黒色土を主体に構成される。自然堆積と思われる。

〔壁面・底面〕 IV 層～VI 層を壁とし VI 層を底面とする。底面はほぼ平坦である。

## 2 検出遺構

[出土遺物] なし。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

### 71号陥し穴状遺構（第46図、写真図版34）

[位置・検出状況] III B 2 f・2 g・3 f グリッドに位置する。7号竪穴住居床面で検出した。7号竪穴住居跡を截る。

[形状・規模] 平面形はN-58°-Eに長軸をとる溝状で、上面規模は3.7×0.3 mである。横断面形はY字形を呈する。縦断面形は壁面の両端部がオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で0.64 mである。

[埋土] 黒褐色土の単層で構成される。自然堆積と思われる。

[壁面・底面] IV~V層を壁としV層を底面する。底面は若干の凹凸があるがほぼ平坦である。

[出土遺物] 第47図、写真図版52

[出土状況] 埋土から繊維を含む0段多条の単節縄文が施される土器143が出土している。流れ込みによるものと思われる。

[性格と年代] 構造的に陥し穴として機能していたと考えられる。規模・形状から縄文時代の遺構と考えられる。

## （4）土 坑

### 1号土坑（第49図・写真図版36）

[位置・検出状況] II B 5 c・5 d グリッドに位置する。基本層序AのIII層で検出した。黒褐色の円形プランとして確認した。

[重複関係] 重複する遺構はない。

[形状・規模] 円形を呈する。規模は上端1.24×1.2 m、下端0.91×0.91 mである。深さは最深部で0.3 mである。

[埋土] 2層に細分した。黒褐色土を主体に構成される。

[壁面・底面] III・IV層を壁としIV層を底面とする。壁面は皿状に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 第47図、写真図版52

[出土状況] 埋土から繊維を含む結束羽状縄文が施される144、搔・削器145が出土している。

[性格と年代] 出土遺物から縄文時代前期前葉の遺構と考えられる。

### 2号土坑（第49図・写真図版36）

[位置・検出状況] III B 5 e・5 f グリッドに位置する。基本層序AのIII層で検出した。黒褐色土の円形プランとして確認した。

[重複関係] 重複する遺構はない。

[形状・規模] 円形を呈する。規模は推定で上端1.11×1.05 m、下端0.88×0.86 mである。深さは最深部で0.38 mである。

[埋土] 2層に細分した。黒褐色土・黒色土を主体に構成される。

[壁面・底面] III・IV層を壁としIV層を底面とする。壁面は碗状に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 第47図、写真図版52

〔出土状況〕埋土から繊維を含む単節縄文（0段多条？）が施される 146 が出土している。

〔性格と年代〕出土遺物から縄文時代前期前葉の遺構と考えられる。

### 3号土坑（第49図・写真図版36）

〔位置・検出状況〕ⅢB5f・6fグリッドに位置する。基本層序AのⅢ層で検出した。黒褐色の円形プランとして確認した。

〔重複関係〕重複する遺構はない。

〔形状・規模〕円形を呈する。規模は推定で上端1.62×1.6m、下端1.49×1.46mである。深さは最深部で0.28mである。

〔埋土〕2層に細分した。黒褐色土を主体に構成される。

〔壁面・底面〕Ⅲ・Ⅳ層を壁としⅣ層を底面とする。壁面は東壁が皿状に立ち上がり、西壁は攪乱により不明である。底面は凹凸がある。

〔出土遺物〕なし。

〔性格と年代〕検出面から縄文時代の遺構と考えられる。

## （5）焼土遺構

### 焼土遺構群（第48図、写真図版37・38）

17基検出された。焼土遺構の把握については1・8・14号を除き、焼土ブロック・焼土粒の集中範囲として検出した。原位置を留めていない人為的な焼土集中ブロックである。なお、これらは竪穴住居跡の埋土・窪地など一定の場所で検出された特徴があることから、便宜的に焼土遺構として登録したものである。また、これらは竪穴住居跡を検出する目安となった。年代については重複関係・To-Cuテフラを鍵層として、おおまかな時代区分が可能となった。8号焼土遺構は現地性で4・6号竪穴住居跡に近接していることから、竪穴住居跡の炉もしくは屋外炉の可能性も考えられるが、明確に断定はできなかった。

調査の方法は、焼土遺構の断面観察から焼土に黒色土粒が混じっているものは異地性焼土と捉え、平面図作成と検出状況写真の記録のみとした。現地性焼土遺構は断面図作成と断面写真の記録を追加した。

### A区焼土遺構1～6号（第49図、写真図版37）

ⅢB3a～3c、4b・4cグリッドに位置する。To-Cuテフラ堆積層上面で検出された。形状は不整形を呈し、規模は長軸1号67cm、2号63cm、3号82cm、4号128cm、5号48cm、6号35cmである。1号は現地性焼土遺構で他は異地性焼土である。年代は検出面からTo-Cuテフラ降下以降と考えられる。

### B区焼土遺構12A・14号（第50図）

ⅢB2gグリッドに位置する。5号竪穴住居跡の埋土上面で検出された。形状は不整形を呈し、規模は長軸12号73cm、14号85cmである。年代は縄文時代前期前葉以降と考えられる。

### C区焼土遺構8～10号（第50図、写真図版38）

ⅢB9b・10aグリッドに位置する。検出面は8号がⅢ層、9・10号が4号竪穴住居跡埋土上面

## 2 検出遺構

でそれぞれ検出された。形状は不整形を呈し、規模は長軸 8 号 105 cm、9 号 71 cm、10 号 55 cm である。

8 号は現地性焼土遺構で、4・6 号竪穴住居跡の炉もしくは屋外炉の可能性が考えられる。10・11 号は異地性焼土である。年代は検出面から 8 号が縄文時代前期前葉、9・10 号が縄文時代前期前葉以降と考えられる。

### D 区焼土遺構 11・12 b・13 号 (第 51 図)

Ⅲ B 2～4 f グリッドに位置する。形状は不整形を呈し、規模は長軸 11 号 50 cm、12 号 40 cm、13 号 48 cm である。すべて異地性焼土である。13 号が 8 号陥し穴状遺構に截られる。年代は陥し穴状遺構、構築以前と考えられる。

### E 区焼土遺構 15・16 号 (第 51 図)

Ⅲ B 2 c・3 c グリッドに位置する。Ⅲ層で検出された。形状は不整形を呈し、規模は長軸 15 号 59 cm、16 号 35 cm である。両者は異地性焼土である。16 号が 7 号陥し穴状遺構に截られる。年代は陥し穴状遺構、構築以前と考えられる。

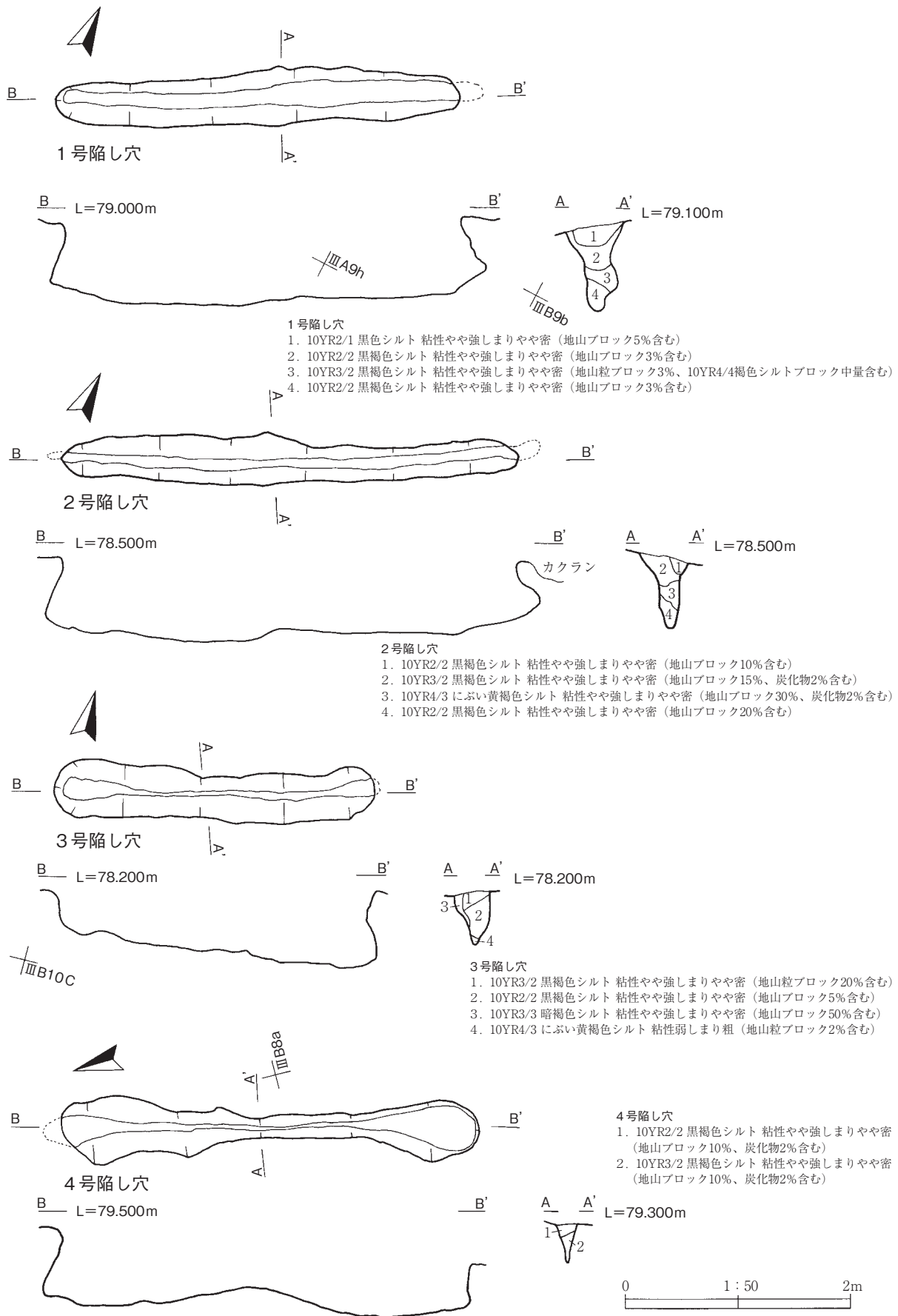
### 7 号焼土遺構 (第 51 図・写真図版 37)

Ⅲ B 2 d グリッドに位置する。Ⅲ層窪地で検出された。形状は不整形を呈し、規模は径 50 × 36 cm、厚さは 6 cm で焼成良好である。年代は検出面・周辺の出土遺物から縄文時代前期前葉と考えられる。竪穴住居跡に隣接することから屋外炉の可能性も考えられる。

## (6) 柱 穴 状 土 坑

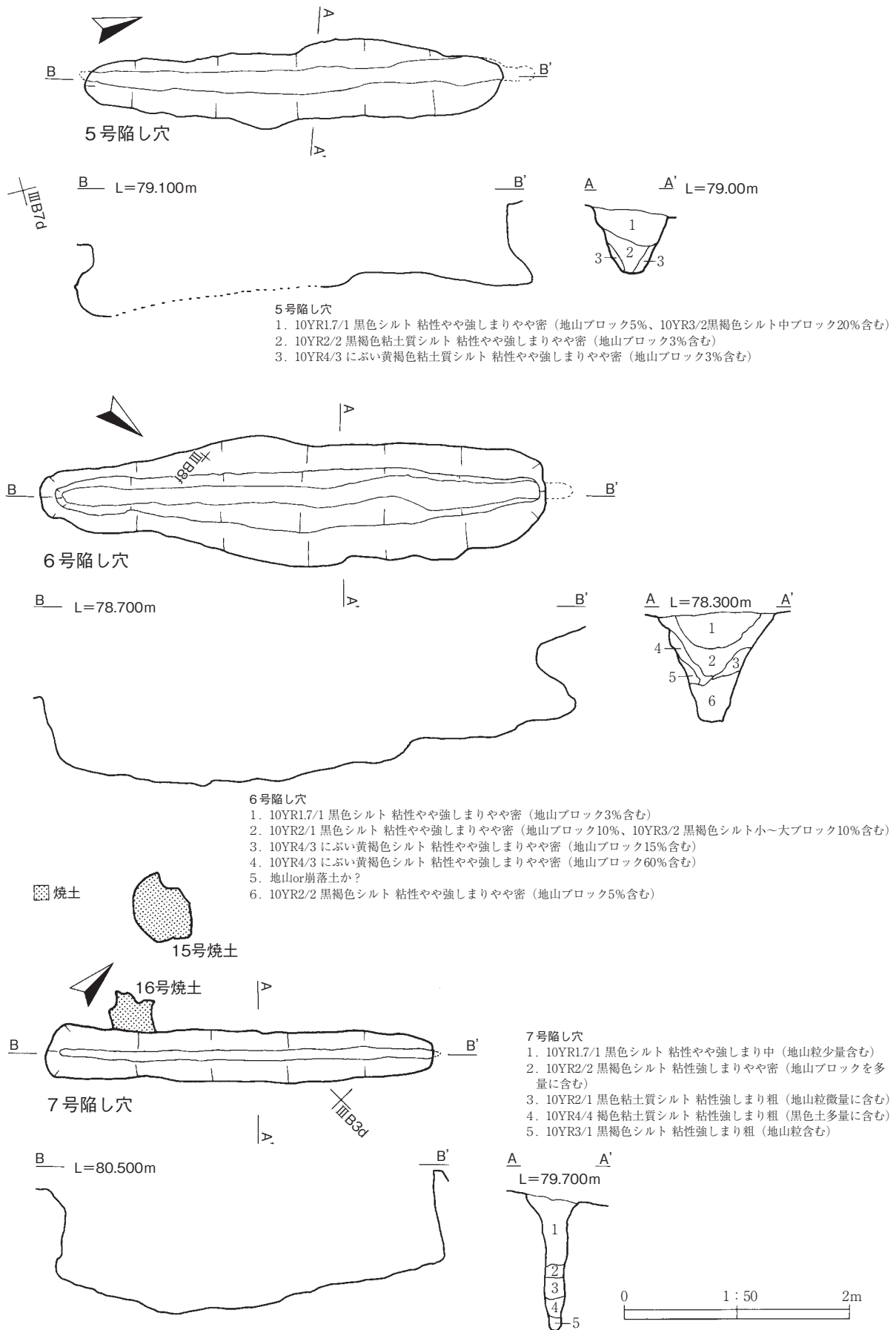
### 1・2 号柱穴状土坑 (第 50 図・写真図版 38)

Ⅱ B 9 a グリッドに位置する。Ⅲ層で検出された。規模は 1 号が開口部径 26 × 16 cm、深さ 36 cm。2 号が開口部径 19 × 16 cm、深さ 37 cm である。埋土は 1 号が地山ブロックを含む黒色土。2 号は掘り方が認められる地山ブロックを含む褐色土で構成される。4・6 号竪穴住居跡に伴う遺構と考えられるが、明確に判断することが出来なかった。年代は検出面、周辺の出土遺物から縄文時代前期前葉の遺構と考えられる。

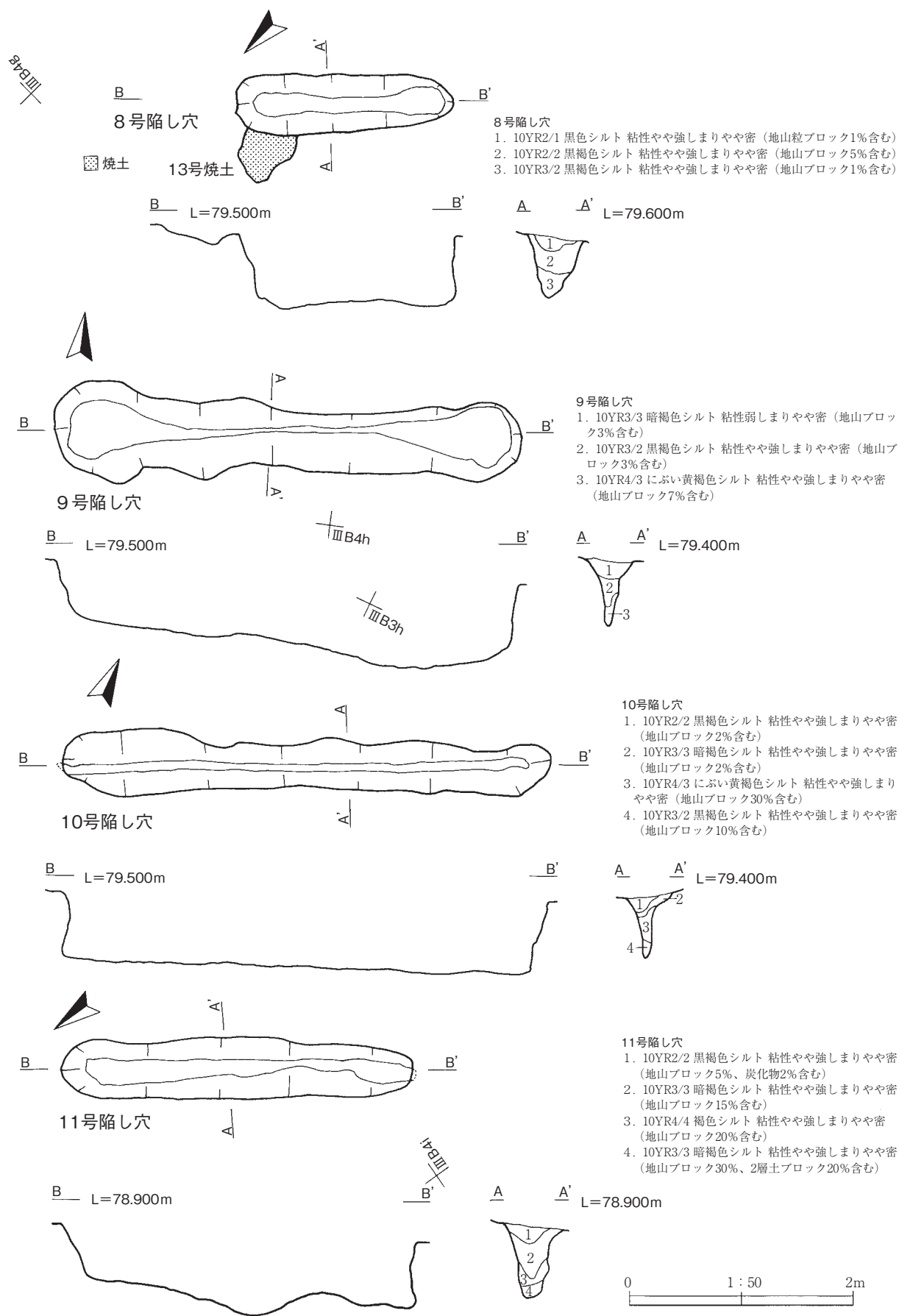


第29図 1～4号陥し穴状遺構

2 検出遺構



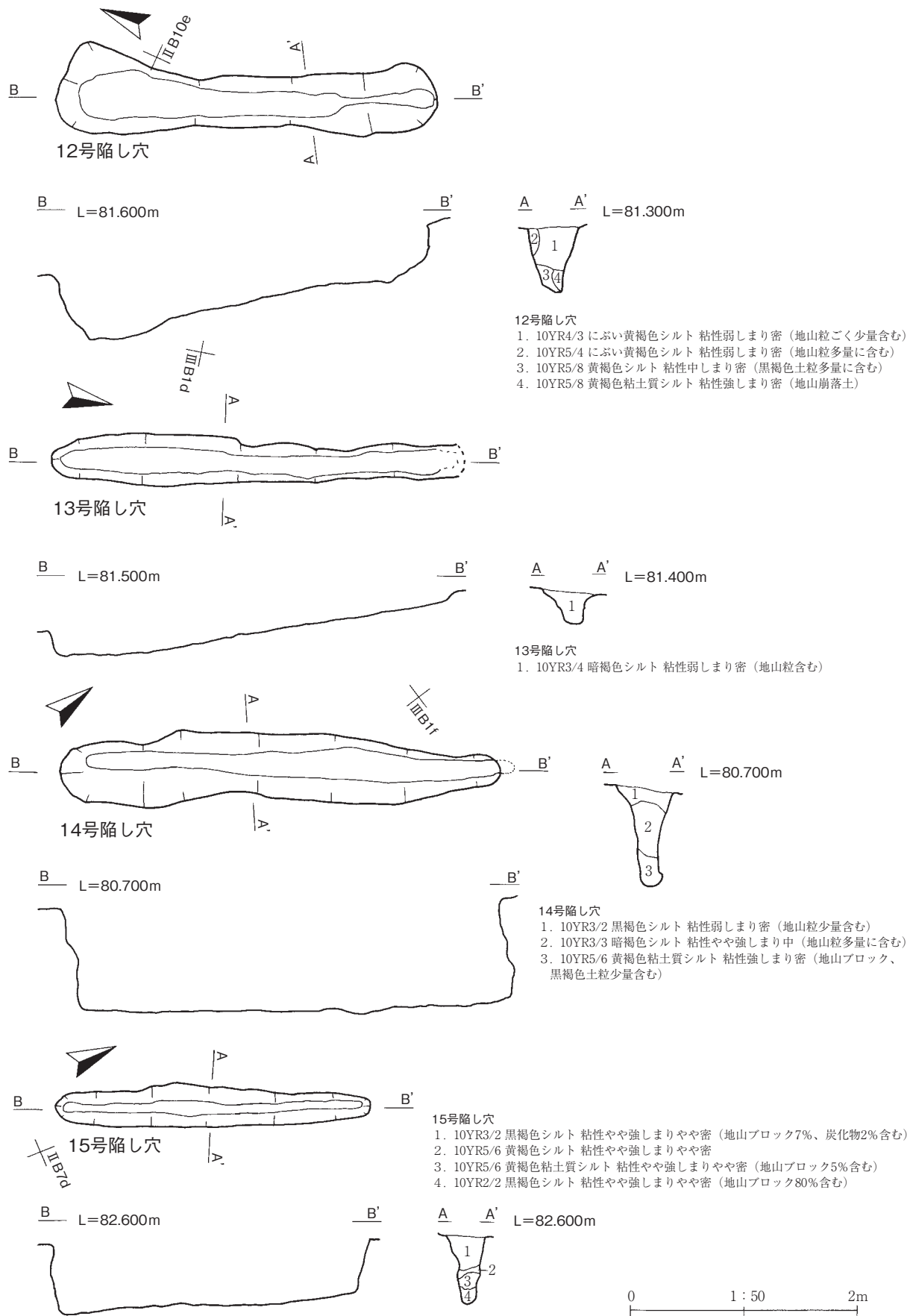
第30図 5～7号陥し穴状遺構



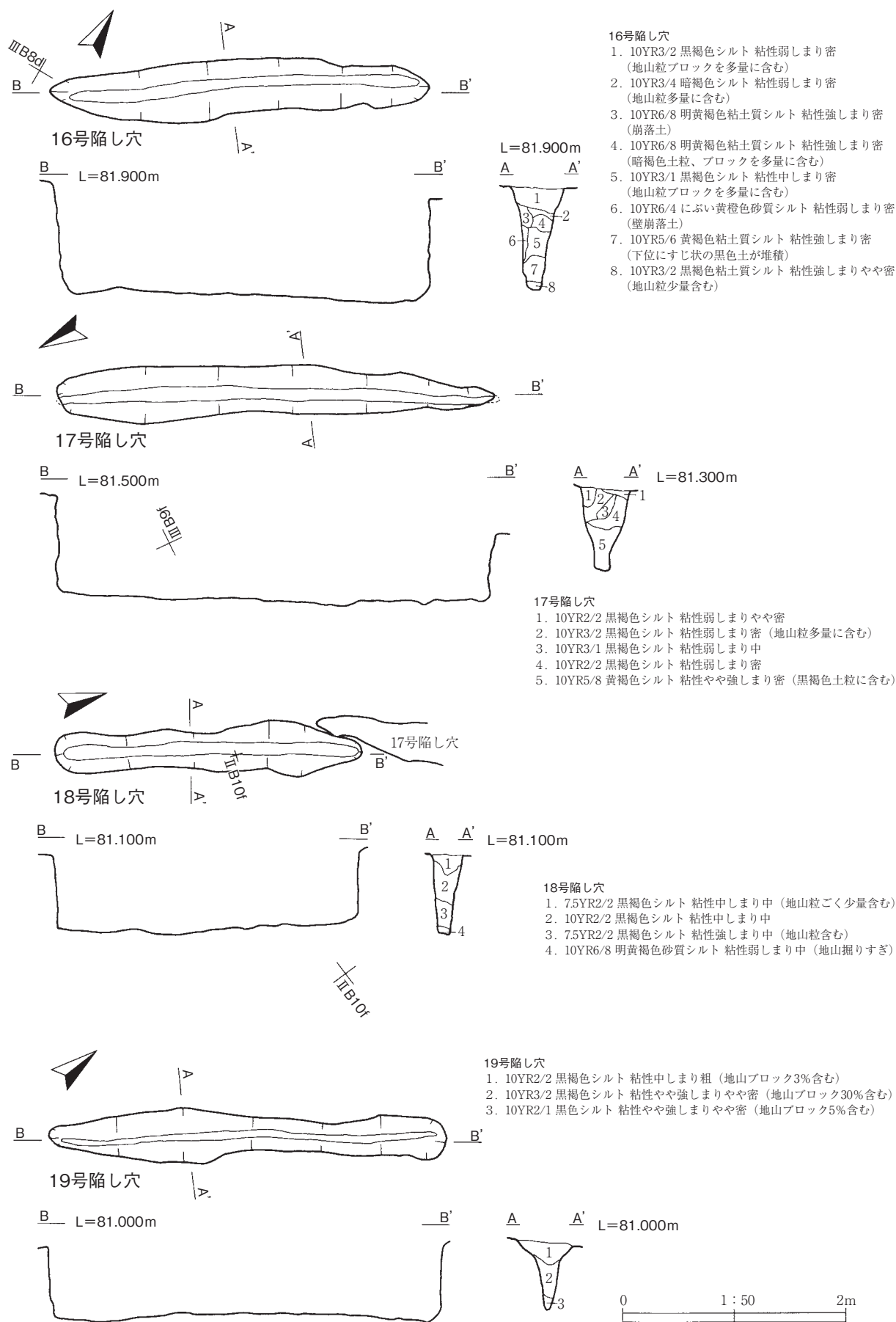
第31図 8~11号陥し穴状遺構



2 検出遺構

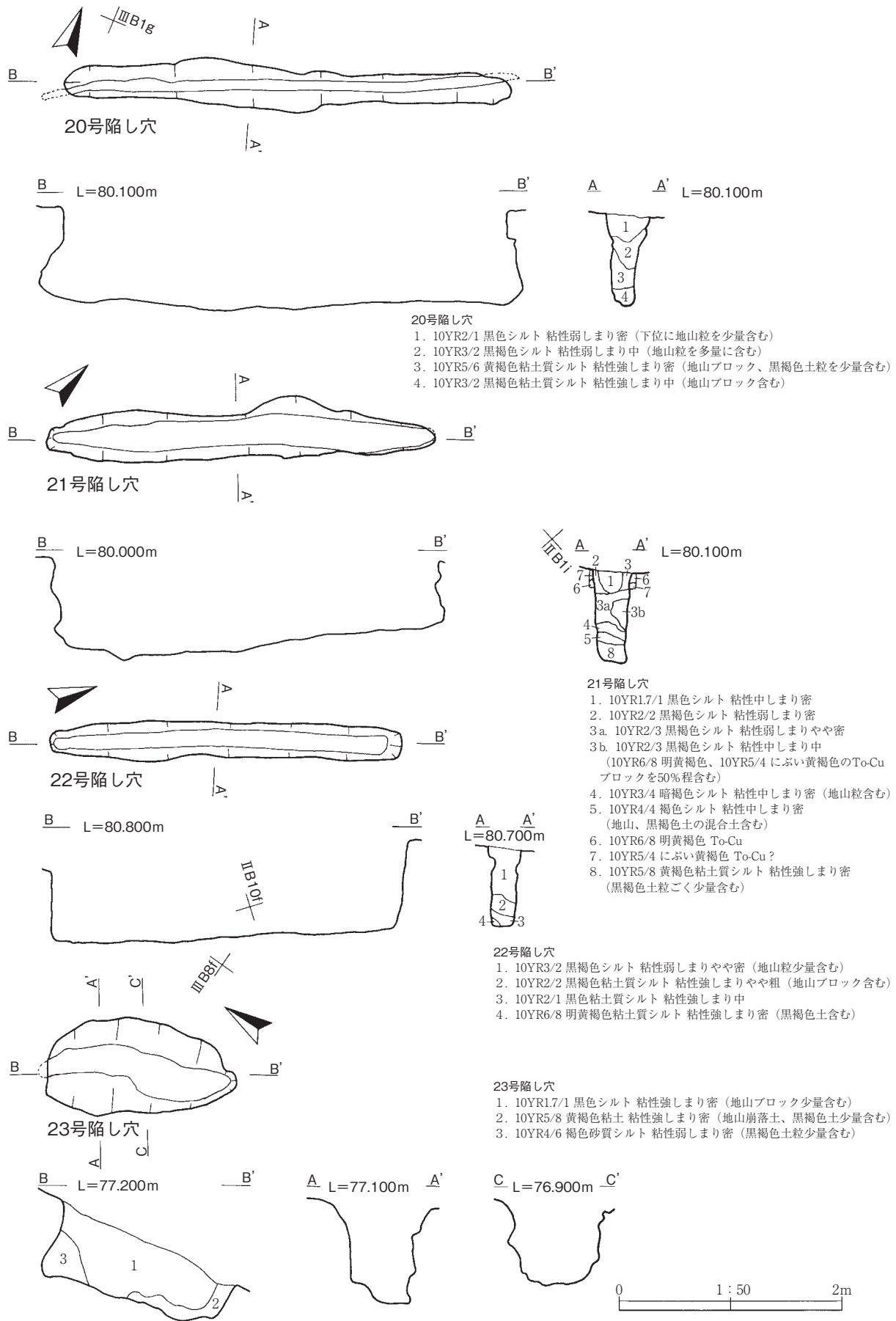


第32図 12~15号陥し穴状遺構

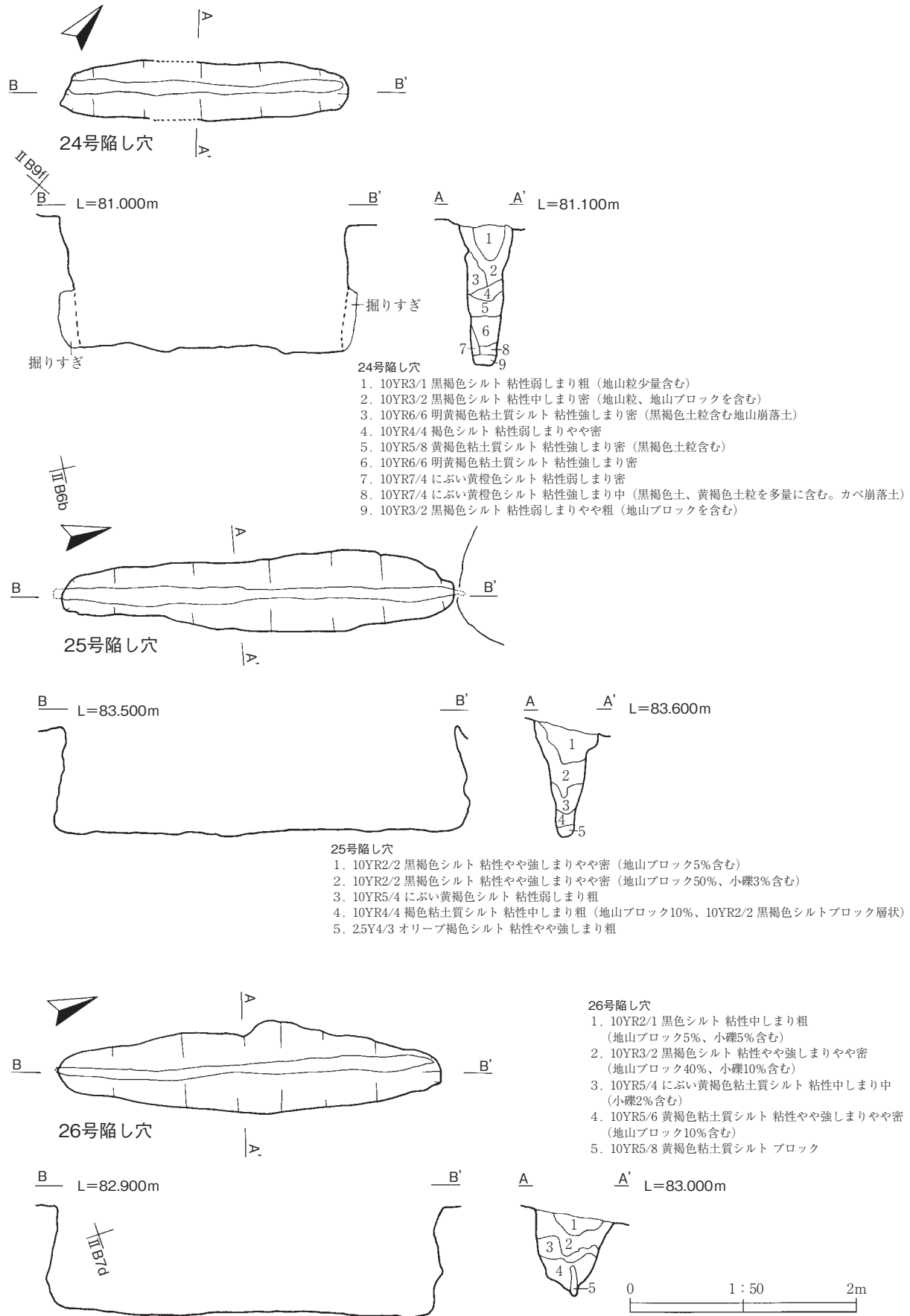


第33図 16~19号陥し穴状遺構

2 検出遺構

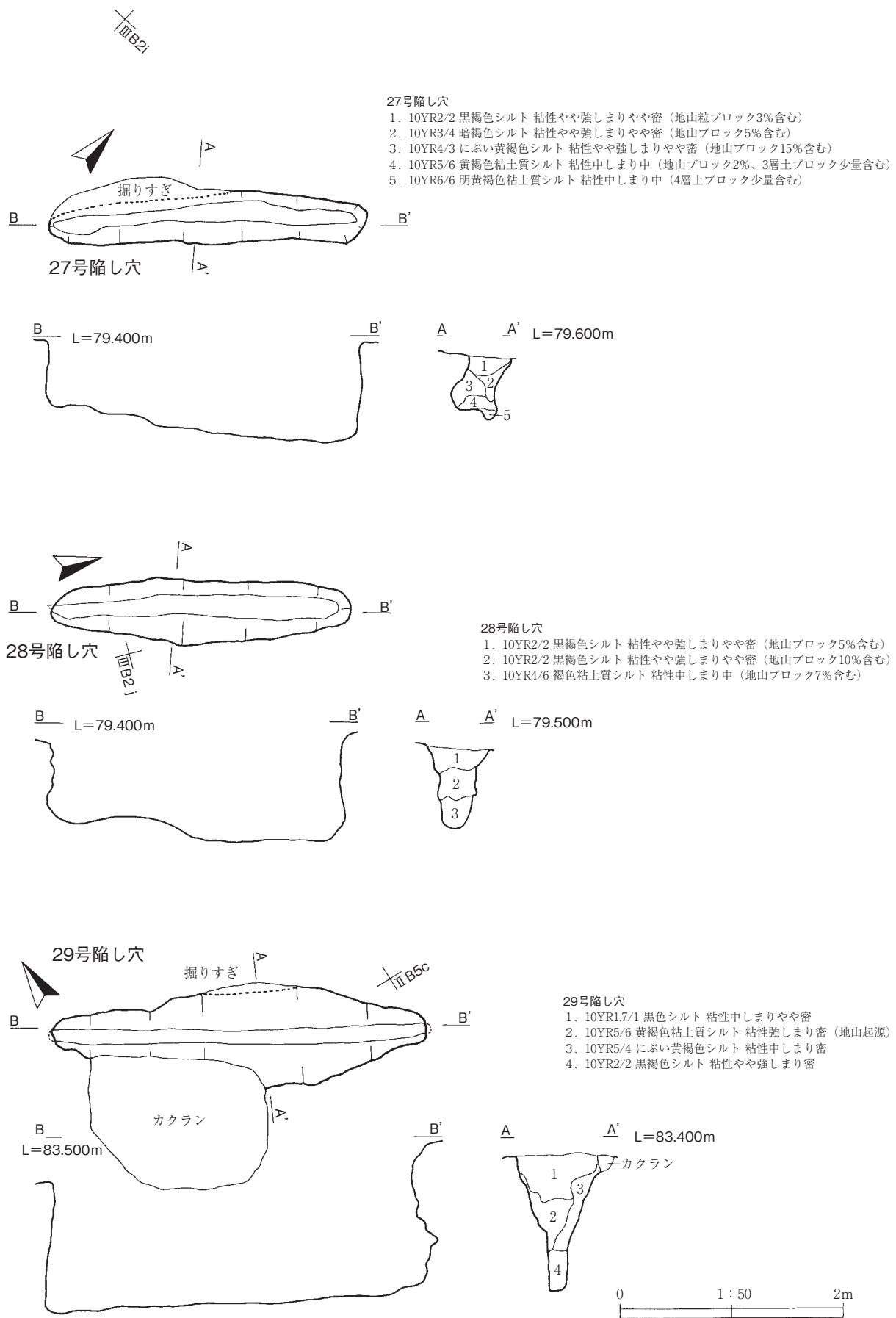


第34図 20~23号陥し穴状遺構

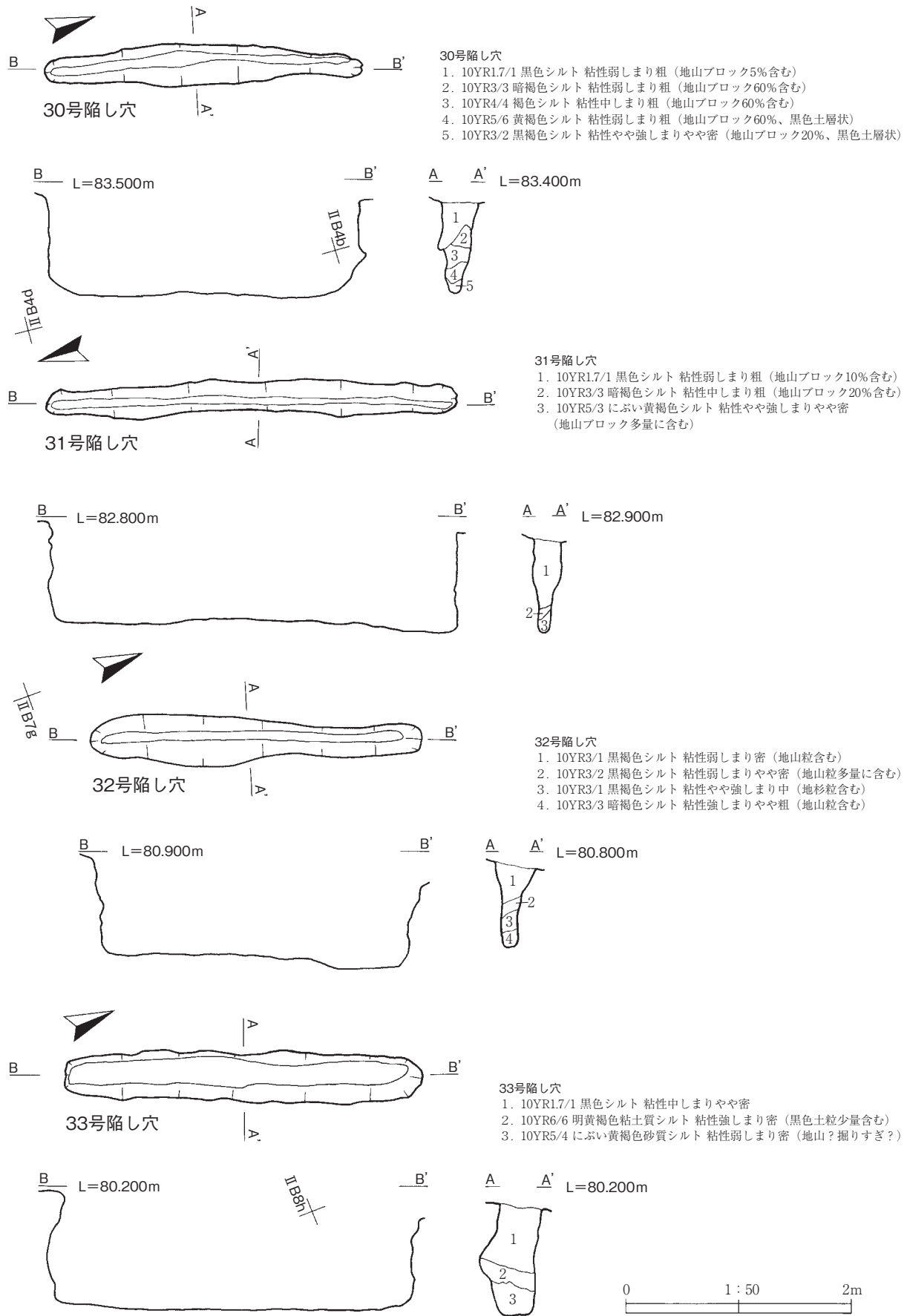


第35図 24~26号陥し穴状遺構

2 検出遺構

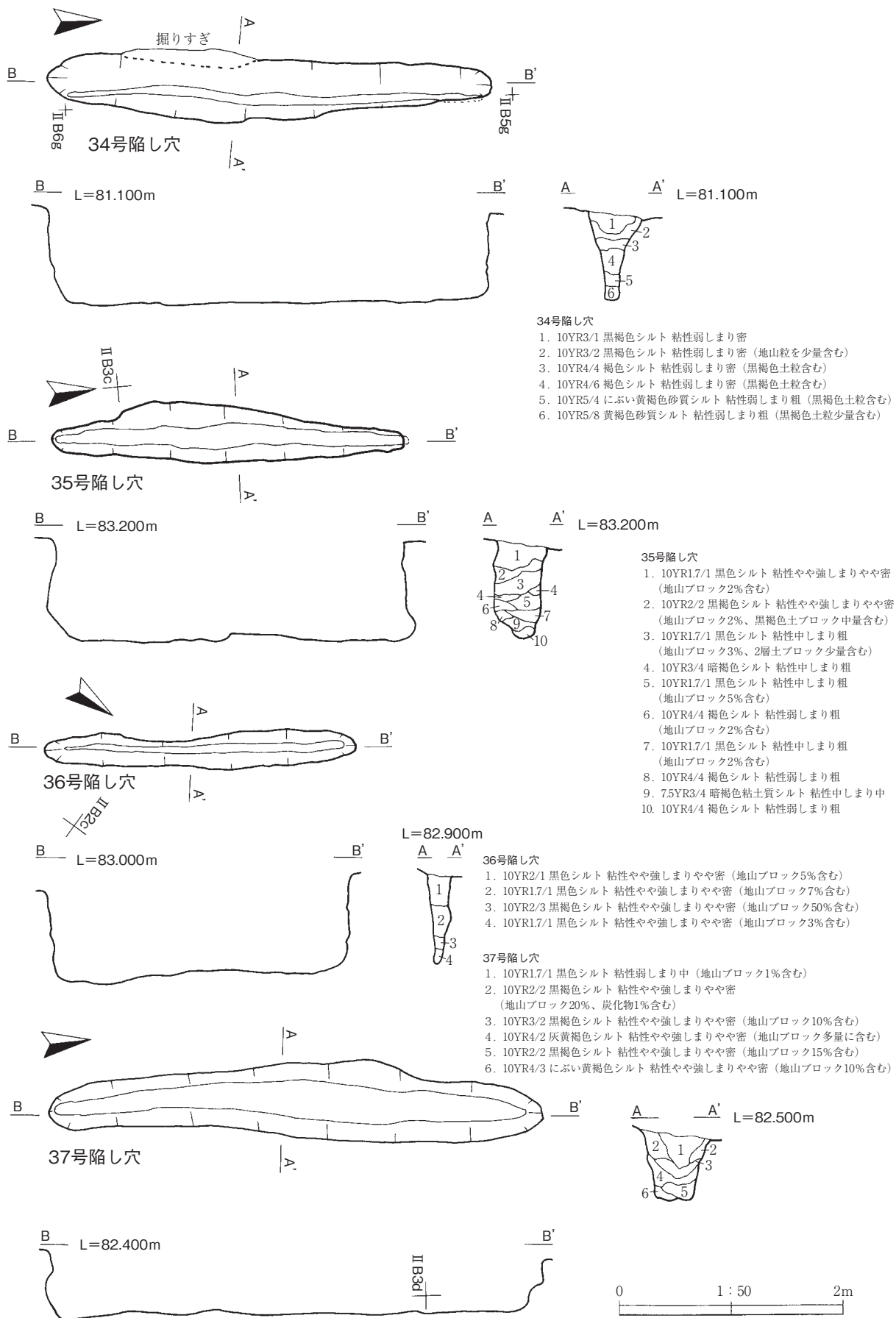


第36図 27~29号陥し穴状遺構

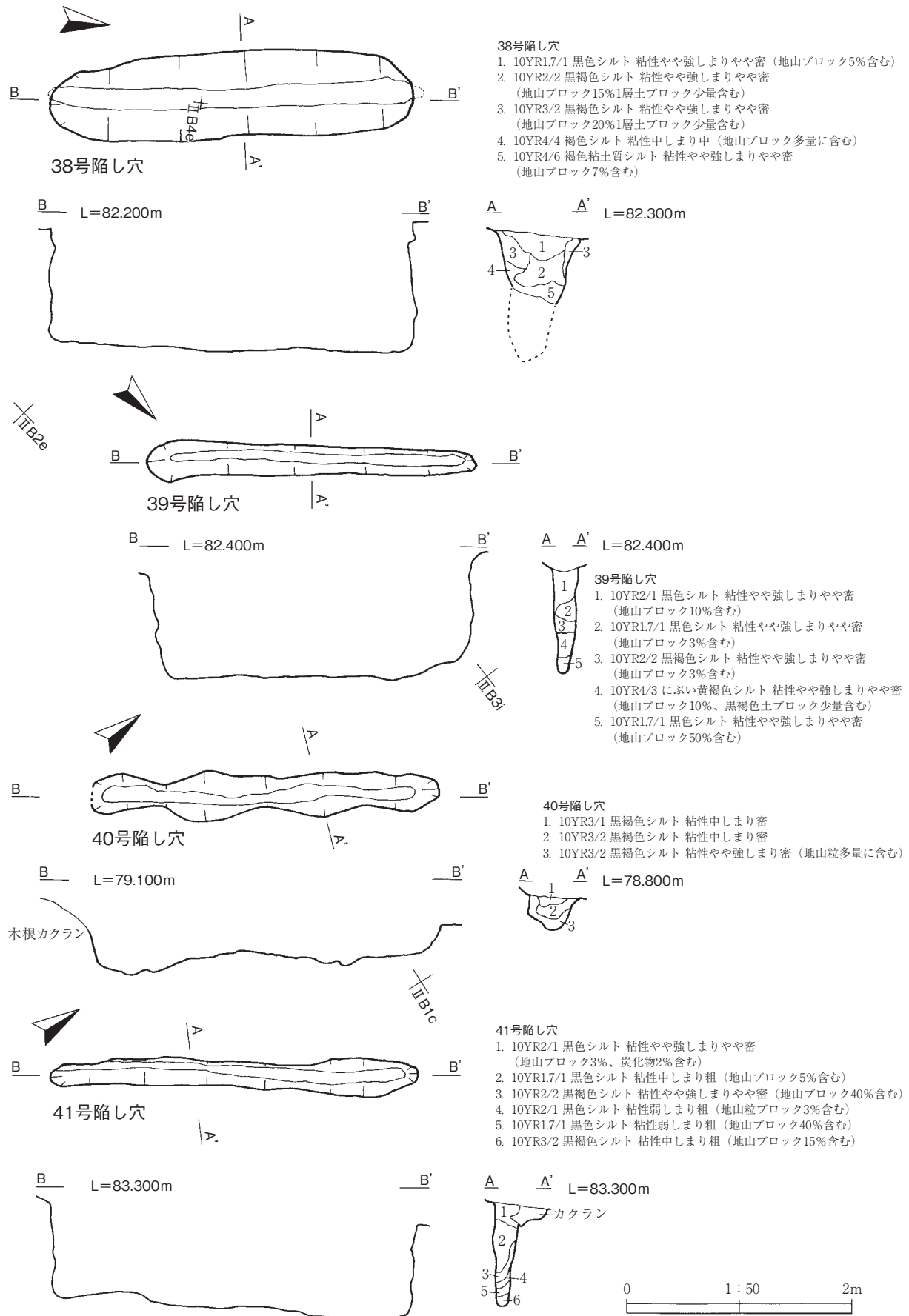


第37図 30~33号陥し穴状遺構

2 検出遺構



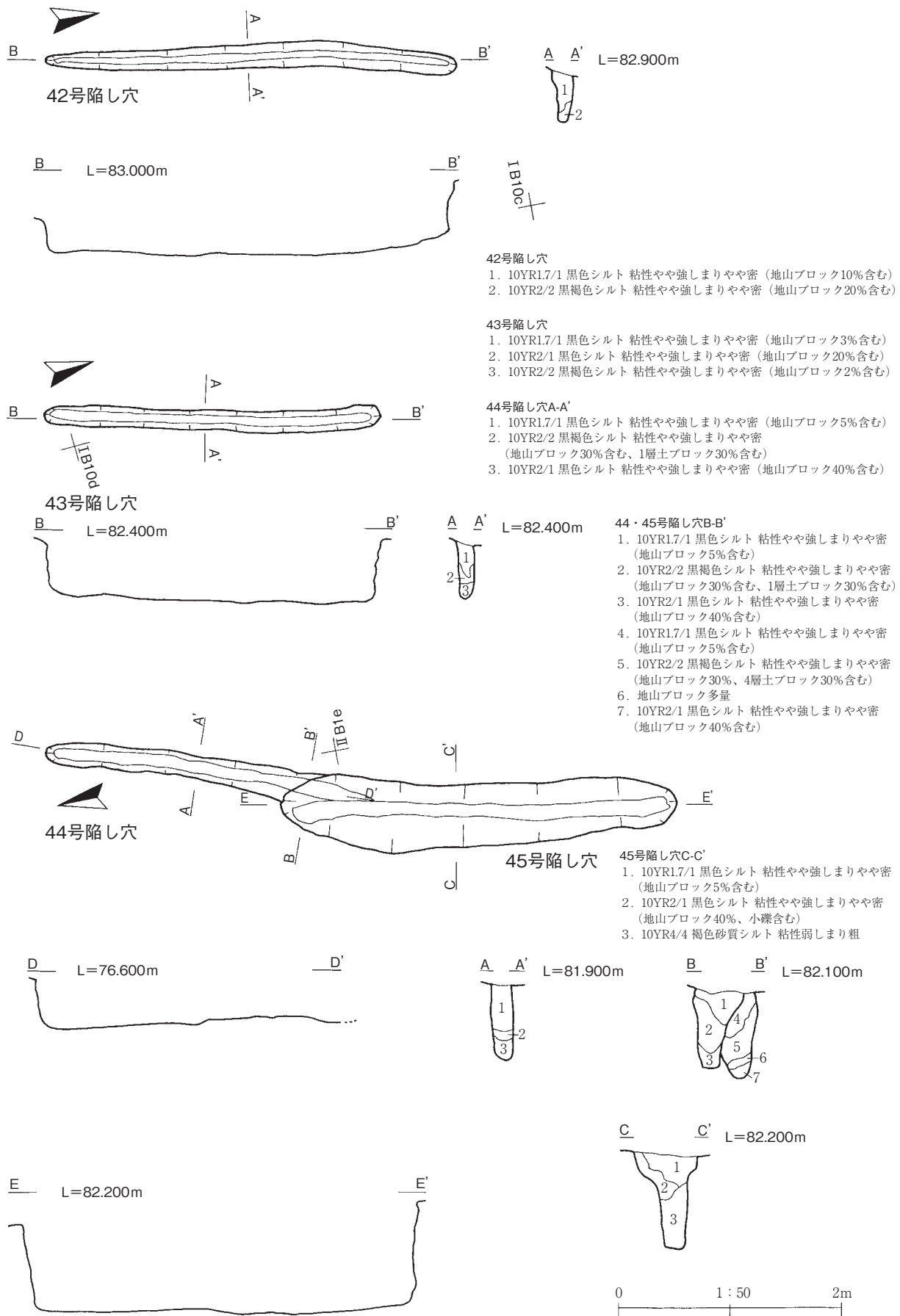
第38図 34~37号陥し穴状遺構



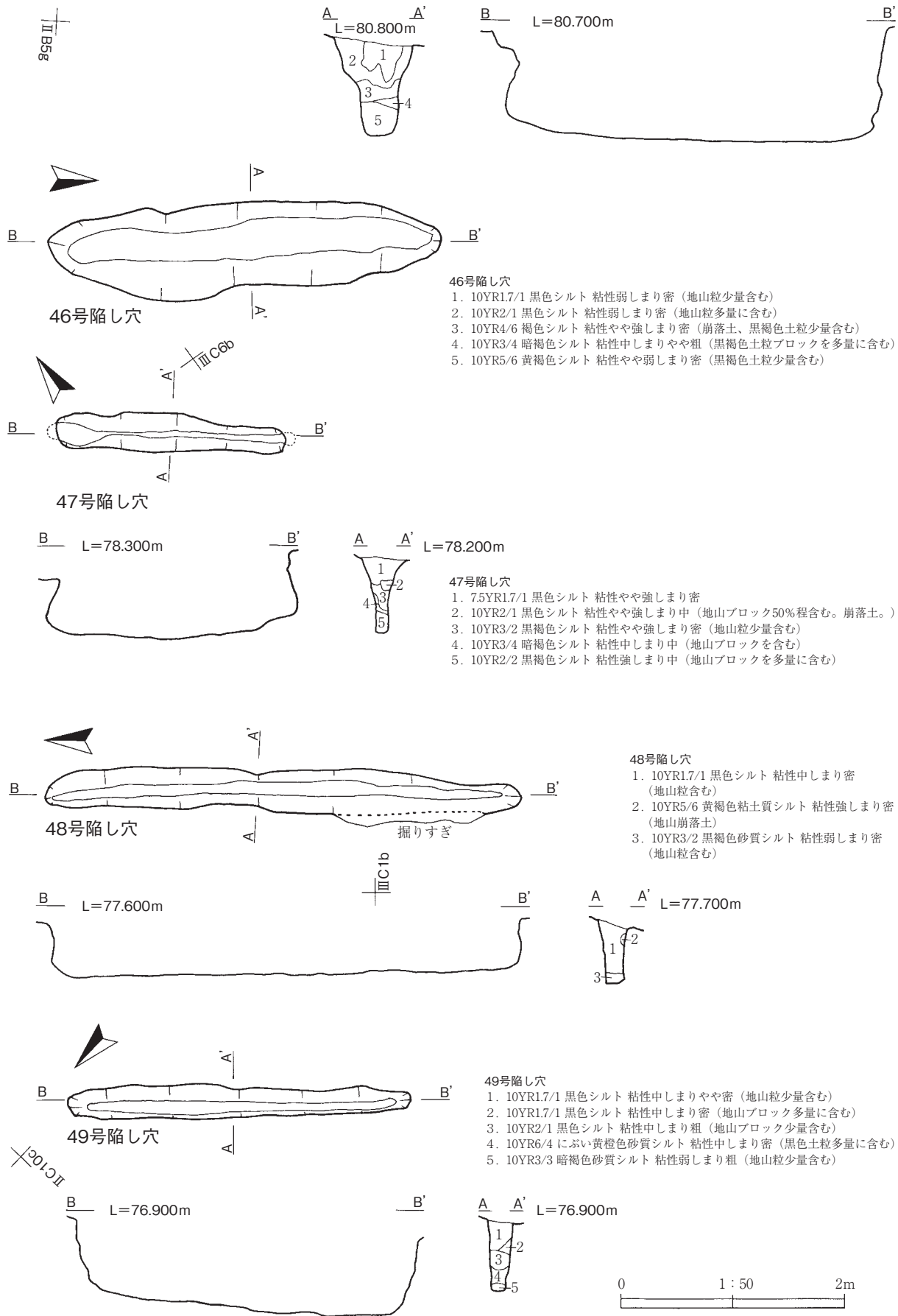
第39図 38~41号陥し穴状遺構



2 検出遺構

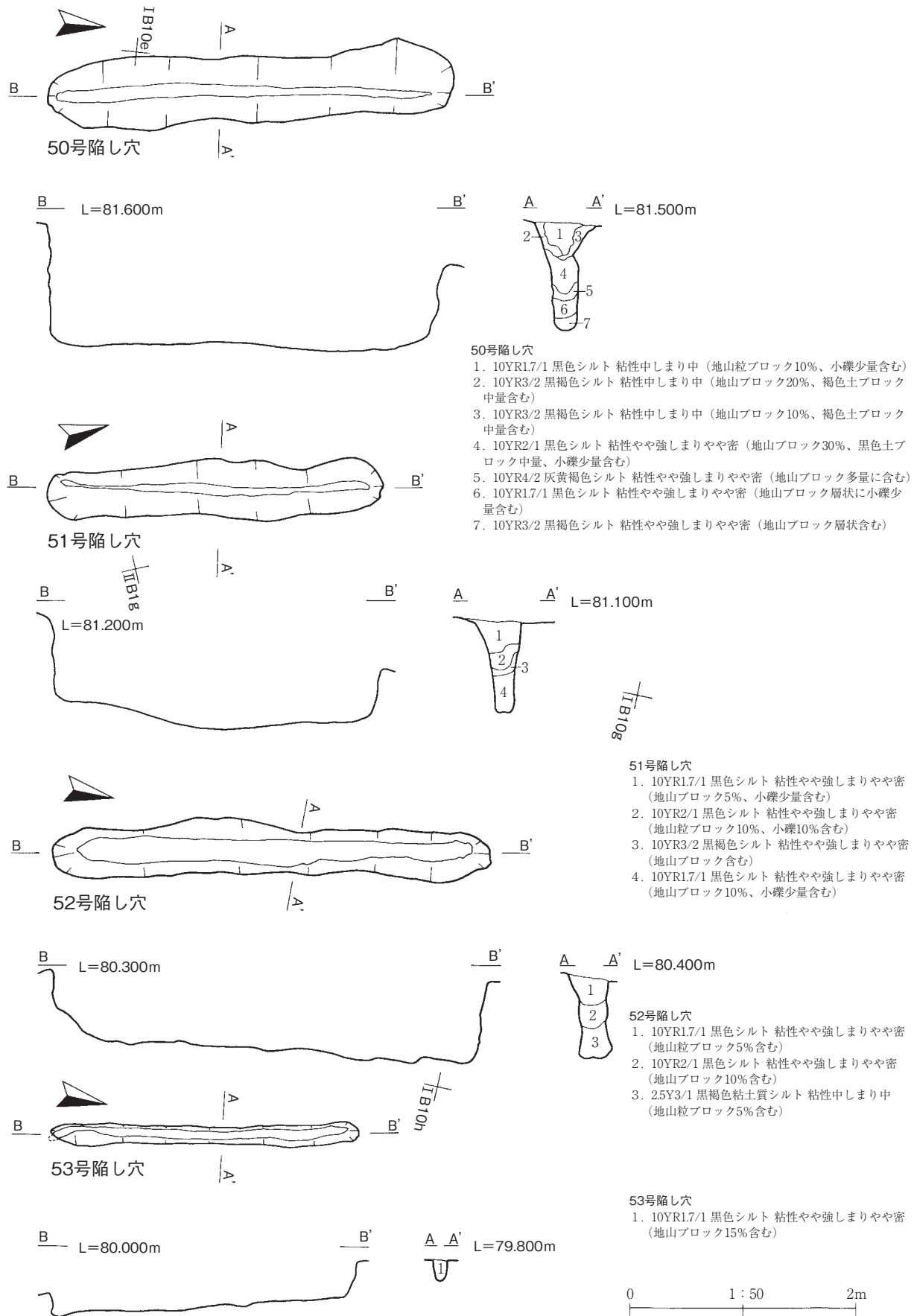


第40図 42~45号陥し穴状遺構



第41図 46~49号陥し穴状遺構

2 検出遺構



50号陥し穴

1. 10YR1.7/1 黒色シルト 粘性中しまり中 (地山粒ブロック10%、小礫少量含む)
2. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中しまり中 (地山ブロック20%、褐色土ブロック中量含む)
3. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中しまり中 (地山ブロック10%、褐色土ブロック中量含む)
4. 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強しまりやや密 (地山ブロック30%、黒色土ブロック中量、小礫少量含む)
5. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性やや強しまりやや密 (地山ブロック多量に含む)
6. 10YR1.7/1 黒色シルト 粘性やや強しまりやや密 (地山ブロック層状に小礫少量含む)
7. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや強しまりやや密 (地山ブロック層状含む)

51号陥し穴

1. 10YR1.7/1 黒色シルト 粘性やや強しまりやや密 (地山ブロック5%、小礫少量含む)
2. 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強しまりやや密 (地山粒ブロック10%、小礫10%含む)
3. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや強しまりやや密 (地山ブロック含む)
4. 10YR1.7/1 黒色シルト 粘性やや強しまりやや密 (地山ブロック10%、小礫少量含む)

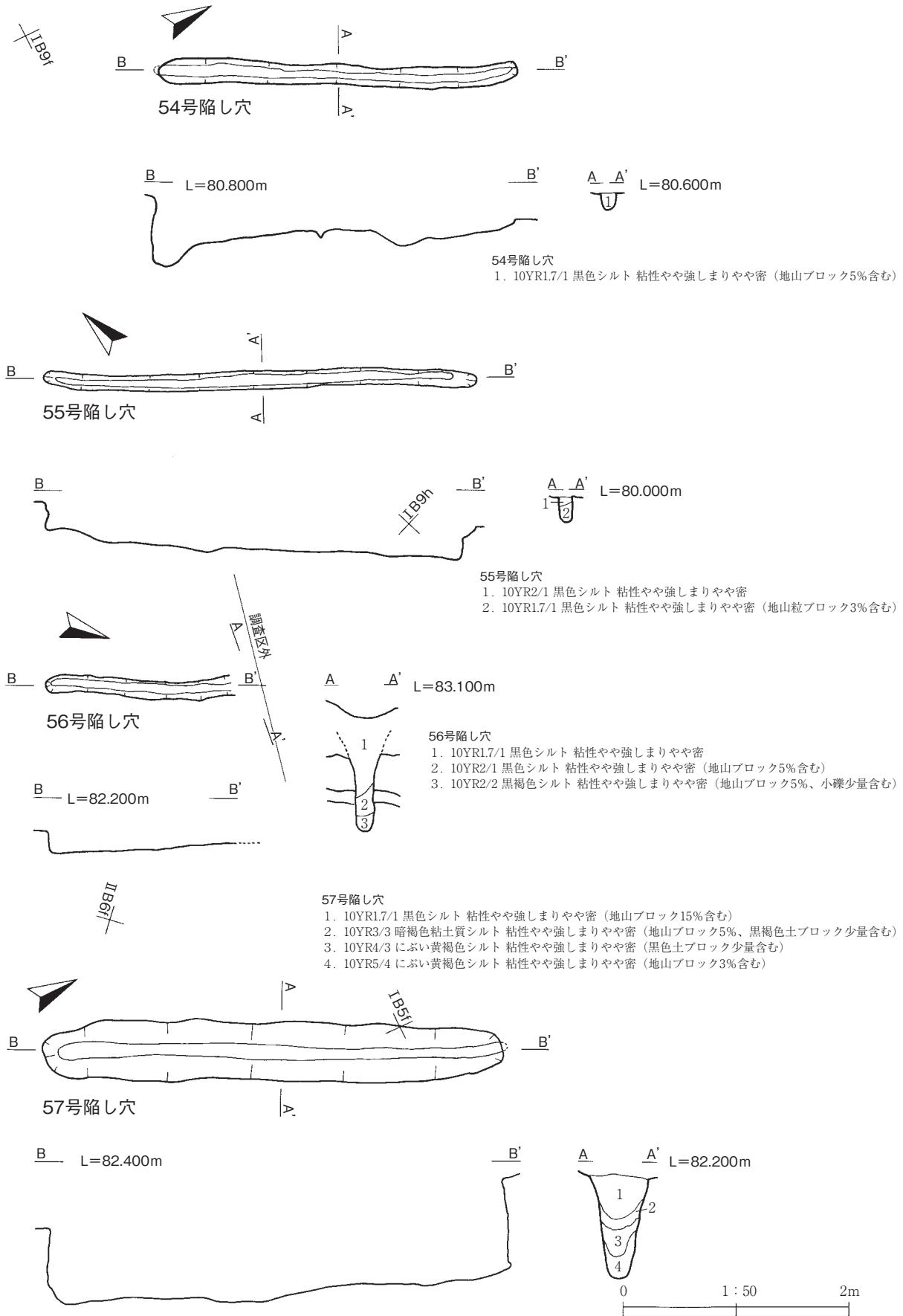
52号陥し穴

1. 10YR1.7/1 黒色シルト 粘性やや強しまりやや密 (地山粒ブロック5%含む)
2. 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強しまりやや密 (地山ブロック10%含む)
3. 2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性中しまり中 (地山粒ブロック5%含む)

53号陥し穴

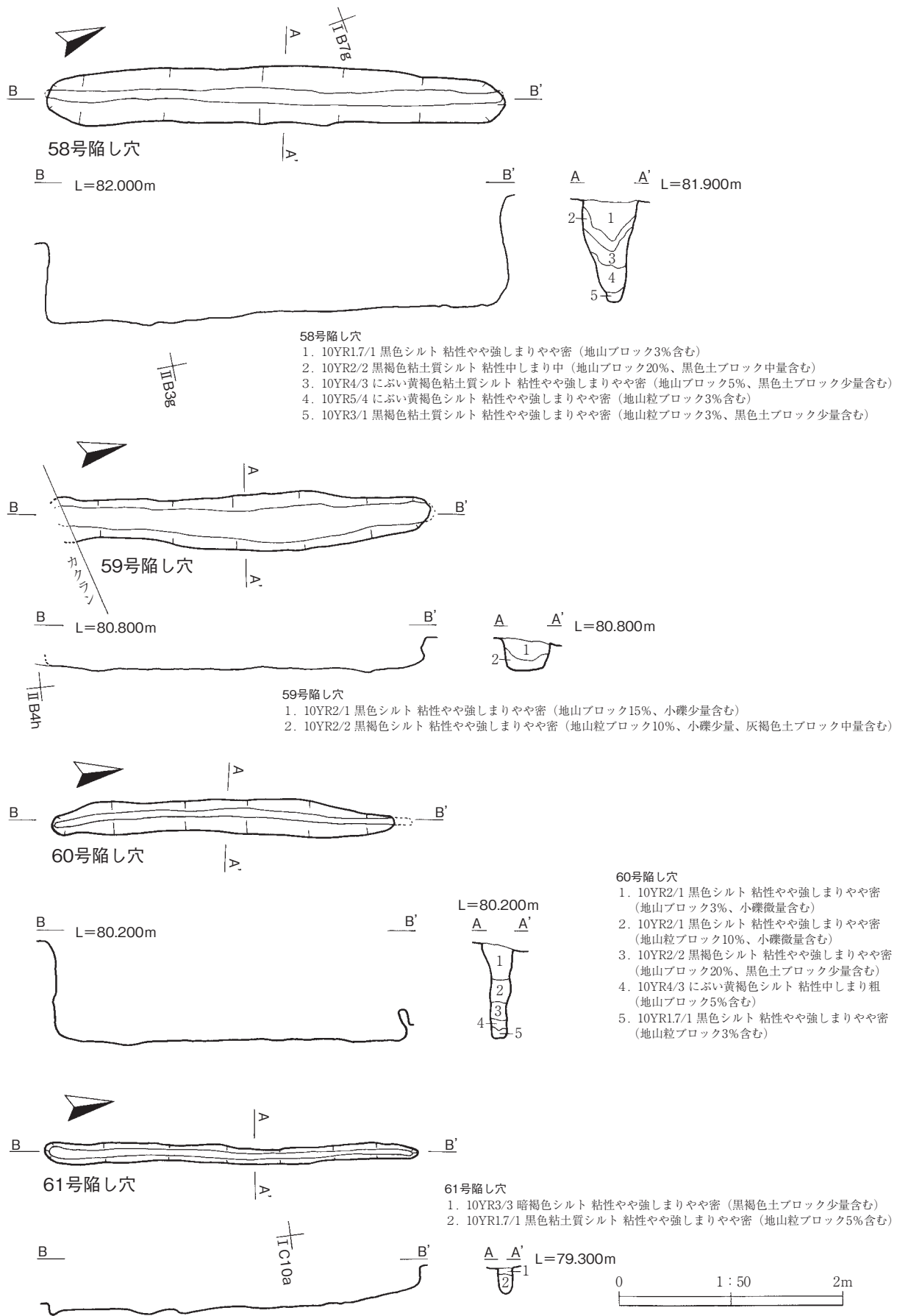
1. 10YR1.7/1 黒色シルト 粘性やや強しまりやや密 (地山ブロック15%含む)

第42図 50～53号陥し穴状遺構

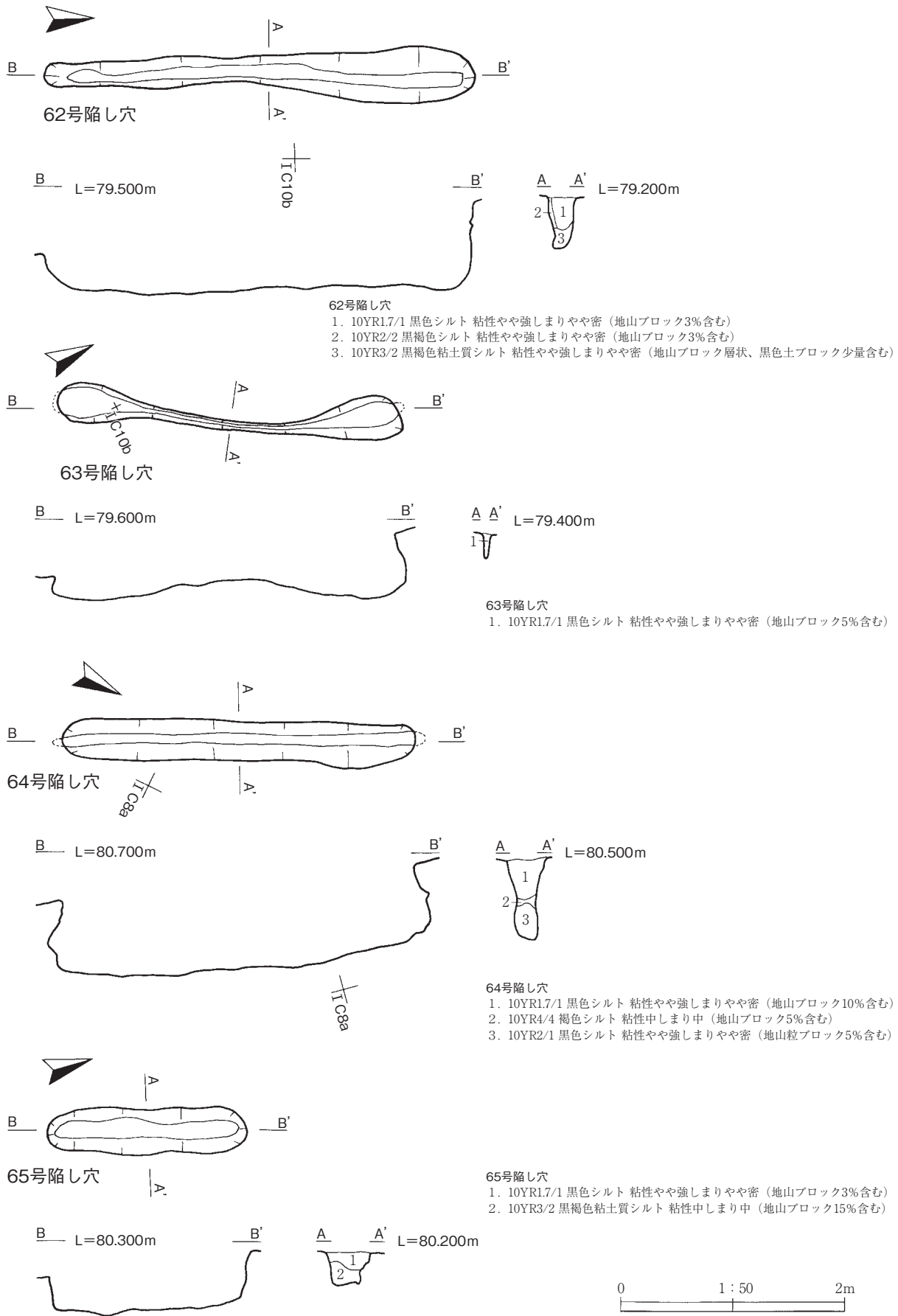


第43図 54～57号陥し穴状遺構

2 検出遺構

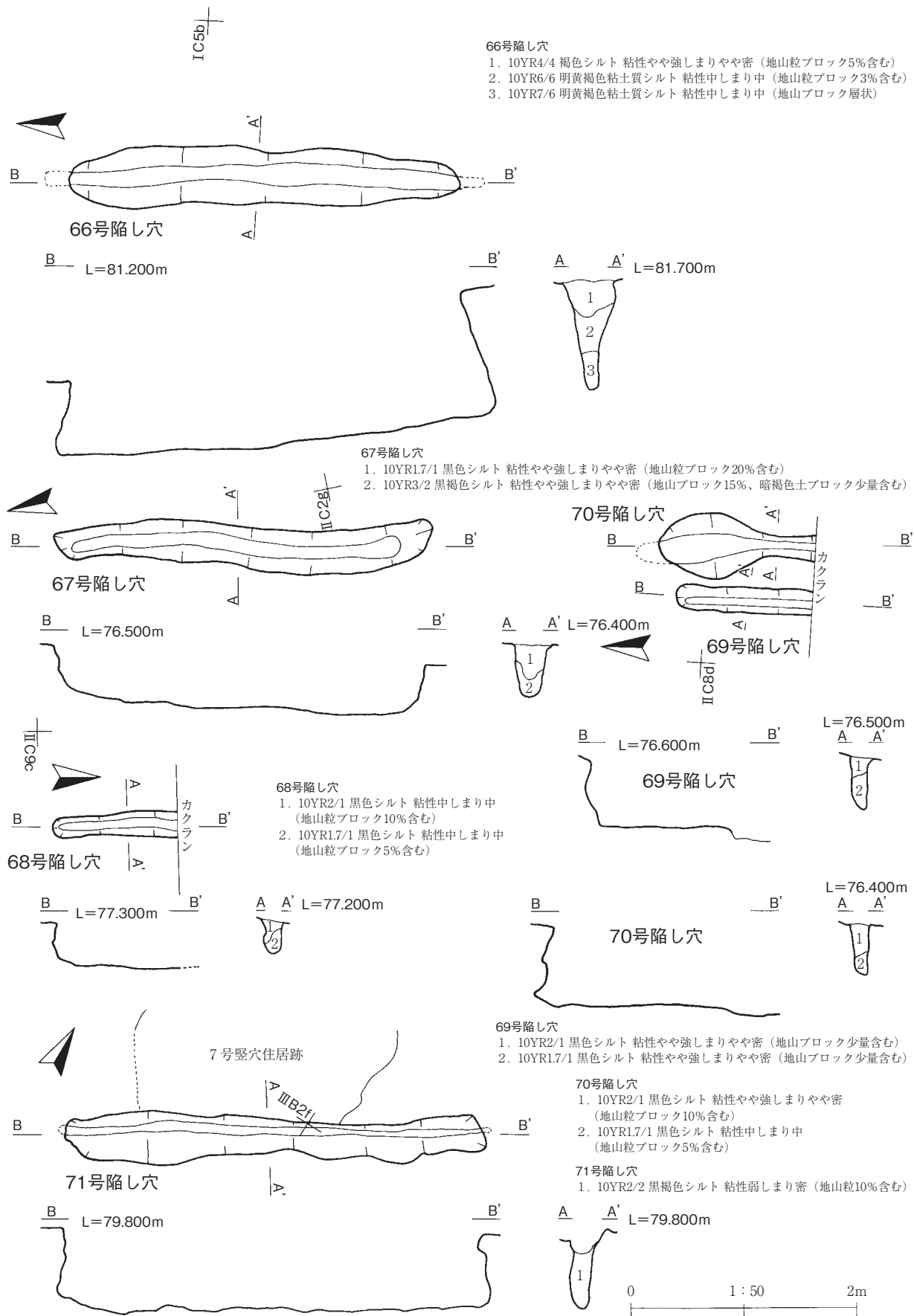


第44図 58~61号陥し穴状遺構

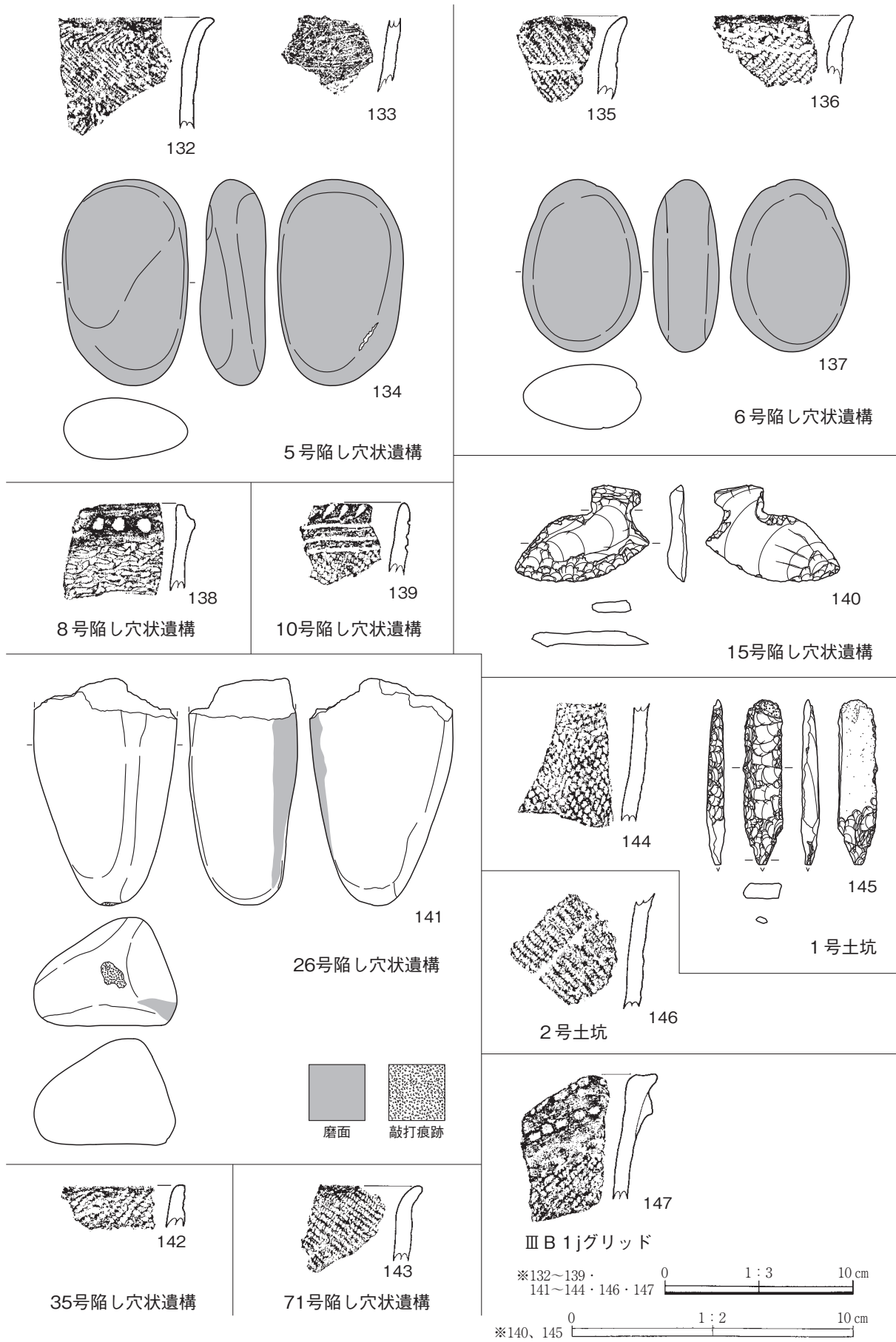


第45図 62~65号陥し穴状遺構

2 検出遺構

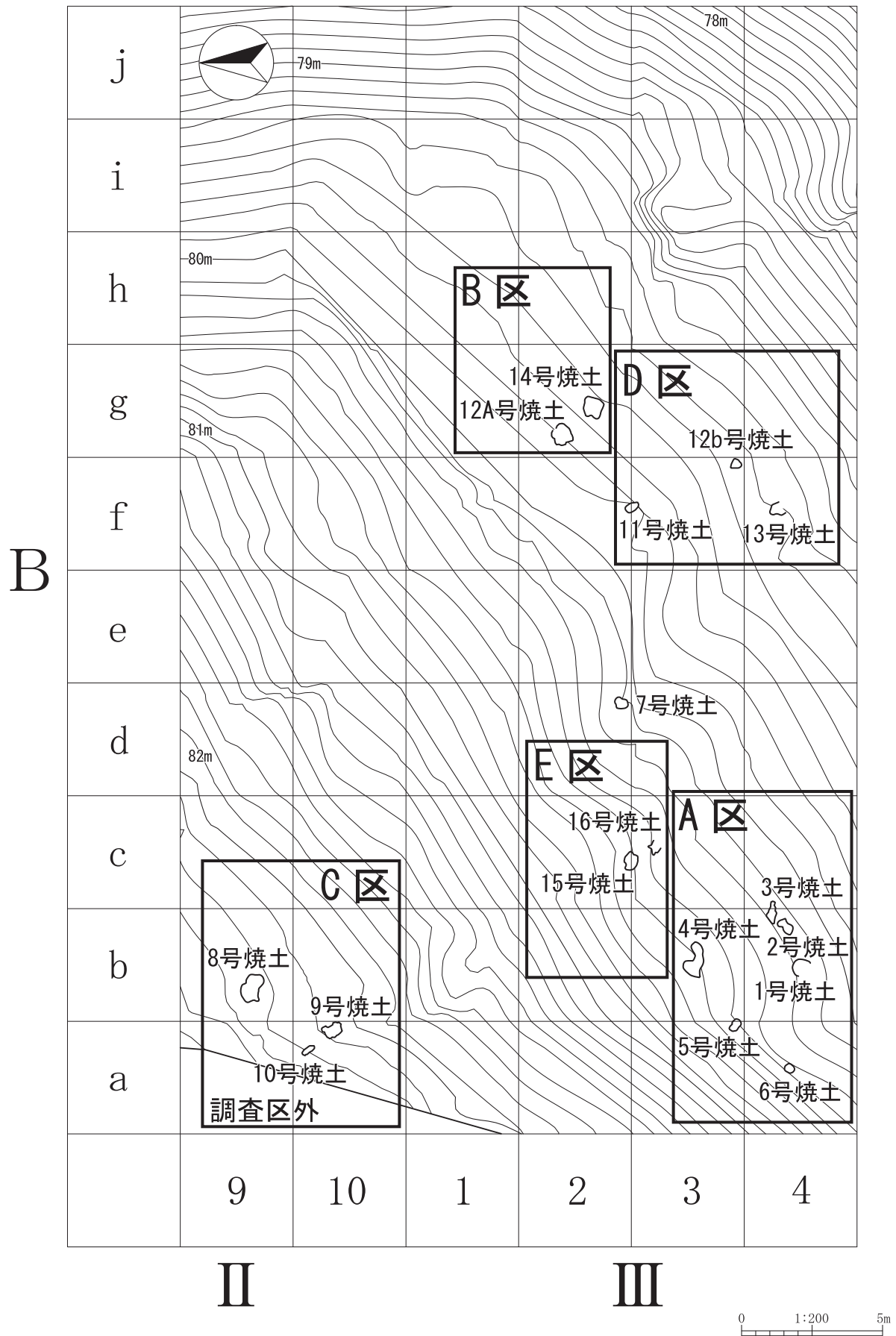


第46図 66~71号陥し穴状遺構

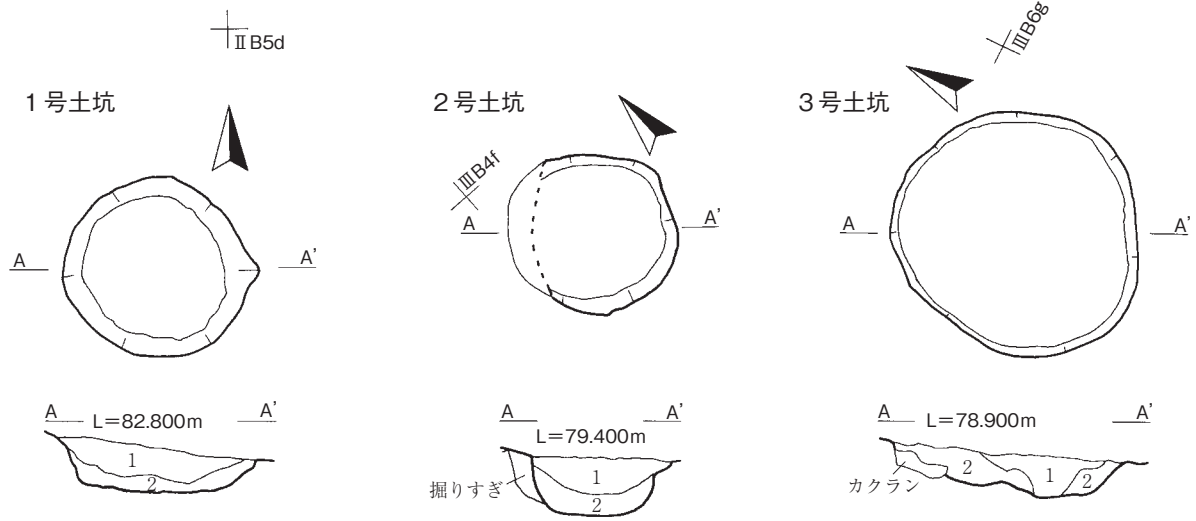


第47図 陥し穴状遺構・土坑出土遺物

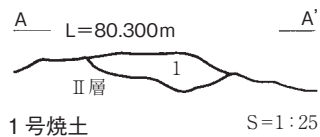
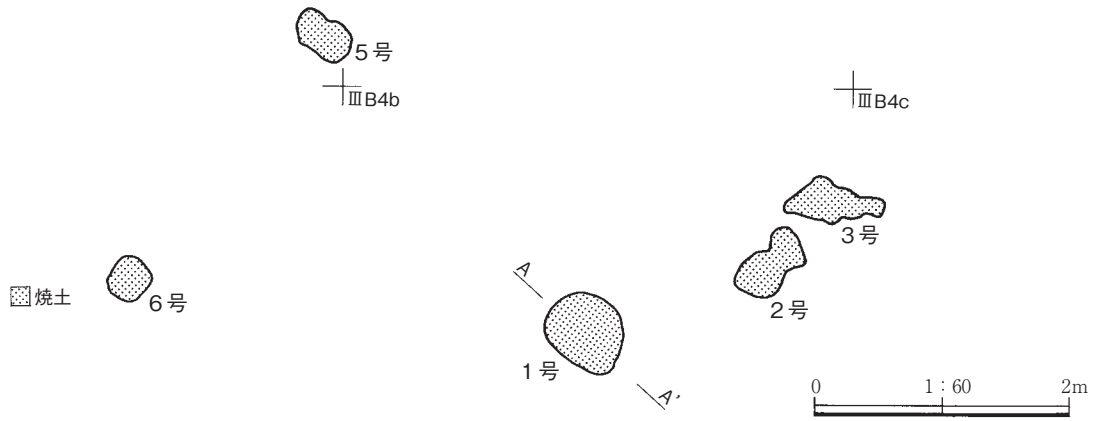
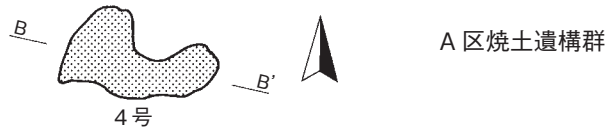
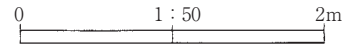




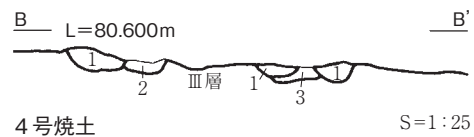
第48図 焼土遺構配置図



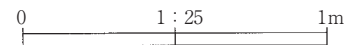
- 1号土坑**
- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中しまり中 (地山ブロック5%含む)
  - 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中しまり中 (地山ブロック20%、炭化物少量、小礫10%含む)
- 2号土坑**
- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強しまりやや密 (地山ブロック2%、炭化物1%含む)
  - 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強しまりやや密 (地山ブロック5%、炭化物1%含む)
- 3号土坑**
- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強しまりやや密 (地山ブロック3%、炭化物2%含む)
  - 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや強しまりやや密 (地山ブロック30%含む)



- 1号焼土**
- 5YR5/6 明赤褐色砂質シルト 粘性弱しまり密 (焼土。焼成良好)

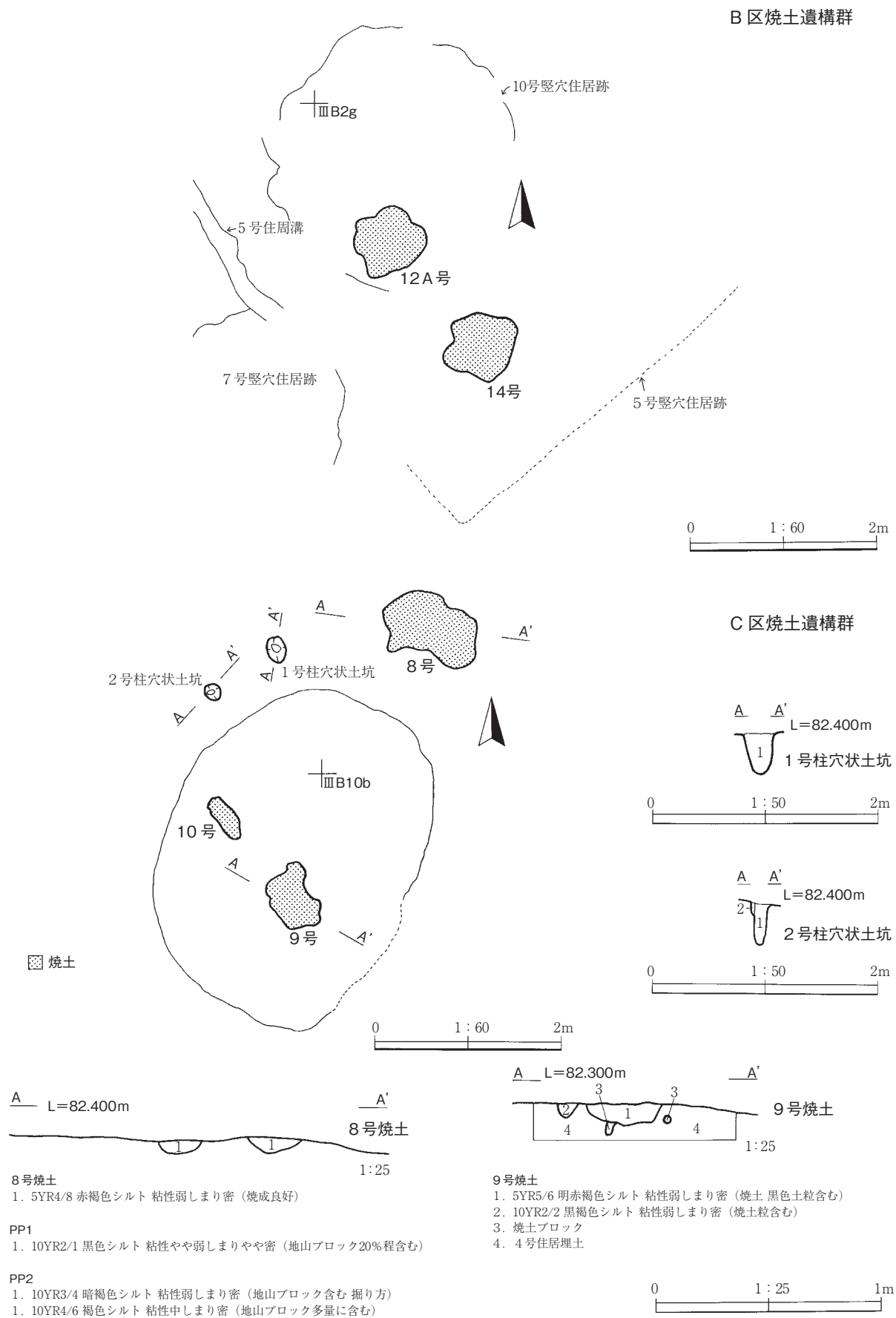


- 4号焼土**
- 5YR5/6 明赤褐色シルト 粘性弱しまり密 (焼土)
  - 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱しまり密
  - 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性弱しまり密

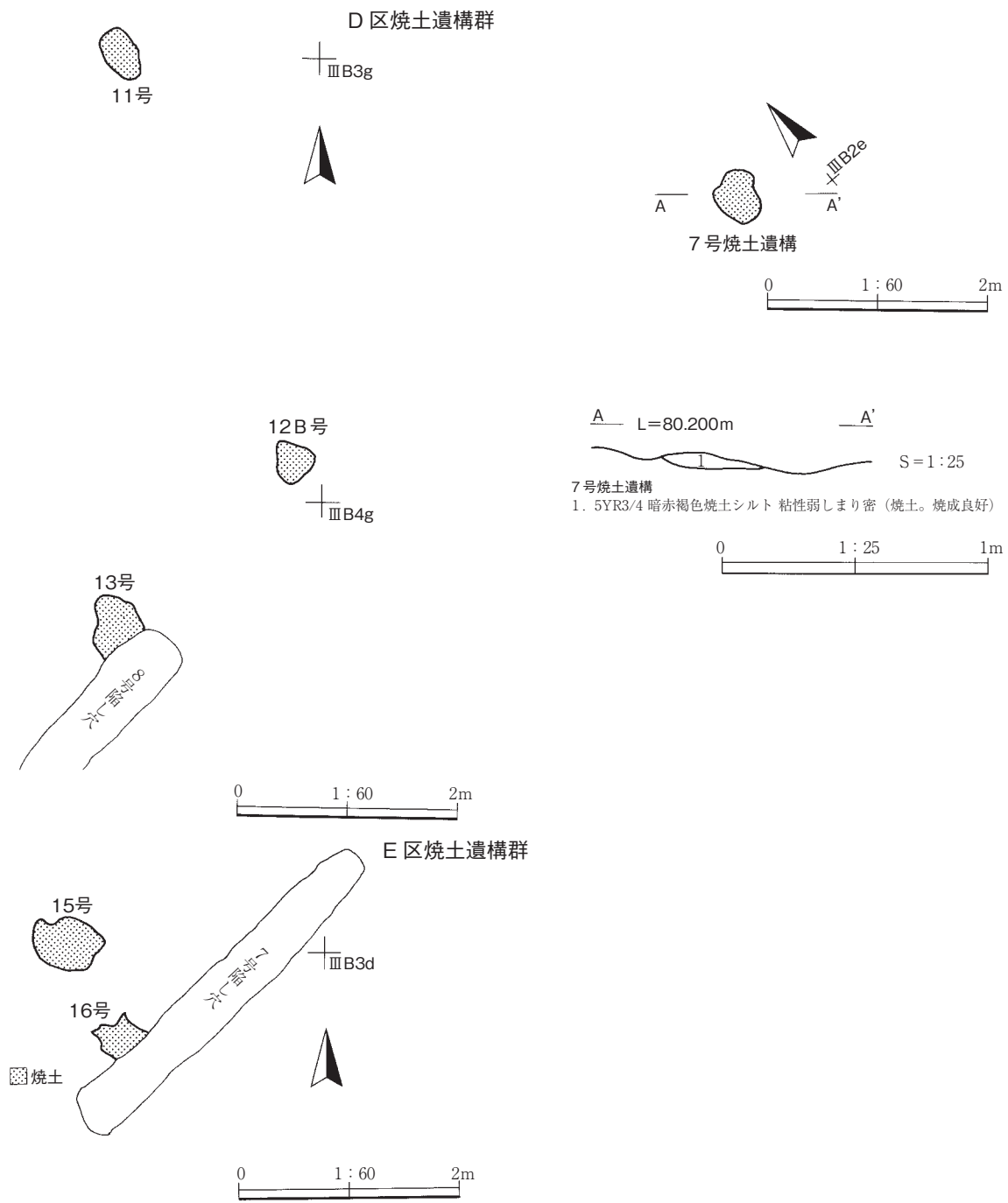


第49図 1～3号土坑、A区焼土遺構群

2 検出遺構



第50図 B・C区焼土遺構群



第51図 D・E区焼土遺構群、7号焼土遺構

### 3 遺構外出土遺物

#### (1) 遺物の実測掲載基準について

土器については原則文様等に着目して、径3×3cm以上の口縁部・底部、径6×6cm以上の胴部を実測・掲載した。摩滅が著しく文様等が不明なものについては割愛した。実測掲載点数170点である。石器は完形品、または破損品でも全体形状が推定できるものを選抜掲載した。

#### (2) 出土状況について

出土遺物は遺構内外合わせて土器が大コンテナで約4箱、石器・石製品が大コンテナで約1箱、合わせて約5箱出土した。遺物の出土地点の大半は遺構内・竪穴住居跡周辺の基本層序AのⅢ層からの出土である(ⅢBグリッド・ⅡBグリッド南側)。26・32・47号陥し穴状遺構から北側の調査区では出土遺物はなかった。

#### (3) 遺物観察表の表記について

第10図1の数条の結節回転文が施される土器を「多段結節回転文」、第54図188の口縁部・頸部に綾絡文が施される土器を結節回転文と表記した。色調の項目については『新版標準土色帖』(2006年版、農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に基づいて表記した。繊維の含有量については以下のように肉眼観察による量比を記載した。注意深く観察して繊維の混入が認められるものを「微量」、散見されるものを「少量」、内面のほぼ全体に認められるものを「中量」、内外面に認められるものを「多量」と表記した。

#### (4) 土器について

本遺跡の出土土器は、縄文時代早期前葉・中葉、前期前葉の土器と弥生土器である。ここでは、縄文時代・弥生時代の土器を従来の土器型式と文様・繊維の有無・色調等に着目し、以下の通りに分類した。

#### ◆第I群 縄文時代早期の土器 (第52図148～165、写真図版53)

##### 第I群1類 縄文時代早期中葉白浜式に相当する土器 (第52図148～157、写真図版53)

148～150は格子状沈線文が施され、押型文の意匠を置換したと考えられる土器群である。148・151・152は爪形状刺突文が施される。153は口唇部に刻目、156は単軸絡条体第1類、154・155・157は条痕が施される。153～157は151・152と胎土が類似していることから本類とした。

##### 第I群2類 貝殻腹縁文が施される土器 (第52図158～162、写真図版53)

158～160は沈線文と貝殻腹縁文が施される。159は括れを持つキャリパー形の土器と思われる。162は口唇部先端が尖り刻目・内外面にミガキ調整が施される。不鮮明であるが貝殻腹縁文?が施される。

##### 第I群3類 上記した文様以外の土器 (第52図163～165、写真図版53)

163 は胴部下半に外面ミガキ調整、内面ナデ調整が施され繊維を含む。164 は縄文が施される尖底部で繊維を含む。165 は沈線文が施され、繊維混入量が少量で焼成状態が良好な土器である（本群に属さない時期の可能性もある）。

◆第Ⅱ群 縄文時代前期前葉の土器（第 47・52～56 図 147・166～225、写真図版 52～56）

主に文様に着目して分類した。時間的変遷を追うものではない。

Ⅱ群 1 類 大木 2 a 式のメルクマールとされる多段結節回転文が施される土器（第 52・53 図 166～174、写真図版 53・54）

・Ⅱ群 1 a 類 条と条の間隔がほぼ密着する多段結節回転文が施される土器

（第 52・53 図 166～170、写真図版 53）

口縁部がやや外反するもの（166・167）、口縁部がほぼ直立して立ち上がるもの（168・169）がある。168・169 は同一個体である。土器の繊維混入量は少～中量である。

・Ⅱ群 1 b 類 多段結節回転文の条と条の間に一定の間隔がある土器

（第 53 図 171～174、写真図版 53・54）

山形口縁部に多段結節回転文、胴部に結束羽状縄文が施されるもの（171）、口縁部無文部の下に多段結節回転文が施されるもの（171・173・174）がある。172 はいわゆる葺瓦状撚糸文の胴部と思われる。

Ⅱ群 2 類 いわゆる S 字状連鎖沈文が施される土器（第 53 図 175～178、写真図版 54）

すべて、繊維混入量は微～少量、色調は明褐色・にぶい橙色、焼成状態が良好な土器である。

Ⅱ群 3 類 隆帯に刻目・刺突が施される土器（第 47・53 図 147・179～186、写真図版 52・54）

口縁部に沿うように隆帯が施されるもの（147・179～185）、山形口縁部頂部から隆帯が垂下するもの（186）がある。隆帯の作出方法が貼付によるもの（179・180・182～184・186）と器面からのつまみ出しによるもの（147・181・185）がある。182～185 は口端に刻目が施される。頸部から胴部に多段結節回転文が施されるもの（181～184・186）、単節斜縄・複節斜縄文が施されるもの（147・179・180）、組紐が施されるもの（185）がある。口唇部断面形は平坦及び丸みを帯びるものが大半で、尖りぎみのものは遺構内外含め 181 の 1 点のみである（摩滅が著しいことも要因？）。大木 2 b 式～白座式に比定されるものと思われる。

Ⅱ群 4 類 口縁部・頸部に結節回転文が施される土器（第 54 図 187～194、写真図版 54）

口縁部の狭い無文部下に結節回転文が施されるもの（191・192・194）、数条の結節回転文が施されるもの（187～189・193・194）がある。1 類～3 類土器群と比較すると繊維の混入量が多い（194 を除く）。194 は狭い無文部・色調・繊維の混入量から大木 2 b 式の特徴を備える。

Ⅱ群 5 類 附加条縄文が施される土器（第 54 図 195・196、写真図版 54）

口縁部は平縁を呈す。繊維混入量は中～多量である。

Ⅱ群 6 類 結束羽状縄文が施される土器（第 54 図 197～203、写真図版 54・55）

### 3 遺構外出土遺物

単節縄文が施されるもの(197・198)、0段多条の附加条が施されるもの(199)、複節斜縄文が施されるもの(200～203)がある。遺構内外を含め非結束羽状縄文が施される土器は出土していない。

#### Ⅱ群7類 組紐が施される土器(第55図204～207、写真図版55)

204・205は口縁部に無文部をもつ。すべて繊維混入量は少量で径4mm以下の小礫を含む。

#### Ⅱ群8類 単節(0段多条)・複節縄文が施される土器(第55図208～216、写真図版55)

口縁部に刻目が施されるもの(208A～C)、小波状を呈するもの(209・210・214・215)、平縁のもの(208A～C、211～213、216)がある。213・216は無文部下に単節縄文が施される。215は摩滅により不明瞭であるが本類とした。208A～Cは白座式と思われる。

#### Ⅱ群9類 単軸絡条体が施される土器(第55図217～220、写真図版55)

口縁部は平縁を呈す。繊維混入量は中～多量である。

#### Ⅱ群10類 前記した文様以外の土器(第56図221・222、写真図版55)

両者とも繊維混入量は微量である。

#### Ⅱ群11類 底部資料(第56図223～225、写真図版56)

外面・底面に単節縄文が施されるもの(223)、外面底部直上が無文部のもの(224・225)、底面に網代痕?が認められるもの(224)がある。底部直上は無文部をもつものは大木2b式～白座式と思われる。

上記の分類において、隆帯に刻目と単節縄文が施されるものや、多段結節回転文と羽状縄文が施されるもののように、複数以上の文様要素が供伴する土器があることから、Ⅱ群1b類・Ⅱ群6類どちらの分類にもあてはめられる土器がある。

#### ◆第Ⅲ群 弥生土器(第56図226、写真図版56)

弥生時代前期に属す土器である。内外面に沈線文をもつ。器種は浅鉢もしくは高坏である。

#### (5) 石器について

石器・石製品94点を掲載・記載した。いわゆる定形石器と呼ばれるもの、または使用痕が明確に認められるものである。内訳は石鏃32点、石匙21点、搔・削器類11点、石篋1点、尖頭器1点、打製石斧1点、磨製石斧3点、磨石13点、凹石2点、敲石3点、敲石+磨石4点、石皿1点である。時代は、おおむね縄文時代前期前葉に属す。

ここでは、形状・剥離調整に着目して、次の通りに分類した。

#### 石鏃(第56図227～238、写真図版56)

扁平で左右対称、尖頭部とそれより幅の広い基部を有する小形の石器を石鏃とした。基部はすべていわゆる凹基・平基のものである。分類は以下の通りである。

◇1類 平面形が正三角形～二等辺三角形で基部に抉りをもつもの(227～232)を本類とした。細部加工剥離が表裏全面に及ぶもの(227～229)、片面に全面剥離調整が施され、もう一方の面は縁辺

部を中心に細部加工剥離が及ぶもの(230・231)、周縁を中心に細部加工剥離されるもの(232)がある。  
 ◇2類 平面形が正三角形～二等辺三角形で基部がほぼ平坦なもの(233～238)を本類とした。表裏全面に細部加工剥離が及ぶもの(233～235)、主に片面全面に細部加工剥離が施され、もう一方の面は縁辺を中心に細部加工剥離されるもの(236)、周縁を中心に細部加工剥離されるもの(237・238)がある。

#### 石匙(第56・57図239～250、写真図版56・57)

つまみ部が作出されるものを石匙とした。分類は以下の通りである。

- ◇1類 いわゆる縦型石匙。長軸上につまみ部がつくられたもの(239～248)。
  - 1類a 柳葉状の体部を持ち、表裏全面に細部加工剥離が及ぶもの(239)。
  - 1類b 主な剥離調整は片面に施され側縁部に刃部をもつもの(240～247)。
  - 1類c 片面の側縁部に細部加工剥離が施されるもの(248)。
- ◇2類 器体軸線に対しつまみ部分が斜めにつくいわゆる斜位型石匙で、主な剥離調整は片面に施され、側縁部に刃部をもつもの(249・250)がある。

#### 搔・削器(第57図251～255、写真図版57)

251は表裏全面に細部加工剥離が及ぶ。251・252は石匙等の他器種の可能性がある。

#### 尖頭器(第58図256、写真図版57)

1点のみの出土である。平面形は木葉形で側縁部中央から先端部にかけて細部加工剥離が施される。欠損部はつまみ部を作り出すような形状を窺わせることから石匙(1a類)の可能性も考えられる。

#### 打製石斧(第58図257、写真図版57)

1点のみの出土である。主に片面を中心に剥離調整が施され、表面は原石礫面を広く残す。

#### 磨製石斧(第58図258～260、写真図版57・58)

すべてに研磨調整が施される。

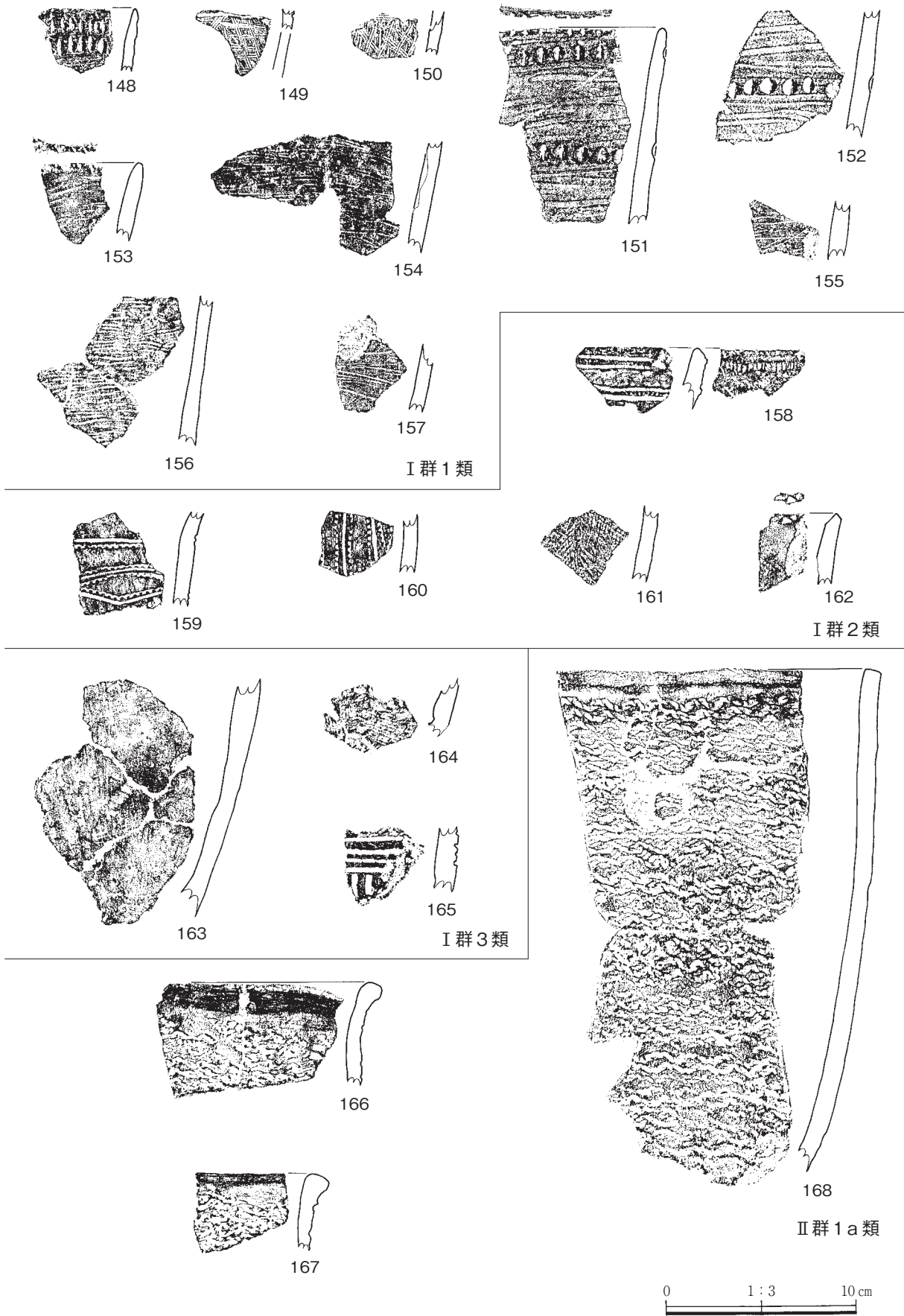
#### 磨石(第58図261・262、写真図版58)

磨痕が認められる。

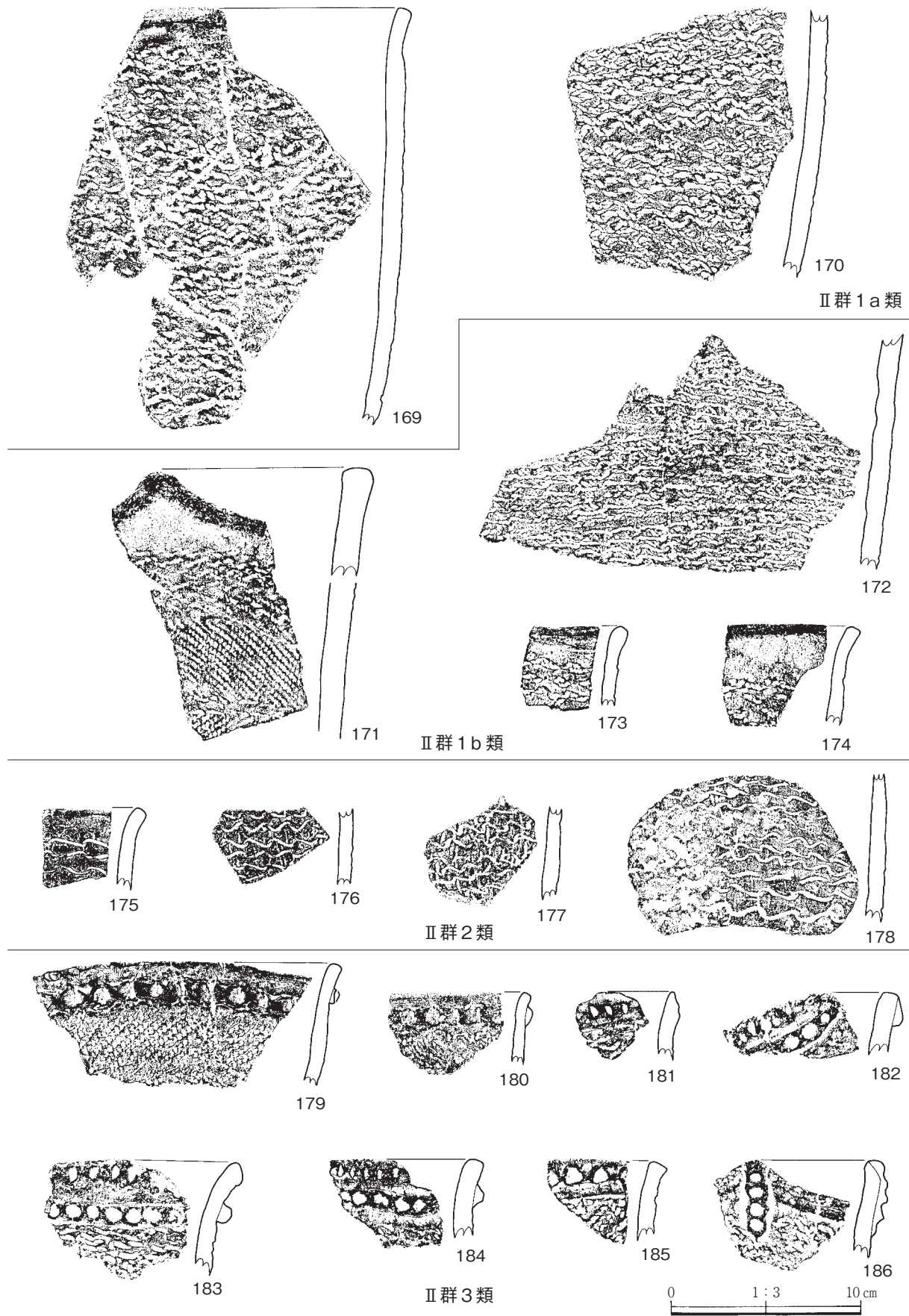
#### 敲石+磨石(第58図263・264、写真図版58)

側縁部に敲打痕が認められ、平坦面に磨痕が認められる。

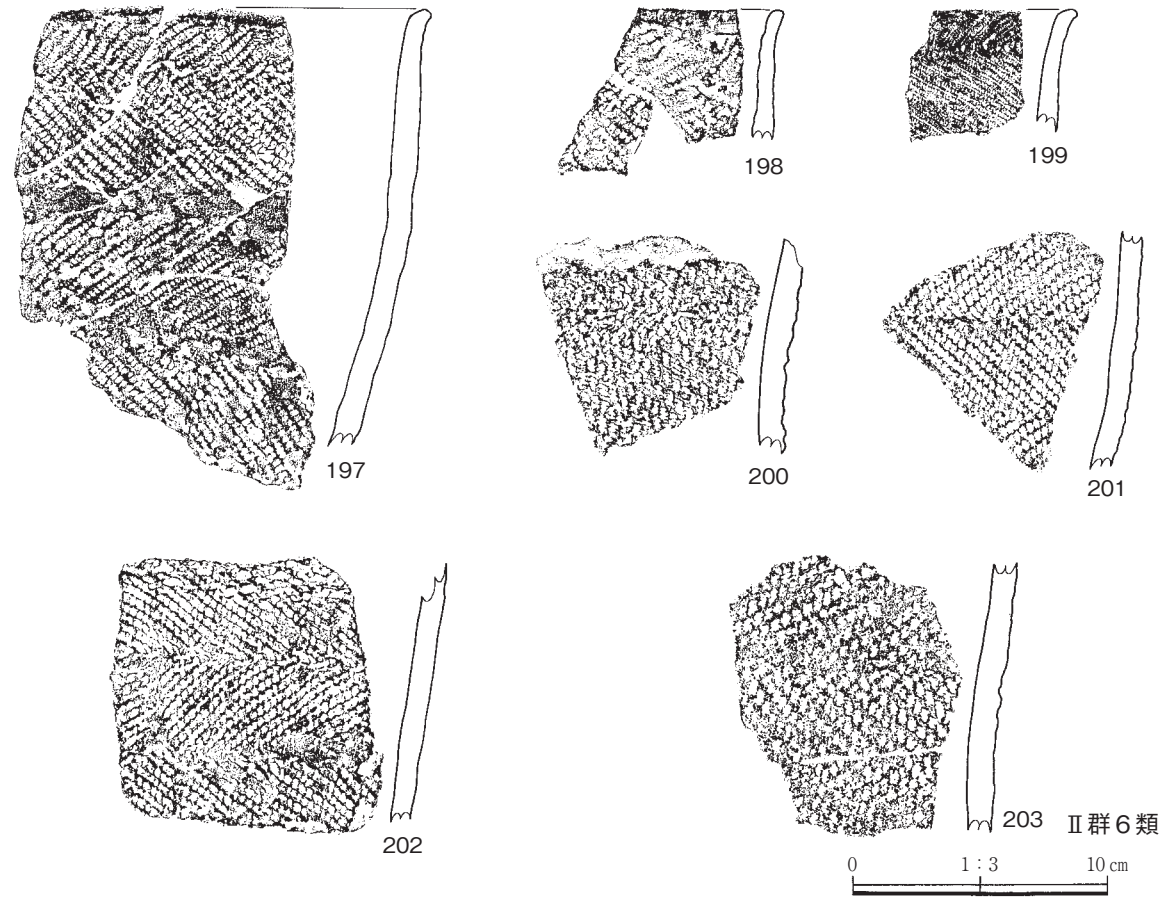
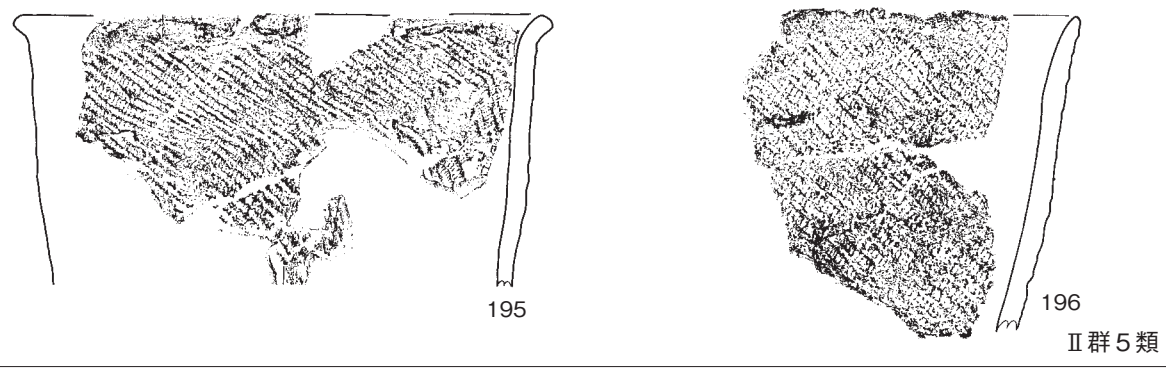
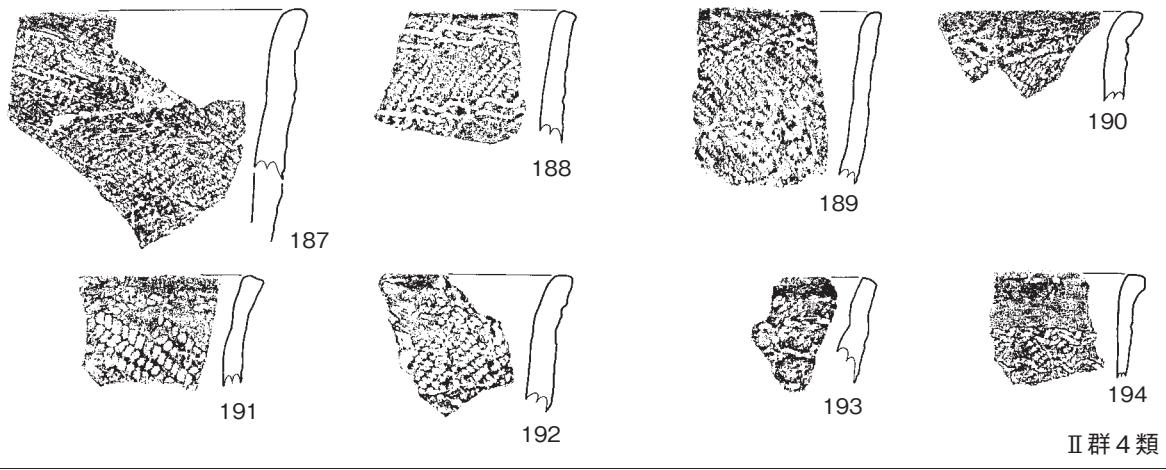




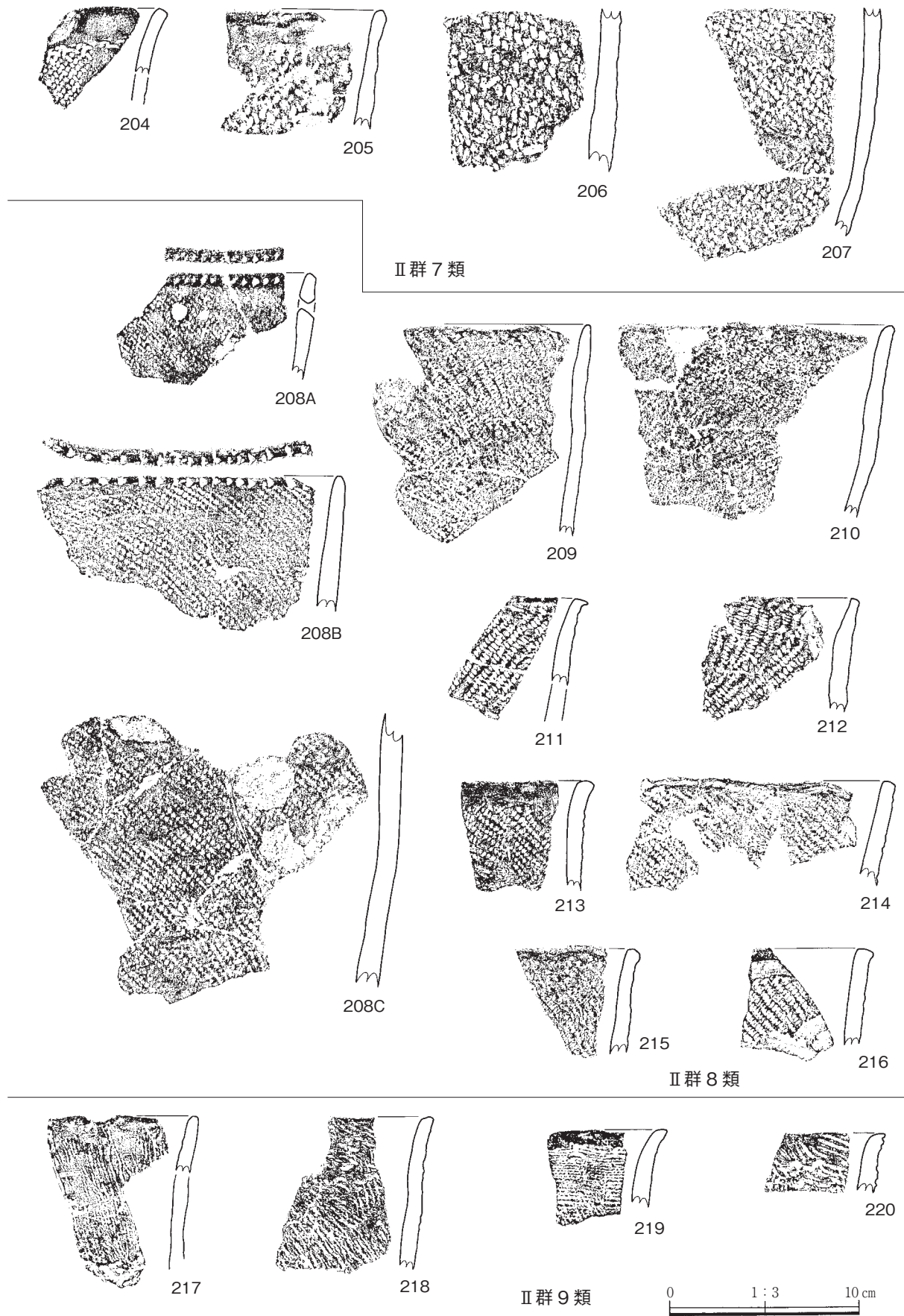
第52図 遺構外出土遺物(1)



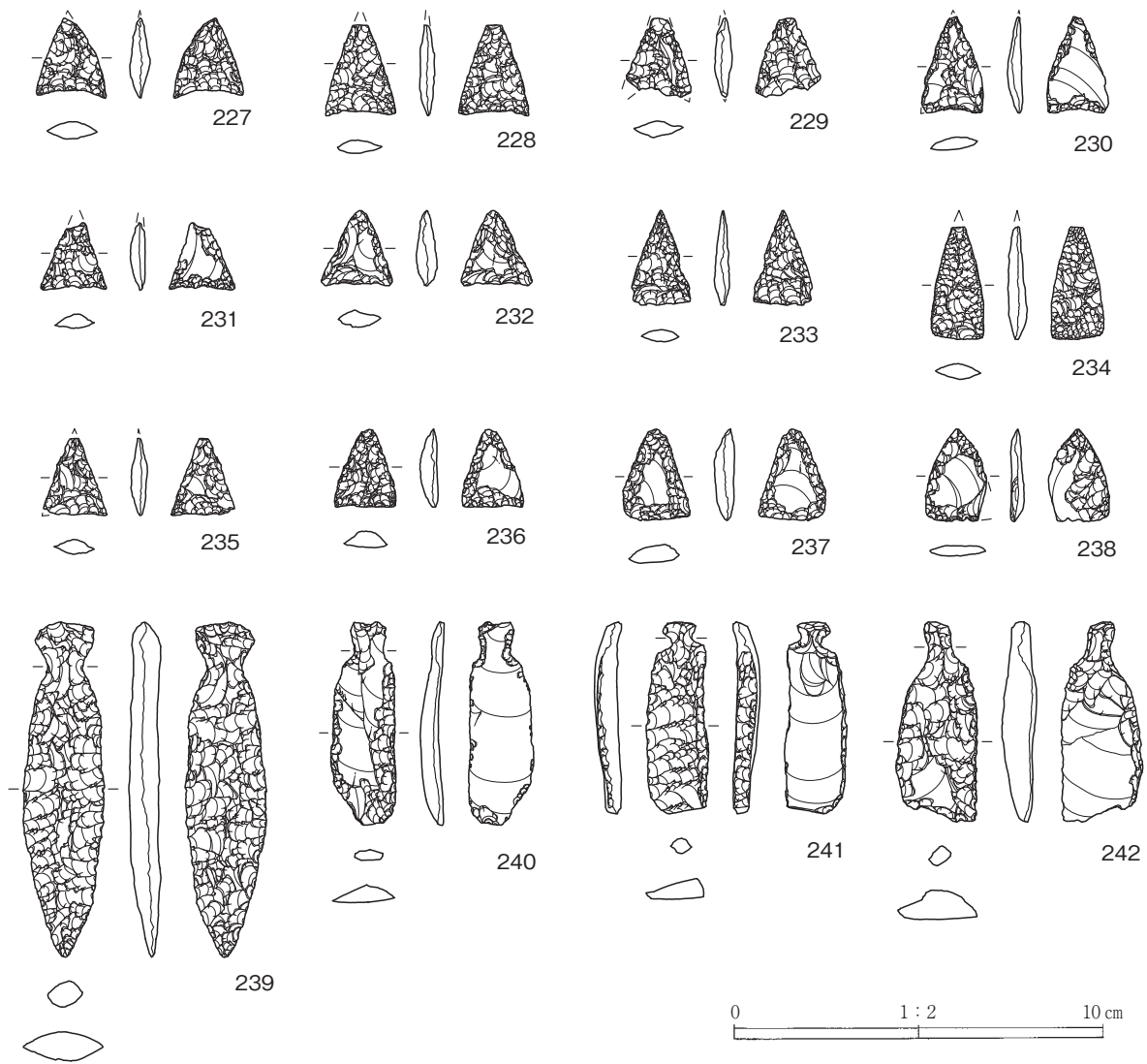
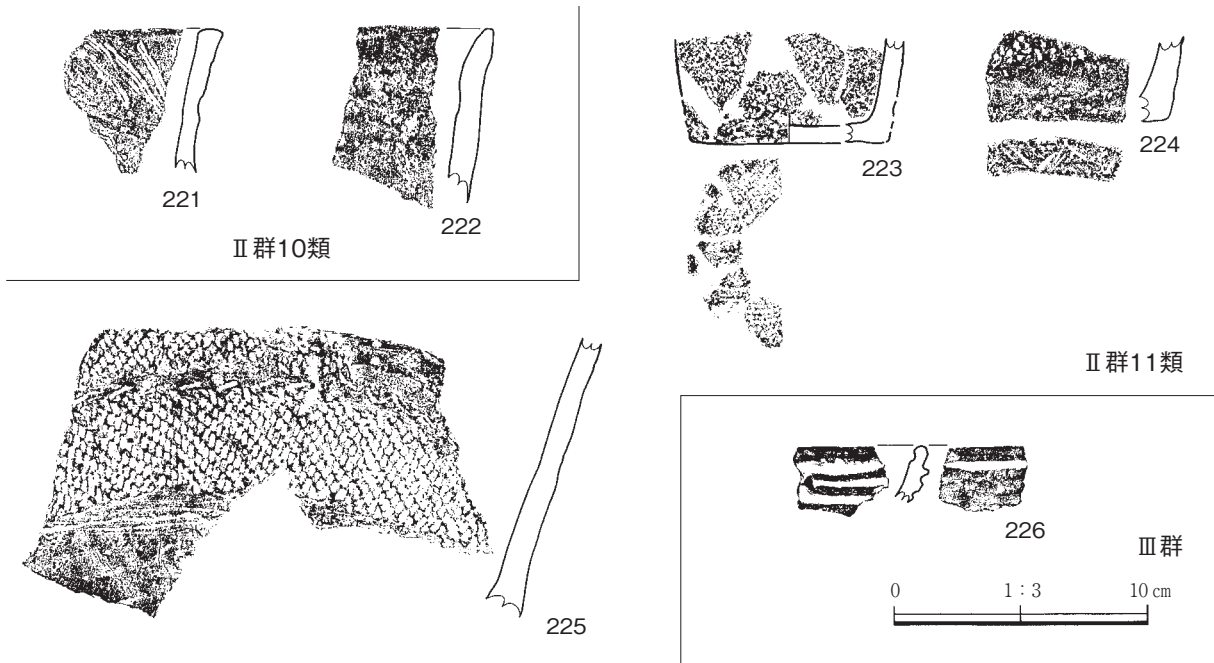
第53図 遺構外出土遺物(2)



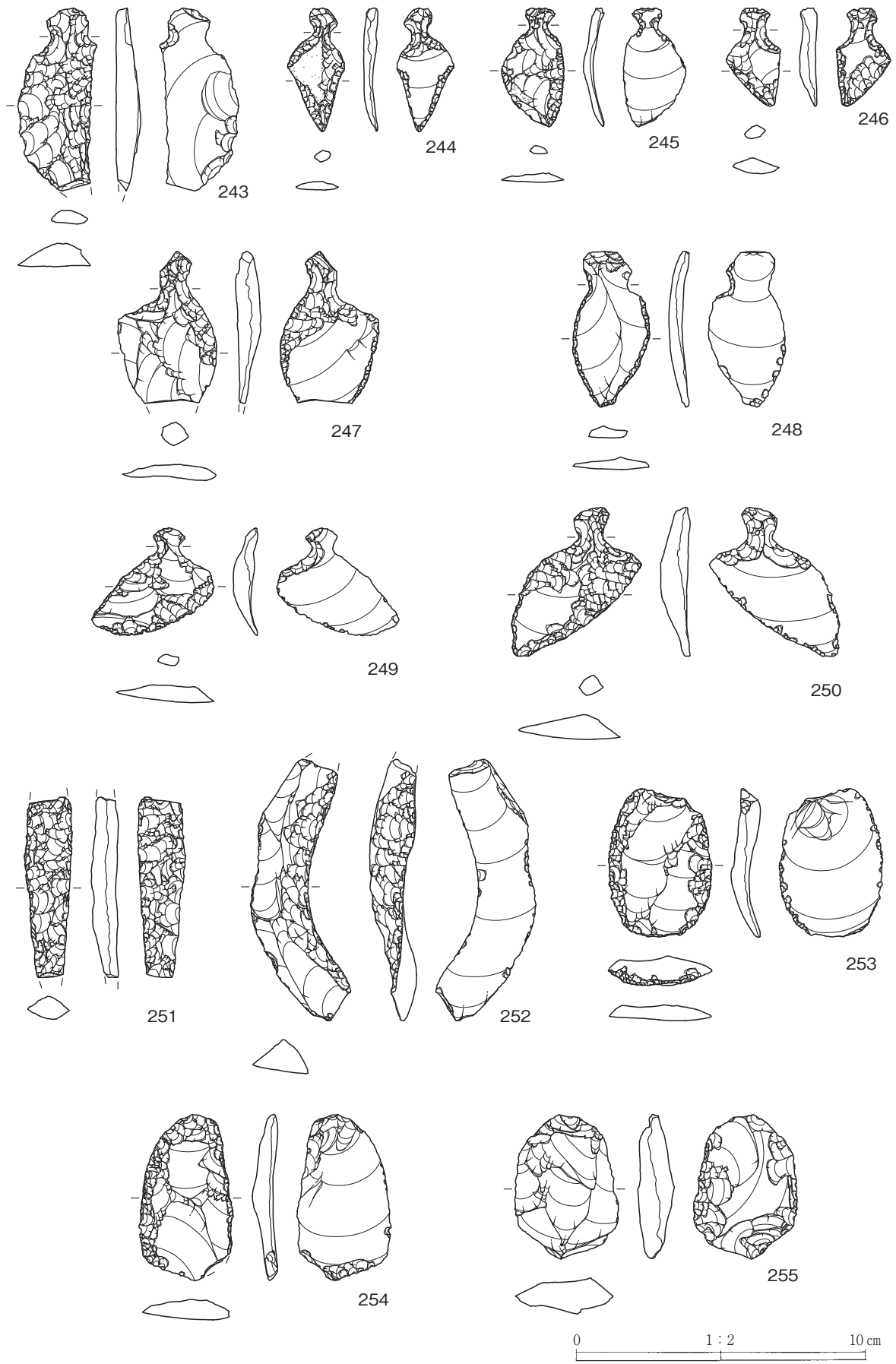
第54図 遺構外出土遺物(3)



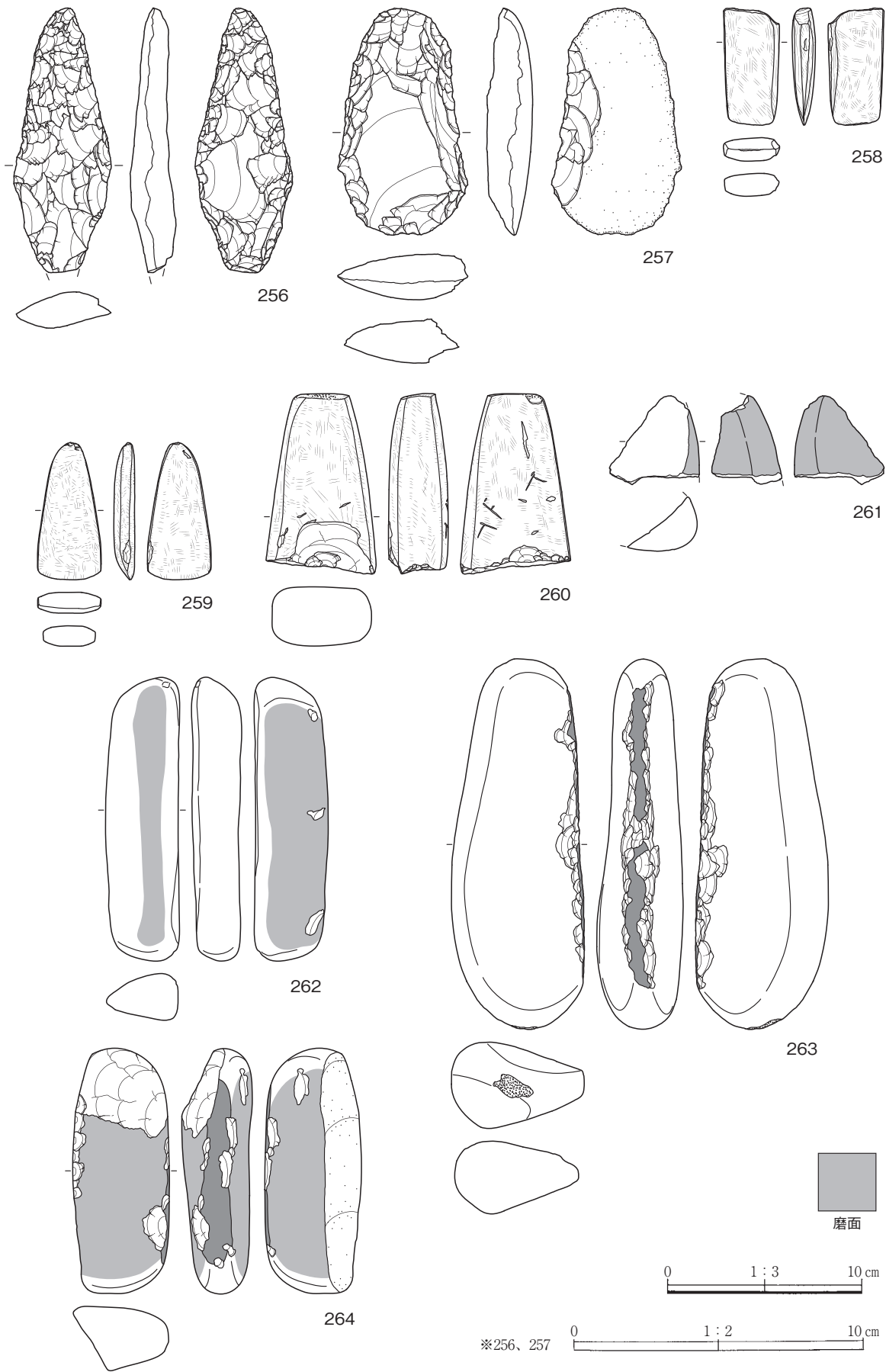
第55図 遺構外出土遺物(4)



第56図 遺構外出土遺物 (5)



第57図 遺構外出土遺物(6)



第58図 遺構外出土遺物（7）

第2表 竪穴住居跡・住居状遺構一覧

No.	遺構名	位置	平面形	規模(m)	深さ(m)	主軸	床面施設	図版	写真
1	1号竪穴住居跡	ⅡB10b・ⅢB1b	方形	3.12×2.70	0.25	-	貼り床	9	3
2	2号竪穴住居跡	ⅡB8c・8d	方形	3.53×3.36	0.39	-	貼り床・柱穴	9	4
3	3号竪穴住居跡	ⅡB8c・9c・9d	方形	北東軸4.44	0.14	-	貼り床・柱穴	13	5
4	4号竪穴住居跡	ⅡB9a・9b・10a・10b	卵状	3.55×(26.6)	0.20	-	貼り床・柱穴	13	6
5	5号竪穴住居跡	ⅡB9h・9h・10h・10i、ⅢB1f~i、ⅢB2f~2h、ⅢB3f	長方形	(13.2)×(6.2)	0.24	-	貼り床・柱穴・炉・土坑	15~17	7~10
6	6号竪穴住居跡	ⅡB9b	方形?		0.90	-	柱穴	17	10・11
7	7号竪穴住居跡	ⅢB2f・2g・3f	楕円形	東西軸2.18	0.20	-	貼り床	24	11
8	8号竪穴住居跡	ⅢB3h・3i	方形	北東~ 南西軸4.34	0.39	-	貼り床	24	12
9	9号竪穴住居跡	ⅡB9c・9d	方形	北東軸2.1	0.23	-	貼り床	13	13
10	10号竪穴住居跡	ⅢB1f・2f、ⅢB1g・2g	円形	2.71×(2.55)	0.18	-	貼り床	26	14
11	1号住居状遺構	ⅢB4i・5i	方形	4.16×2.84	0.25	-	-	26	15
12	2号住居状遺構	ⅢB4h・4i・5h	方形	北東軸4.12	0.15	-	-	26	16

( ) は推定値

第3表 陥し穴状遺構・土坑一覧(1)

No.	遺構名	位置	平面形	開口部(m)	底部(m)	深さ(m)	長軸(主軸)	図版	写真
1	1号陥し穴	ⅢA9g・9h	溝状	3.58×0.50	3.75×0.19	0.76	N-63° - E	29	17
2	2号陥し穴	ⅢB9a・9b	溝状	4.02×0.42	4.36×0.09	0.64	N-62° - E	29	17
3	3号陥し穴	ⅢB9b・9c	溝状	2.88×0.42	2.78×0.04	0.48	N-75° - E	29	17
4	4号陥し穴	ⅢA7j・8j、ⅢB7a	溝状	3.60×0.20	3.85×0.04	0.70	N-15° - E	29	17
5	5号陥し穴	ⅢB6c・6d、ⅢB7c・7d	溝状	3.70×0.60	4.09×0.22	0.57	N-14° - E	30	18
6	6号陥し穴	ⅢB7e・7f・8e・8f	溝状	4.46×1.10	4.54×0.18	0.97	N-39° - W	30	18
7	7号陥し穴	ⅢB2c・2d・3c	溝状	3.45×0.46	3.38×0.10	1.17	N-45° - E	30	18
8	8号陥し穴	ⅢB4f	溝状	1.90×0.54	1.7×0.14	0.67	N-44° - E	31	18
9	9号陥し穴	ⅢB3g・3h	溝状	4.16×0.54	3.98×0.04	0.71	N-83° - E	31	19
10	10号陥し穴	ⅢB3g・3h	溝状	4.40×0.40	4.20×0.09	0.65	N-65° - E	31	19
11	11号陥し穴	ⅢB3i・4i	溝状	3.12×0.58	2.96×0.14	0.66	N-35° - E	31	19
12	12号陥し穴	ⅡB9d・10d・10e	溝状	3.34×0.46	3.15×0.21	0.58	N-25° - W	32	19
13	13号陥し穴	ⅡB10d・ⅢB1d	溝状	(3.16)×0.31	3.51×0.14	0.28	N-10° - W	32	20
14	14号陥し穴	ⅡB10f・ⅢB1e・1f	溝状	3.9×0.58	3.80×0.19	1.00	N-38° - E	32	20
15	15号陥し穴	ⅡB7c・7d	溝状	2.8×0.34	2.65×0.12	0.62	N-22° - E	32	20
16	16号陥し穴	ⅡB8e	溝状	3.7×0.48	3.12×0.09	0.95	N-60° - E	33	20
17	17号陥し穴	ⅢB8f・9f	溝状	3.94×0.46	3.96×0.10	0.86	N-26° - E	33	21
18	18号陥し穴	ⅡB9e・9f・10e	溝状	2.78×0.34	2.66×0.10	0.73	N-60° - E	33	21
19	19号陥し穴	ⅡB10e・10f	溝状	3.58×0.28	3.36×0.08	0.72	N-37° - E	33	21
20	20号陥し穴	ⅢB1g・2f・2g	溝状	3.98×0.36	4.30×0.09	0.85	N-60° - E	34	21
21	21号陥し穴	ⅡB1h	溝状	3.39×0.36	3.44×0.24	0.82	N-43° - E	34	22
22	22号陥し穴	ⅡB10f、ⅢB1f	溝状	3.16×0.32	2.29×0.16	0.82	N-19° - E	34	22
23	23号陥し穴	ⅢB8f・9f	溝状	1.69×0.84	1.64×0.24	0.75	N-33° - W	34	22
24	24号陥し穴	ⅡB9f・9g	溝状	2.52×0.50	2.46×0.08	1.26	N-50° - E	35	22
25	25号陥し穴	ⅡB5b・6b	溝状	3.46×0.64	3.66×0.09	0.99	N-12° - E	35	23
26	26号陥し穴	ⅡB6c	溝状	3.4×0.70	3.32×0.06	0.94	N-20° - E	35	23
27	27号陥し穴	ⅢB1i・2i	溝状	2.84×0.40	2.70×0.15	0.86	N-48° - E	36	23
28	28号陥し穴	ⅢB1i・1j・2i	溝状	2.18×0.56	2.58×0.18	0.96	N-28° - E	36	23
29	29号陥し穴	ⅡB4b・5b・5c	溝状	3.39×(0.9)	3.44×0.10	1.34	N-58° - W	36	24
30	30号陥し穴	ⅡB3b・4b	溝状	2.8×0.40	2.66×0.12	0.84	N-17° - E	37	24



第4表 陥し穴状遺構・土坑一覧(2)

No.	遺構名	位置	平面形	開口部(m)	底部(m)	深さ(m)	長軸(主軸)	図版	写真
31	31号陥し穴	ⅡB3c・4c	溝状	3.64×0.24	3.56×0.06	0.90	N-16° - E	37	24
32	32号陥し穴	ⅡB6g	溝状	2.90×0.39	2.68×0.09	0.74	N-21° - E	37	24
33	33号陥し穴	ⅡB7h・8h	溝状	3.16×0.41	3.00×0.30	0.98	N-27° - E	37	25
34	34号陥し穴	ⅡB5f・5g	溝状	3.98×0.52	3.71×0.10	0.88	N-2° - E	38	25
35	35号陥し穴	ⅡB2c・3c	溝状	3.18×0.48	3.16×0.20	0.93	N-6° - E	38	25
36	36号陥し穴	ⅡB2c・3c	溝状	2.79×0.24	2.51×0.06	0.85	N-37° - W	38	25
37	37号陥し穴	ⅡB2d・3d	溝状	4.42×0.66	4.24×0.28	0.60	N-7° - E	38	26
38	38号陥し穴	ⅡB3d・3e・4d・4e	溝状	3.18×0.75	3.32×0.16	1.16	N-9° - W	39	26
39	39号陥し穴	ⅡB2d	溝状	2.9×0.28	2.62×0.08	1.14	N-46° - W	39	26
40	40号陥し穴	ⅢB3h・3i	溝状	(3.1)×0.28	2.76×0.10	0.29	N-39° - E	39	26
41	41号陥し穴	ⅡB1b・ⅡB1c	溝状	3.28×0.20	3.14×0.10	0.92	N-32° - E	39	27
42	42号陥し穴	I B10c	溝状	3.72×0.20	3.52×0.08	0.59	N-10° - E	40	27
43	43号陥し穴	I B10c・10d、ⅡB1c	溝状	3.01×0.19	2.92×0.08	0.56	N-16° - E	40	27
44	44号陥し穴	I B10d・10e、ⅡB1d	溝状	短軸0.18	短軸0.11	0.67	N-21° - E	40	27
45	45号陥し穴	I B10d、ⅡB1d	溝状	3.51×0.56	3.36×0.34	0.92	N-18° - E	40	28
46	46号陥し穴	ⅡB4g	溝状	3.54×0.72	3.26×0.34	1.00	N-5° - W	41	28
47	47号陥し穴	ⅡC5a・6a・6b	溝状	2.06×0.34	2.24×0.06	1.00	N-55° - W	41	28
48	48号陥し穴	ⅡC10b、ⅢC1b	溝状	4.28×0.32	4.08×0.11	0.45	N-1° - E	41	28
49	49号陥し穴	ⅡC10c・10d	溝状	3.06×0.26	2.74×0.10	0.72	N-47° - E	41	29
50	50号陥し穴	I B10e・10f、ⅡB1f	溝状	3.58×0.62	3.34×0.10	1.08	N-8° - W	42	29
51	51号陥し穴	I B10f、ⅡB1f	溝状	2.96×0.50	2.74×0.09	0.81	N-14° - E	42	29
52	52号陥し穴	I B10g、ⅡB1g	溝状	3.86×0.38	3.48×0.24	0.71	N-19° - W	42	29
53	53号陥し穴	I B10h	溝状	2.71×0.14	2.68×0.09	0.31	N-14° - W	42	30
54	54号陥し穴	I B9f	溝状	3.20×0.19	3.11×0.06	0.64	N-27° - E	43	30
55	55号陥し穴	I B9g・9h	溝状	3.84×0.16	3.54×0.11	0.24	N-43° - W	43	30
56	56号陥し穴	I B5e・6e	溝状	短軸0.14	短軸0.10	0.68	N-15° - W	43	30
57	57号陥し穴	I B5f・5g・6f・6g	溝状	4.07×0.56	4.00×0.11	0.92	N-26° - E	43	31
58	58号陥し穴	I B7f・6g・7g	溝状	4.07×0.50	4.08×0.16	0.96	N-21° - E	44	31
59	59号陥し穴	ⅡB2g・3g	溝状	(3.5)×0.50	(3.4)×0.26	0.28	N-11° - E	44	31
60	60号陥し穴	ⅡB3h	溝状	3.06×0.18	3.21×0.08	0.93	N-7° - E	44	31
61	61号陥し穴	I B9j・10j	溝状	3.34×0.16	3.24×0.06	0.24	N-9° - E	44	32
62	62号陥し穴	I C9a・10a	溝状	3.84×0.26	3.54×0.14	0.80	N-0° - E	45	32
63	63号陥し穴	I C9a・I C9b・10a・10b	溝状	3.0×0.06	3.09×0.04	0.53	N-27° - W	45	32
64	64号陥し穴	I B7j・8j	溝状	3.16×0.36	3.30×0.11	0.71	N-27° - E	45	32
65	65号陥し穴	I C8a	溝状	1.78×0.4	1.66×0.14	0.45	N-16° - E	45	33
66	66号陥し穴	I C5b・6b	溝状	3.46×0.48	3.90×0.14	1.13	N-3° - W	46	33
67	67号陥し穴	ⅡC2g・3g	溝状	3.22×0.34	2.92×0.14	0.45	N-18° - E	46	33
68	68号陥し穴	ⅡC8c	溝状	短軸0.20	短軸0.09	0.29	N-0° - E	46	33
69	69号陥し穴	ⅡC7e・8e	溝状	短軸0.20	短軸0.06	0.58	N-0° - E	46	34
70	70号陥し穴	ⅡC7e・8e	溝状	短軸0.20	短軸0.06	0.69	N-3° - W	46	34
71	71号陥し穴	ⅢB2f・2g・3f	溝状	3.70×0.30	3.74×0.06	0.64	N-58° - E	46	34
72	1号土坑	ⅡB5c・5d	円形	1.24×1.20	0.91×0.91	0.31	-	49	36
73	2号土坑	ⅢB5e・5f	円形	(1.11)×1.05	0.88×(0.86)	0.38	-	49	36
74	3号土坑	ⅢB5f・6f	円形	1.62×1.60	1.49×1.46	0.28	-	49	36

( )は推定値

第5表 土器観察表(1)

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁部	文様	内面	色調	繊維	備考	分類	図版	写真
1	1号竪穴住居跡	床面	深鉢	胴		多段結節回転文L	ミガキ	橙色	微量	内面すす付着	II群1b類	10	42
2	1号竪穴住居跡	床面	深鉢	胴		結束羽状縄文第2種RL・LR	ナデ	橙色	少量	内面・外面すす付着・径2mm以下の小礫を含む	II群6類	10	42
3	1号竪穴住居跡	床面	深鉢	口~胴	平縁	結節回転文L・単節斜縄文RL or 附加条	ナデ	黄橙~橙色	中量	径2mm以下の小礫を含む	II群4類	10	42
4	1号竪穴住居跡	床面	深鉢	口	平縁	結節回転文R・単節斜縄文?	ナデ	橙色	中量		II群4類	10	42
5	1号竪穴住居跡	床面	深鉢	口	平縁	口端刻目・多段結節回転文R	ミガキ	橙色	微量	径1.5mm以下の小礫を含む	II群1b類	10	42
6	1号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口	平縁	単軸絡条体?	ナデ	橙色	多量		II群9類	10	42
7	1号竪穴住居跡	床面	深鉢	口	平縁	単軸絡条体第1類L?	ナデ	黄橙~橙色	中量	金雲母含む	II群9類	10	42
8	1号竪穴住居跡	埋土	鉢	口	平縁	無文・ミガキ調整	ナデ	橙色	少量	内面ナデ	II群10類	10	42
12	2号竪穴住居跡	埋土下位	深鉢	口~胴	山形	口縁部突起4単位?・隆帯に刻目(貼付)多段結節回転文	ナデ	橙色	無し	隆帯貼り付け・摩滅が著しい	II群3類	11	42
13	2号竪穴住居跡	埋土上位	深鉢	口~胴	山形	口縁部頂部突起4単位?(2個一対が2単位)・結束羽状縄文RL・LR	ナデ	橙色	少量	径1~4mmの小礫・摩滅が著しい	II群6類	11	42
14	2号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口~胴	平縁	口端刻目・口縁部隆帯刻目(つまみ出し)・多段結節回転文・羽状縄文LRL・RLR	ナデ	橙色	無し	径1mm以下の小礫を含む・摩滅が著しい。18と同一個体か?	II群3類	11	42
15	2号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口~胴	平縁	口縁部に補修孔?(貫通していない)単節斜縄文RL	ナデ	橙色	少量	径1mm以下の小礫を含む	II群8類	11	43
16	2号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口~胴	平縁	口縁部隆帯刻目(貼付?)S字状連鎖沈文・単節斜縄文LRもしくは複節斜縄文LRL	ナデ	にぶい褐色	少量	径2mm以下の小礫を含む	II群2類	11	43
17	2号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口	平縁	補修孔・単節斜縄文RL?(不明瞭)	ナデ	明褐色	中量		II群8類	11	43
18	2号竪穴住居跡	埋土	深鉢	底		複節斜縄文LRL・無文部ナデ	ナデ	橙色	少量	内面明赤褐色・径2mm以下の小礫を含む。14と同一個体か?	II群11類	11	43
19	2号竪穴住居跡	埋土	深鉢	胴		単軸絡条体第5類L?(不明瞭)	ナデ	にぶい橙色	少量	20と同一個体?	II群9類	11	43
20	2号竪穴住居跡	埋土	深鉢	胴		単軸絡条体第5類L?(不明瞭)	ナデ	にぶい褐色	少量	19と同一個体?	II群9類	11	43
21	2号竪穴住居跡	埋土下位	深鉢	底		尖底・無文部ナデ	ナデ?	にぶい褐色	多量	径2mm以下の小礫を含む	I群3類	11	43
30	3号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口	平縁?	口唇部刺突・隆帯刺突(つまみ出し)・組紐 or 附加条	ナデ	にぶい褐色	少量	径2mm以下の小礫を含む	II群3類	14	44
31	3号竪穴住居跡	埋土下位	深鉢	口	平縁	結節回転文R・単節斜縄文LR?	ナデ	にぶい褐色	多量	雲母含む	II群4類	14	44
32	3号竪穴住居跡	床面	深鉢	口	平縁	単節斜縄文RL?	ナデ	にぶい褐色	中量		II群8類	14	44
33	3号竪穴住居跡	床面	深鉢	胴		多段結節回転文L・単節斜縄文RL?	ナデ?	にぶい褐色	少量		II群1a類	14	44
34	3号竪穴住居跡	床面	深鉢	底		単節斜縄文RL?(不明瞭)・無文部ナデ	ナデ?	にぶい褐色	中量		II群11類	14	44
43	4号竪穴住居跡	埋土下位	深鉢	口	平縁	結節回転文L・単節斜縄文RL	ナデ	にぶい褐色	少量	径4mm以下の小礫を含む	II群4類	18	44
44	4号竪穴住居跡	埋土	深鉢	胴		多段結節回転文R・結束羽状縄文RL・LR	ナデ?	黒褐色	無し	一次過熱による色調・雲母・径1mm以下の小礫を含む	II群1a類	18	44
45	4号竪穴住居跡	埋土	深鉢	底		無文部ナデ調整	ナデ	黄褐色	無し		II群11類	18	44
46	4号竪穴住居跡	埋土	深鉢	胴		単軸絡条体第1類L	ナデ	橙色	多量	金雲母含む	II群9類	18	44
48	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口	平縁	多段結節回転文R・単節斜縄文LR・無文部が光沢	ナデ	にぶい褐色	少量	径0.5mm以下の小礫を含む	II群1a類	18	44
49	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口	平縁	多段結節回転文L	ナデ	灰褐色	無し	径1mm以下の小礫を含む	II群1b類	18	44
50	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口	平縁	多段結節回転文L?	ナデ	橙色	微量		II群1a類	18	44
51	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	頸~胴		多段結節回転文L・結束羽状縄文RL・LR	ナデ	明褐色	微量	金雲母・径3mm以下の小礫を含む	II群1a類	18	44

第6表 土器観察表(2)

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁部	文様	内面	色調	繊維	備考	分類	図版	写真
52	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口~胴	平縁	多段結節回転文R・単節斜縄文RL	ナデ	にぶい橙色	少量	径1mm以下の小礫を含む	II群1b類	18	44
53	5号竪穴住居跡	埋土中位	深鉢	口~頸	平縁	S字状連鎖沈文	ナデ	明褐色	無し	径0.5mm以下の小礫を含む	II群2類	18	44
54	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	胴		S字状連鎖沈文	ナデ	明褐色	少量	雲母含む	II群2類	18	44
55	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口~頸	山形	隆帯刻目(つまみ出し)・羽状縄文RLR・LRL	ナデ	明褐色	少量	径3mm以下の小礫を含む・雲母含む	II群3類	18	44
56	5号竪穴住居跡	埋土中位	深鉢	口~頸	平縁	口縁部結節回転文(不明瞭)・単節斜縄文RL	ナデ	にぶい褐色	多量	雲母含む	II群4類	18	45
57	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口	平縁	結節回転文L・0段多条or単節斜縄文	ナデ	にぶい褐色	中量		II群4類	18	45
58	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口	平縁	口縁部結節回転文?・単節斜縄文RL?	ナデ	黒褐色	多量	一次過熱による色調	II群4類	18	45
59	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口~胴	平縁	結節回転文・単軸絡条体第1類L	ナデ	橙色	中量	摩滅が著しい・径6mm以下の小礫を含む	II群4類	18	45
60	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口	平縁	結束羽状縄文第1種(不明瞭)	ナデ	にぶい橙色	少量	外面すす付着・径1mm以下の小礫を含む	II群6類	19	45
61	5号竪穴住居跡	床面	深鉢	胴		結束羽状縄文RL・LR	ナデ	にぶい橙色	少量		II群6類	19	45
62	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	胴下半		単節斜縄文RL・羽状縄文?	ナデ	橙色	少量	雲母含む	II群6類	19	45
63	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口~胴	山形	口唇部刻目・2個一対の突起・口縁部無文部ナデ調整・組紐	ナデ	にぶい褐色	微量	径1mm以下の小礫を含む	II群7類	19	45
64	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	胴		結束羽状縄文RL・LR	ナデ	にぶい褐色	中量	一部すす付着・径4mm以下の小礫を含む	II群6類	19	45
65	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口~頸	平縁	口唇部刻目・無文部ナデ調整・組紐	ナデ	にぶい褐色	微量	径1mm以下の小礫を含む	II群7類	19	45
66	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口~頸	平縁	口縁部無文帯(ナデ調整)・口唇部ミガキ・組紐	ナデ	にぶい褐色	無し	雲母・径1mm以下の小礫を含む	II群7類	19	45
67	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口~頸	平縁	単節斜縄文(不明瞭)・or附加条	ナデ	明褐色	中量	径4mm以下の小礫を含む・摩滅が著しい	II群8類?	19	45
68	5号竪穴住居跡	埋土中位	深鉢	口	平縁	単節斜縄文(不明瞭)	ナデ	黒褐色	中量	色調は一次加熱の部分で記載	II群8類	19	45
69	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	胴		単節斜縄文RL?・結節回転文L	ナデ	にぶい褐色	中量		II群8類	19	45
70	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口	平縁	結節回転文or単節斜縄文(ナデ調整が縄文を截る)	ナデ	灰褐色	中量		II群8類?	19	45
71	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	胴		複節斜縄文LRL・結束?	ナデ	浅黄褐色	少量	雲母含む	II群8類	19	45
72	5号竪穴住居跡	埋土中位	深鉢	胴		結節回転文L・単節斜縄文RL	ナデ	にぶい褐色	中量		II群8類	19	45
73	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口	平縁	単節斜縄文RL・附加条?	ナデ	にぶい褐色	中量	径6mm以下の小礫を含む	II群8類?	19	46
74	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口	波状	単軸絡条体第1類L	ナデ	灰褐色	中量		II群9類	20	46
75	5号竪穴住居跡	埋土中位	深鉢	胴		単軸絡条体第5類R	ナデ→ミガキ	にぶい褐色	少量	雲母含む	II群9類	20	46
76	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口	平縁	合燃	ナデ	にぶい褐色	中量		II群10類	20	46
77	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	底		単節斜縄文(不明瞭)・無文部ナデ	ナデ	橙色	微量		II群11類	20	46
78	5号竪穴住居跡	床面	深鉢	胴		単軸絡条体第1類(不明瞭)・補修孔	ナデ	にぶい褐色	少量		II群9類	20	46
79	5号竪穴住居跡	埋土中位	深鉢	胴		押型文	ナデ	浅黄褐色	無し		I類	20	46
80	5号竪穴住居跡	埋土中位	深鉢	胴		単軸絡条体第1類R	ミガキ?	にぶい褐色	少量		II群9類	20	46
81	5号竪穴住居跡	埋土	深鉢	胴		単軸絡条体第1類L	ナデ	浅黄褐色	多量	金雲母含む	II群9類	20	46
82	5号住居跡土坑	埋土	深鉢	口	平縁	単節斜縄文(不明瞭)・結節回転文R	ナデ	橙色	多量	雲母含む・摩滅が著しい	II群8類	20	46
83	5号住居跡土坑	埋土	深鉢	口	小波状	口唇部刻目・単軸絡条体第1類R	ナデ	にぶい褐色	中量	径1mm以下の小礫を含む	II群9類	20	46
108	6号竪穴住居跡PP1	埋土	深鉢	胴		単節斜縄文or0段多条	ナデ	にぶい褐色	少量		II群8類	23	49
109	7号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口	平縁	無文部ナデ調整	ナデ	にぶい褐色	少量		II群10類	23	49

第7表 土器観察表(3)

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁部	文様	内面	色調	繊維	備考	分類	図版	写真
110	7号竪穴住居跡	埋土	深鉢	胴		複節斜縄文LRL	ナデ	浅黄橙色	少量		II群8類	23	49
112	8号竪穴住居跡	埋土中位	深鉢	胴		S字状連鎖沈文	ナデ	明褐色	少量	雲母含む	II群2類	23	49
113	8号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口~頸	波状	S字状連鎖沈文・無文部ナデ調整	ナデ	にぶい褐色	少量	金雲母含む・径3mm以下の小礫を含む	II群2類	23	49
114	8号竪穴住居跡	埋土中位	深鉢	胴		単軸絡条体(不明瞭)	ナデ	橙色	多量	摩滅が著しい	II群9類	23	49
115	8号竪穴住居跡	埋土中位	深鉢	口~頸	波状	単軸絡条体第1類L	ナデ	明褐色	多量		II群9類	23	49
116	8号竪穴住居跡	埋土中位	深鉢	胴		単軸絡条体第1類	ナデ	橙色	少量		II群9類	23	49
117	8号竪穴住居跡	埋土中位	深鉢	口	平縁	単節斜縄文(不明瞭)・ナデ調整が縄文を載る	ナデ	黒褐色	中量		II群8類	23	49
118	8号竪穴住居跡	埋土中位	深鉢	口	平縁	単節斜縄文(不明瞭)・補修孔	ナデ	にぶい褐色	中量	径2mm以下の小礫を含む	II群8類	23	49
122	9号竪穴住居跡	埋土	深鉢	胴		単軸絡条体第1類(不明瞭)	ナデ	にぶい橙色	少量		II群9類	27	51
123	9号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口	平縁	口縁部隆帯刻目(貼付)・結節回転文L	ナデ	橙色	無し	径1.5mm以下の小礫を含む	II群3類	27	51
124	9号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口~頸	平縁	結節回転文L・単節斜縄文(不明瞭)	ナデ	にぶい褐色	少量	雲母・径2mm以下の小礫を含む	II群4類	27	51
125	9号竪穴住居跡	埋土	深鉢	底		単節斜縄文LR・無文部ナデ調整	ナデ	にぶい橙色	微量		II群11類	27	51
128	10号竪穴住居跡	埋土	深鉢	口	平縁	結節回転文L・単節斜縄文RL	ナデ	橙色	微量		II群4類	27	51
129	1号住居状遺構	埋土	深鉢	胴		0段多条	ナデ	褐色	少量	径3mm以下の小礫を含む・摩滅が著しい	II群8類	27	51
130	2号住居状遺構	埋土	深鉢	胴		複節斜縄文LRL	ナデ	明褐色	少量		II群8類	27	51
132	5号陥し穴	埋土	深鉢	口	平縁	結束羽状縄文・0段多条・附加条	ミガキ	橙色	少量	径1mm以下の小礫を含む	II群6類	47	51
133	5号陥し穴	埋土	深鉢	胴		格子状沈線文	ミガキ	にぶい褐色	微量		I群1類	47	51
135	6号陥し穴	埋土	深鉢	口	平縁	単節斜縄文RL・附加条?・合捺?	ナデ	にぶい褐色	多量		II群8類?	47	52
136	6号陥し穴	埋土	深鉢	口	平縁	結節回転文R	ミガキ	にぶい褐色	多量		II群4類	47	52
138	8号陥し穴	埋土	深鉢	口	平縁	隆帯に刻目(隆帯つまみ出し)・多段結節回転文L	ナデ	にぶい褐色	少量	径2mm以下の小礫を含む・雲母含む	II群3類	47	52
139	10号陥し穴	埋土	深鉢	口	平縁	口唇部刻目・平行沈線・単節斜縄文RL	ミガキ	明褐色	少量	径1mm以下の小礫を含む	I群	47	52
142	35号陥し穴	埋土	深鉢	口	平縁	単節斜縄文RL	ナデ	橙色	中量	雲母含む	II群8類	47	52
143	71号陥し穴	埋土	深鉢	口	平縁	単節斜縄文RL	ナデ	にぶい褐色	少量	径1mm以下の小礫を含む	II群8類	47	52
144	1号土坑	埋土	深鉢	胴		結束羽状縄文RLR・LRL	ナデ	にぶい褐色	少量	雲母含む	II群6類	47	52
146	2号土坑	埋土	深鉢	胴		0段多条or単節斜縄文	ナデ	にぶい褐色	中量	雲母含む	II群8類	47	52
147	ⅢB1jグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	山形	隆帯に刺突・単節斜縄文LR	ナデ+ミガキ	浅黄橙色	少量	径1mm以下の小礫を含む・雲母含む	II群3類	47	52
148	ⅢB8fグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	瓜形状刺突文・格子状沈線	ナデ	黒色	無し		I群1類	52	53
149	ⅢA6~8i・5~8jグリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		平行沈線文・格子状沈線文	ナデ	黒褐色	無し		I群1類	52	53
150	ⅢA6~8i・5~8jグリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		平行沈線文・格子状沈線文	ナデ	黒褐色	無し		I群1類	52	53
151	ⅡB6gグリッド	Ⅲ層	深鉢	口~胴	平縁	口唇部刻目・瓜形状刺突文	ミガキ	にぶい褐色	微量		I群1類	52	53
152	ⅢB6dグリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		瓜形状刺突文・条痕	ミガキ	にぶい褐色	無し		I群1類	52	53
153	ⅢB6dグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	口唇部刻目・条痕	ナデ	浅黄色	少量含む?		I群1類	52	53
154	ⅢB4dグリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		条痕・ミガキ調整	ナデ	浅黄色	中量		I群1類	52	53

第8表 土器観察表(4)

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁部	文様	内面	色調	繊維	備考	分類	図版	写真
155	ⅢB 6h グリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		条痕文・ミガキ調整	ミガキ	浅黄橙色	無し		I群1類	52	53
156	ⅢA 6~8i・5~8j グリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		単軸絡条体第1類R	ナデ	浅黄色	少量	雲母含む	I群1類	52	53
157	ⅡB 6g グリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		条痕		にぶい橙色	少量		I群1類	52	53
158	ⅢA 6~8i・5~8j グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	平行沈線文・貝殻腹縁文	ナデ	にぶい橙色	微量?		I群2類	52	53
159	ⅢA 6~8i・5~8j グリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		貝殻腹縁文	ミガキ	にぶい褐色	微量?		I群2類	52	53
160	東端トレンチ	Ⅲ層	深鉢	胴		貝殻腹縁文	ナデ	にぶい橙色	無し		I群2類	52	53
161	ⅡB 6g グリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		条痕		浅黄橙色	無し		I群2類	52	53
162	ⅢB 7g グリッド	Ⅲ層	深鉢	口		口唇部刻目・ミガキ調整	ミガキ	灰褐色	無し		I群2類	52	53
163	ⅢA 6~8i・5~8j グリッド	Ⅲ層	深鉢	胴下半		ミガキ調整	ナデ	にぶい橙色	中量	径3mm以下の小礫を含む	I群3類	52	53
164	ⅢB 2j グリッド	Ⅲ層	深鉢	底		単節斜縄文LR?	ナデ	橙色	中量?	胎土が縄文早期の土器と酷似	I群3類	52	53
165	ⅢB 4b・4c・5b・5c グリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		沈線	ナデ	にぶい橙色	少量	雲母含む	I群3類	52	53
166	ⅢA 4j~6j グリッド	Ⅲ層	深鉢	口~頸	平縁	多段結節回転文R	ナデ	明褐色	微量	雲母含む・径1mm以下の小礫を含む・183と同一個体	II群1a類	52	53
167	ⅢA 4j~6j グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	多段結節回転文L	ナデ	明褐色	微量	雲母含む・径1mm以下の小礫を含む・181と同一個体	II群1a類	52	53
168	ⅢB 8d グリッド	Ⅲ層	深鉢	口~胴	平縁	多段結節回転文L	ナデ	橙色	少量	径2mm以下の小礫を含む・169と同一個体	II群1a類	52	53
169	ⅢB 8d グリッド	Ⅲ層	深鉢	口~胴	平縁	多段結節回転文L	ナデ	橙色	少量	径1mm以下の小礫を含む・168と同一個体	II群1a類	53	53
170	ⅢB 6h グリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		多段結節回転文L	ナデ	にぶい褐色	中量	雲母・径2mm以下の小礫を含む	II群1a類	53	53
171	ⅢA グリッド	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口~胴	山形	突起・多段結節回転文L・結束羽状縄文RL・LR	ナデ	橙色	少量		II群1b類	53	53
172	ⅢB 4b・4c・5b・5c グリッド	Ⅱ層	深鉢	胴		葺瓦状鬚糸文L	ナデ	橙色	少量		II群1b類	53	53
173	ⅢB 4b・4c・5b・5c グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	多段結節回転文L	ナデ	黒褐色	少量		II群1b類	53	54
174	ⅢB 3c グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	口唇部無文帯・多段結節回転文R	ナデ	にぶい褐色	少量		II群1b類	53	54
175	ⅢA 6~8i・5~8j グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	波状?	S字状連鎖沈文	ナデ	黒褐色	少量		II群2類	53	54
176	ⅢA 6~8i・5~8j グリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		S字状連鎖沈文	ナデ	にぶい褐色	少量	雲母含む	II群2類	53	54
177	ⅢA 6~8i・5~8j グリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		S字状連鎖沈文	ナデ	にぶい橙色	少量	雲母含む	II群2類	53	54
178	ⅢA 6~8i・5~8j グリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		S字状連鎖沈文	ナデ	橙色	少量		II群2類	53	54
179	ⅢB 3g グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	隆帯刻目(貼付)・複節斜縄文LR L	ナデ	にぶい褐色	少量	径1mm以下の小礫を含む	II群3類	53	54
180	ⅢB グリッド	Ⅳ層上面	深鉢	口	平縁	口端隆帯刻目(貼付)・縄文原体不明瞭	ナデ	橙色	少量		II群3類	53	54
181	ⅢB グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	隆帯刻目・隆帯つまみ出し	ナデ+ミガキ	にぶい褐色	少量		II群3類	53	54

第9表 土器観察表(5)

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁部	文様	内面	色調	繊維	備考	分類	図版	写真
182	ⅢB5eグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	山形	口唇部刻目・隆帯刻目(貼付)	ナデ	橙色	無し		Ⅱ群3類	53	54
183	ⅢB3cグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	口唇部刻目・隆帯刻目(貼付)・多段結節回転文(不明瞭)	ナデ	橙色	少量	径3mm以下の小礫を含む・金雲母含む	Ⅱ群3類	53	54
184	ⅢB4b・4c・5b・5cグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	口端刻目・隆帯刻目・多段結節回転文?	ナデ	にぶい橙色	少量		Ⅱ群3類	53	54
185	ⅢB8dグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	隆帯刻目・組紐?	ナデ	黒褐色	無し		Ⅱ群3類	53	54
186	ⅢB8dグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	山形	口唇部突起・隆帯に刻目・多段結節回転文L	ナデ	にぶい橙色	微量	雲母含む・隆帯貼付	Ⅱ群3類	53	54
187	ⅢA6~8i・5~8jグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	結節回転文R・単節斜縄文LR	ナデ	にぶい橙色	中量		Ⅱ群4類	54	54
188	ⅢA4j~6jグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	結節回転文R?・単節斜縄文LR	ナデ	にぶい褐色	中量		Ⅱ群4類	54	54
189	ⅢA6~8i・5~8jグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	結節回転文(不明瞭)・単節斜縄文(不明瞭)	ナデ	にぶい褐色	中量		Ⅱ群4類	54	54
190	ⅢA6~8i・5~8jグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	結節回転文・単節斜縄文(不明瞭)	ナデ	にぶい褐色	多量		Ⅱ群4類	54	54
191	ⅢB8cグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	結節回転文?・単節斜縄文RL?(ナデ調整が縄文を載る)	ナデ	にぶい褐色	多量	雲母含む・径3mm以下の小礫を含む	Ⅱ群4類	54	54
192	ⅢB4b・4c・5b・5cグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	結節回転文R・単節斜縄文LR(ナデ調整が縄文を載る)	ナデ	にぶい褐色	少量		Ⅱ群4類	54	54
193	ⅢB5dグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	結節回転文R?	ナデ	にぶい褐色	中量		Ⅱ群4類	54	54
194	ⅢA6~8i・5~8jグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	口端無文部・結節回転文R・単節斜縄文RL	ミガキ	橙色	無し	雲母含む	Ⅱ群4類	54	54
195	ⅢB2jグリッド	Ⅲ層	深鉢	口~胴	平縁	附加条・RL縄文	ナデ	橙色	多量	径1mm以下の小礫を含む	Ⅱ群5類	54	54
196	ⅡB4dグリッド	Ⅲ層	深鉢	口~胴		附加条・RL斜縄文	ナデ	褐色	中量	雲母・径4mm以下の小礫を含む	Ⅱ群5類	54	54
197	ⅢB4f・5f・4g・5gグリッド	Ⅱ層	深鉢	口~胴	平縁	結束羽状縄文第2種L	ナデ	橙色	少量		Ⅱ群6類	54	54
198	ⅢB4b・4c・5b・5cグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	羽状縄文(不明瞭)	ナデ	にぶい褐色	少量		Ⅱ群6類	54	54
199	ⅢA6~8i・5~8jグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	結束羽状縄文RL・LR・0段多条・附加条	ミガキ	にぶい褐色	少量	雲母含む	Ⅱ群6類	54	54
200	ⅢB4b・4c・5b・5cグリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		複節斜縄文LRL・RLR	ナデ	明褐色	少量		Ⅱ群6類	54	54
201	ⅢA6~8i・5~8jグリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		結束羽状縄文RL・LR	ナデ	浅黄色	少量		Ⅱ群6類	54	54
202	ⅢB3cグリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		結束羽状縄文RLR・LRL	ナデ	にぶい褐色	中量	雲母・径3mm以下の小礫を含む	Ⅱ群6類	54	54
203	ⅢA6~8i・5~8jグリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		結束羽状縄文複節LRL・RLR	ナデ	橙色	少量		Ⅱ群6類	54	55
204	ⅢB5cグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	口縁部無文・組紐	ナデ	黒褐色	少量	径4mm以下の小礫を含む	Ⅱ群7類	55	55
205	ⅢB4bグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁?	組紐	ナデ	黄橙~橙色	少量	径3mm以下の小礫を含む	Ⅱ群7類	55	55
206	ⅢA6~8i・5~8jグリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		組紐	ナデ	明褐色	少量	径3mm以下の小礫を含む	Ⅱ群7類	55	55
207	ⅢB4dグリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		組紐	ナデ	にぶい褐色	少量	径3mm以下の小礫を含む	Ⅱ群7類	55	55
208A	ⅢA6~8i・5~8jグリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	口唇部刻目・補修孔・単節斜縄文	ナデ	にぶい褐色	微量	雲母含む	Ⅱ群8類	55	55

第10表 土器観察表(6)

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁部	文様	内面	色調	繊維	備考	分類	図版	写真
208B	Ⅲ A 6~8i・5~8j グリッド	Ⅲ層	深鉢	口~胴	平縁	口唇部刻目・単節斜縄文 R L	ミガキ	にぶい橙色	微量	径4mm以下の小礫を含む	Ⅱ群8類	55	55
208C	Ⅲ A 6~8i・5~8j グリッド	Ⅲ層	深鉢	胴		口唇部に刻目・補修孔・単節斜縄文 R L	ミガキ	にぶい橙色	微量	径4mm以下の小礫を含む	Ⅱ群8類	55	55
209	Ⅲ B 4d グリッド	Ⅲ層	深鉢	口~胴	平縁	単節斜縄文 R L	ナデ	にぶい橙色	多量		Ⅱ群8類	55	55
210	Ⅲ B 8c グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	小波状	単節斜縄文 R L	ナデ	にぶい橙色	多量	雲母含む・摩滅が著しい	Ⅱ群8類	55	55
211	Ⅲ B 4d グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	単節斜縄文 L R	ナデ	にぶい褐色	中量		Ⅱ群8類	55	55
212	Ⅲ B 3g グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	単節斜縄文 L R ?	ナデ	にぶい褐色	多量		Ⅱ群8類?	55	55
213	Ⅲ A 6~8i・5~8j グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	口端無文・単節斜縄文 R L	ナデ	橙色	少量	雲母含む	Ⅱ群8類	55	55
214	Ⅲ B 6f グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	小波状	単節斜縄文 R L (ナデ調整が縄文を截る)	ナデ	にぶい橙色	多量	雲母含む	Ⅱ群8類	55	55
215	Ⅲ B 6d グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	単節斜縄文 R L	ナデ	にぶい褐色	多量		Ⅱ群8類	55	55
216	Ⅲ A グリッド	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口	平縁	口端無文・単節斜縄文 R L	ナデ	にぶい褐色	少量		Ⅱ群8類?	55	55
217	Ⅲ B 6d グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	単軸絡糸体第1類R	ナデ	にぶい褐色	多量		Ⅱ群9類	55	55
218	Ⅲ B 4c グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	単軸絡糸体第1類R	ナデ	にぶい褐色	多量		Ⅱ群9類	55	55
219	Ⅲ A 6~8i・5~8j グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	単軸絡糸体第1類R	ナデ	にぶい褐色	多量		Ⅱ群9類	55	55
220	Ⅲ B 6g グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	単軸絡糸体第1類L	ナデ	褐色	中量		Ⅱ群9類	55	55
221	Ⅱ B 6g グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	斜沈線文	ナデ	明褐色	少量		Ⅱ群10類	56	55
222	Ⅲ A 6~8i・5~8j グリッド	Ⅲ層	深鉢	口	平縁	無文・ナデ調整	ナデ	にぶい褐色	少量	雲母含む	Ⅱ群10類	56	55
223	Ⅲ B 8c グリッド	Ⅲ層	深鉢	底		単節斜縄文 L R ? ・底面単節斜縄文 L R	ナデ	にぶい褐色	中量		Ⅱ群11類	56	56
224	Ⅲ A 6~8i・5~8j グリッド	Ⅲ層	深鉢	底		単節斜縄文?無文帯(ナデ調整)・底面櫛引痕	ナデ	明褐色	少量		Ⅱ群11類	56	56
225	Ⅲ B 4f・5f・4g・5g グリッド	Ⅲ層	深鉢	胴~底		結節回転文?・複節斜縄文 R L R ? 胴部下半無文帯	ナデ	明褐色	少量	雲母含む 同一個体	Ⅱ群11類	56	56
226	Ⅲ A 6~8i・5~8j グリッド	Ⅲ層	浅鉢	口	平縁	変形工字文	沈線・ナデ	浅黄色	無し	弥生土器	Ⅲ群	56	56

第11表 石器観察表(1)

掲載 番号	出土地点	層位	器種	石材	時代	産地	計測値(cm)				分類	備考	図版	写真
							長さ	幅	厚さ	重量(g)				
9	1号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	18.8	16.1	3.1	0.8	2類		10	42
10	1号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	23.3	19.9	3.5	1.5	2類		10	42
11	1号竪穴住居跡	床面	石匙	頁岩	中生代	北上山地	58.0	40.0	12.8	14.7	1類1b		10	42
22	2号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	25.8	19.1	3.8	1.6	2類		12	43
23	2号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	22.1	16.2	5.2	1.4	2類		12	43
24	2号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	71.2	47.2	18.7	55.2			12	43
25	2号竪穴住居跡	埋土	石匙	頁岩	中生代	北上山地	34.4	35.5	7.8	5.6	2類		12	43
26	2号竪穴住居跡	床面	搔・削器	頁岩	中生代	北上山地	45.7	35.8	12.9	16.3			12	43
27	2号竪穴住居跡	埋土	搔・削器	頁岩	中生代	北上山地	52.5	45.4	12.4	21.6			12	43
28	2号竪穴住居跡	埋土	敲石	デイスait	中生代白亜紀	北上山地	66.2	63.0	53.0	299.4			12	43
29	2号竪穴住居跡	埋土	磨石	砂岩	中生代	北上山地	98.6	86.4	71.4	763.3			12	43
35	3号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	24.1	18.7	6.3	2.0	1類		14	44
36	3号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	23.8	18.6	5.7	2.1	2類		14	44
37	3号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	25.1	16.3	3.4	0.9	2類		14	44
38	3号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	19.6	16.8	2.2	0.7	2類		14	44
39	3号竪穴住居跡	床面	石匙	頁岩	中生代	北上山地	52.8	26.4	7.6	6.0	1類1b		14	44
40	3号竪穴住居跡	埋土	石匙	頁岩	中生代	北上山地	87.9	33.0	12.8	26.3	1類1b		14	44
41	3号竪穴住居跡	埋土	搔・削器	頁岩	中生代	北上山地	20.2	33.4	7.6	3.7			14	44
42	3号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	28.7	23.3	7.2	3.9	2類		14	44
47	4号竪穴住居跡	埋土	搔・削器	頁岩	中生代	北上山地	65.5	35.5	11.8	16.7			18	44
84	5号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	30.9	21.8	5.1	2.0	1類		20	46
85	5号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	27.4	17.8	3.8	1.2	1類		20	46
86	5号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	25.1	17.6	4.1	1.3	1類		20	46
87	5号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	30.1	11.2	3.1	0.9	2類		20	46
88	5号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	17.9	15.4	3.5	0.7	2類		20	46
89	5号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	21.5	16.9	5.0	1.5	2類	未製品?	20	46
90	5号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	15.2	18.4	3.6	0.8	1類		20	46
91	5号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	21.6	18.8	2.9	0.9	2類		20	46
92	5号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	26.2	19.6	5.9	2.4	2類		20	46
93	5号竪穴住居跡	埋土	石匙	頁岩	中生代	北上山地	76.0	18.4	9.8	7.8	1類1b		20	46
94	5号竪穴住居跡	埋土	石匙	頁岩	中生代	北上山地	62.1	24.5	11.2	9.4	1類1b		20	46
95	5号竪穴住居跡	埋土	石匙	頁岩	中生代	北上山地	58.5	28.4	7.9	9.1	1類1b		20	46
96	5号竪穴住居跡	埋土	石匙	頁岩	中生代	北上山地	46.8	27.9	11.5	9.7	1類1b		20	46
97	5号竪穴住居跡	埋土	搔・削器	頁岩	中生代	北上山地	26.4	30.1	6.1	4.1			21	46
98	5号竪穴住居跡	埋土	石核	頁岩	中生代	北上山地	57.3	71.0	48.8	218.0			21	47
99	5号竪穴住居跡	床面	磨石	花崗閃緑岩	中生代白亜紀	北上山地	97.8	88.2	52.4	677.4			21	47
100	5号竪穴住居跡	床面	磨石	はんれい岩	中生代白亜紀	北上山地	116.2	47.2	23.0	201.4			21	47
101	5号竪穴住居跡	床面	磨石	石英斑岩	中生代白亜紀	北上山地	158.2	120	64.0	1764.3			21	47
102	5号竪穴住居跡	埋土	磨石	砂岩	中生代	北上山地	78.4	66.6	68.2	356.8			22	48
103	5号竪穴住居跡	埋土	磨石+敲石	砂岩	中生代	北上山地	95.8	82.8	47.0	522.6			22	48
104	5号竪穴住居跡	床面	敲石	礫岩	中生代	北上山地	115.4	89.8	54.4	841.9			22	48
105	5号竪穴住居跡	床面	凹石	砂岩	中生代	北上山地	113.4	63.8	37.4	389.1			22	48
106	5号竪穴住居跡	埋土	敲石	花崗閃緑岩	中生代白亜紀	北上山地	128.6	149.8	118.6	2214.8			23	49
107	5号竪穴住居跡	床面	磨石	砂岩	中生代	北上山地	168.6	62.8	50.8	740.6			23	49
111	7号竪穴住居跡	埋土	磨石	花崗斑岩	中生代白亜紀	北上山地	40.4	52.8	29.8	79.6			23	49



第12表 石器観察表(2)

掲載 番号	出土地点	層位	器種	石材	時代	産地	計測値(cm)				分類	備考	図版	写真
							長さ	幅	厚さ	重量(g)				
119	8号竪穴住居跡	埋土	石皿	砂岩	中生代白亜紀～ 新生代古第?	久慈層群・野 田層群	260.4	334.8	91.2	6500.0			25	50
120	8号竪穴住居跡	埋土	磨石	デイサイト	中生代白亜紀	原地山層	73.8	129.6	100	1067.8			27	51
121	8号竪穴住居跡	埋土	凹石	デイサイト	中生代白亜紀	北上山地	57	80.6	51.6	261.2			27	51
126	9号竪穴住居跡	埋土	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	18.6	18.1	3.6	1.1	1類	先端部欠損	27	51
127	9号竪穴住居跡	埋土	石鏃	珪質頁岩	中生代	北上山地	22.6	18.8	5.1	1.6	1類		27	51
131	2号住居状遺構	埋土	磨石	デイサイト	中生代白亜紀	原地山層	115.8	82.8	51.6	706.5			27	51
134	5号陥し穴状遺構	埋土	磨石	デイサイト	中生代白亜紀	原地山層	109.8	67	34.8	363.1			47	51
137	6号陥し穴状遺構	埋土	磨石	砂岩	中生代	北上山地	92	63.2	34.8	280.1			47	52
140	15号陥し穴状遺構	埋土	石匙	頁岩	中生代	北上山地	34.5	47.7	7	9.3	2類		47	52
141	26号陥し穴状遺構	埋土	磨石+敲石	砂岩	中生代	北上山地	121.4	76.6	58	637.7			47	52
145	1号土坑	埋土	搔・削器	頁岩	中生代	北上山地	58.8	13.9	6.4	6.6		ツマミ部欠 損?	47	52
227	ⅢB4f・5f・4g・ 5gグリッド	Ⅲ層	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	21.6	18.8	5.3	1.5	1類		56	56
228	ⅢB3gグリッド	Ⅲ層	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	24.7	18.9	3.9	1.6	1類		56	56
229	ⅢB3cグリッド	Ⅲ層	石鏃	凝灰岩	中生代白亜紀 原地山層	北上山地	21.4	17.4	4.6	1.3	1類		56	56
230	ⅢB6fグリッド	Ⅲ層	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	26	16.7	4.2	1.4	1類		56	56
231	ⅢA6～8i・5～8j グリッド	Ⅲ層	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	18.1	17.8	3.9	0.9	1類		56	56
232	ⅢB4b・4c・5b・ 5cグリッド	Ⅱ層	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	20.4	19.2	5.5	1.5	1類		56	56
233	ⅢB3gグリッド	Ⅲ層	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	25.6	15.9	4	1.2	2類		56	56
234	ⅢA6～8i・5～8j グリッド	Ⅲ層	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	30.6	14.2	5.1	2.0	2類		56	56
235	ⅢA6～8i・5～8j グリッド	Ⅲ層	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	20.8	17.1	4.4	1.1	2類		56	56
236	ⅢB4b・4c・5b・ 5cグリッド	Ⅲ層	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	21.1	16.6	4.8	1.3	2類		56	56
237	ⅢB6fグリッド	Ⅲ層	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	24.8	18.2	5.4	2.3	2類		56	56
238	ⅢB1dグリッド	Ⅲ層	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	24.9	16.5	3.6	1.4	2類		56	56
239	ⅢB4dグリッド	Ⅲ層	石匙	頁岩	中生代	北上山地	91.3	22.2	8.7	16.6	1類1a		56	56
240	ⅢB6fグリッド	Ⅲ層	石匙	頁岩	中生代	北上山地	55.5	17.8	6.4	5.1	1類1b		56	56
241	ⅢAグリッド	Ⅲ層	石匙	頁岩	中生代	北上山地	52.3	17.1	7.3	5.2	1類1b		56	56
242	ⅢA6～8i・5～8j グリッド	Ⅲ層	石匙	頁岩	中生代	北上山地	54.5	22.2	9.5	10.6	1類1b		56	56
243	ⅢA6～8i・5～8j グリッド	Ⅲ層	石匙	頁岩	中生代	北上山地	63.6	27.4	8.6	14.4	1類1b		57	56
244	ⅢB6fグリッド	Ⅲ層	石匙	頁岩	中生代	北上山地	42.9	19.8	4.8	2.7	1類1b		57	56
245	ⅢB5cグリッド	Ⅲ層	石匙	頁岩	中生代	北上山地	41.2	21.7	7.1	2.7	1類1b		57	56
246	ⅢB6fグリッド	Ⅲ層	石匙	頁岩	中生代	北上山地	34	18.8	6	2.9	1類1b		57	56
247	ⅢA6～8i・5～8j グリッド	Ⅲ層	石匙	珪質頁岩	中生代	北上山地	52.8	34.4	8.8	10.5	1類1b		57	57
248	ⅢB7cグリッド	Ⅲ層	石匙	頁岩	中生代	北上山地	54.1	26.8	6.9	6.6	1類1b		57	57
249	ⅢB1jグリッド	Ⅲ層	石匙	頁岩	中生代	北上山地	37.3	42.4	8.5	6.6	2類		57	57
250	ⅢB5eグリッド	Ⅲ層	石匙	頁岩	中生代	北上山地	51.6	45.2	10.2	13.2	2類		57	57
251	ⅢB4b・4c・5b・ 5cグリッド	Ⅲ層	搔・削器	頁岩	中生代	北上山地	62.7	16.6	9.4	6.9			57	57
252	ⅢA4j～6jグリッド	Ⅲ層	搔・削器	頁岩	中生代	北上山地	90.9	34.8	16.3	25.1			57	57
253	ⅢB6fグリッド	Ⅲ層	搔・削器	頁岩	中生代	北上山地	51.7	35.9	10.1	13.1			57	57
254	ⅢB1eグリッド	Ⅲ層	搔・削器	頁岩	中生代	北上山地	57.7	32.7	8.8	12.9			57	57
255	ⅢB2jグリッド	Ⅲ層	搔・削器	頁岩	中生代	北上山地	50.2	36.1	12.6	20.0			57	57

第13表 石器観察表 (3)

掲載 番号	出土地点	層位	器種	石材	時代	産地	計測値(cm)				分類	備考	図版	写真
							長さ	幅	厚さ	重量(g)				
256	ⅢA 6～8 i・5～8 j グリッド	Ⅲ層	尖頭器	頁岩	中生代	北上山地	91.7	33.7	15.9	38.2			58	57
257	ⅢA 6～8 i・5～8 j グリッド	Ⅲ層	打製石斧	デイサイト	中生代白亜紀	北上山地	78.5	44.9	15.7	59.9			58	57
258	ⅢB 4 d グリッド	Ⅲ層	磨製石斧	蛇紋岩	古生代オルドビス紀	早池峰山周辺	60.7	29	11.9	37.0			58	57
259	ⅢB 8 c グリッド	Ⅲ層	磨製石斧	蛇紋岩	古生代オルドビス紀	早池峰山周辺	71.2	32.9	10.6	43.3			58	58
260	ⅢB 6 f グリッド	Ⅲ層	磨製石斧	蛇紋岩	古生代オルドビス紀	早池峰山周辺	93.7	57	30.7	284.1			58	58
261	ⅢB 4 b グリッド	Ⅲ層	磨石	デイサイト	中生代白亜紀	北上山地	45.9	46.5	36.2	45.0			58	58
262	ⅢA 6～8 i・5～8 j グリッド	Ⅲ層	磨石	ホルンフェルス	中生代(変成は中生代白亜紀?)	北上山地	147.2	38	25.4	230.8			58	58
263	ⅢB 6 f グリッド	Ⅲ層	磨石+敲石	細粒花崗閃緑岩	中生代白亜紀	北上山地	192.6	68.8	44.6	746.0			58	58
264	ⅢA グリッド	Ⅲ層	磨石+敲石	砂岩	中生代	北上山地	127	49.8	36.2	292.3			58	58

## V 芦ヶ沢Ⅱ遺跡で検出された遺構と遺物

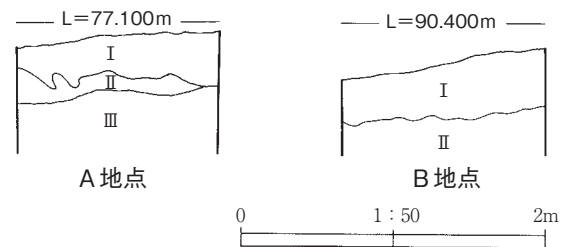
### 1 概 要

芦ヶ沢Ⅱ遺跡の調査は、試掘溝を地形に応じて20箇所程設定した。試掘の結果、調査区頂部ⅠA・ⅡAグリッドは削平により表土を剥ぐと地山という状態であった。ⅠB・ⅡB・ⅠC・ⅡC・ⅠD・ⅡDグリッドは造成による盛土が形成されていた。Ⅰ～Ⅱ層を重機によって除去した後、ジョレンを用いて検出を行ったが、縄文時代の遺構は検出されなかった。

芦ヶ沢Ⅱ遺跡の地山は芦ヶ沢Ⅰ遺跡とは異なる粘土層で形成されており、調査中の掘削作業は困難な状態であった。縄文時代にも各種施設等の掘削をためらわせるものがあったのかも知れない。

第59図は、ⅡA2g・ⅠB7eグリッドで観察された土層断面である。遺跡内には近現代における改変が認められ、斜面地ではⅡ～Ⅲ層の流失と削平が著しい。

- Ⅰ層：暗褐色シルト（10YR3/3）表土層  
層厚 24～40 cm 粘性弱 しまり密
- Ⅱ層：灰黄褐色粘土（10YR6/2）層厚は  
12～30 cm 粘性強 しまり密
- Ⅲ層：灰黄褐色粘土（10YR5/2）層厚は  
不明 粘性強 しまり密



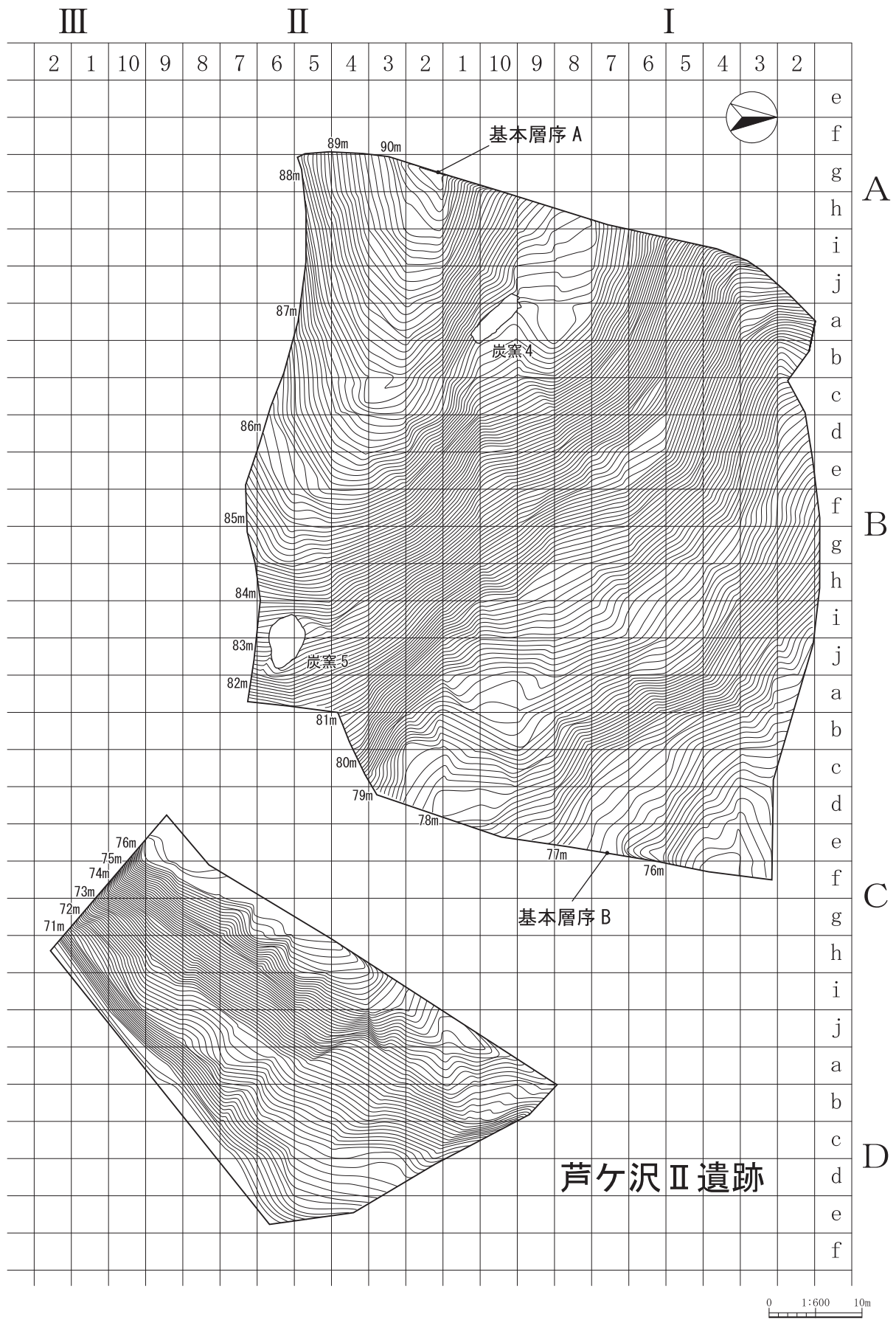
第59図 芦ヶ沢Ⅱ遺跡の基本層序

### 2 検 出 遺 構

ⅠB10aグリッド・ⅡB6iグリッドで炭窯2基が検出された。近現代の遺構であり、掲載は遺構配置図のみとした。

### 3 出 土 遺 物

径2cm未満の土器片1点・剥片1点が出土している。土器は小破片で摩滅が著しいことから、年代は不明である。図示できない状態であったことから不掲載とした。



第60図 芦ヶ沢Ⅱ遺跡遺構配置図

## VI 総 括

### 1 遺 構

#### (1) 豎 穴 住 居 跡

##### 時期

10棟の豎穴住居跡出土土器はその大部分が大木2式～白座式に比定される。なお、豎穴住居跡出土遺物の詳細については遺物の項で後述する。テフラとの関係では埋土にTo-Cuテフラを含むもの、To-Cuテフラより下位から検出されたものの両者がある。このことから、To-Cuテフラ降下以前に構築・使用された豎穴住居跡と考えられる。放射性炭素年代測定の結果は2号豎穴住居跡貼床、4号豎穴住居跡貼床、5号豎穴住居跡1号炉、2号炉の採取試料から6000～6200年前という数値が得られている(第Ⅶ章2)。

##### 規模・形状

5号豎穴住居跡を除くと長径3.6m以下であり、比較的小型の住居跡が主体となっている。5号豎穴住居跡は長軸13mに達するいわゆるロングハウスと捉えられる。

他の豎穴住居跡は、形状から方形基調のもの(1・2・3・6・8号豎穴住居跡)、卵状のもの(4号豎穴住居跡)、不整な円形状のもの(7・10号豎穴住居跡)に分類される。

##### 炉・柱穴

炉は5号豎穴住居跡で5基検出された。このうち、3基の炉は柱穴間に設けられたものである。焼成状態が良好な炉は2号・5号炉である。柱穴は小規模なものが床面中央部付近から南西側に配置される。周溝底面の柱穴についても同様である。

他の1・7～10号豎穴住居跡では柱穴は検出されなかった。ただし、1・2号柱穴状土坑は4・6号豎穴住居跡に近接することから、これらの豎穴住居跡に伴う可能性も考えられる。また4・6号豎穴住居跡に近接する8号焼土遺構についても、4号豎穴住居跡の屋外炉、あるいは6号豎穴住居跡の床面に伴う炉の可能性はある。

##### 床面

床面は1棟(6号豎穴住居跡)を除きすべてに貼床が施される。

##### 占地

1～4・6・9号豎穴住居跡が標高81.2～82.6m、5・7・8・10号が標高78.6～80.4mの範囲で東向き緩斜面に位置する。標高80.4～81.2m間には構築されていない。よって見かけ上、斜面上部下部の二つの住居跡群に分かれる状態である。

##### 重複関係

7号豎穴住居跡が5号豎穴住居跡周溝に截られ、10号豎穴住居跡が5号豎穴住居跡の5号炉下から検出された。また、9号豎穴住居跡は3号豎穴住居跡に截られる。新旧関係をまとめると次の通りである。

旧		新
7・10号豎穴住居跡	→	5号豎穴住居跡
9号豎穴住居跡	→	3号豎穴住居跡

### 岩手県内の縄文時代前期前葉の竪穴住居跡（第 61～64 図）

ここでは、岩手県で検出された縄文時代前期前葉の竪穴住居跡を本遺跡と比較・検討する。第 61 図～64 図は岩手県内における縄文時代前期前葉の竪穴住居跡を集成したものである。12 遺跡 91 棟を掲載した。抽出基準は報告書に「縄文時代前期前葉の遺構」・「縄文時代前期前半の遺構」と記載され、平面形がおよそ 50% 以上明らかになっているものである。「縄文時代前期」・「縄文時代前期前葉～中葉」という時代幅のあるものについては除外している。対象遺跡は、早坂平遺跡（久慈市・旧山形村）・野場 I 遺跡（田野畑村）・沢田 I 遺跡（山田町）・沢田 2 遺跡（釜石市）・小松 I 遺跡・小松 II 遺跡（住田町）・権現前遺跡（遠野市）・長者屋敷遺跡（八幡平市・旧松尾村）・上八木田 I 遺跡（盛岡市）・新田 II 遺跡（遠野市）・久保遺跡（大船渡市）・力持遺跡（普代村）である。上記した各遺跡における竪穴住居跡の特徴をそれぞれ概観する。

早坂平遺跡 形状は方形・不整な楕円形を呈する。規模は 6 号を除く 5 棟は長軸が 3 m 前後である。壁沿いに柱穴を持つものがある。

野場 I 遺跡 形状は方形・不整な楕円形を呈する。規模は長軸 8 m を越えるもの（住居跡 7）がある。テラス状の段を有す。

沢田 I 遺跡（第四次調査）形状は方形状を呈する。長軸 6 m を越えるものと 3 m 未満のものがある。壁沿いに柱穴を持つ。

沢田 I 遺跡（第五次調査）形状はロングハウスを呈する。規模は長軸約 7～9 m 程で、柱穴が壁沿いに配置され、周溝内にも柱穴を持つ。

沢田 2 遺跡 形状はロングハウス・方形・楕円形を呈する。ロングハウスの規模は長軸約 9.5 m（R A 07）と約 7 m（R A 04）のものがある。方形状・楕円形のは約 5 m 未満のものである。柱穴は壁沿い、あるいは壁面に持つものがある。R A 04 は壁沿いに小穴を持つ。

小松 I 遺跡 200・400 号竪穴住居跡は地床炉を伴うものである。400 号はいわゆるピッチリ縄文が施される土器が出土していることから、本遺跡の竪穴住居跡より古い時期と思われる。小松 I 遺跡の検出された竪穴住居跡は早期末葉～前期初頭の竪穴住居跡が大半を占める。その中で 407 号竪穴住居跡は早期末葉～前期初頭と報告され、形状は不整な円形、断面形は皿状を呈し竪穴住居跡中央付近が最深部となる。

小松 II 遺跡 形状はほぼ円形を呈する。規模は径約 5.2 × 5.0 m、壁沿いに小穴を持つ。

権現前遺跡 形状はテラス状の段を有す。規模は径約 5.5 × 4.6 m で壁面・壁沿いに柱穴を持つ。炉は地床炉である。

長者屋敷遺跡 形状は方形・不整な楕円形を呈する。規模は長軸約 4.2 m のもの（F IV - 5 住居跡）、2 m 未満のもの（H IV - 6 住居跡）がある。柱穴の配置に規則性が無い。壁沿いに柱穴を持つものがある。炉は地床炉で規則性があるもの（F IV - 5 号住居跡）、壁面に近接するもの（F III - 1 住居跡）がある。

上八木田 I 遺跡 形状は方形・楕円形を呈する。長軸は最長で約 3.7 m、最小で約 1.6 m と大小それぞれの竪穴住居跡が検出されている。柱穴を持たないものが大半である。柱穴を持つものは I X d 5 j 住居跡で、コーナー壁沿いと床面中央部に配置されている。大半の竪穴住居跡に地床炉が伴う。

新田 II 遺跡 形状はいわゆるロングハウスと小型の方形状である。規模は長軸が最大で約 11 m、小型のものは長軸約 1 m 前後である。ロングハウスはいずれも短軸中央部付近に炉を持つ。小型住居跡の形状は方形のものが大半を占める。炉と柱穴を伴うものは 1 棟、他は柱穴を持つものと持たないものがある。

## 1 遺構

**久保遺跡** 形状は楕円形を呈する。規模は径約 6.5 × 6.0 m、対になるように柱穴を持つ。

**大日向Ⅱ遺跡**（第2次・第5次調査）形状は方形・円形状を呈する。S A 68 住居跡は規模が径約 4.5 × 4.5 mほどで周溝を持ち壁沿いに柱穴を持つ。

**力持遺跡** 形状は方形を呈する。規模はB II 23 住居跡1号が長軸約 5.4 m、C II f 25 住居跡1号が約 4.2 m、B II 23 住居跡5号が約 3 mである。平面形的全容を知り得ないが、B II 23 住居跡1号・C II f 25 住居跡1号はロングハウスと思われる。柱穴は周溝内・壁沿いに持ち、他の柱穴は規則性が窺えない。

上記した竪穴住居跡の形状は方形・楕円形の他にロングハウス・テラス状（野場Ⅰ住居跡7・9、沢田2 R A 07、権現前1号竪穴住居跡）・張り出し部をもつものが含まれる。本遺跡と比較すると大日向Ⅱ遺跡S A 68 住居跡の張り出し部と1号竪穴住居跡の張り出し部が近似する。また、小松Ⅰ遺跡の早期末葉～前期初頭と位置づけられた407号竪穴住居跡は、床面中央付近が最深部となる特徴が4号竪穴住居跡と類似する。平面形・柱穴の配置についても総じて他遺跡例と類似することを指摘できることが分かった（壁沿い・対になる柱穴の配置など）。

### （2）住居状遺構

第Ⅳ章で記載したように住居状遺構として扱った2棟の遺構は形状が方形を呈し、竪穴住居跡に近接することから竪穴住居跡として扱うことも検討したが、床面がフラットではないこと、貼床が施されていないことから、竪穴住居跡と分離して考えた。出土遺物から縄文時代前期前葉と考えられる。5・7・8号竪穴住居跡と近接することから、竪穴住居跡に付属する施設の可能性も考えられる。

### （3）陥し穴状遺構

#### 時期

71基が検出された。To-Cu テフラ堆積層上位から掘り込まれるもの（20・21号陥し穴状遺構）や竪穴住居跡を截るもの（20・21・40・71号陥し穴状遺構）がある。出土遺物は、縄文時代早期・前期前葉の土器・石器が出土しているが、二次的な流入の可能性が高く、時期決定遺物とは考え難い。71基の陥し穴状遺構は竪穴住居跡との重複関係及びTo-Cu テフラを截ることから（巻頭カラー2参照）、To-Cu テフラ降下以降、縄文時代前期中葉以降のものであるが、年代の下限は不明である。

#### 形状と規模（第28・64～66図）

検出された71基の陥し穴状遺構の平面形は溝状である。4・9・12・63号陥し穴状遺構の4基は両端が広がるもので、中央部の幅が狭い（第64図）。

形状について田村（1987）が、陥し穴状遺構の平面形をA・B・Cに分類している（第65図）。この分類に基づくとA型1・2に当てはまる（4・9・12・63号陥し穴状遺構を除く）。本遺跡では、埋土に壁面崩落土を含む遺構が大半を占め、精査を完了した一ヶ月後には壁面は崩落し底面が10～20 cm程埋まっている状態のものもあった。原形がA1型であったものが、壁面崩落によってA2型になったと考えられる。原形をとどめていると考えられるのは底面で、上記分類中にあるA3型・B1型・B2型のような小穴を持つタイプは検出されなかった。

横断面形はV字・Y字・逆台形・U字型の4種に大別される。U字形・Y字形と表記したものの中には、埋土の大半が壁面崩落土であることから本来はV字形であったものを含むと考えられる。上面形規模の平均値は、長軸 3.24 m、短軸 0.44 m、深さ 0.66 mである。最大のもので長軸 4.46 m、短軸 1.6 m、深さ 1.26 m。最小のもので長軸 1.11 m、短軸 0.06 m、深さ 0.15 mである。

深さについては、13号・65号陥し穴状遺構は他の陥し穴状遺構と比較して極端に浅い。65号陥し穴状遺構の長軸は71基の中で最小である（第64図）。両者は共に底面が礫層となっている。第28図に示した占地のように礫層を避けて遺構を構築していることが窺えることから、13・65号陥し穴状遺構は遺構築時に礫層に到達した時点で遺構の構築を放棄した可能性が考えられる。

#### 長軸方向・占地

陥し穴状遺構の長軸方向は、N-0°～30°-E 33基、N-31°～60°-E 12基、N-61°～90°-W 8基、N-0°～30°-W 11基、N-31°～60°-W 7基である（第66図）。このうち最も多いN-0°～60°-Eの軸方向のものは沢跡を囲み、斜面上部から下部、あるいは等高線と平行に配置される（第28図）。

#### （4）焼土遺構

前述しているが、現地性焼土遺構として検出された遺構は1・7・8号焼土遺構である。その他は本来形成された地点から動いている焼土ブロックである。A区の焼土遺構と焼土ブロックは、To-Cu テフラ堆積層上面で検出されたことからTo-Cu テフラ降下以降、7・8号焼土遺構はⅢ層で検出されたことから、To-Cu テフラ降下以前と判断出来る。一方、これ以外の竪穴住居跡の埋土、陥し穴状遺構に截られる焼土遺構については、詳細な時期を判断することは出来なかった。

#### （5）テフラ

##### 十和田起源のテフラ

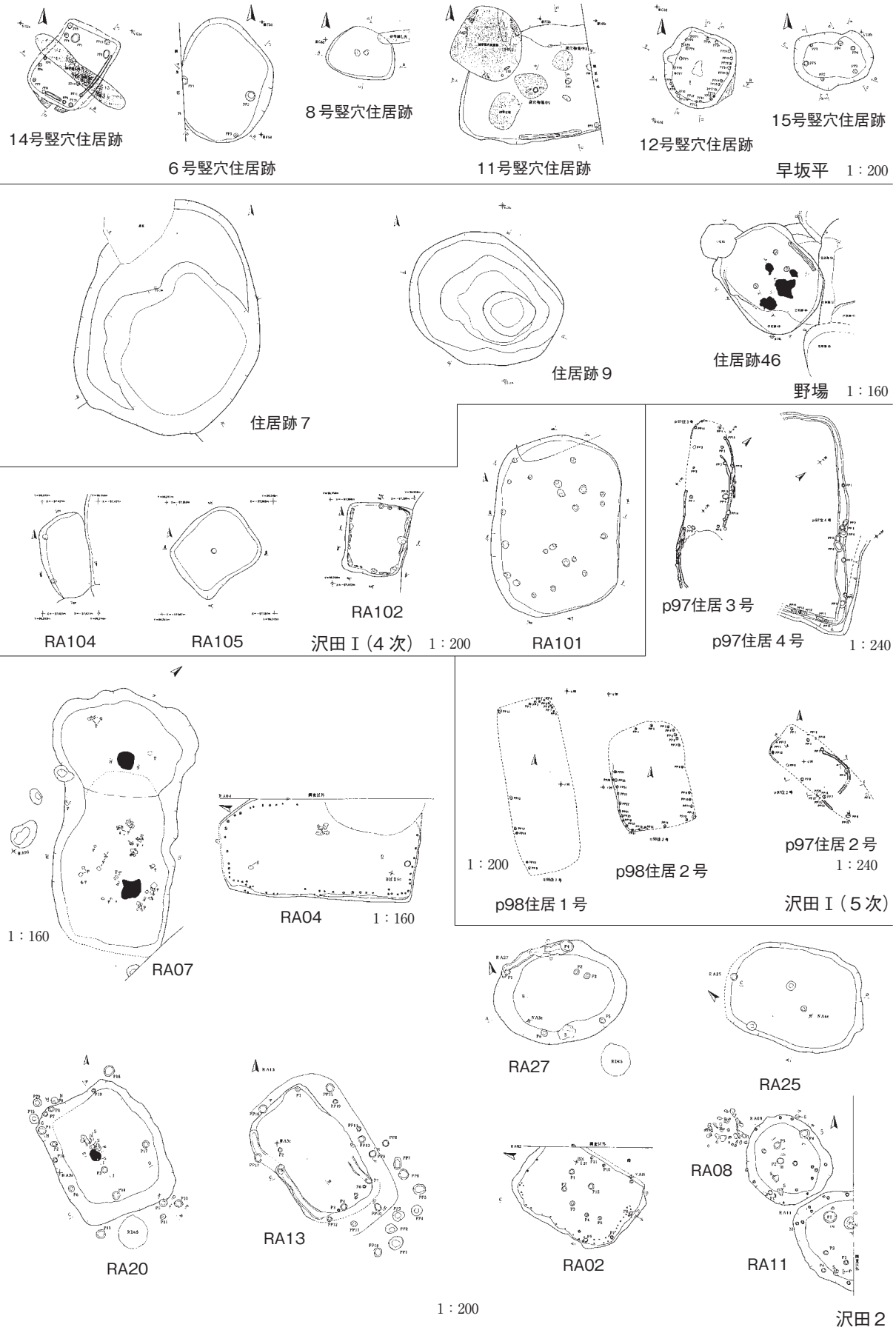
今回の調査で十和田八戸テフラと十和田中掬テフラが確認された。火山灰研究所に試料の分析を委託し、To-H、To-Cu と同定されたものである（第Ⅶ章1）。十和田八戸テフラは、基本層序B地点のⅤ層で、十和田中掬テフラは第7図A'地点、B地点のⅢ層、4・5・8号竪穴住居跡埋土で確認された。十和田起源のテフラは、県北内陸部二戸市周辺の遺跡のように調査区全面に形成されたものではなく、谷状地形の底面、竪穴住居跡埋土及び窪地で確認されたことから、雨水等に流され再堆積したものと思われる。中掬テフラは約6000前に降下したものと報告されており、放射性炭素14年代測定による竪穴住居跡内の炭化物年代と整合性のある結果となった（第Ⅶ章2）。

##### 中掬テフラ

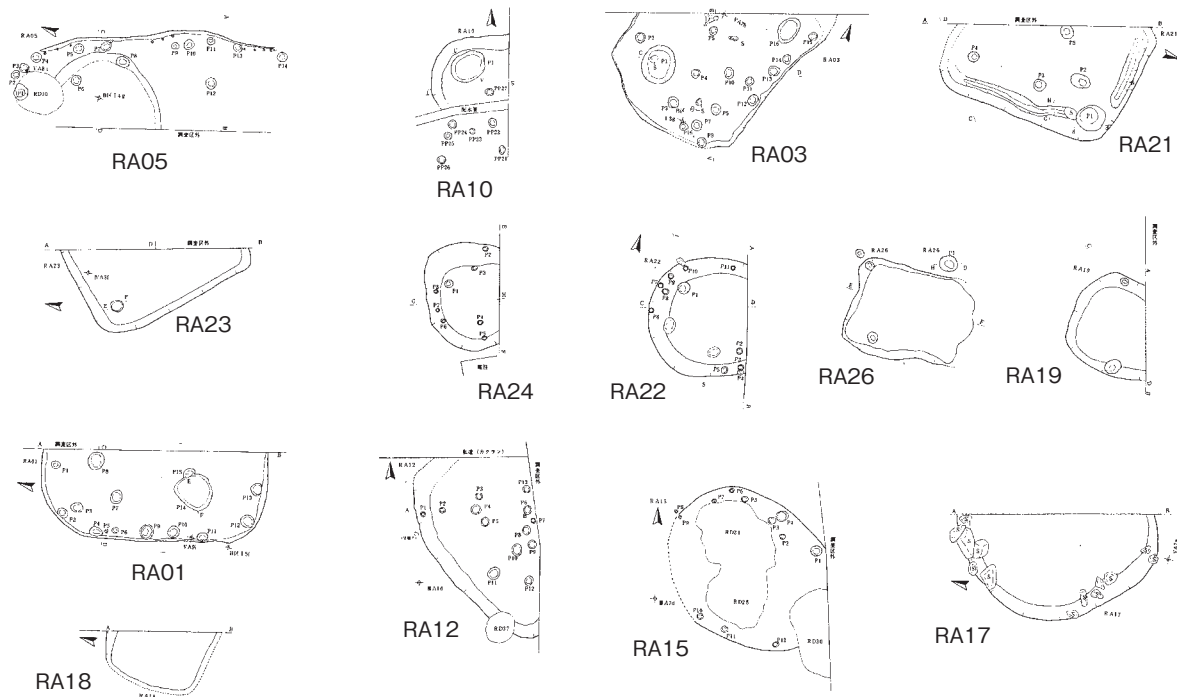
縄文時代前期前葉の土器の大半は中掬テフラより下位の層で出土した（第7図基本層序A'地点Ⅱ層中位に堆積）。他遺跡との中掬テフラと出土遺物の関係は「円筒下層a式は上位、大木2a式To-Cu下位、大木2b式はTo-Cu下位若しくは上下（To-Cuを挟む）、大木3式はTo-Cu上位」とするのが共通理解となっている（星・須原 2004）。本遺跡では大木2a式～白座式の土器がTo-Cu テフラより下位で出土したことから、他遺跡と同様の層序関係を確認することとなった。



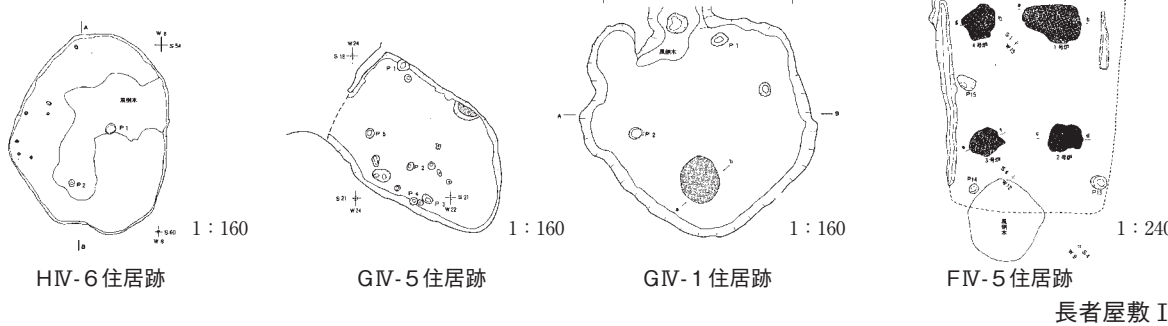
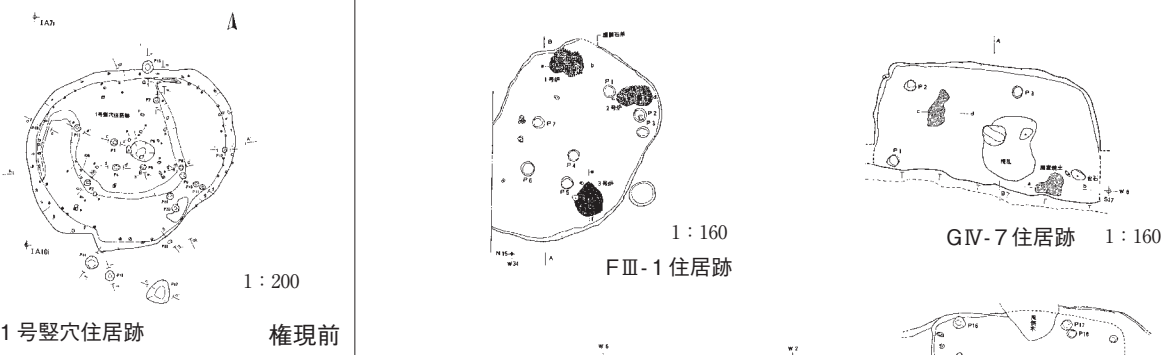
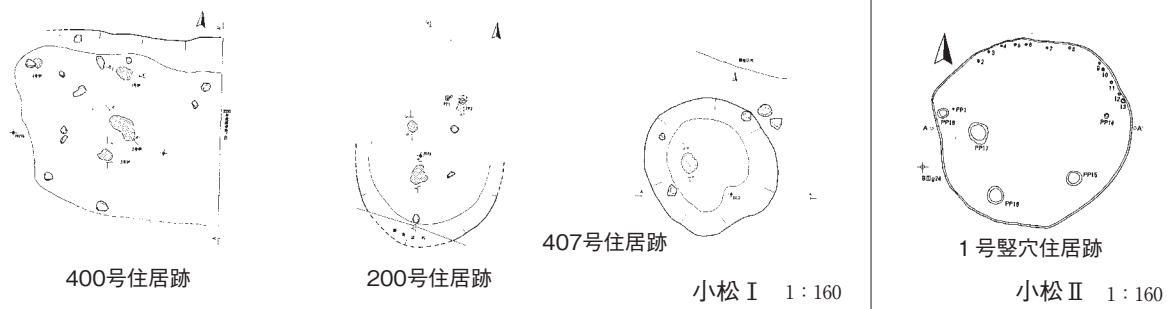
1 遺構



第61図 岩手県内の縄文時代前期前葉の竪穴住居跡 (1)

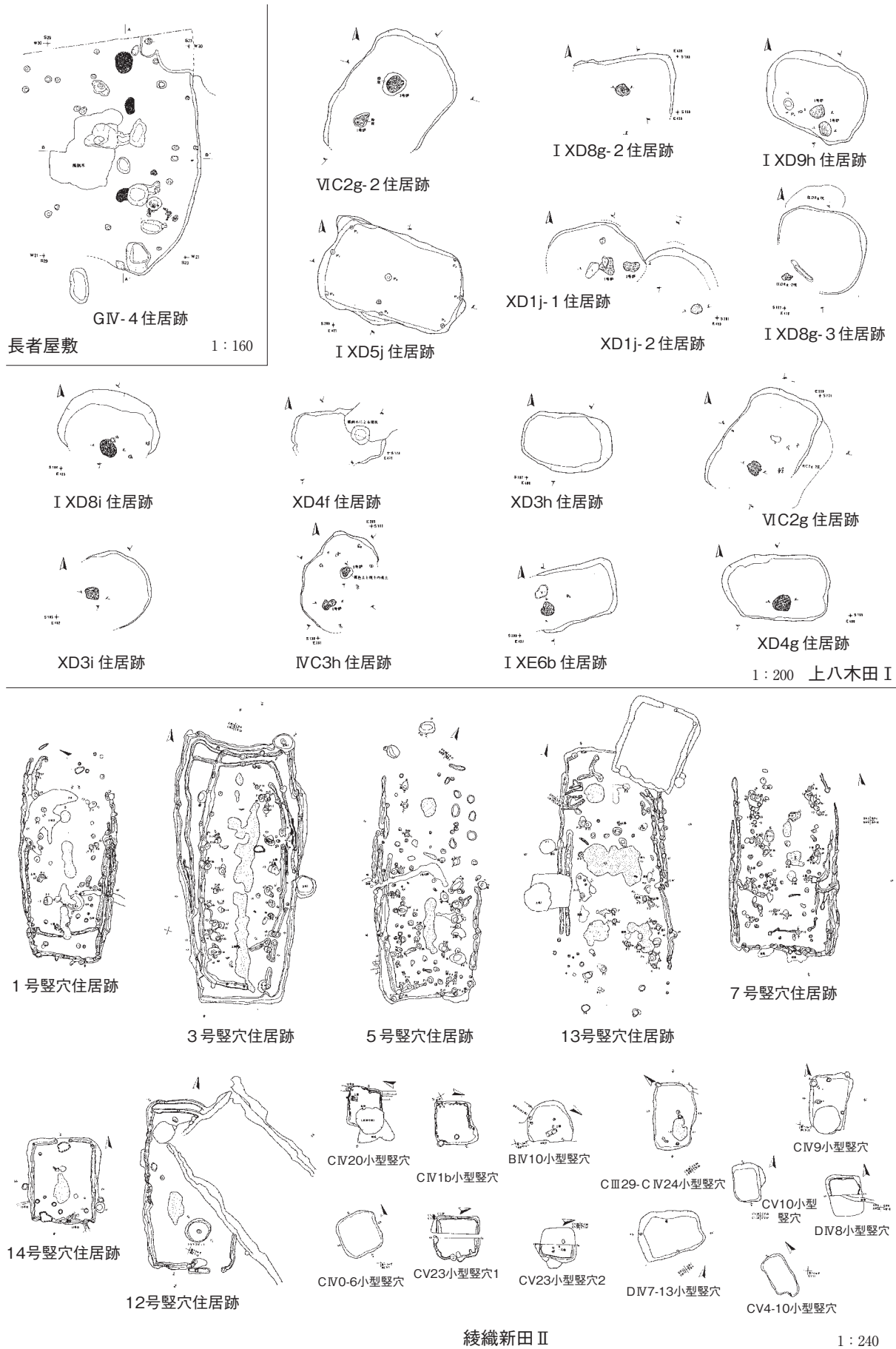


沢田2 1:200

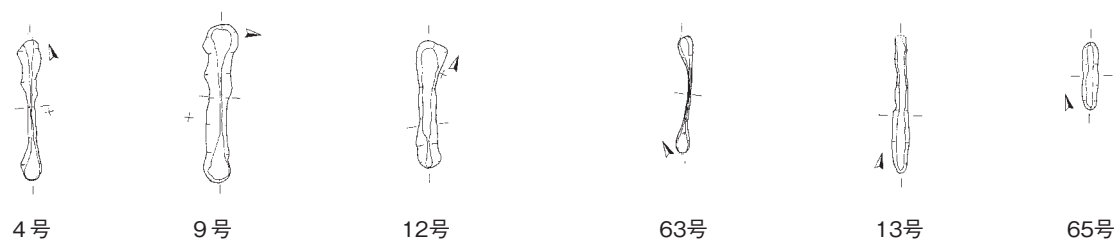
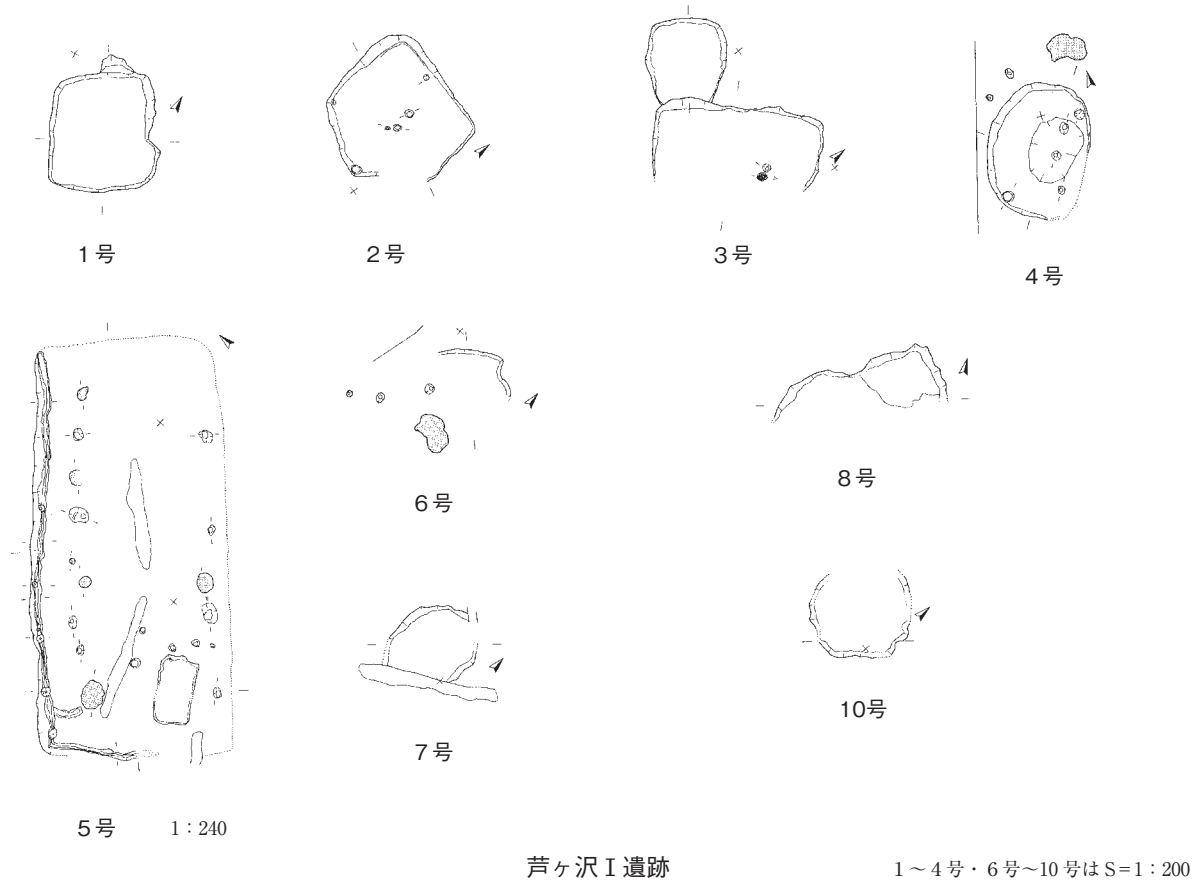
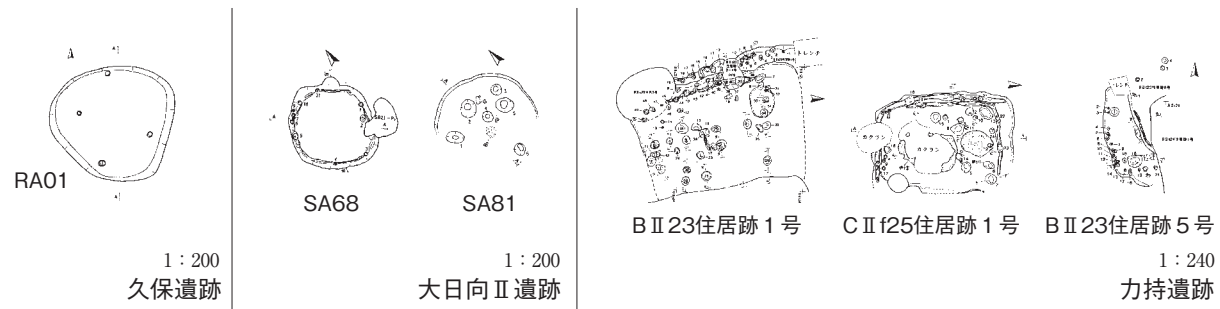


第62図 岩手県内の縄文時代前期前葉の竪穴住居跡 (2)

1 遺構

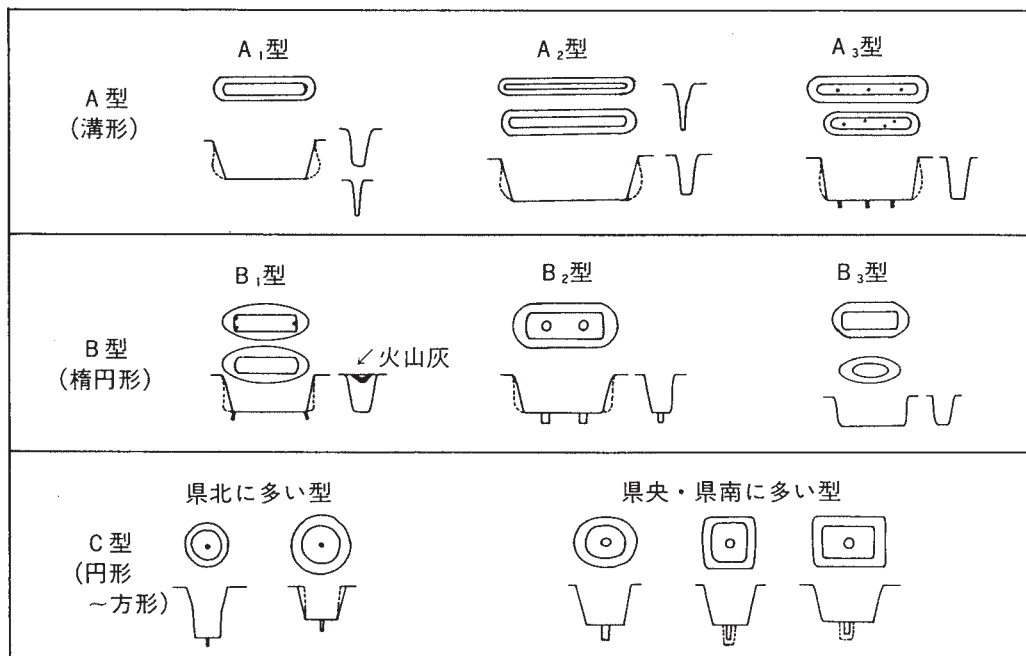


第63図 岩手県内の縄文時代前期前葉の竪穴住居跡 (3)



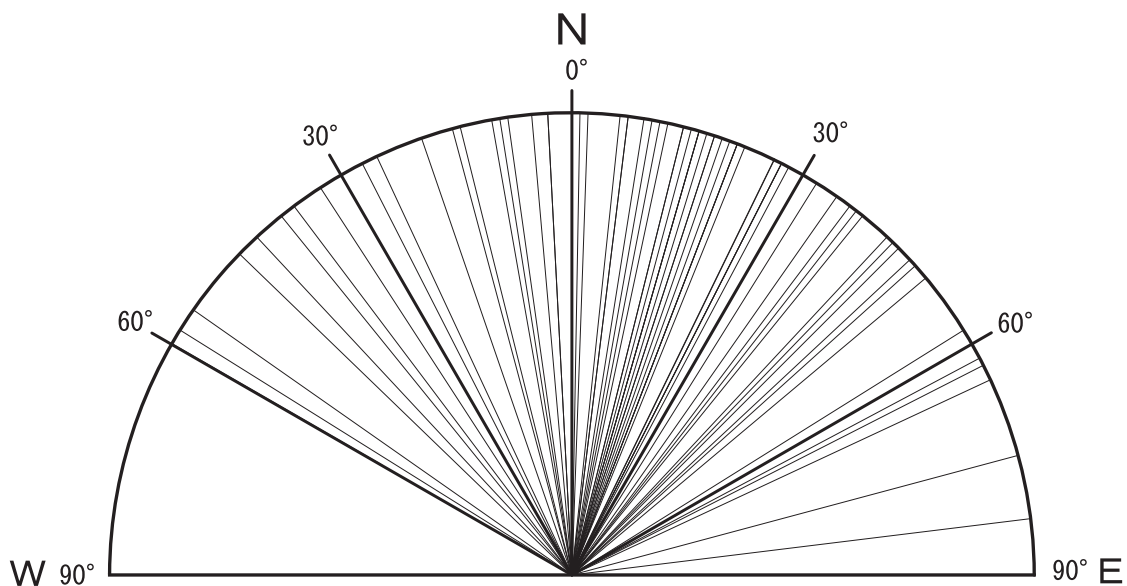
両端が広がる陥し穴状遺構 (8~63号)、13・16号の浅い陥し穴状遺構 S=1:200

第64図 岩手県内の縄文時代前期前葉の竪穴住居跡 (4)・陥し穴状遺構



(1987 田村)

第65図 陥し穴状遺構の形態分類 (模式図)



N- 0° ~ 30° -W 11 基  
 N-30° ~ 60° -W 7 基

N- 0° ~ 30° -E 33 基  
 N-30° ~ 60° -E 12 基  
 N-60° ~ 90° -E 8 基

第66図 陥し穴状遺構主軸グラフ

## 2 遺 物

### (1) 縄文時代早期の土器

#### 日計式の土器 (第 68 図)

5号竪穴住居跡から出土した芦ヶ沢 I 遺跡 (I) 79、8号陥し穴状遺構から出土した (I) 139 は、縄文時代早期前葉と報告されている大日向 II H IV 22 住居から出土した 1・2 の押型文と 3～5 の口唇部に刻目・平行沈線・縄文が施される土器と類似する。このことから、芦ヶ沢 I 遺跡 (I) 79・139 は日計式に比定される土器と考えられる。芦ヶ沢 I 遺跡 (I) 79 については日計式の前段階と思われる (領塚 1996)。

#### 久慈市内で出土した土器との比較 (第 68 図)

第 68 図に久慈市内の遺跡から出土した縄文時代早期の土器を集成した。本遺跡出土土器と比較する。大平遺跡 (A) は、芦ヶ沢 I 遺跡 (G) の日計式押型文の意匠を置換した菱形状の沈線文・爪形状刺突文が施されている。成谷遺跡 (B)・外屋敷 X IX 遺跡 (E) 16・17 は、爪形状刺突文が施される。成谷遺跡 (B) 60・芦ヶ沢 I 遺跡 (G) 153 は共に口唇部に刻目が施される。これらは、芦ヶ沢 I 遺跡 (G) 148～152 と類似性が認められ、刺突の特徴から白浜式相当の土器と捉えられる。南部浮石層上位から出土した外屋敷 X IX 遺跡 (E) 25 は斜位の爪形状刺突文直下に縄文が施される。(E) 25 のような斜位の爪形状刺突文と縄文が施される土器は出土していない。芦ヶ沢 I 遺跡 (H) は貝殻腹縁文と沈線文の意匠を持つ。また、芦ヶ沢 I 遺跡 (H) 159 は胴部中位が括れる。この特徴は物見台式に相当すると考えられる。久慈市二子貝塚 (C)・早坂平遺跡 (D) 等で類例がある。

### (2) 縄文時代前期前葉の土器

#### 竪穴住居跡出土遺物と時期

ここでは To-Cu 降下以前に構築・使用された 10 棟の竪穴住居跡出土土器を検討し、遺構の年代観を把握する。記載にあたり、大木 2 a 式、大木 2 b 式、白座式の特徴を以下のように整理し検討項目とする (星・茅野 2006 を参照した)。

#### 大木 2 a 式

器形：平底深鉢。底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がるものと胴部付近でやや膨らみをもつものがある。

口縁部形状：平縁・波状・4 単位あるいは 2 単位の波状口縁。

口唇部端部：端部の面取り顕著・端部断面は外側に肥厚し角張る。

頸部文様：結節回転文・沈線文。

胴部：非結束羽状縄文・斜縄文・単軸絡条体第 1 類・5 類。

胎土：繊維を多量に含んでいる。

#### 大木 2 b 式

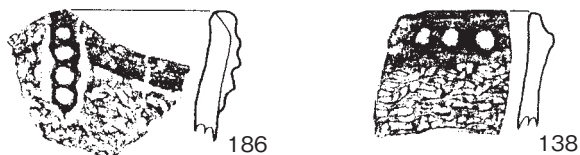
器形：胴部中位に膨らみを持ち、口縁部は弱く外反またはバケツ状・ラッパ状に開くものがある。

口縁部形状：平縁・波状・山形状突起。

口唇端部：やや丸み・角張る・端面はミガキ。

口縁部文様：狭い無文帯・結節回転文 (葺瓦状・S 字状連鎖沈文)・隆帯に刻目。

胴部文様：斜縄文LR・附加条・結節回転文（S字状連鎖沈文）・単軸絡条体第1類・5類。  
胎土：繊維を含むもの・含まないものがあり、含むものは非常に少ない。



1 S=1/6  
138・186 S=1/3

#### 白座式

器形：胴部中位～下位に膨らみを持つ・口縁部外反。

口縁部形状：波状口縁・突起・平縁

口唇端部：やや丸み・四角張る・ミガキ調整・

面取り・端部外面に刻目・隆帯貼付・刻目

口縁部文様：結節回転文（不整葺瓦状・S字状連鎖沈文）

胴部：斜縄文（LR・RL）・附加条・組紐

胎土：繊維を含むもの・含まないもの。含むものは非常に少ない。



第67図 多段結節回転文土器

#### 1号竪穴住居跡（第10図・67図、写真図版42）

床面出土の1はⅡ群1b類とした条と条に間隔がある多段結節回転文が施される土器である。繊維を微量に含み焼成状態が良好で内面にミガキ調整が施される。施文の特徴は大木2a式と捉えられるが、前述した胎土・焼成状態・繊維混入量を考えると大木2a～2b式と幅を持たせるべきかと考えられる。他の土器の文様は結束羽状縄文（2）、口端に刻目、多段結節回転文（5）、結節回転文・単軸絡条体（3・4・6・7）である。1・5（白座式）に着目して時期は大木2a式期～白座式期の遺構と考えられる。

#### 2号竪穴住居跡（第11図、写真図版42・43）

文様は山形口縁部（四単位）に沿うように刻目に隆帯を持ち胴部に多段結節回転文（12）、S字状連鎖沈文と隆帯に刻目（16）、口端・隆帯に刻目・胴部に結束羽状縄文（14）、四単位2個一対山形状口縁部（13）、単節斜縄文・単軸絡条体第5類（15・19・20）である。18の底部直上に無文部をもつものは14と同一個体である。12（大木2b式）・14（白座式）・16・19・20（大木2a式～2b式）に着目して、時期は大木2a式期～白座式期の遺構と考えられる。

#### 3号竪穴住居跡（第14図、写真図版44）

文様は口唇部・隆帯に刺突・胴部に組紐？（30）、地文に単節縄文、口縁部に結節回転文（31）、多段結節回転文（33）が施される。34は底部直上に無文部をもつ底部である。30（大木2b式～白座式）・31・34（大木2a式～2b式）に着目して、時期は大木2a式期～白座式期の遺構と考えられる。

#### 4号竪穴住居跡（第18図、写真図版44）

文様は2段の結節回転文（43）、結束羽状縄文と多段結節回転文（44）、単軸絡条体第1類（46）である。45は底部直上に無文部をもつ底部である。出土遺物が少量のため詳細な土器型式による時期の判断はできなかった。

#### 5号竪穴住居跡（第18～20図、写真図版44～46）

文様は多段結節回転文（48～52）、S字状連鎖沈文（53・54）、山形口縁・隆帯に刻目・結束羽状縄文（55）、口縁部・胴部に結節回転文・単軸絡条体第1類（59）、結束羽状縄文（51・55・60～

62・64)、組紐(63・65・66)、単節縄文、複節斜縄文、附加条、単軸絡条体、合撚(67～76・78・80・81)である。77の底部は底部直上の無文部をもつ。82・83は竪穴住居跡に伴うものと推定した土坑から出土した土器である。文様は間隔のある結節回転文(82)、口唇部に刻目・単軸絡条体(83)である。出土遺物が大木2 a式の多段結節回転文・大木2 b式のS字状連鎖沈文、大木2 b式～白座式相当の組紐・刻目が施される土器などで構成されていることから、時期は大木2 a式期～白座式期の遺構と考えられる。

#### 6号竪穴住居跡(第23図、写真図版49)

遺構に伴うものと判断したPP1から繊維混入量が中量の土器片1点(108)の出土である。詳細な土器型式による時期の判断はできなかった。

#### 7号竪穴住居跡(第23図、写真図版49)

文様は口縁部無文(109)、複節斜縄文(110)である。出土遺物が少量のため詳細な土器型式による時期の判断はできなかった。重複関係から5号竪穴住居跡より時間的に先行する縄文時代前期前葉の遺構である。

#### 8号竪穴住居跡(第23図、写真図版49)

文様は単軸絡条体(114～116)、単節縄文(117・118)、S字状連鎖沈文(112・113)である。単軸絡条体、S字状連鎖沈文が施される土器に着目して時期は大木2 a式期～大木2 b式期の遺構と考えられる。

#### 9号竪穴住居跡(第27図、写真図版51)

文様は隆帯に刻目・多段結節回転文(123)、結節回転文(124)、単軸絡条体(122)である。125は底部直上に無文部をもつ底部である。122・123・125に着目して、時期は大木2 a式期～白座式期の遺構と考えられる。重複関係から3号竪穴住居跡より時間的に先行する縄文時代前期前葉の遺構である。

#### 10号竪穴住居跡(第27図、写真図版51)

口縁部に結節回転文が施される(128)土器1点の出土である。土器型式による時代時期の判断はできなかった。重複関係から5号竪穴住居跡より時間的に先行する縄文時代前期前葉の遺構である。

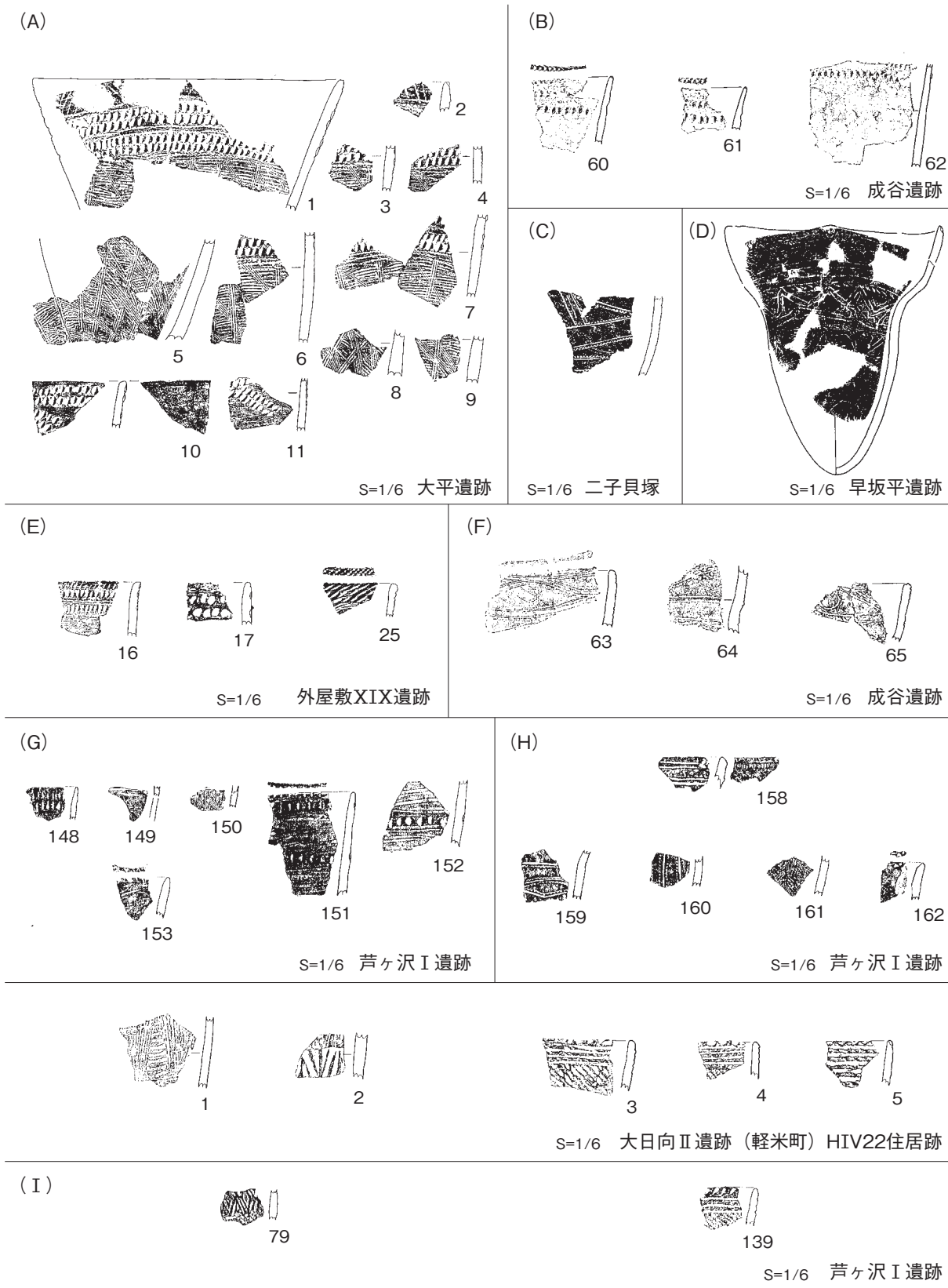
竪穴住居跡を土器型式に基づく、詳細な時期差を明らかにしたいと考えたが、結果として大半の竪穴住居跡は、大木2 a式期～白座式期と時代幅のあるものとなった。

### 遺構内出土土器と遺構外出土土器の比較・検討

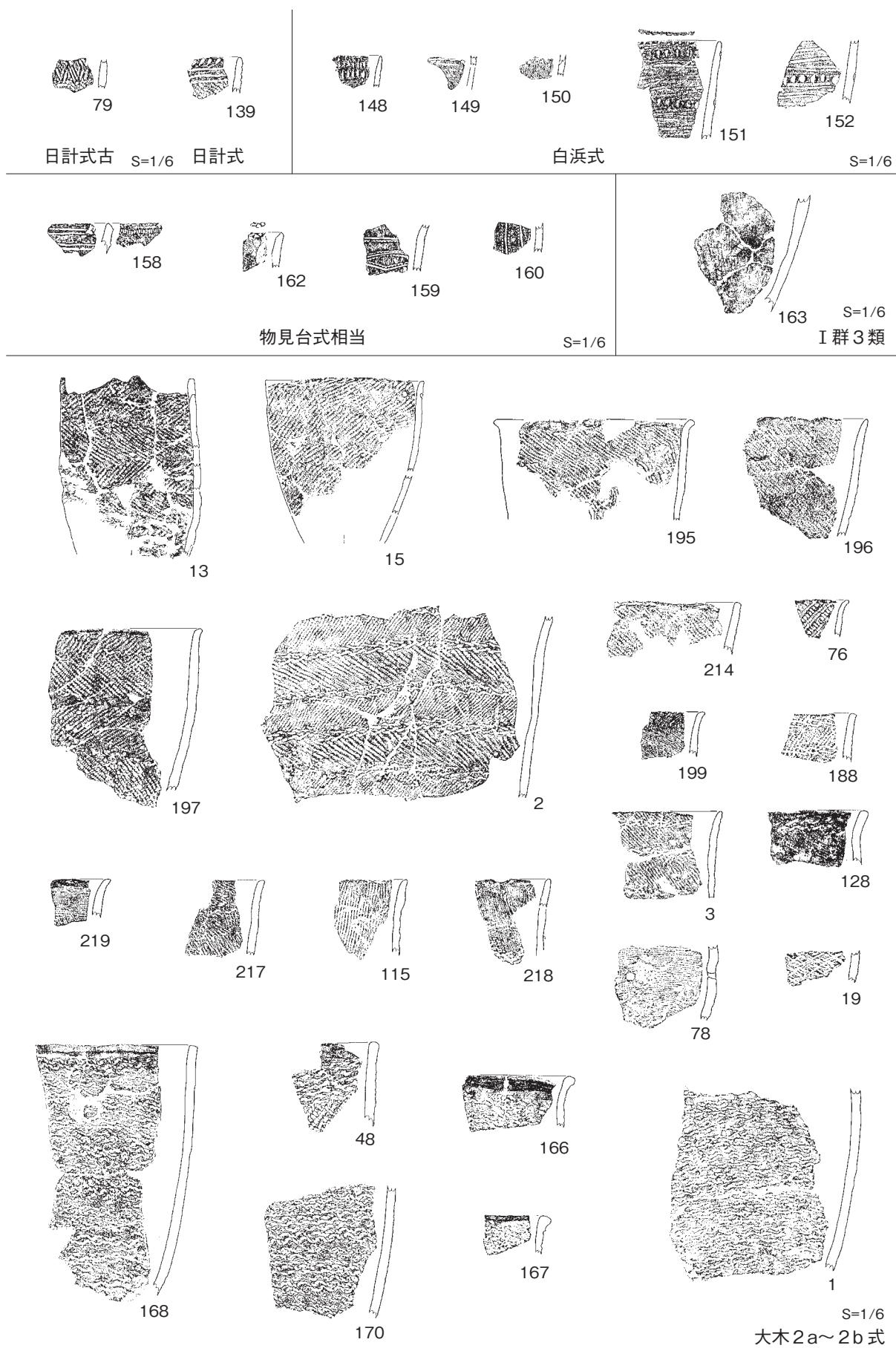
Ⅱ群1 a類・Ⅱ群1 b類と分類した多段結節回転文が施される土器は、大木2 a式の範疇に収まるものである。本遺跡の多段結節回転文が施される土器は焼成状態が良好で、S字状連鎖沈文が施される土器と胎土・器面の色調・繊維混入量が類似する。また、第67図186の山形口縁部頂部から隆帯が懸垂し、多段結節回転文が施されている土器は多段結節回転に着目すると大木2 a式、隆帯が懸垂する部分に着目すると大木2 b式、同様に陥し穴状遺構から出土した第67図138も多段結節回転文に着目すると大木2 a式、隆帯に刻目が施される部分に着目すると大木2 b式両方の要素を持つ。このことから、Ⅱ群1類a・Ⅱ群1類bとして扱った本遺跡の多段結節回転文が施される土器は、大木2 a式～2 b式の範疇に収まるものと考えられる。Ⅱ群11類として扱った底部資料第11図18・第14図34・第18図45・第20図77・第27図125・第56図224・225は、2号竪穴住居跡出土の口端・隆帯に刻目を持つ白座式相当と捉えられる第11図14と18が同一個体であることから、18と同様に底部直上に無文部を持つ底部は大木2 b式～白座式の可能性が考えられる。



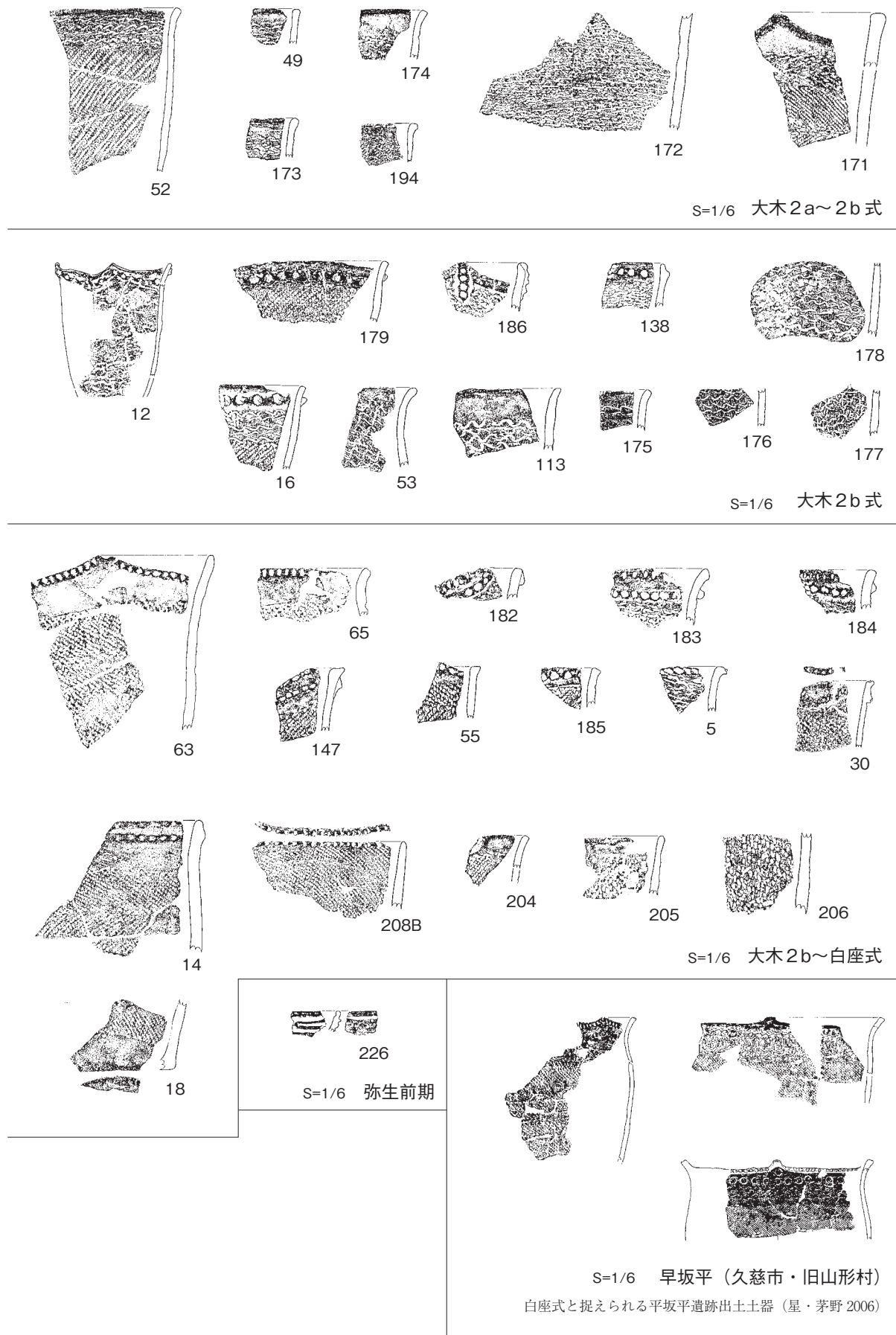
2 遺物



第68図 久慈市内・軽米町（大日向II遺跡）の縄文時代早期遺物集成図



第69図 土器集成図(1)

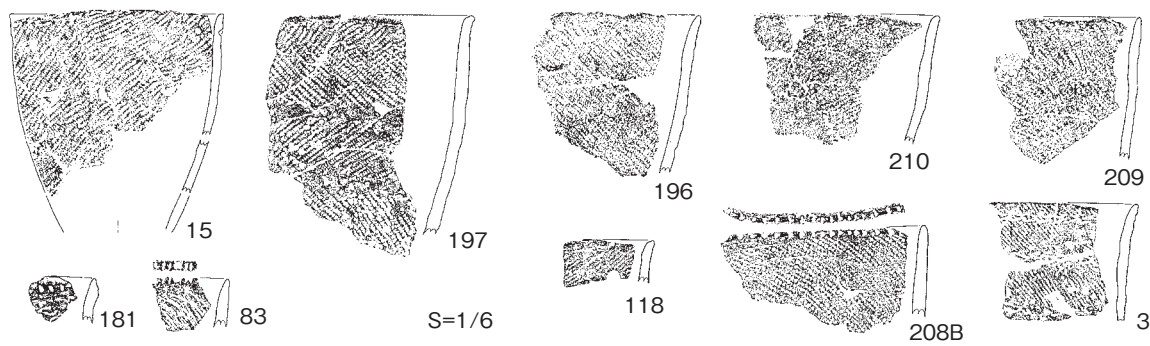


第70図 土器集成図 (2)

口唇部断面形 A

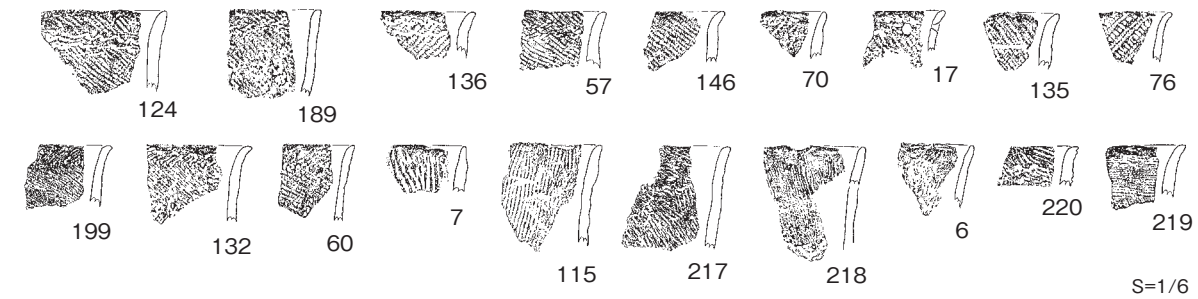


口唇部断面形 B



第71図 土器口唇部断面形 A～B (1)

## 口唇部断面形 B



第72図 土器口唇部断面形A～B（2）

## 芦ヶ沢 I 遺跡土器集成図（第 69・70 図）

第 69・70 図に土器集成図を掲載した。押型文が施される土器を日計式、格子状沈線文・爪形状刺突文が施される土器を白浜式、貝殻腹縁文が施される土器を物見台式相当、多段結節回転文・結節回転文・単節縄文・結束羽状縄文・単軸絡条体・附加条・合燃が施される土器を大木 2 a 式～大木 2 b 式、S 字状連鎖沈文・隆帯に刻目が施される土器を大木 2 b 式、口唇部・隆帯に刻目・組紐が施されるものを大木 2 b 式～白座式として掲載した。

## 口唇部断面形態（第 71・72 図）

本遺跡で出土した縄文時代前期前葉土器の口唇部断面形態は、角張るもの、または丸みを帯びるもの（A 類）と、端部に向かって薄くなり断面が尖るもの（B 類）に大きく 2 分できる。この分類別に集成した第 71・72 図から読み取れるように、A 類では多段結節回転文、口唇部の刻目、口縁部下端隆帯といった属性との結びつきが強く、B 類では単節縄文、単軸絡条体回転文、結束羽状縄文、附加条原体が用いられる土器に多いという傾向が指摘できる。前述した星・茅野（2006）による大木 2 b 式、白座式の特徴を踏まえれば、A 類の口唇部を持つ土器群は概ね大木 2 b 式、白座式に相当するものと考えられる。

## ま と め

今回の発掘調査で本遺跡は、岩手県内で類例の少ない大木 2 a 式期～白座式期に時代が限定される集落跡であったことが明らかになった。また、竪穴住居跡埋土に To-Cu テフラの堆積が認められたことにより、To-Cu テフラが白座式期直後に降下したことを推測することが出来た。集落跡は To-Cu テフラ降下期以降には継続することなく、集落跡から狩猟場へと変遷していったことが明らかになった。本報告書を活用していただき新知見を得る資料となれば幸いである。

## 引用・参考文献

## 論文

- 阿部明彦 1986「S字状連鎖糸文の原体復元」『山形考古』第4巻第1号（通巻19号）
- 田村壮一 1987「陥し穴状遺構の形態と時期」『紀要Ⅶ』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 早瀬亮介 2008「前期大木式土器」『総覧 縄文土器』
- 盛岡市遺跡の学び館 2009『盛岡の縄文時代草創期～早期の土器文化』
- 領塚正浩 1996「東北地方北部に於ける縄文時代早期前半の土器編年（上）」『史館』第27号
- 領塚正浩 1996「東北地方北部に於ける縄文時代早期前半の土器編年（下）」『史館』第28号
- 領塚正浩 2008「貝殻・沈線文系土器」『総覧 縄文土器』
- 星 雅之・須原 拓 2004「岩手県内の発掘調査事例からみた十和田中堰テフラ」『紀要』XXⅢ岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 星 雅之・茅野嘉雄 2006「十和田中堰テフラからみた円筒下層a式土器成立期の土器様相」『植生史研究 三内丸山遺跡の生態系史』特別第2号
- （公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター**
- 1995『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集
- 1995『上八木田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第227集
- 1996『久保遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第251集
- 1998『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第273集
- 1999『大平遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第301集
- 2000『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書（1～3次調査）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第318集
- 2000『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書（5次調査）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第342集
- 2001『成谷遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第356集
- 2001『権現前遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第384集
- 2002『小松Ⅱ発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第392集
- 2002『沢田2発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第396集
- 2004『小松Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第433集
- 2004『早坂平遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第437集
- 2008『力持遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第510集
- 2013『芋田沢田Ⅳ遺跡・芋田沢田Ⅵ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第604集
- 2014『屋形遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第629集
- 2015『野場Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第635集
- 2015『豊間根新田Ⅰ発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第642集
- 2015『外屋敷ⅩⅨ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第646集
- 2016『宇部館跡・北ノ越遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第654集
- 他組織発行報告書**
- 青森県教委 2002『畑内遺跡Ⅷ発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第326集
- 久慈市教委 1993『二子貝塚』久慈市埋蔵文化財調査報告書第16集
- 七ヶ浜町教委 2013『大木冨貝塚災害復旧に伴う東貝層発掘調査報告書』七ヶ浜町文化財調査報告書第10集
- 遠野市教委 2002『新田Ⅱ遺跡』遠野市文化財調査報告書第13集
- 階上町教委 1988『白座遺跡 野場遺跡』

## Ⅶ 自然科学分析

### 1 芦ヶ沢Ⅰ遺跡から出土した火山灰同定

株式会社 火山灰考古学研究所

#### 1 はじめに

東北地方の三陸沿岸地域の地層や土壌の中には、十和田、岩手、秋田駒ヶ岳、焼石、鳴子など東北地方の火山のほか、洞爺、浅間、御岳、三瓶、阿蘇、始良、鬼界など遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。とくに、後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載の特徴がテフラ・カタログ（町田・新井，1992，2003，2011など）に収録されており、考古遺跡などで調査分析を行って年代や層位が明らかな指標テフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古遺物・遺構の層位や年代などに関する情報を得ることができる。

久慈市芦ヶ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査でも、テフラを含む可能性のある土層が検出されたことから、テフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析・火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率測定）を実施して、指標テフラを検出し、土層の層位を明らかにすることになった。分析対象試料は、発掘調査担当者により採取された6試料（基本土層BのⅤ層・Ⅳ層・Ⅲ層および5号住居址の試料C・試料B・試料A）である。

#### 2 テフラ検出分析

##### （1）分析試料と分析方法

基本土層BのⅤ層・Ⅳ層・Ⅲ層および5号住居址の試料C・試料B・試料Aに含まれるテフラ粒子の量や特徴を定性的に明らかにするために、テフラ検出分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料を観察し、砂分の含有率により試料6～8gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥機により80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

##### （2）分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。実体顕微鏡による観察では、基本土層BのⅤ層から火山ガラスは検出されなかった。強磁性鉱物をのぞく重鉱物としては、斜方輝石のほか、単斜輝石や角閃石が少量含まれている。Ⅳ層では、ごくわずかに白色や無色透明のスポンジ状や繊維束状の軽石型ガラスが検出された。重鉱物は比較的多く含まれており、強磁性鉱物をのぞけば、斜方輝石のほか、単斜輝石や角閃石が認められる。Ⅲ層には、白色がかった黄色の軽石（最大径3mm）がごくわずかに、また白色や無色透明の繊維束状やスポンジ状の軽石型ガラス、また分厚い中間型ガラスが少量含まれている。なお、中間型ガラスの中には有色のものもごくわずかに認められる。重鉱物は比較的多く、強磁性鉱物をのぞけば、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

5号住居址の試料Cには、白色軽石（最大径2.1mm）がわずかに、またスポンジ状や繊維束状の軽石型ガラスや中間型ガラスが比較的多く含まれている。火山ガラスの色調は白色や無色透明である

が、中間型ガラスの中には有色のものもごくわずかに認められる。強磁性鉱物をのぞく重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。5号住居址の試料Bには、スポンジ状や繊維束状の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。火山ガラスの色調は白色や無色透明である。強磁性鉱物をのぞく重鉱物としては、斜方輝石のほか少量の単斜輝石が認められる。5号住居址の試料Aには、繊維束状やスポンジ状や繊維束状の軽石型ガラスや中間型ガラスが比較的多く含まれている。火山ガラスの色調は、おもに白色や無色透明である。強磁性鉱物をのぞく重鉱物としては、斜方輝石のほか少量の単斜輝石が認められる。

### 3 テフラ組成分析（火山ガラス比分析・重鉱物組成分析）

#### （1）分析試料と分析方法

テフラ分析対象の6試料について、より詳しく定量的にテフラ粒子の傾向をみるために、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析を行った。分析の手順は次のとおりである。

1) テフラ検出分析済みの試料から、分析篩をもちいて1/4～1/8mm および1/8～1/16mmの粒子を篩別。

2) 偏光顕微鏡下で1/4～1/8mmの250粒子を観察して、火山ガラスの色調形態別含有率、軽鉱物と重鉱物の含有率を求める（火山ガラス比分析）。

3) 偏光顕微鏡下で1/4～1/8mmの重鉱物250粒子を観察して、重鉱物組成を明らかにする（重鉱物組成分析）。

#### （2）分析結果

テフラ組成分析の結果をダイヤグラムにして図1に、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果の内訳をそれぞれ表2と表3に示す。

基本土層BのV層に含まれる火山ガラスの含有率は0.4%（中間型ガラス）で非常に低い。また、軽鉱物と重鉱物の含有率は、それぞれ34.0%と3.6%である。強磁性鉱物を除く重鉱物としては、斜方輝石（33.6%）、単斜輝石（7.2%）、角閃石（4.0%）が含まれている。

基本土層BのIV層に含まれる火山ガラスの含有率は1.6%でやはり低い。含まれる火山ガラスは、スポンジ状軽石型（1.2%）と繊維束状軽石型（0.4%）である。また、軽鉱物と重鉱物の含有率は、それぞれ34.4%と11.6%である。強磁性鉱物を除く重鉱物としては、斜方輝石（37.6%）、単斜輝石（10.8%）、角閃石（1.2%）が含まれている。

基本土層BのIII層に含まれる火山ガラスの含有率は6.4%で、高い順にスポンジ状軽石型（3.2%）、繊維束状軽石型（1.6%）、中間型（1.2%）、無色透明のバブル型（0.4%）が含まれている。また、軽鉱物と重鉱物の含有率は、それぞれ21.2%と5.6%である。強磁性鉱物を除く重鉱物としては、斜方輝石（36.8%）と単斜輝石（24.0%）が含まれている。

5号住居址の試料Cに含まれる火山ガラスの含有率は20.8%で比較的高い。含まれる火山ガラスは、スポンジ状軽石型（14.4%）、中間型（4.0%）、繊維束状軽石型（2.4%）である。また、軽鉱物と重鉱物の含有率は、それぞれ28.8%と12.4%である。強磁性鉱物を除く重鉱物としては、斜方輝石（29.6%）、単斜輝石（9.6%）、黒雲母（0.4%）が含まれている。

5号住居址の試料Bに含まれる火山ガラスの含有率は20.4%で比較的高い。含まれる火山ガラスは、スポンジ状軽石型（9.6%）、繊維束状軽石型（8.4%）、中間型（2.4%）である。また、軽鉱物と重鉱物の含有率は、それぞれ49.2%と12.0%である。強磁性鉱物を除く重鉱物としては、斜方輝石（39.6%）と単斜輝石（19.2%）が含まれている。



5号住居址の試料Aに含まれる火山ガラスの含有率は33.6%で比較的高い。含まれる火山ガラスは、スポンジ状軽石型(15.2%)、中間型(12.8%)、繊維束状軽石型(5.6%)である。また、軽鉱物と重鉱物の含有率は、それぞれ21.2%と5.6%である。強磁性鉱物を除く重鉱物としては、斜方輝石(28.8%)と単斜輝石(15.22%)が含まれている。

#### 4 屈折率測定(火山ガラス・鉱物)

##### (1) 測定試料と測定方法

テフラ分析対象の6試料に含まれる火山ガラスと鉱物の屈折率測定を実施した。測定方法は温度変化型屈折率法(壇原, 1993)で、測定には温度変化型屈折率測定装置を使用した。測定対象のうち、測定対象の火山ガラスは、1/8～1/16mm粒子中のものである。また、測定対象の鉱物は、>1/4mm粒子から手選した斜方輝石を軽く粉碎したものである。

##### (2) 測定結果

屈折率の測定結果を表4に示す。この表には、三陸沿岸地域の後期更新世後半以降の代表的な指標テフラの火山ガラスと斜方輝石の屈折率特性も合わせて示した。

基本土層BのV層に含まれる火山ガラス(n, 19粒子)と斜方輝石( $\gamma$ , 31粒子)の屈折率は、順に1.500-1.508と1.703-1.709である。IV層に含まれる火山ガラス(n, 21粒子)と斜方輝石( $\gamma$ , 30粒子)の屈折率は、順に1.502-1.511と1.707-1.714である。III層に含まれる火山ガラス(n, 32粒子)と斜方輝石( $\gamma$ , 31粒子)の屈折率は、順に1.503-1.511と1.708-1.714である。

5号住居址の試料Cに含まれる火山ガラス(n, 32粒子)と斜方輝石( $\gamma$ , 30粒子)の屈折率は、順に1.506-1.510と1.704-1.710である。試料Bに含まれる火山ガラス(n, 30粒子)と斜方輝石( $\gamma$ , 30粒子)の屈折率は、順に1.506-1.508と1.701-1.710である。このうち後者はbimodal組成となっており、1粒子は1.701、ほかの29粒子は1.704-1.710である。試料Aに含まれる火山ガラス(n, 30粒子)と斜方輝石( $\gamma$ , 30粒子)の屈折率は、順に1.506-1.508と1.705-1.713である。

#### 5 考 察

いわゆるローム層からなる基本土層BのV層には、火山ガラスの含有率は低いものの、斜方輝石や単斜輝石のほかに角閃石が比較的多く含まれている。火山ガラスや斜方輝石の屈折率特性は、この試料の中に、約1.5万年前に十和田カルデラから噴出した十和田八戸テフラ(To-H, 早川, 1983a, Hayakawa, 1985, 町田・新井, 2011など)に由来するテフラ粒子が含まれていることを示している。土層断面の写真をみると、V層の基底部付近に黄色の火山灰層が認められたようである。本試料とこの火山灰層の関係の詳細は不明であるが、層相から、この火山灰層がTo-Hである可能性が高い。

また、土層断面の写真をみると、とくに暗い黒ボク土の基底付近のIII層が明色で、テフラ粒子が混在しているように見える。III層中に含まれるテフラ粒子の特徴は、To-Cuのそれと非常によく似ている。5号住居址覆土中に約6,000年前に十和田火山から噴出した十和田中振テフラ(To-Cu, 大池ほか, 1966, 早川1983b, 町田・新井, 1992, 2003, 2011)が厚く堆積していること(後述)を考えると、このIII層中にもTo-Cuが含まれている可能性が高い。しかしながら、さほど知られていないものの、To-Cuの下位には、To-Cuに火山ガラスや斜方輝石の屈折率特性がよく似た別のテフラがあることから(早田, 未公表資料)、ここではTo-Cuの可能性を指摘するに留めておきたい。その下位のIV層中に含まれる火山ガラスや斜方輝石の屈折率特性も、III層中のそれらに似ていることから、実際にはIV層中にTo-Cuに似た別のテフラが含まれているのかも知れない。

5号住居址の試料A～Cのうち、少なくとも試料Aと試料Bの2試料は、いずれも住居址覆土中のテフラ層中から採取されているようである。このテフラ層は、試料採取時に撮影された写真でみられる層相、火山ガラスの形態色調や屈折率特性、重鉍物の組み合わせや斜方輝石の屈折率特性から、To-Cuと考えられる。試料Cについても、To-Cuが高率で含まれているようである。床面とその間には腐植土が形成されていることから、5号住居址の層位は、To-Cuより下位と推定される。

なお、分析者は現地において試料が採取された堆積物の層相を実見する機会を得ていないが、三陸沿岸域中～南部において、To-Cuの一次堆積層が認められる際には、下部が細粒の黄色火山灰層、上部が比較的細粒の灰色火山灰層の組み合わせからなる場合が多い。5号住居址の覆土断面で認められたTo-Cuも同様の層相をもつらしいことから、やはりこの地点のTo-Cuは一次堆積層と思われる。火山灰編年学においては、室内分析のみでは得られる情報は多くなく、ましてやテフラの一次堆積層の認定は難しい。地域のテフラを熟知した研究者による、現地におけるテフラ層やテフラ粒子の観察記載と高純度の試料採取を実施することが基本となることを付記しておく。

## 6 ま と め

久慈市芦ヶ沢I・II遺跡で採取されたテフラ試料6点を対象に、テフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析・火山ガラスおよび鉍物の屈折率測定）を実施した。5号住居址覆土中のテフラ層は、層相、火山ガラスの岩相、重鉍物の組み合わせ、火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率特性から、十和田中振テフラ（To-Cu, 約6,000年前）に同定される。したがって、5号住居址の層位はTo-Cuより下位と考えられる。また、基本土層BのⅢ層中にもTo-Cuが含まれている可能性のあることがわかった。さらに、V層基底部付近には、十和田八戸テフラ（To-H）が堆積している可能性が高い。

## 文献

- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロロジーの基礎的研究。第四紀研究，11，p.254-269.
- 新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2」，東京大学出版会，p.138-149.
- 壇原 徹（1993）温度変化型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀研究試料分析法2」，p.149-158.
- 早川由紀夫（1983a）火山豆石として降下堆積した十和田火山八戸火山灰。火山，28，p.25-40.
- 早川由紀夫（1983b）十和田中振テフラ層の分布，粒度，組成，年代。火山，28，p.263-273.
- Hayakawa, Y. (1985) Pyroclastic geology of Towada volcano. Bull. Earthq. Res. Inst. Univ. Tokyo, 60, p.507-592.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会，276p.
- 町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス。東京大学出版会，336p.
- 町田 洋・新井房夫（2011）新編火山灰アトラス（第2刷）。東京大学出版会，336p.
- 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之（1966）馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰。第四紀研究，5，p.29-35.

表 1 芦ヶ沢 I 遺跡のテフラ検出分析結果

試料	試料処理量			軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物(強磁性鉱物以外)		
	量 (最終処理量)	色調	最大径	量	形態	色調	量	組成				
基本土層 B・III層	8 g	(*) 黄(白)色	3.0	*	pm(fb, sp), md	白, 無色透明	**	opx > cpx				
基本土層 B・IV層	8 g			(*)	pm(sp, fb)	白, 無色透明	**	opx > cpx, am				
基本土層 B・V層	8 g(18g)						*	opx > cpx, am				
5号住居址・試料A	6 g(26g)			**	pm(fb, sp), md	白, 無色透明	*	opx, cpx				
5号住居址・試料B	6 g(16g)			**	pm(sp, fb)	白, 無色透明	**	opx, (cpx)				
5号住居址・試料C	6 g	(*) 白色	2.1	**	pm(sp, fb), md	白, 無色透明	**	opx > cpx				

\*\*\*\*: とくに多い, \*\*\*: 多い, \*\*: 中程度, \*: 少ない, (\*): 非常に少ない. 最大径の単位は, mm.

bw: バブル型, pm: 軽石型, md: 中間型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, md: 中間型.

ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, bi: 黒雲母, (): 量が少ないことを示す.

表2 火山ガラス比分析結果

試料	bw (cl)	bw (pb)	bw (br)	md	pm (sp)	pm (fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
基本土層B・Ⅲ層	1	0	0	3	8	4	127	54	53	250
基本土層B・Ⅳ層	0	0	0	0	3	1	86	29	131	250
基本土層B・Ⅴ層	0	0	0	1	0	0	85	9	155	250
5号住居址・試料A	0	0	0	32	38	14	53	14	99	250
5号住居址・試料B	0	0	0	6	24	21	123	30	46	250
5号住居址・試料C	0	0	0	10	36	6	72	31	95	250

bw : バブル型, md : 中間型, pm : 軽石型, cl : 無色透明, pb : 淡褐色, br : 褐色, sp : スポンジ状, fb : 繊維束状, 数字は粒子数.

表3 重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	am	bi	opq	その他	合計
基本土層B・Ⅲ層	0	92	60	0	0	95	3	250
基本土層B・Ⅳ層	0	94	27	3	0	119	7	250
基本土層B・Ⅴ層	0	84	18	10	0	128	10	250
5号住居址・試料A	0	72	38	0	0	132	8	250
5号住居址・試料B	0	99	48	0	0	102	1	250
5号住居址・試料C	0	74	24	0	1	141	10	250

ol : カンラン石, opx : 斜方輝石, cpx : 斜方輝石, am : 角閃石, bi : 黒雲母, opq : 不透明鉱物, 数字は粒子数.

表 4 屈折率測定結果

試料	火山ガラス		斜方輝石		文献
	屈折率(n)	測定点数	屈折率(γ)	測定点数	
芦ヶ沢 I・II 遺跡・基本土層 B・III 層	1.503-1.511	32	1.708-1.714	31	本報告
芦ヶ沢 I・II 遺跡・基本土層 B・IV 層	1.502-1.511	21	1.707-1.714	30	本報告
芦ヶ沢 I・II 遺跡・基本土層 B・V 層	1.500-1.508	19	1.703-1.709	31	本報告
芦ヶ沢 I・II 遺跡・5号住居址・試料 A	1.506-1.508	30	1.705-1.713	30	本報告
芦ヶ沢 I・II 遺跡・5号住居址・試料 B	1.506-1.508	30	1.701-1.710 (1.701)	30 (1)	本報告
芦ヶ沢 I 遺跡・5号住居址・試料 C	1.506-1.510	32	1.704-1.710	30	本報告
岩手・青森地域の指標テフラ (後期旧石器時代以降)					
白頭山苫小牧 (B-Tm)	1.511-1.522				町田・新井 (2011)
十和田 a (To-a)	1.496-1.508		1.706-1.708		町田・新井 (2011)
青森周辺					
岩手周辺	1.500-1.508		1.706-1.708		町田・新井 (2011)
十和田 b (To-b)	1.498-1.501		1.705-1.708		町田・新井 (2011)
十和田中郷 (To-Cu)	1.508-1.512		1.703-1.709		町田・新井 (2011)
十和田南部 (To-Nb)	1.512-1.517		1.708-1.712		町田・新井 (2011)
十和田二の倉 (To-Nk)			1.696-1.706		町田・新井 (2011)
十和田八戸 (To-H)	1.502-1.509		1.705-1.708		町田・新井 (2011)
始良 Tn (AT)	1.498-1.501				町田・新井 (2011)
十和田大不動 (To-Of)	1.505-1.511		1.707-1.710		町田・新井 (2011)

本報告における屈折率の測定：温度変化型屈折率測定法 (壇原, 1993). 町田・新井 (2011)：温度一定型屈折率測定法 (新井, 1993).

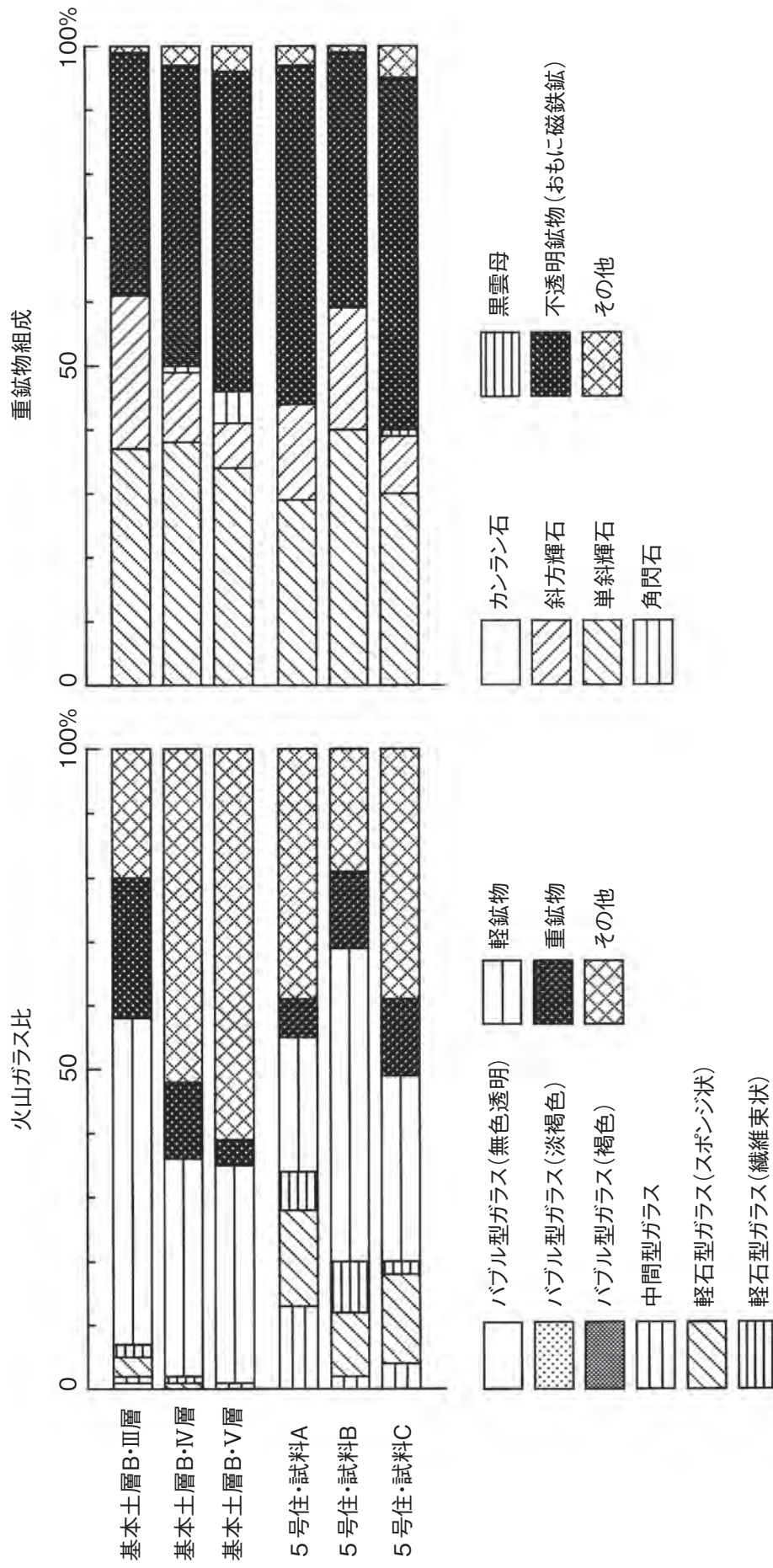


図1 芦ヶ沢I遺跡のテフラ組成ダイアグラム

1 芦ヶ沢 I 遺跡から出土した火山灰同定

芦ヶ沢 I 遺跡テフラ分析写真図版 (1)

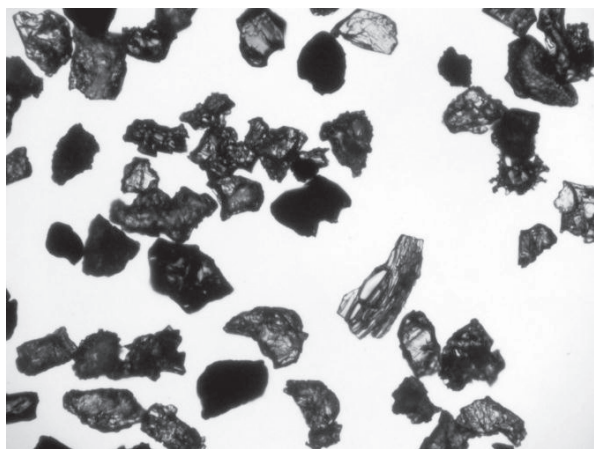


写真1 基本土層 B・III層の顕微鏡写真 (透過光)  
中央右下: 繊維束状軽石型ガラス.  
中央上: 有色鉱物: 斜方輝石.  
中央左: 有色鉱物: 単斜輝石.



写真2 基本土層 B・IV層の顕微鏡写真 (透過光)  
長柱状有色鉱物: 斜方輝石.

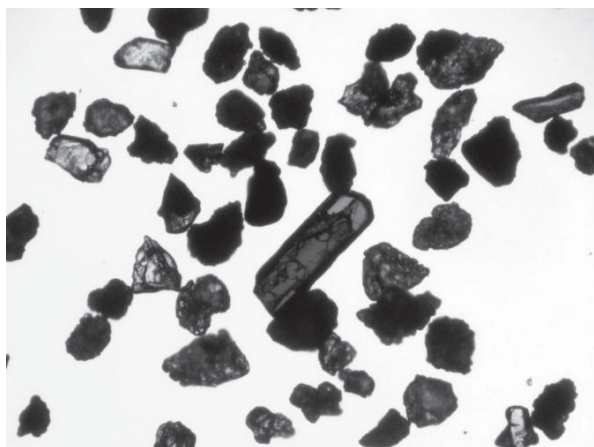
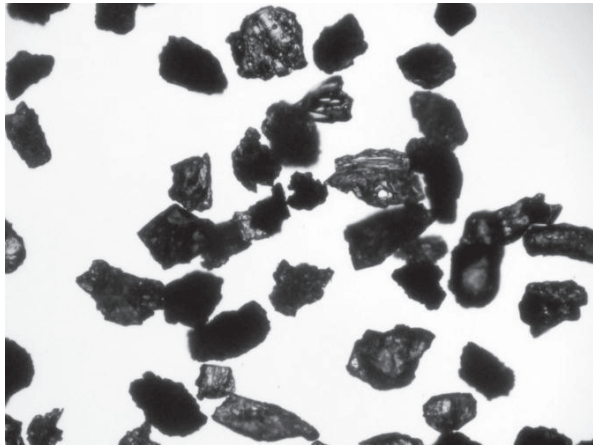


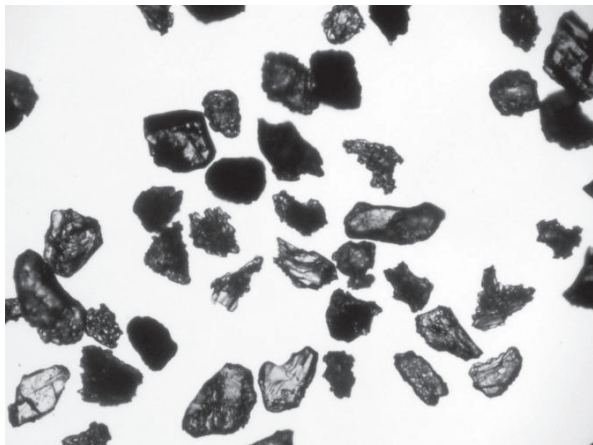
写真3 基本土層 B・V層の顕微鏡写真 (透過光)  
中央 (長板状有色鉱物): 角閃石.

芹ヶ沢Ⅰ遺跡テフラ分析写真図版(2)



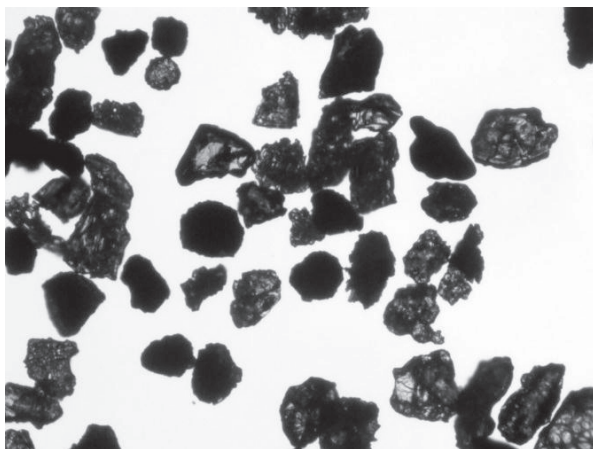
0.2mm

写真4 5号住居址・試料Aの顕微鏡写真(透過光)  
中央右: 繊維束状軽石型ガラス,  
中央左(褐色): 中間型ガラス,  
右(有色鉱物): 斜方輝石.



0.2mm

写真5 5号住居址・試料Bの顕微鏡写真(透過光)  
中央ほか: スポンジ状軽石型ガラス,  
中央左下・右下: 繊維束状軽石型ガラス,  
左上(有色鉱物): 斜方輝石.



0.2mm

写真6 5号住居址・試料Cの顕微鏡写真(透過光)  
中央ほか多数: スポンジ状軽石型ガラス,  
中央左上(有色鉱物): 単斜輝石.



## 2 芦ヶ沢 I 遺跡から検出した竪穴住居跡の放射性炭素 14 年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

## 1 試料

芦ヶ沢 I 遺跡（久慈市長内町 17 所在）は、長内川とその支流の間に形成された丘陵地緩斜面部に立地する。縄文時代の前期前半頃の集落跡と考えられており、住居跡や落とし穴などが見つまっている。

今年年代測定を行う試料は、2号住貼り床（試料番号1）、4号住貼り床（試料番号2）、5号住1号炉（試料番号3）、5号住2号炉（試料番号4）、5号住床面（試料番号5）の5点である。いずれも土壌ごと採取された微細な（数ミリ以下）の炭化片で、土壌を自然乾燥させたあと、各試料から炭化物を 50mg 程度になるよう複数個抽出し、分析に用いる。

## 2 分析方法

炭化物に付着する土壌を、できるだけ取り除く。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は HCl、NaOH 共に最大 1 mol/L である。試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age 3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1 mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置（NEC 社製）を用いて、 $^{14}\text{C}$  の計数、 $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$  濃度 ( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-II）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C 6 等）、バックグラウンド試料（IAEA-C 1）の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$  は試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver and Polach 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正に用いるソフトウェアは、Calib7.1 を用いる。較正曲線は Intcal13（Reimer et al.,2013）を用いる。

表 1 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	処理法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	年代値(BP)	Code No.
1 2号住 貼り床	土壌抽出炭化物	AAA	-27.45 ± 0.22	5245 ± 20	pal-10138 PLD-32820
2 4号住 貼り床	土壌抽出炭化物	AAA	-26.23 ± 0.19	5255 ± 25	pal-10139 PLD-32821
3 5号住 1号炉	土壌抽出炭化物	AAA	-29.42 ± 0.21	5300 ± 20	pal-10140 PLD-32822
4 5号住 2号炉	土壌抽出炭化物	AAA	-27.69 ± 0.35	5300 ± 25	pal-10141 PLD-32823
5 5号住 床面	土壌抽出炭化物	AAA	-26.05 ± 0.25	5965 ± 25	pal-10142 PLD-32824

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
- 2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$ （測定値の 68% が入る範囲）を年代値に換算した値。
- 4) AAA は、酸、アルカリ、酸処理を示す。

表2 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代											Code No.										
		年代値											相対比	中央値									
No.1	5244 ± 22	$\sigma$	cal	BC	4,050	-	cal	BC	4,032	cal	BP	5,999	-	5,981	0.315	calBC 4027	pal- 10138	PLD- 32820					
			cal	BC	4,028	-	cal	BC	3,991	cal	BP	5,977	-	5,940	0.685								
		$2\sigma$	cal	BC	4,224	-	cal	BC	4,207	cal	BP	6,173	-	6,156	0.043								
			cal	BC	4,162	-	cal	BC	4,131	cal	BP	6,111	-	6,080	0.099								
			cal	BC	4,071	-	cal	BC	3,978	cal	BP	6,020	-	5,927	0.858								
			cal	BC	4,220	-	cal	BC	4,211	cal	BP	6,169	-	6,160	0.072								
No.2	5255 ± 23	$\sigma$	cal	BC	4,153	-	cal	BC	4,134	cal	BP	6,102	-	6,083	0.179	calBC 4049	pal- 10139	PLD- 32821					
			cal	BC	4,060	-	cal	BC	4,035	cal	BP	6,009	-	5,984	0.338								
			cal	BC	4,024	-	cal	BC	3,993	cal	BP	5,973	-	5,942	0.411								
			cal	BC	4,227	-	cal	BC	4,202	cal	BP	6,176	-	6,151	0.098								
		$2\sigma$	cal	BC	4,168	-	cal	BC	4,128	cal	BP	6,117	-	6,077	0.194								
			cal	BC	4,117	-	cal	BC	4,098	cal	BP	6,066	-	6,047	0.036								
No.3	5301 ± 21	$\sigma$	cal	BC	4,140	-	cal	BC	4,127	cal	BP	6,089	-	6,076	0.118	calBC 4134	pal- 10140	PLD- 32822					
			cal	BC	4,119	-	cal	BC	4,095	cal	BP	6,068	-	6,044	0.225								
			cal	BC	4,078	-	cal	BC	4,054	cal	BP	6,027	-	6,003	0.214								
			$2\sigma$	cal	BC	4,231	-	cal	BC	4,191	cal	BP	6,180	-	6,140				0.224				
				cal	BC	4,178	-	cal	BC	4,047	cal	BP	6,127	-	5,996				0.776				
		No.4	5301 ± 25	$\sigma$	cal	BC	4,119	-	cal	BC	4,094	cal	BP	6,068	-				6,043	0.228	calBC 4134	pal- 10141	PLD- 32823
cal	BC				4,078	-	cal	BC	4,053	cal	BP	6,027	-	6,002	0.205								
$2\sigma$	cal				BC	4,232	-	cal	BC	4,188	cal	BP	6,181	-	6,137	0.232							
	cal				BC	4,181	-	cal	BC	4,046	cal	BP	6,130	-	5,995	0.768							
No.5	5965 ± 26			$\sigma$	cal	BC	4,850	-	cal	BC	4,799	cal	BP	6,799	-	6,748	0.705	calBC 4844	pal- 10142	PLD- 32824			
					cal	BC	4,933	-	cal	BC	4,785	cal	BP	6,882	-	6,734	1.000						

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1 を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は $\sigma$ は68%、 $2\sigma$ は95%である
- 5) 相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。
- 6) 中央値は、確率分布図の面積が二分される値を年代値に換算したものである。

### 3 結果

結果を表1に示す。今回の試料はいずれも保存状態が良く、定法でのAAA処理が可能である。また、年代測定を行うのに十分な炭素を回収できた。年代値は、2号住貼り床（試料番号1）が5245 ± 20BP、4号住貼り床（試料番号2）が5255 ± 25BP、5号住1号炉（試料番号3）が5300 ± 20BP、5号住2号炉（試料番号4）が5300 ± 25BP、5号住床面（試料番号5）が5965 ± 25BPである。

暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、及び半減期の違い（ $^{14}\text{C}$ の半減期5730 ± 40年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪（年輪は細胞壁のみなので、形成当時の $^{14}\text{C}$ 年代を反映している）等を用いて作られており、最新のものは2013年に発表されたIntcal13 (Reimer et al., 2013) である。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが (Stuiver and Polach 1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う比較、再計算がしやすいように、表には丸めない値（1年単位）を記す（表2）。 $2\sigma$ の値は、6170

～ 5930calBP、4 号住貼り床（試料番号 2）が 6180～5930calBP、5 号住 1 号炉（試料番号 3）が 6180～6000calBP、5 号住 2 号炉（試料番号 4）が 6180～6000calBP、5 号住床面（試料番号 5）が 6880～6730calBP である。5 号住床面以外はいずれも 6200～6000 年前と近似した値を示す。5 号住床面はこれらよりやや古い年代を示すが、大局的にみると、いずれも縄文時代前期前半頃を示す。

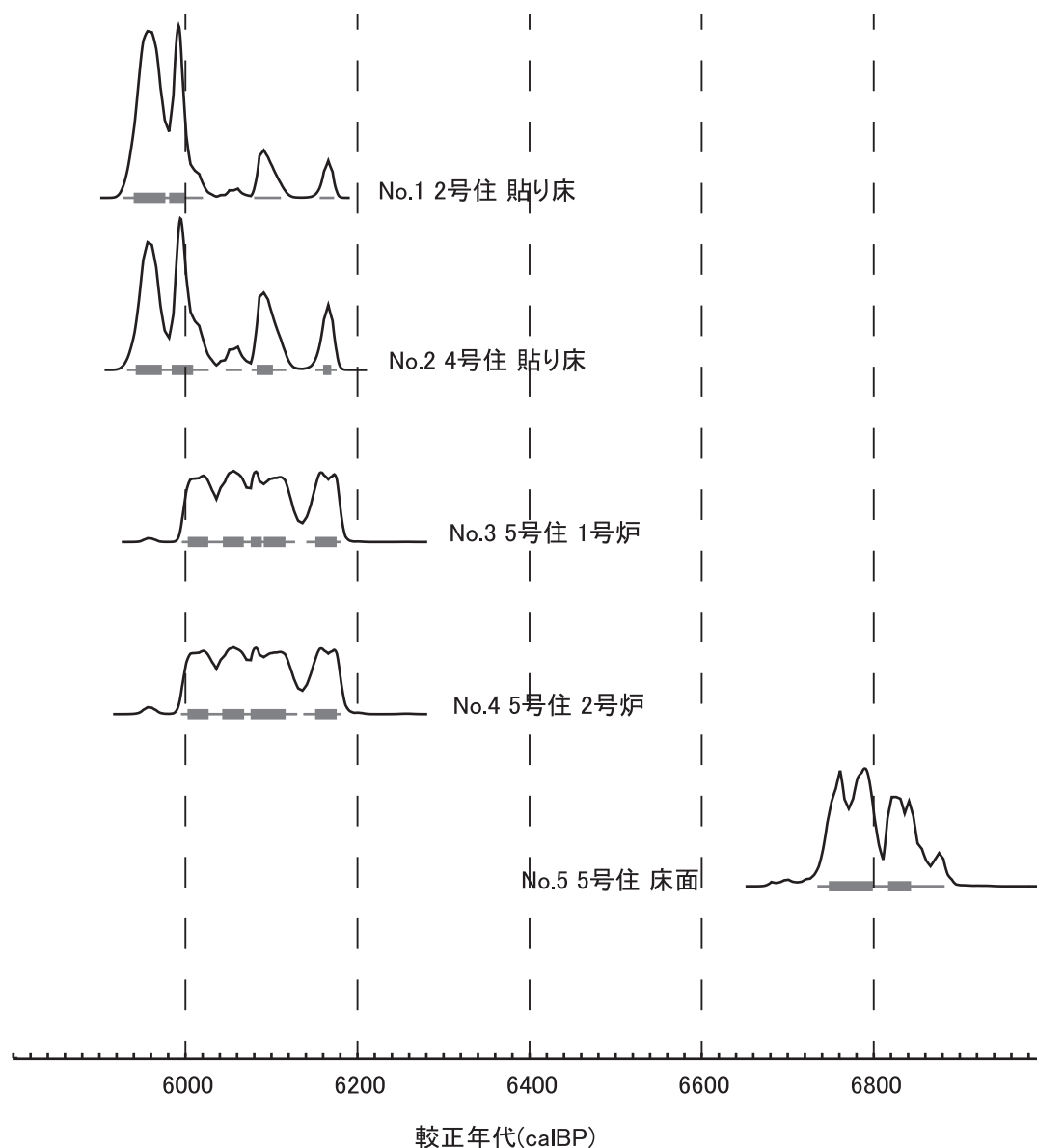
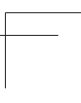
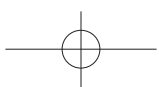
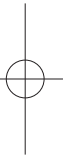
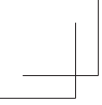


図1 暦年較正結果  
細線は $\sigma$ の範囲、太線が $2\sigma$ の範囲を示す。

#### 引用文献

Reimer PJ, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Cheng H, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Hafliðason H, Hajdas I, Hatté C, Heaton TJ, Hoffmann DL, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, Manning SW, Niu M, Reimer RW, Richards DA, Scott EM, Southon JR, Staff RA, Turney CSM, van der Plicht J. 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869–1887.  
Stuiver Minze and Polach A Henry, 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of  $^{14}\text{C}$  Data. Radiocarbon, 19, 355–363.

# 写真図版





芦ヶ沢Ⅰ遺跡調査区現況（東から）



芦ヶ沢Ⅱ遺跡調査区現況（西から）

写真図版1 芦ヶ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡調査区現況



基本層序 A 地点 (東から)



基本層序 B 地点 (東から)

写真図版 2 芦ヶ沢 I 遺跡基本層序



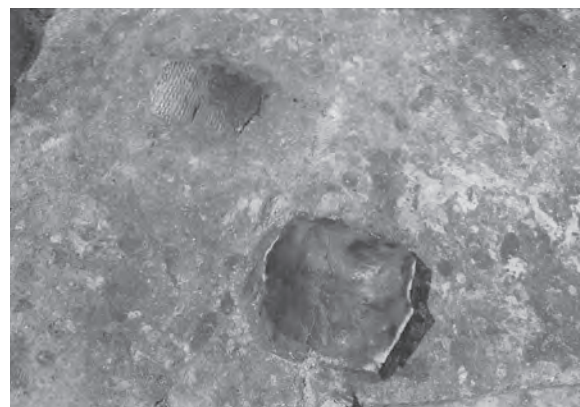
全景（東から）



断面（東から）



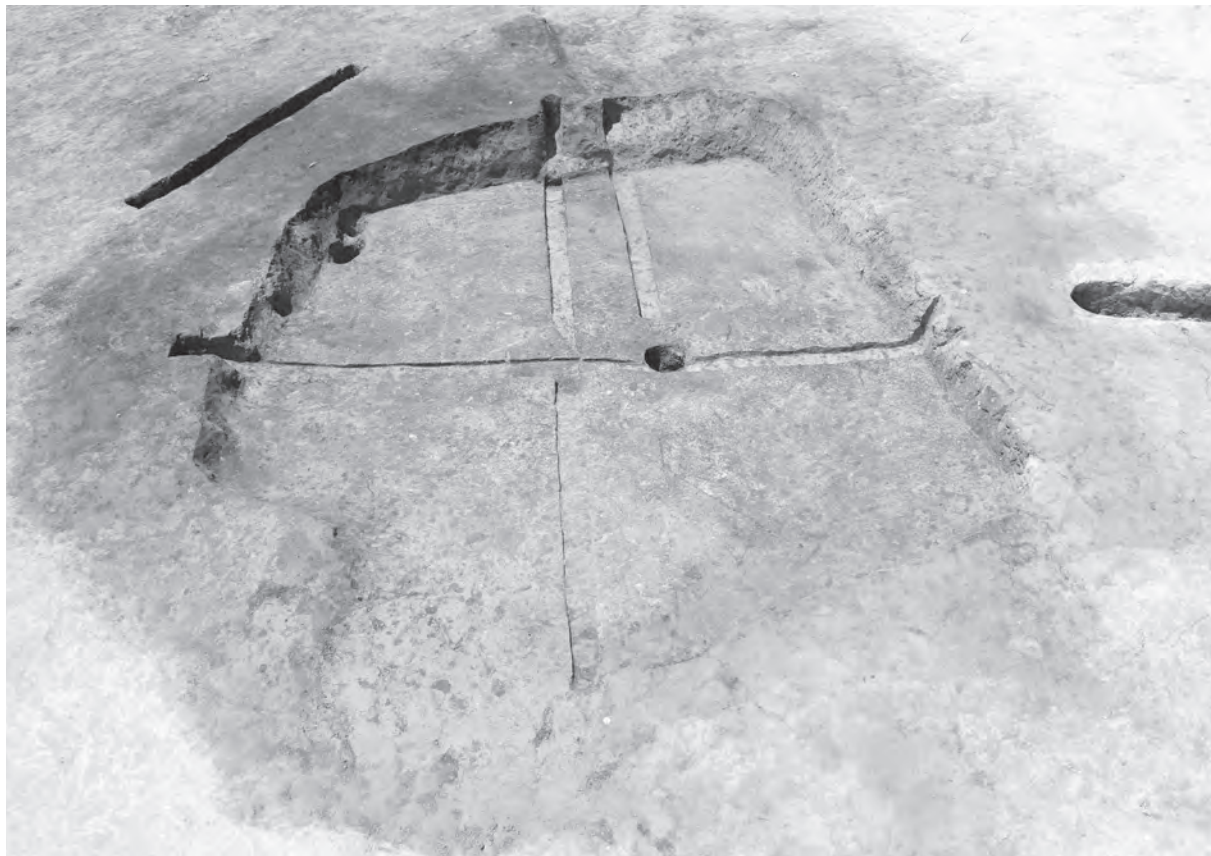
遺物出土状況（北から）



遺物出土状況（北から）

写真図版3 1号竪穴住居跡

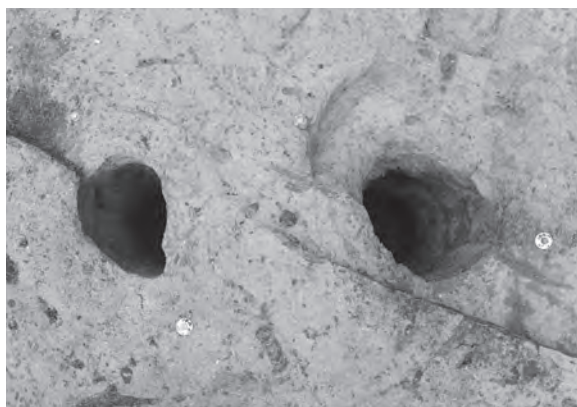




全景（東から）



断面（南から）



PP1・PP5完掘（東から）



遺物出土状況（東から）

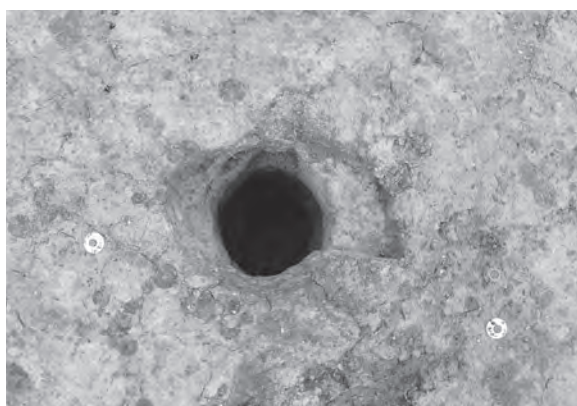
写真図版4 2号竪穴住居跡



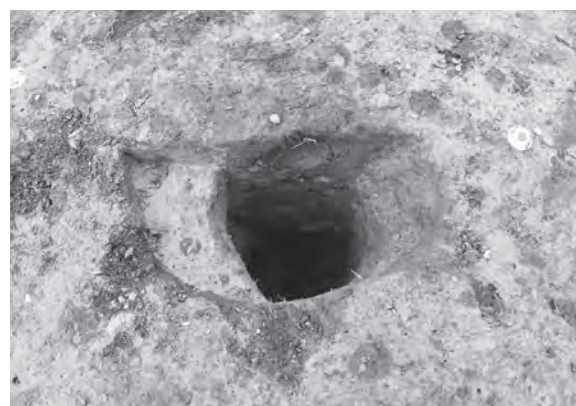
全景（東から）



断面（南から）

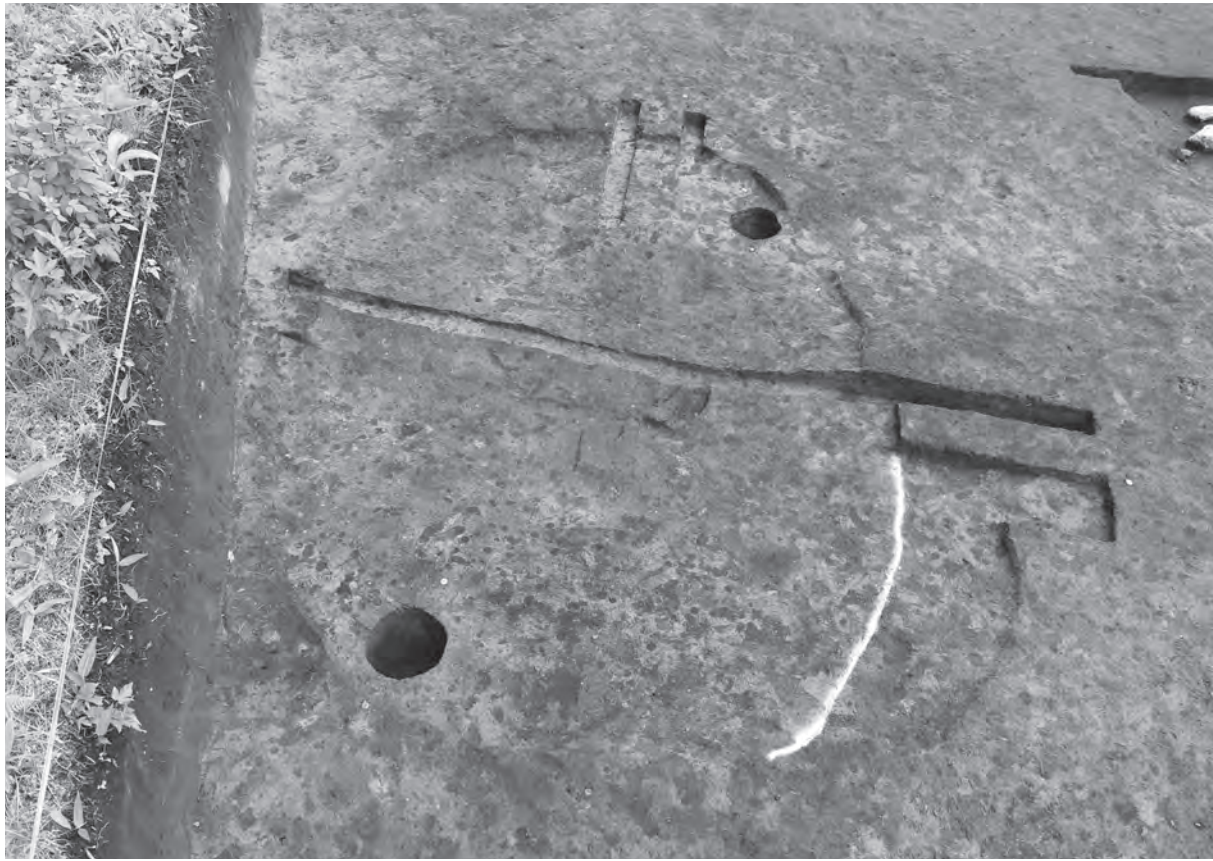


PP1完掘（東から）



PP1断面（東から）

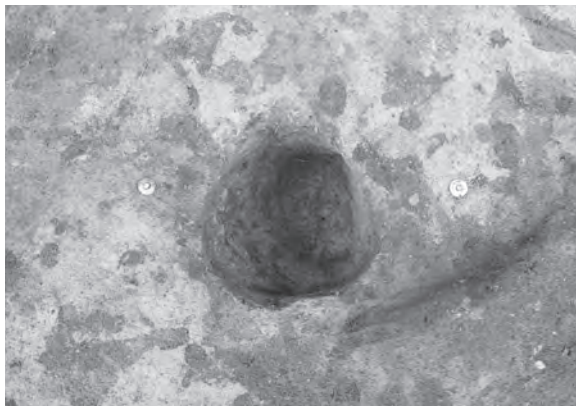
写真図版5 3号竪穴住居跡



全景（南から）



断面（東から）



PP2完掘（東から）



PP2断面（東から）

写真図版6 4号竪穴住居跡



全景（南から）



断面（東から）



断面（南から）

写真図版7 5号竪穴住居跡（1）



全景（東から）



A-A' ベルト断面1（東から）



A-A' ベルト断面2（東から）



B-B' ベルト断面3（南から）



B-B' ベルト断面4（南から）

写真図版8 5号竪穴住居跡（2）



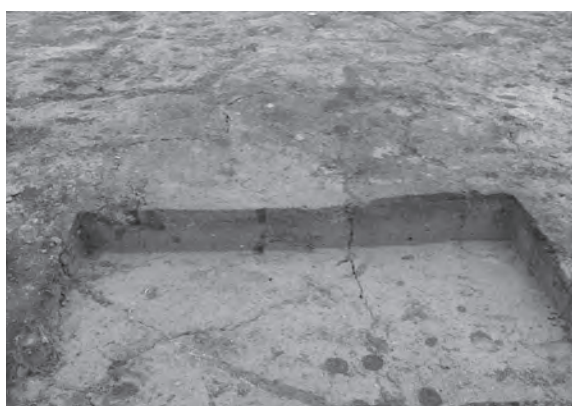
5号炉平面（東から）



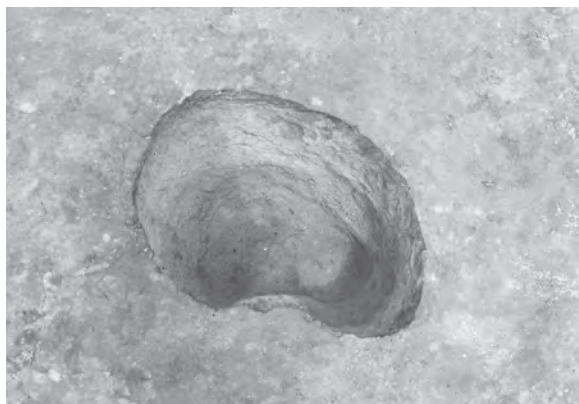
5号炉断面（東から）



2号炉平面（東から）



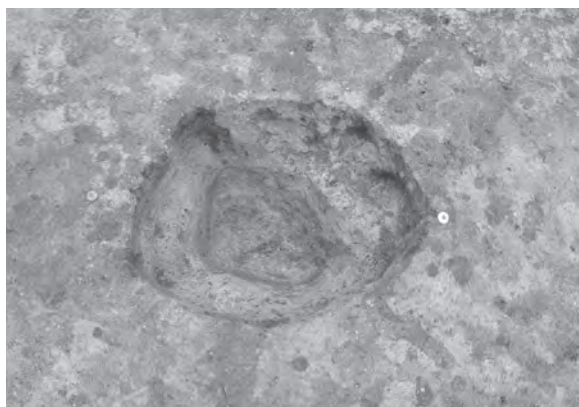
2号炉断面（東から）



PP3完掘（南から）



PP4完掘（東から）



PP12完掘（東から）



PP12断面（東から）

写真図版9 5号竪穴住居跡（3）



5号竖穴住居跡周溝1断面（北から）



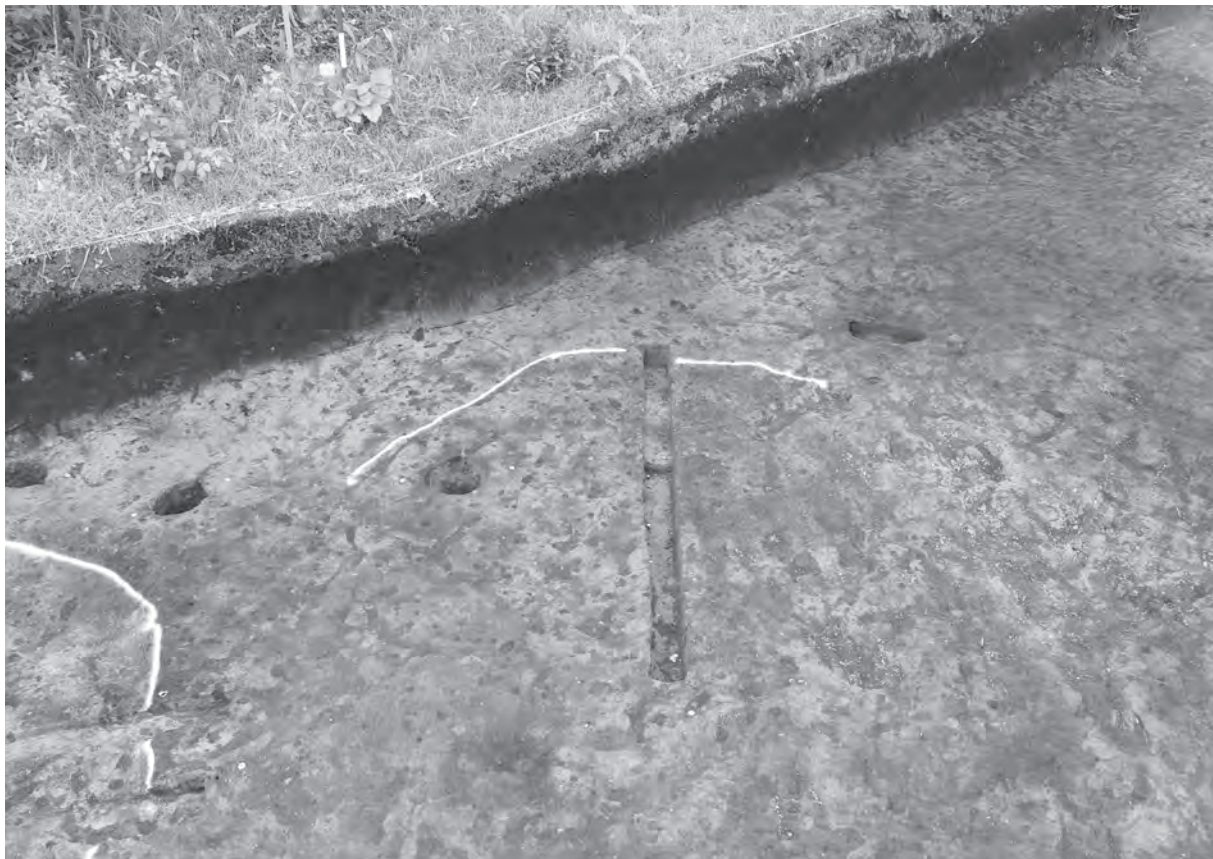
5号竖穴住居跡周溝2断面（南から）



5号竖穴住居跡土坑平面（南から）

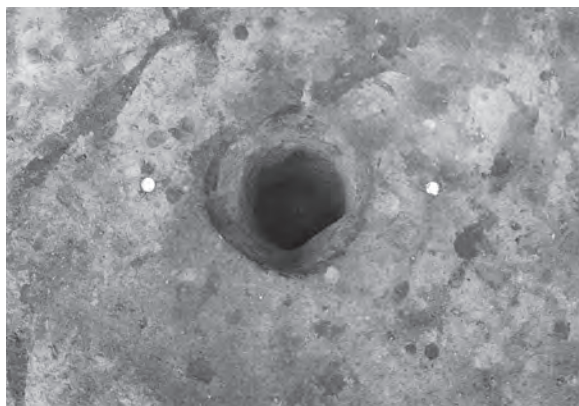


5号竖穴住居跡土坑断面（南から）

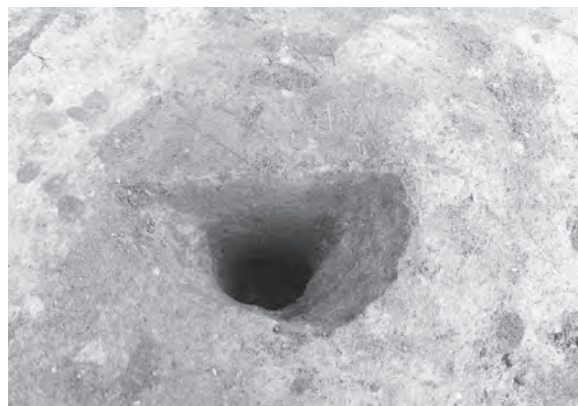


6号竖穴住居跡全景（東から）

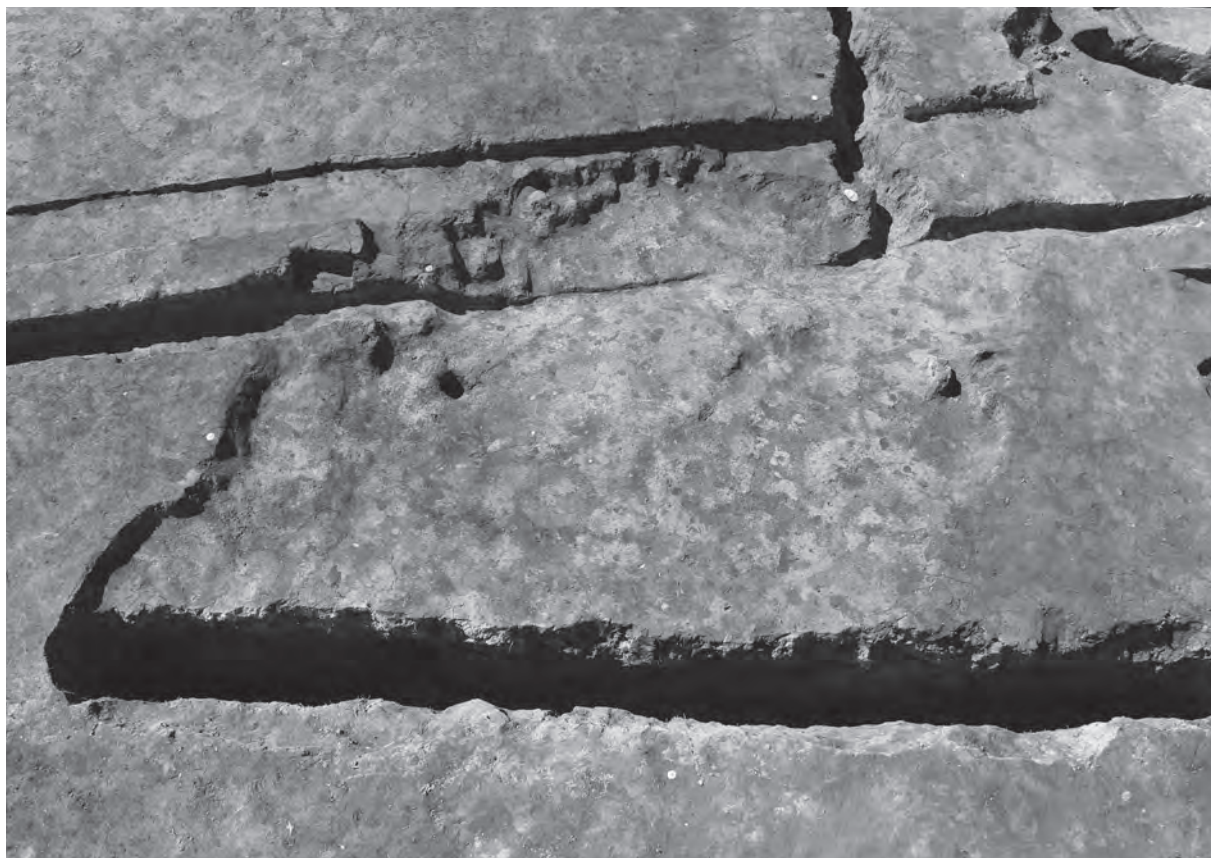
写真図版10 5号竖穴住居跡（4）、6号竖穴住居跡（1）



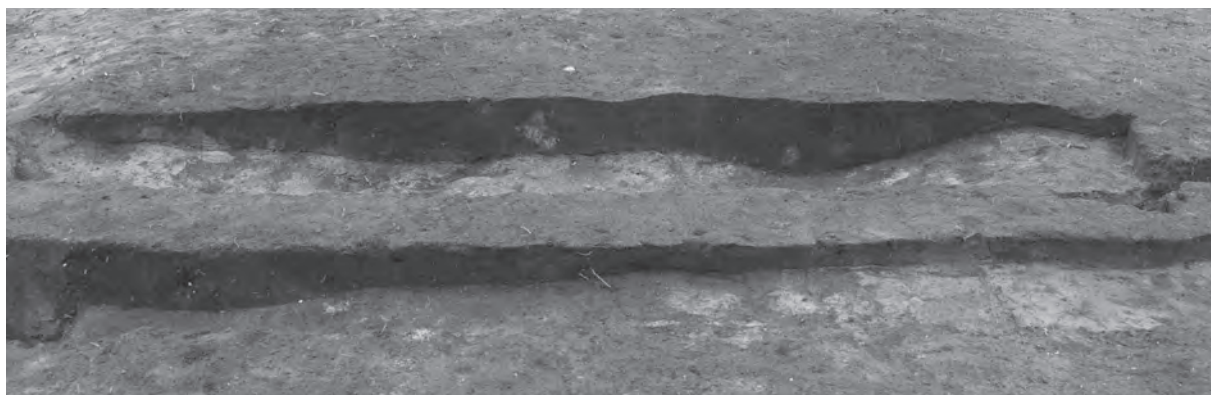
6号竪穴住居跡 PP1 完掘（東から）



6号竪穴住居跡 PP1 断面（東から）



7号竪穴住居跡全景（東から）



7号竪穴住居跡断面（西から）

写真図版11 6号竪穴住居跡（2）、7号竪穴住居跡





全景（東から）

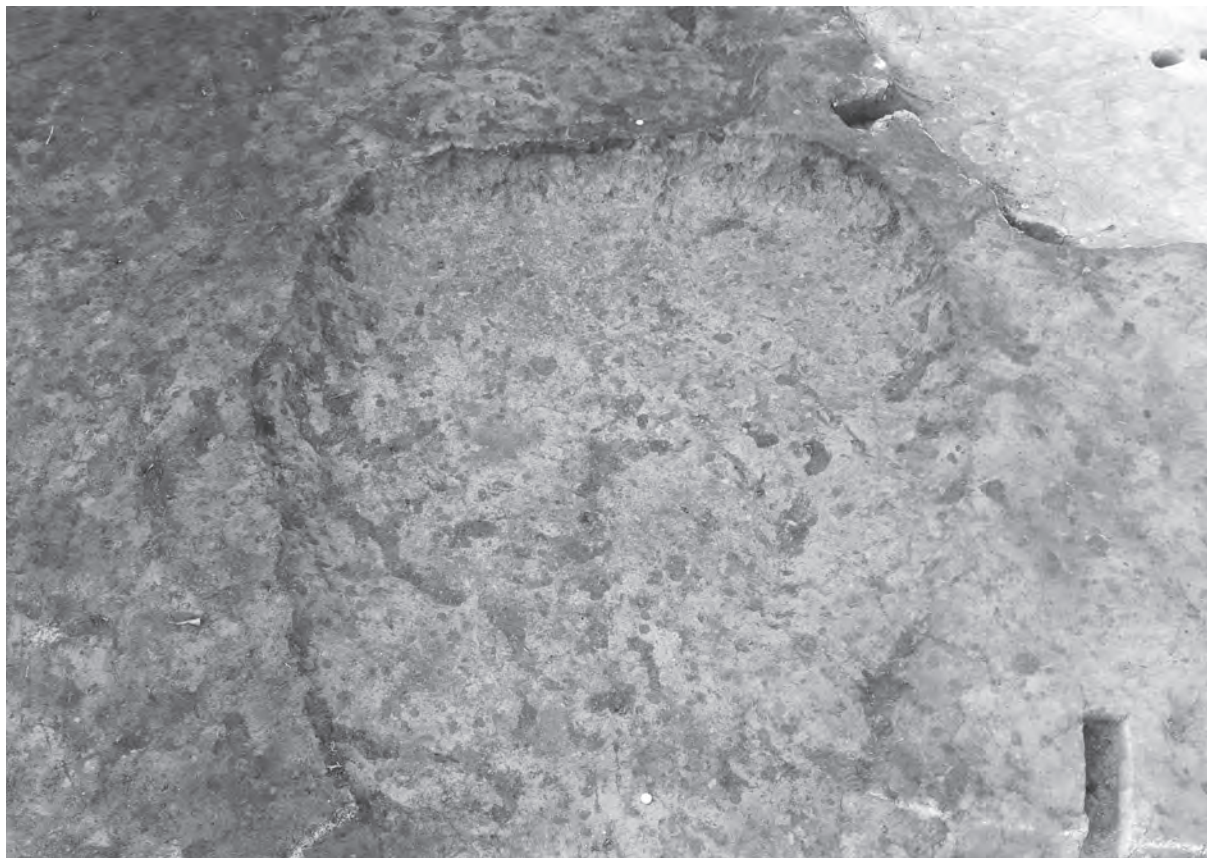


断面（東から）

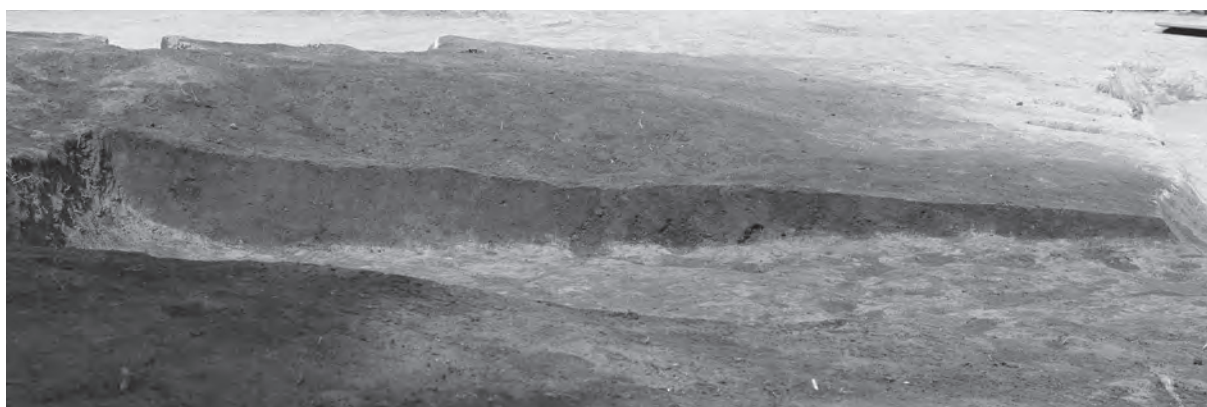


断面（南から）

写真図版12 8号竪穴住居跡

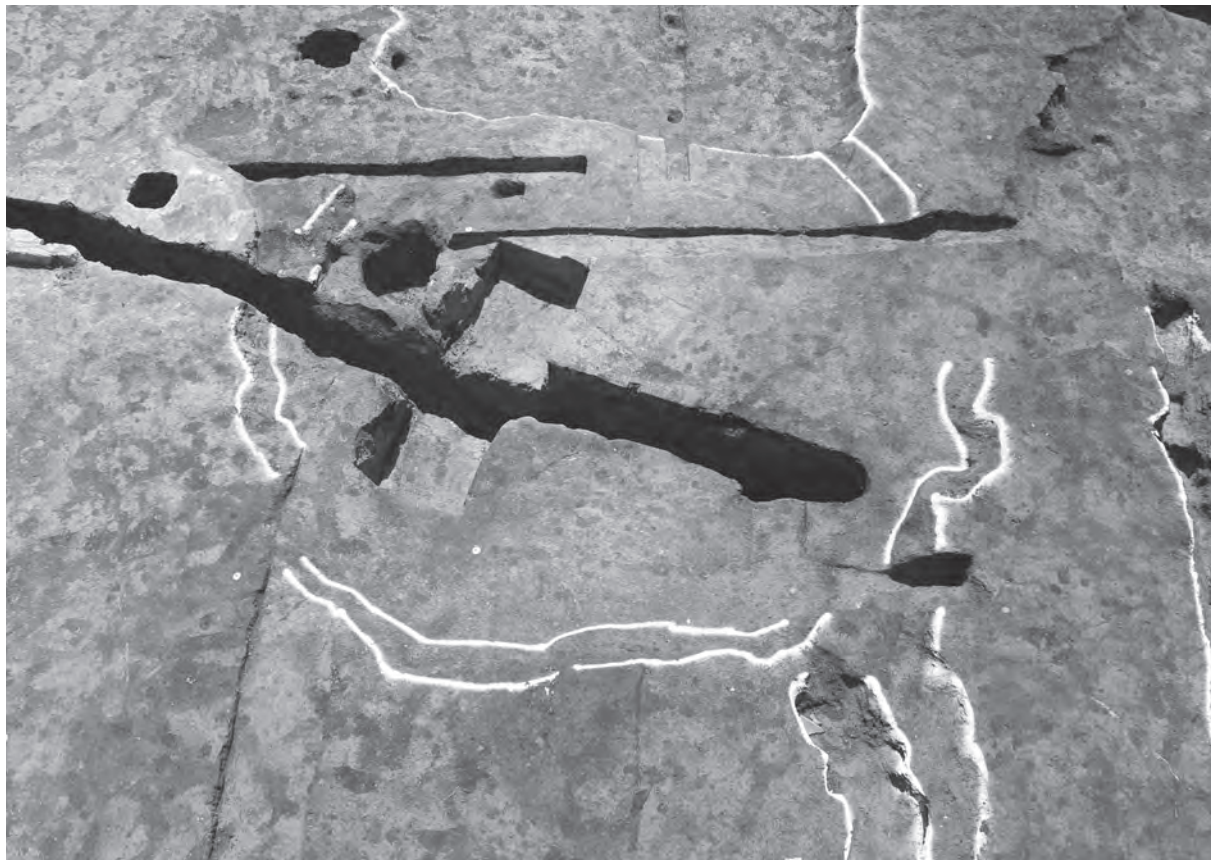


全景（東から）



断面（南から）

写真図版13 9号竪穴住居跡



全景（西から）



断面（東から）



断面（南から）

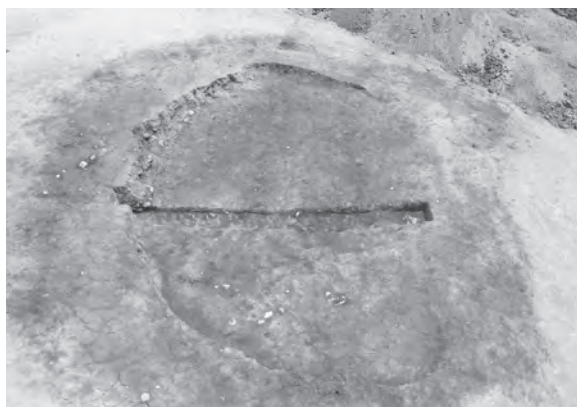
写真図版14 10号竪穴住居跡



全景（東から）



断面（南から）

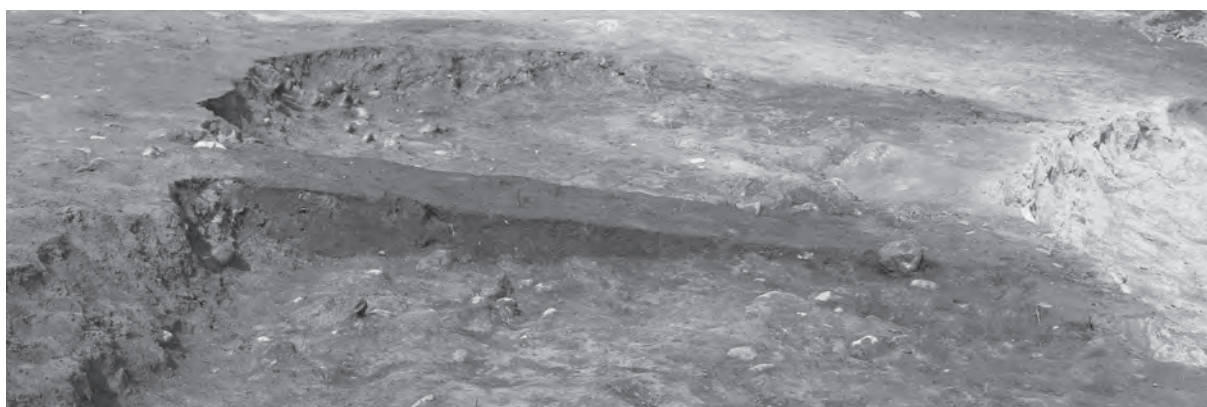


全景（南から）

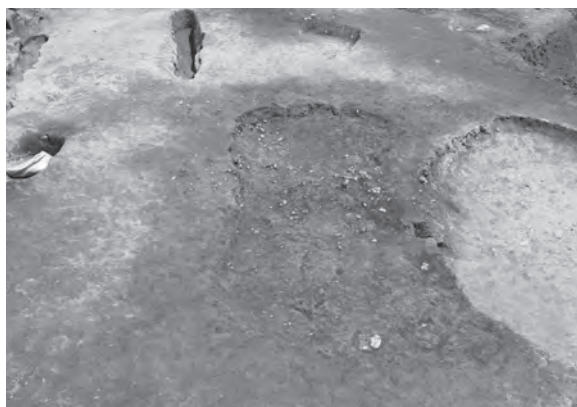
写真図版15 1号住居状遺構



全景（東から）



断面（南から）



全景（南から）

写真図版16 2号住居状遺構



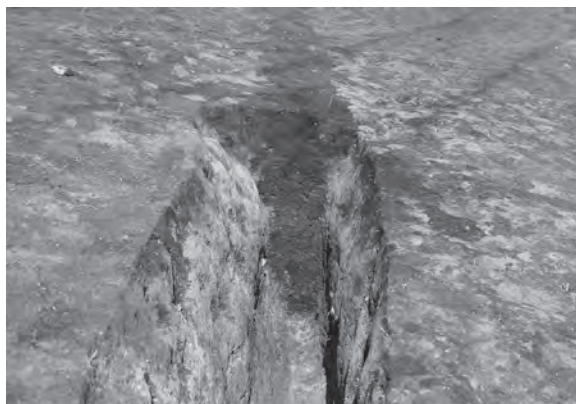
1号陥し穴状遺構完掘（東から）



1号陥し穴状遺構断面（西から）



2号陥し穴状遺構完掘（南から）



2号陥し穴状遺構断面（南から）



3号陥し穴状遺構完掘（西から）



3号陥し穴状遺構断面（西から）



4号陥し穴状遺構完掘（南から）



4号陥し穴状遺構断面（南から）

写真図版17 1～4号陥し穴状遺構



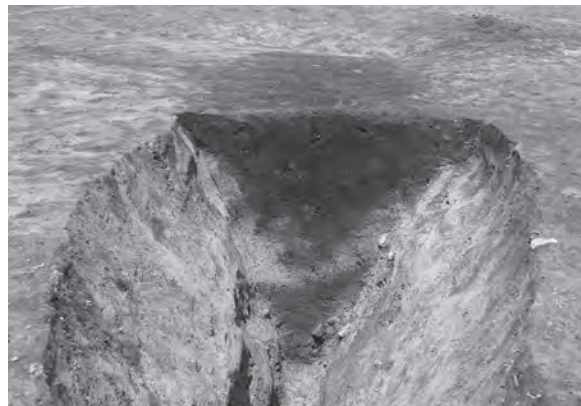
5号陥し穴状遺構完掘（南から）



5号陥し穴状遺構断面（南から）



6号陥し穴状遺構完掘（南から）



6号陥し穴状遺構断面（南から）



7号陥し穴状遺構完掘（南から）



7号陥し穴状遺構断面（南から）



8号陥し穴状遺構完掘（南から）



8号陥し穴状遺構断面（南から）

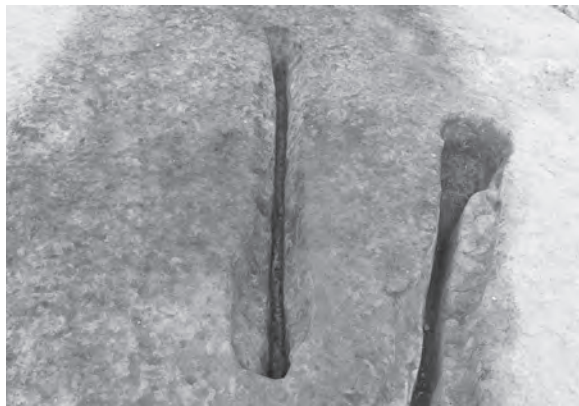
写真図版18 5～8号陥し穴状遺構



9号陥し穴状遺構完掘（東から）



9号陥し穴状遺構断面（東から）



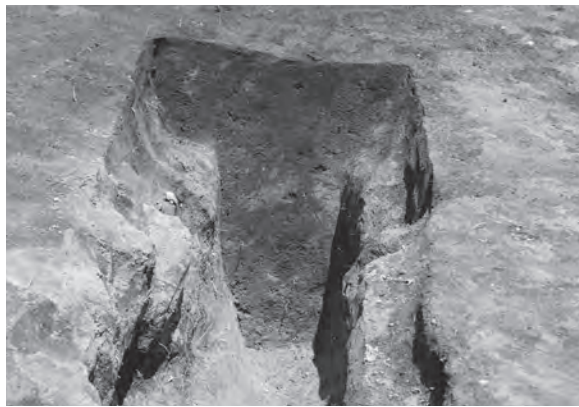
10号陥し穴状遺構完掘（西から）



10号陥し穴状遺構断面（西から）



11号陥し穴状遺構完掘（南から）



11号陥し穴状遺構断面（南から）



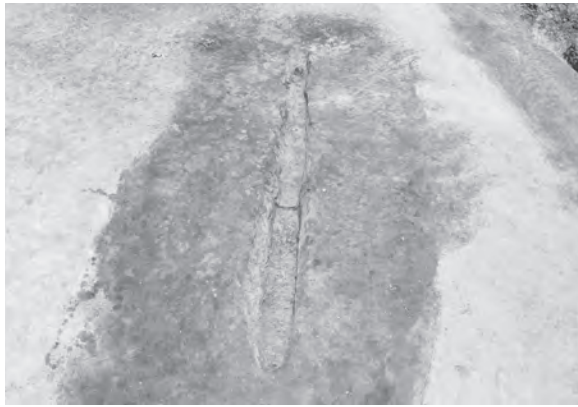
12号陥し穴状遺構完掘（南から）



12号陥し穴状遺構断面（南から）

写真図版19 9～12号陥し穴状遺構





13号陥し穴状遺構完掘（南から）



13号陥し穴状遺構断面（南から）



14号陥し穴状遺構完掘（南から）



14号陥し穴状遺構断面（南から）



15号陥し穴状遺構完掘（北から）



15号陥し穴状遺構断面（南から）



16号陥し穴状遺構完掘（南から）



16号陥し穴状遺構断面（南から）

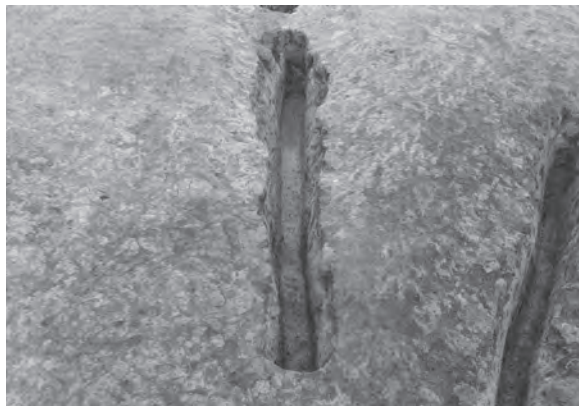
写真図版20 13～16号陥し穴状遺構



17号陥し穴状遺構完掘（北から）



17号陥し穴状遺構断面（南から）



18号陥し穴状遺構完掘（南から）



18号陥し穴状遺構断面（南から）



19号陥し穴状遺構完掘（南から）



19号陥し穴状遺構断面（南から）



20号陥し穴状遺構完掘（南から）



20号陥し穴状遺構断面（南から）

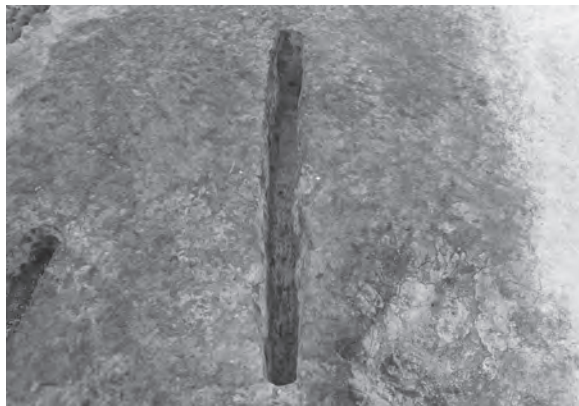
写真図版21 17～20号陥し穴状遺構



21号陥し穴状遺構完掘（南から）



21号陥し穴状遺構断面（南から）



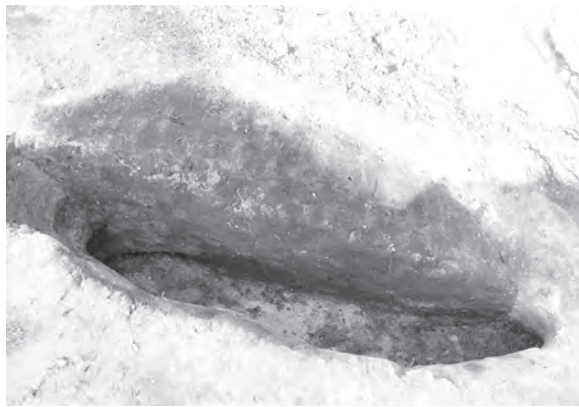
22号陥し穴状遺構完掘（南から）



22号陥し穴状遺構断面（南から）



23号陥し穴状遺構完掘（西から）



23号陥し穴状遺構断面（西から）



24号陥し穴状遺構完掘（南から）



24号陥し穴状遺構断面（南から）

写真図版22 21～24号陥し穴状遺構



25号陥し穴状遺構完掘（南から）



25号陥し穴状遺構断面（南から）



26号陥し穴状遺構完掘（南から）



26号陥し穴状遺構断面（南から）



27号陥し穴状遺構完掘（南から）



27号陥し穴状遺構断面（南から）



28号陥し穴状遺構完掘（南から）



28号陥し穴状遺構断面（南から）

写真図版23 25～28号陥し穴状遺構



29号陥し穴状遺構完掘（東から）



29号陥し穴状遺構断面（西から）



30号陥し穴状遺構完掘（北から）



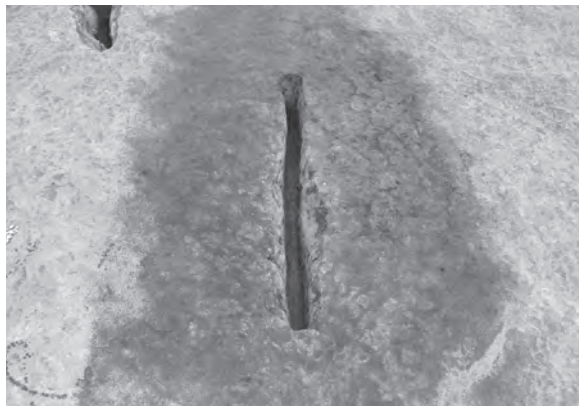
30号陥し穴状遺構断面（北から）



31号陥し穴状遺構完掘（南から）



31号陥し穴状遺構断面（南から）



32号陥し穴状遺構完掘（南から）



32号陥し穴状遺構断面（南から）

写真図版24 29～32号陥し穴状遺構



33号陥し穴状遺構完掘 (南から)



33号陥し穴状遺構断面 (南から)



34号陥し穴状遺構完掘 ((南から)



34号陥し穴状遺構穴断面 (南から)



35号陥し穴状遺構完掘 (南から)



35号陥し穴状遺構断面 (南から)



36号陥し穴状遺構完掘 (南から)



36号陥し穴状遺構断面 (南から)

写真図版25 33~36号陥し穴状遺構



37号陥し穴状遺構完掘（南から）



37号陥し穴状遺構断面（南から）



38号陥し穴状遺構完掘（南から）



38号陥し穴状遺構断面（南から）



39号陥し穴状遺構完掘（南から）



39号陥し穴状遺構断面（南から）



40号陥し穴状遺構完掘（南から）



40号陥し穴状遺構断面（南から）

写真図版26 37～40号陥し穴状遺構



41号陥し穴状遺構完掘（南から）



41号陥し穴状遺構断面（南から）



42号陥し穴状遺構完掘（南から）



42号陥し穴状遺構断面（南から）



43号陥し穴状遺構完掘（南から）



43号陥し穴状遺構断面（南から）



44号陥し穴状遺構完掘（南から）



44号陥し穴状遺構断面（南から）

写真図版27 41～44号陥し穴状遺構





45号陥し穴状遺構完掘（南から）



45号陥し穴状遺構断面（南から）



46号陥し穴状遺構完掘（南から）



46号陥し穴状遺構断面（南から）



47号陥し穴状遺構完掘（東から）



47号陥し穴状遺構断面（東から）

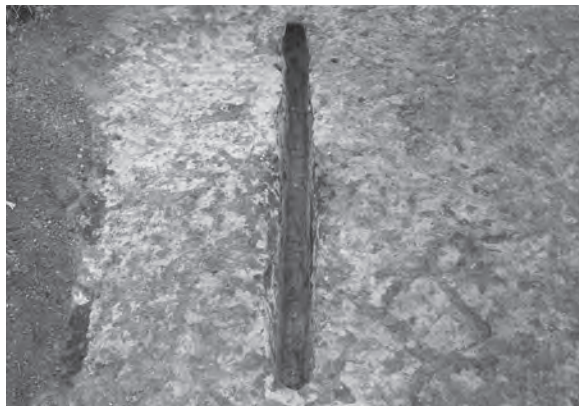


48号陥し穴状遺構完掘（南から）



48号陥し穴状遺構断面（南から）

写真図版28 45～48号陥し穴状遺構



49号陥し穴状遺構完掘（南から）



49号陥し穴状遺構断面（南から）



50号陥し穴状遺構完掘（南から）



50号陥し穴状遺構断面（南から）



51号陥し穴状遺構完掘（南から）



51号陥し穴状遺構断面（南から）



52号陥し穴状遺構完掘（南から）



52号陥し穴状遺構断面（南から）

写真図版29 49～52号陥し穴状遺構



53号陥し穴状遺構完掘（南から）



53号陥し穴状遺構断面（南から）



54号陥し穴状遺構完掘（南から）



54号陥し穴状遺構断面（南から）



55号陥し穴状遺構完掘（南から）



55号陥し穴状遺構断面（南から）



56号陥し穴状遺構完掘（南から）



56号陥し穴状遺構断面（南から）

写真図版30 53～56号陥し穴状遺構



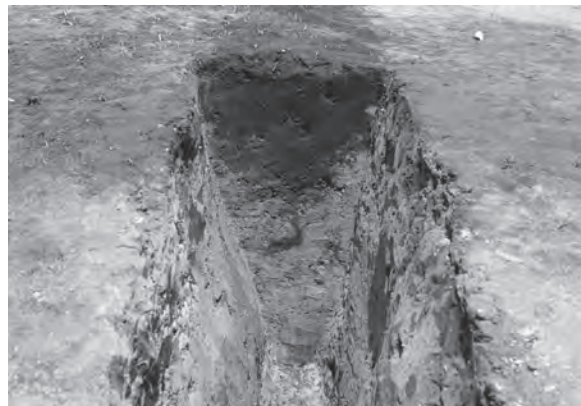
57号陥し穴状遺構完掘（南から）



57号陥し穴状遺構断面（南から）



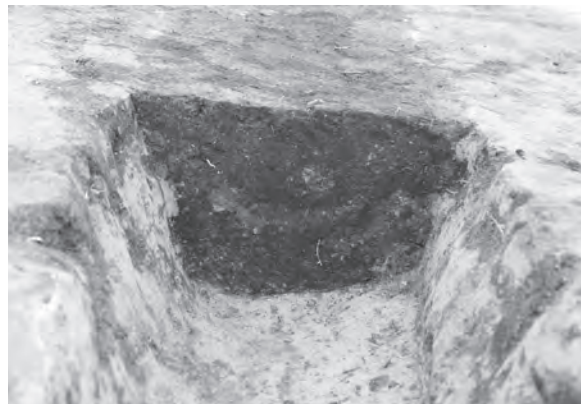
58号陥し穴状遺構完掘（南から）



58号陥し穴状遺構断面（南から）



59号陥し穴状遺構完掘（南から）



59号陥し穴状遺構断面（南から）



60号陥し穴状遺構完掘（南から）



60号陥し穴状遺構断面（南から）

写真図版31 57～60号陥し穴状遺構



61号陥し穴状遺構完掘（南から）



61号陥し穴状遺構断面（南から）



62号陥し穴状遺構完掘（南から）



62号陥し穴状遺構断面（南から）



63号陥し穴状遺構完掘（南から）



63号陥し穴状遺構断面（南から）

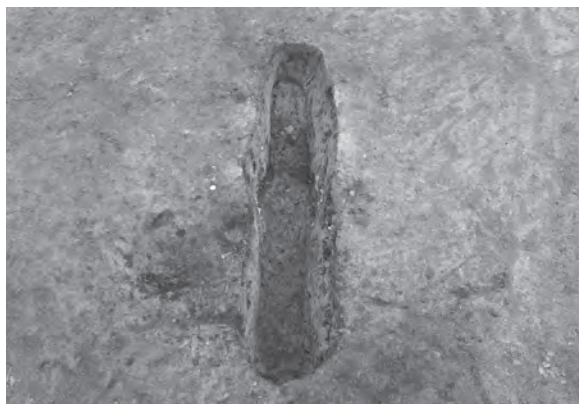


64号陥し穴状遺構完掘（南から）



64号陥し穴状遺構断面（南から）

写真図版32 61～64号陥し穴状遺構



65号陥し穴状遺構完掘（南から）



65号陥し穴状遺構断面（南から）



66号陥し穴状遺構完掘（南から）



66号陥し穴状遺構断面（南から）



67号陥し穴状遺構完掘（南から）



67号陥し穴状遺構断面（南から）



68号陥し穴状遺構完掘（南から）



68号陥し穴状遺構断面（南から）

写真図版33 65～68号陥し穴状遺構



69号陥し穴状遺構完掘（南から）



69号陥し穴状遺構断面（南から）



70号陥し穴状遺構完掘（南から）



70号陥し穴状遺構断面（南から）



71号陥し穴状遺構完掘（南から）

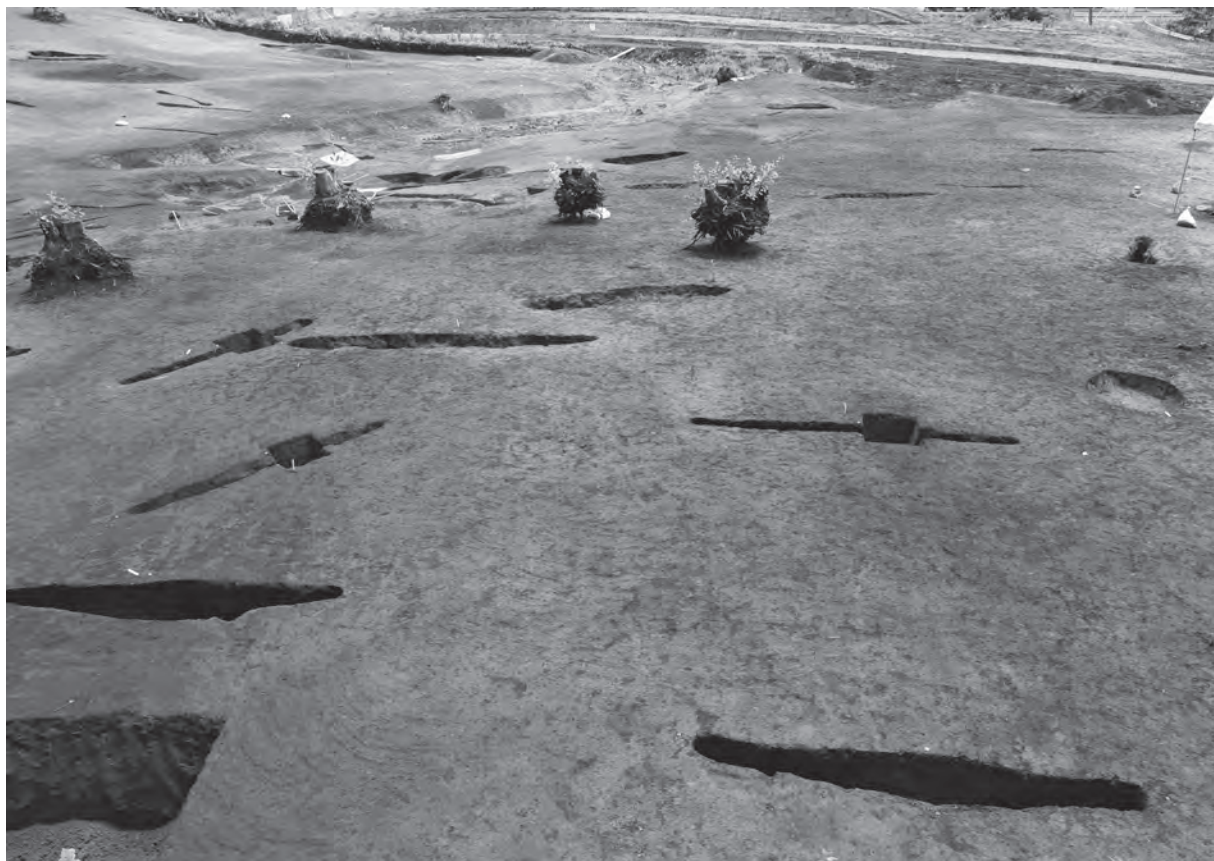


71号陥し穴状遺構断面（南から）

写真図版34 69～71号陥し穴状遺構



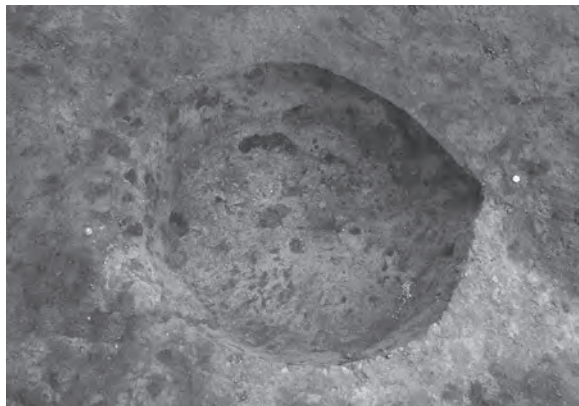
陥し穴状遺構群全景1 (西から)



陥し穴状遺構群全景2 (西から)

写真図版35 陥し穴状遺構群

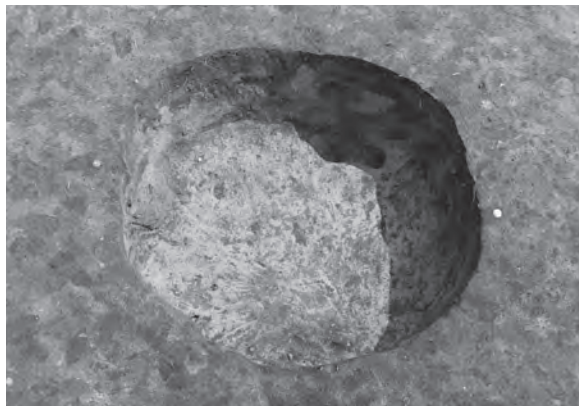




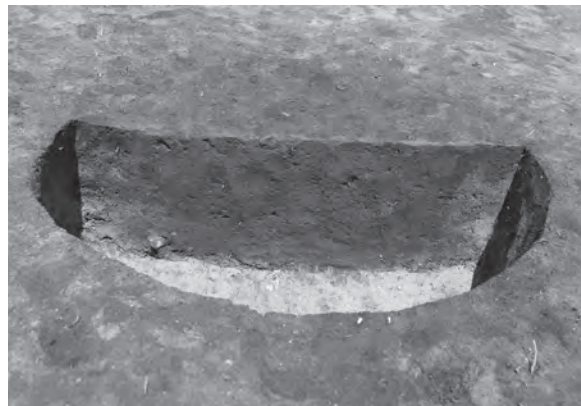
1号土坑完掘（南から）



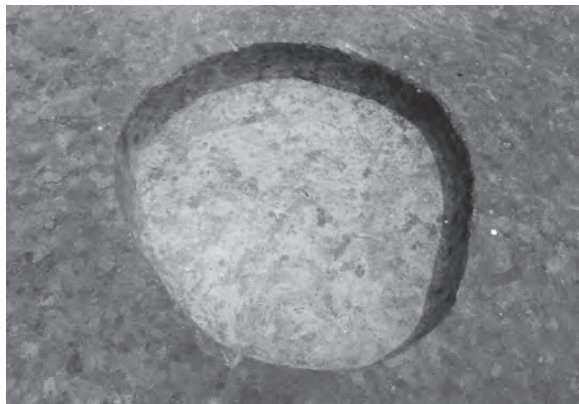
1号土坑断面（南から）



2号土坑完掘（南から）



2号土坑断面（南から）

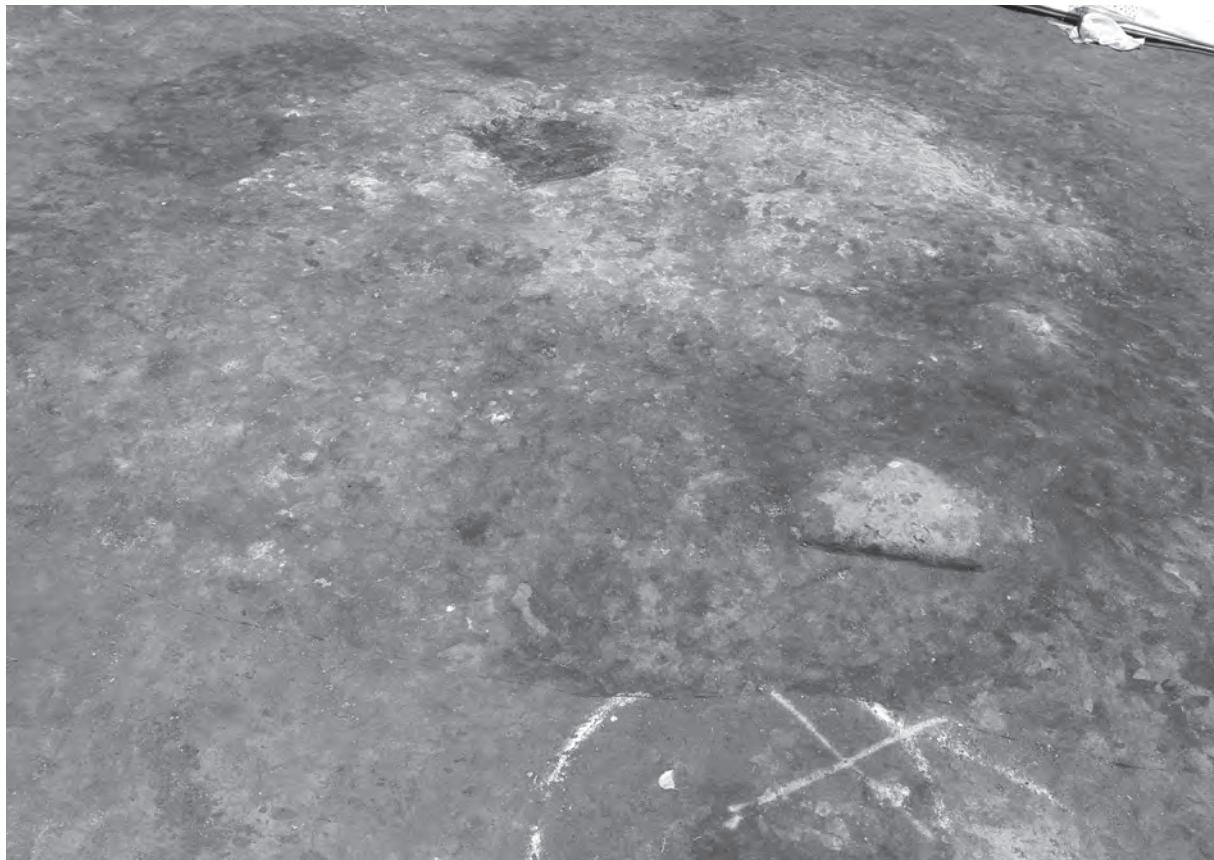


3号土坑完掘（南から）

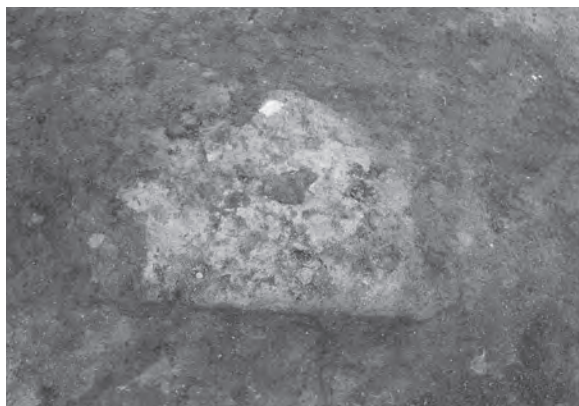


3号土坑断面（西から）

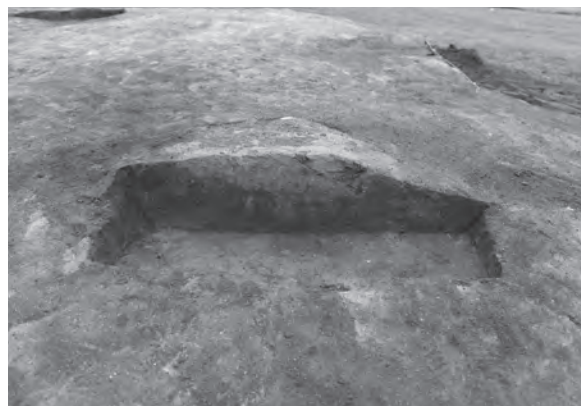
写真図版36 1～3号土坑



1～6号焼土遺構T o-C uテフラ上面に点在する焼土遺構全景（南から）



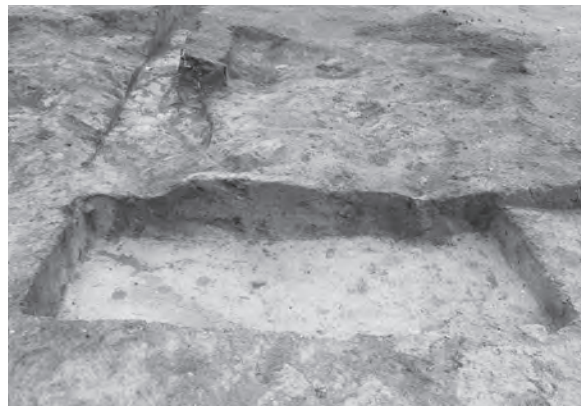
1号焼土遺構平面（南から）



1号焼土遺構断面（南から）

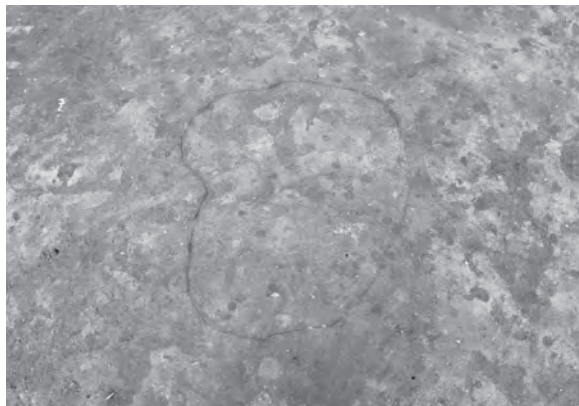


7号焼土遺構平面（南から）



7号焼土遺構断面（南から）

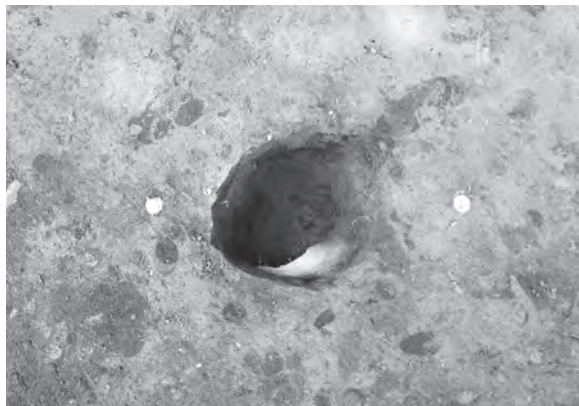
写真図版37 A区焼土遺構群



8号焼土遺構平面（東から）



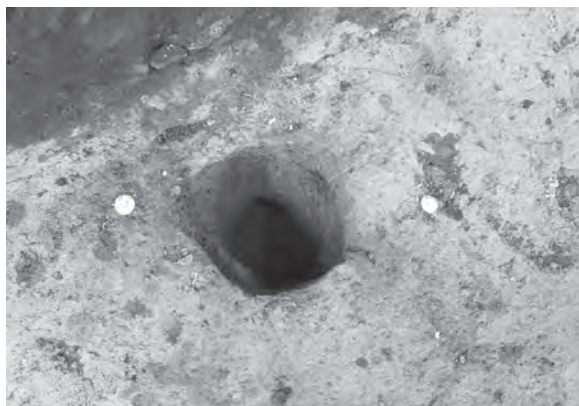
8号焼土遺構断面（南から）



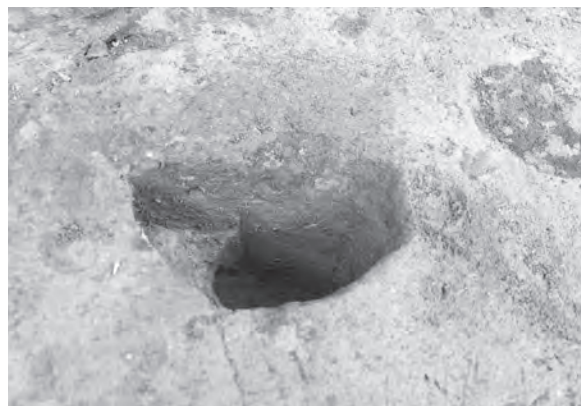
1号柱穴状土坑完掘（東から）



1号柱穴状土坑断面（東から）



2号柱穴状土坑完掘（東から）



2号柱穴状土坑断面（東から）



現地説明会



現地説明会 竪穴住居跡の規模を解説する様子

写真図版38 8号焼土遺構、1・2号柱穴状土坑、現地説明会（1）



現地説明会



現地説明会



作業風景



作業風景



作業風景



作業風景



作業風景



作業風景

写真図版39 現地説明会（2）、作業風景



検出状況（南から）



検出状況（北から）

写真図版40 芦ヶ沢Ⅱ遺跡検出状況



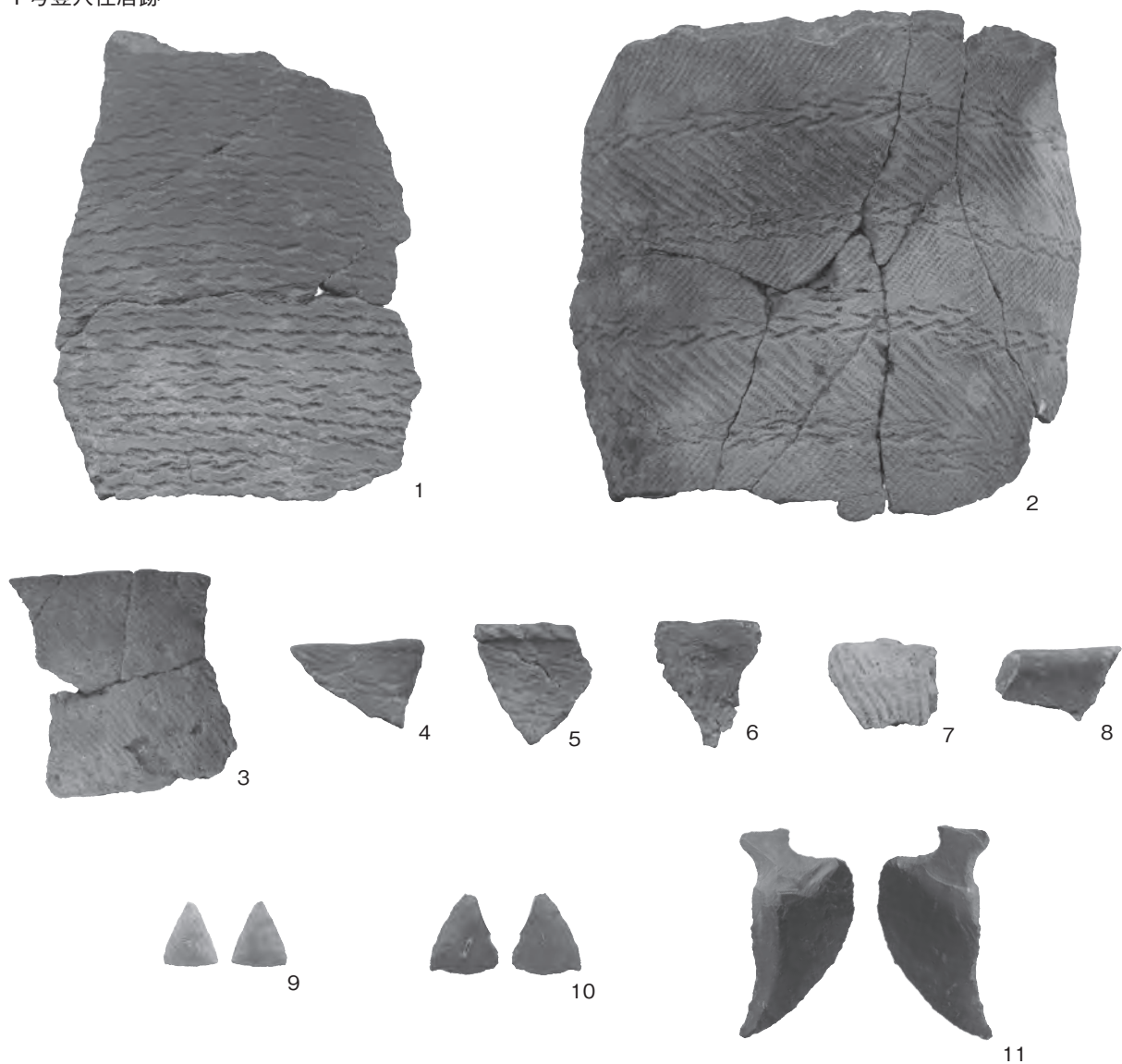
基本層序 A 地点 (東から)



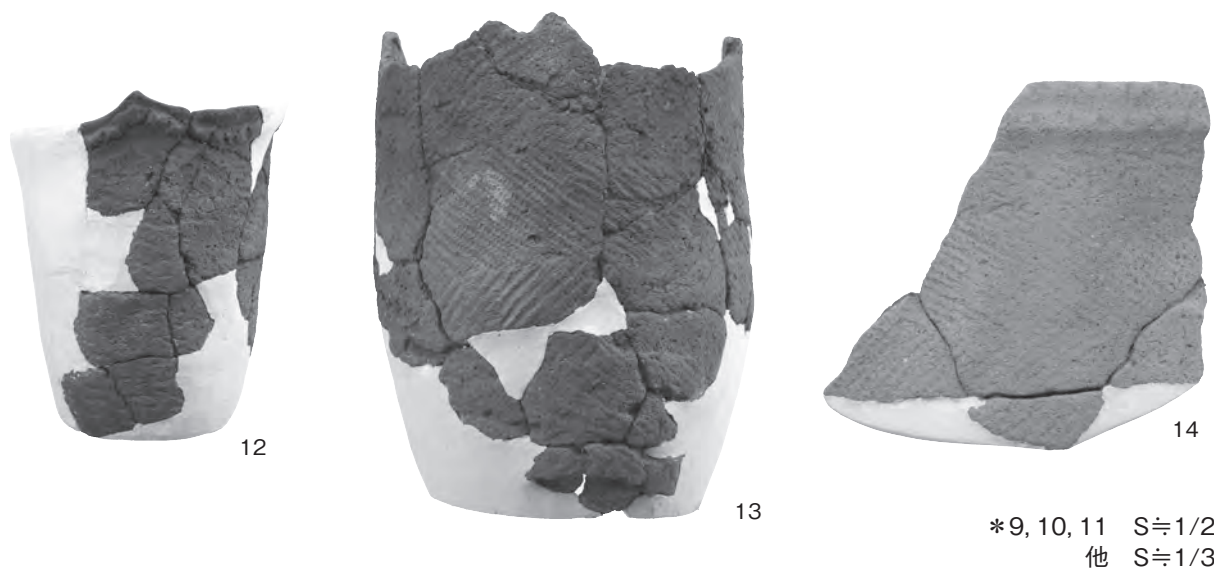
基本層序 B 地点 (西から)

写真図版41 芦ヶ沢Ⅱ遺跡基本層序

1号竖穴住居跡

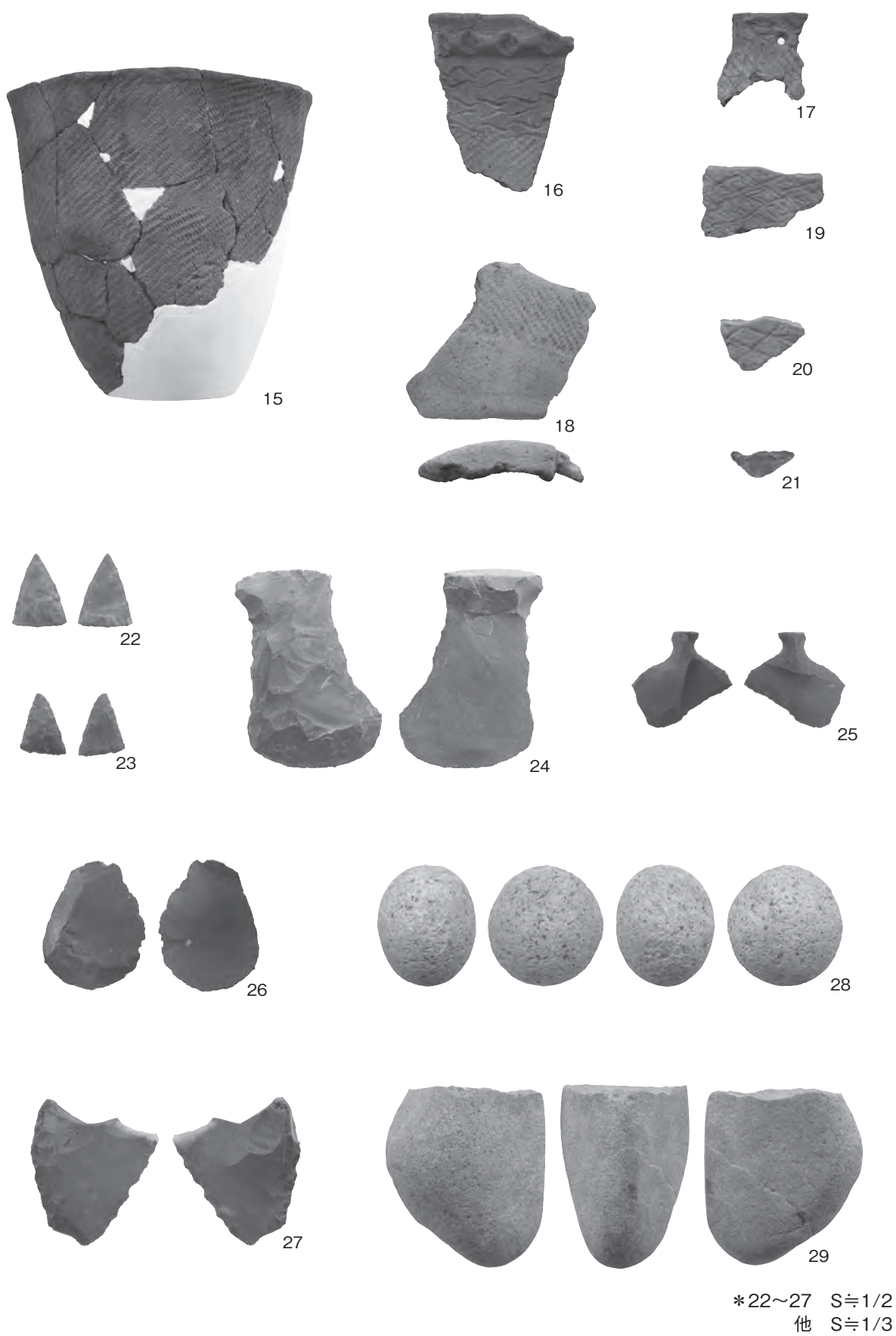


2号竖穴住居跡



写真図版42 1号竖穴住居跡出土遺物、2号竖穴住居跡出土遺物(1)

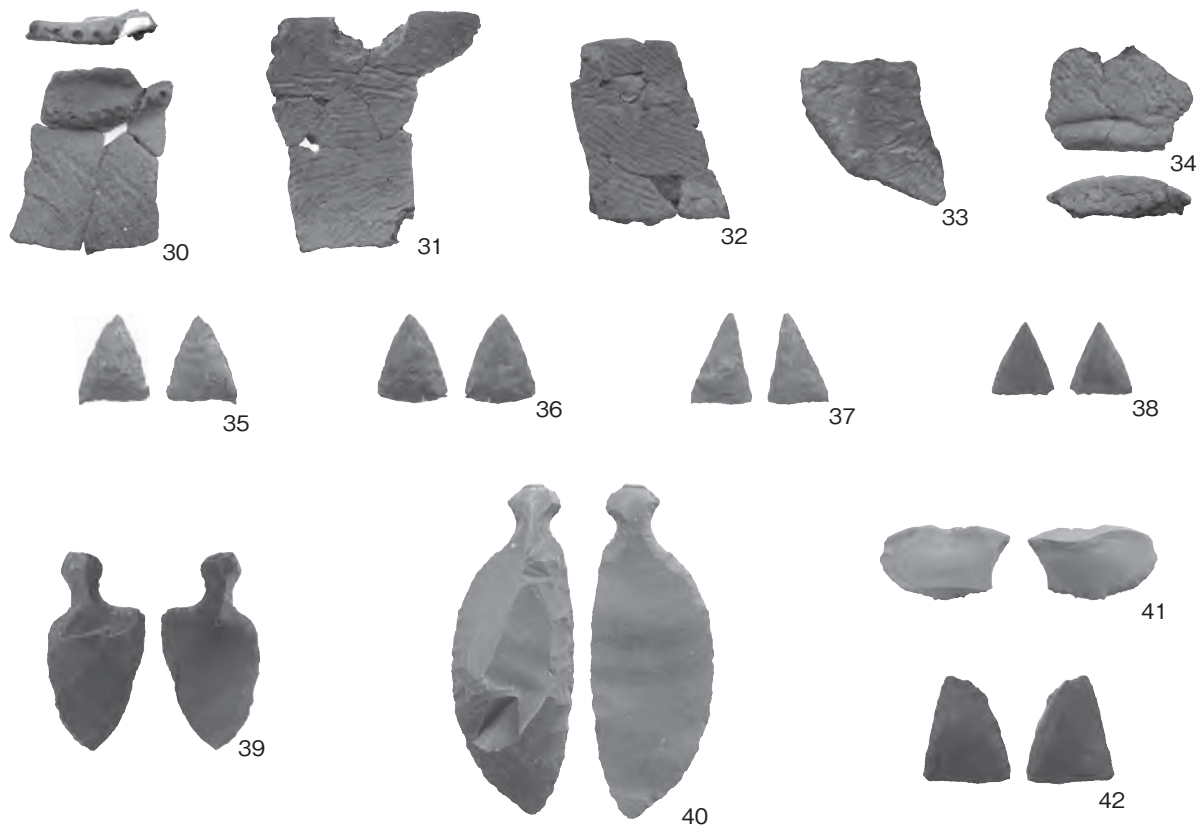
2号竖穴住居跡



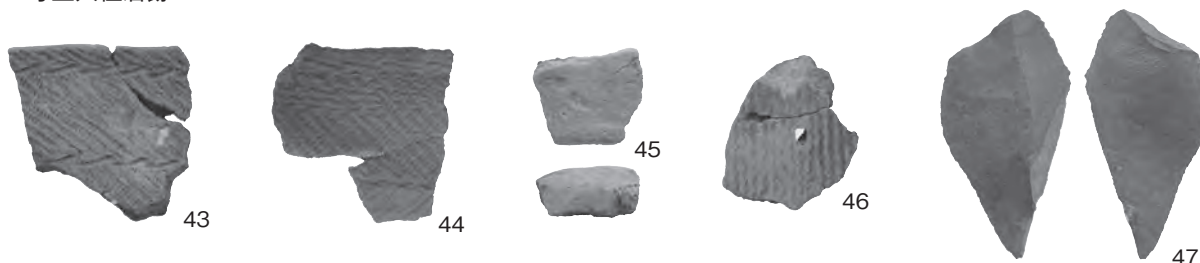
写真図版43 2号竖穴住居跡出土遺物 (2)



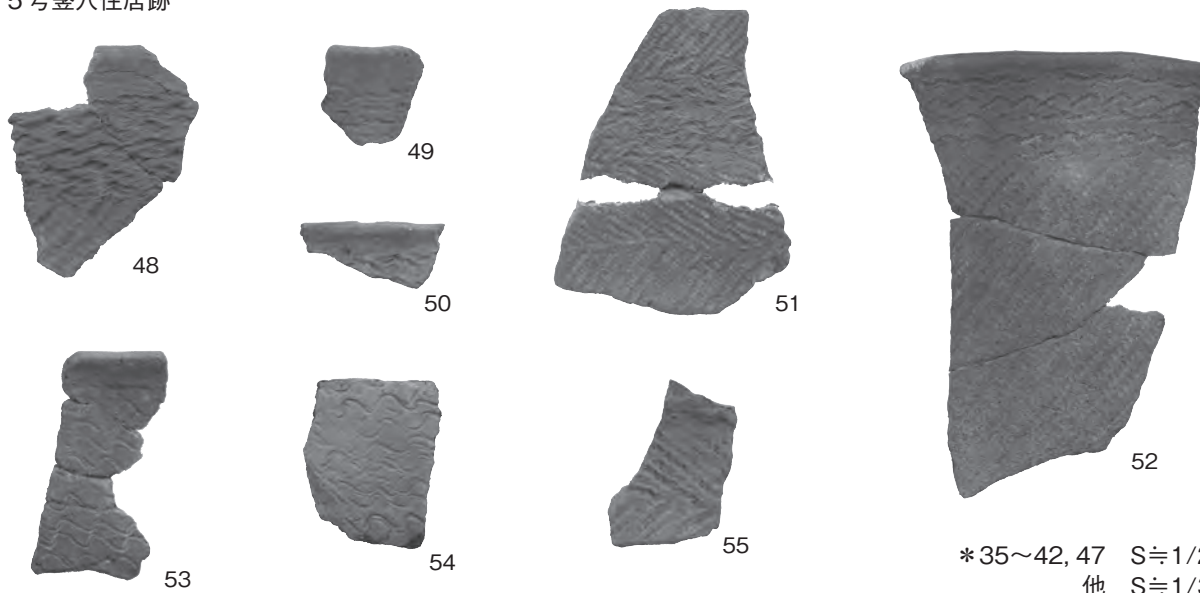
3号竖穴住居跡



4号竖穴住居跡



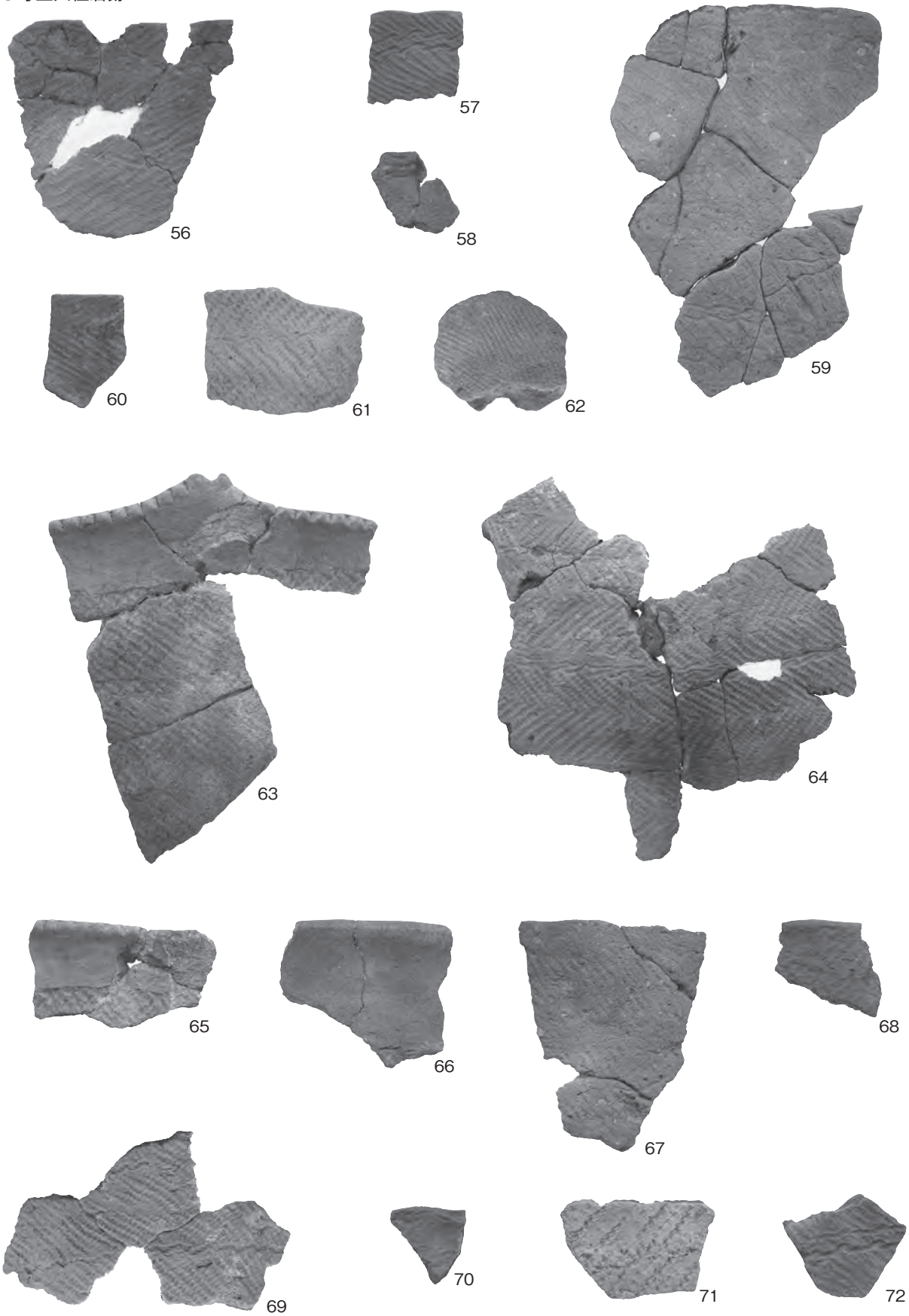
5号竖穴住居跡



\*35~42, 47 S≐1/2  
他 S≐1/3

写真図版44 3・4号竖穴住居跡出土遺物、5号竖穴住居跡出土遺物(1)

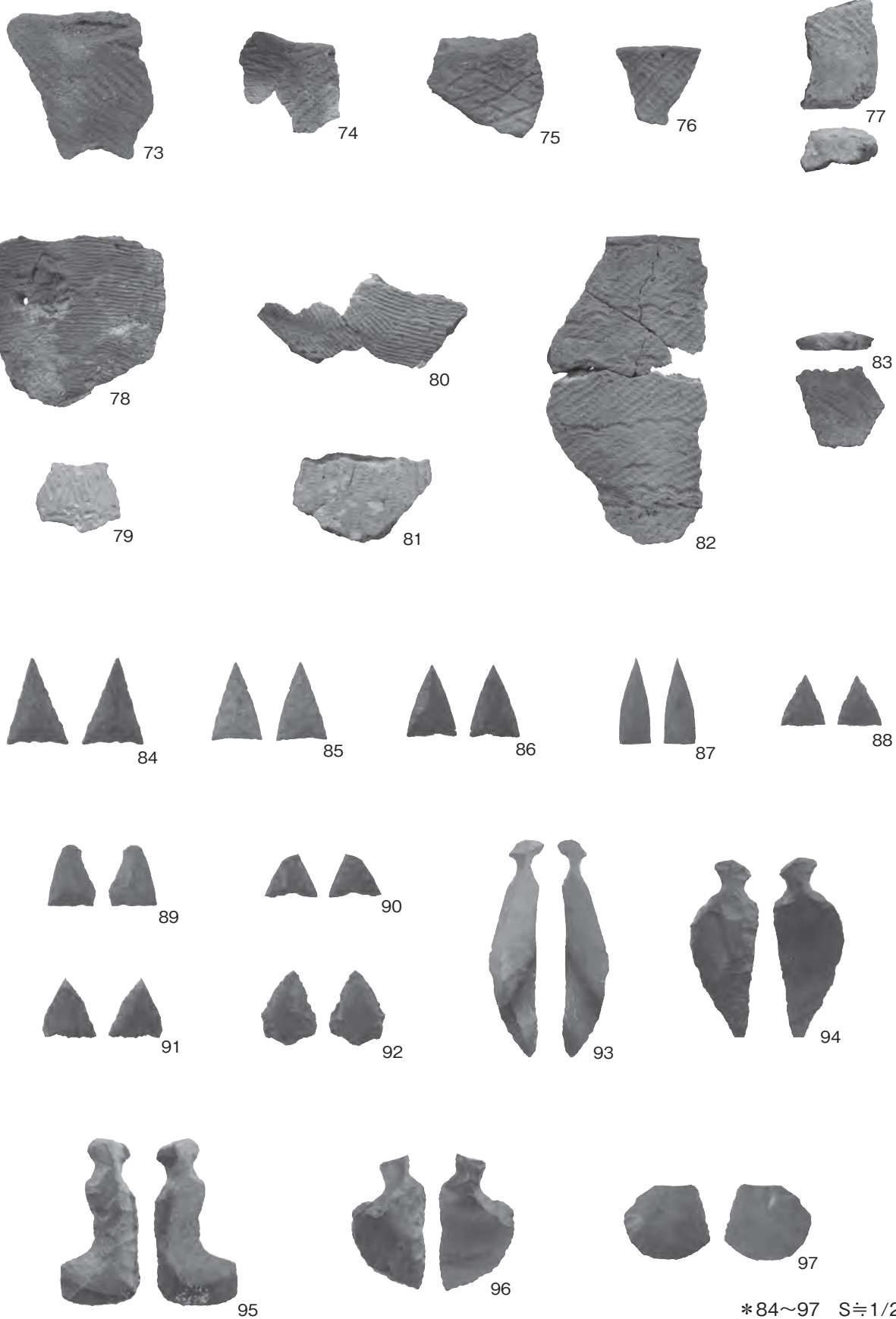
5号竖穴住居跡



S ≐ 1/3

写真図版45 5号竖穴住居跡出土遺物 (2)

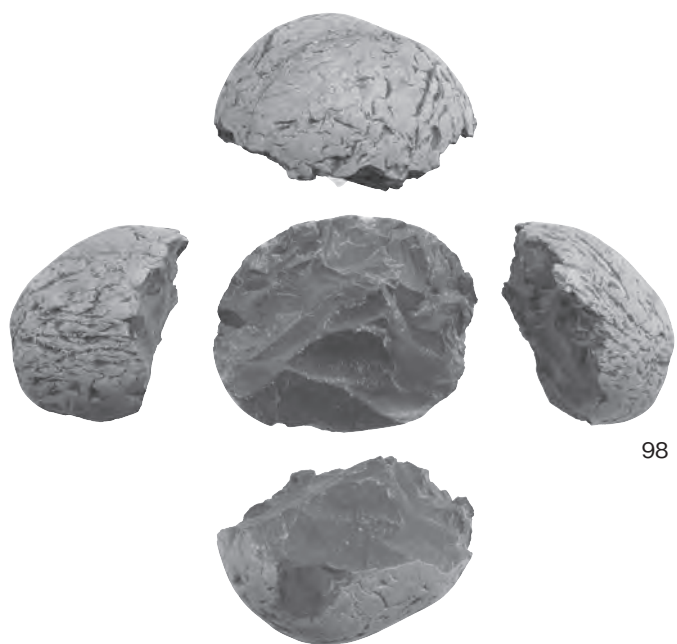
5号竖穴住居跡



\*84~97 S≐1/2  
他 S≐1/3

写真図版46 5号竖穴住居跡出土遺物 (3)

5号豎穴住居跡



98



99



100

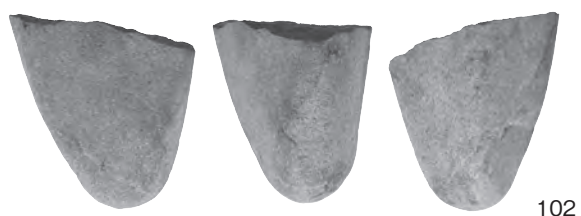


101

\*98 S≐1/2  
他 S≐1/3

写真図版47 5号豎穴住居跡出土遺物（4）

5号竖穴住居跡



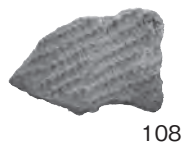
S≐1/3

写真図版48 5号竖穴住居跡出土遺物(5)

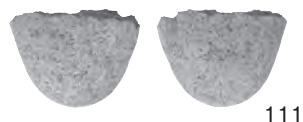
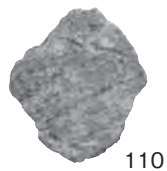
5号竖穴住居跡



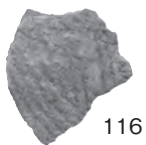
6号竖穴住居跡



7号竖穴住居跡



8号竖穴住居跡



S≒1/3

写真図版49 5号竖穴住居跡出土遺物(6)、6・7号竖穴住居跡出土遺物、8号竖穴住居跡出土遺物(1)

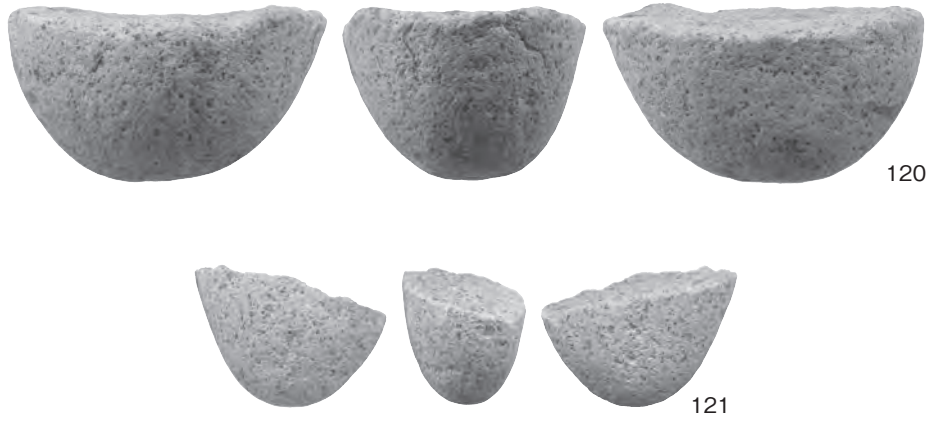
8号竖穴住居跡



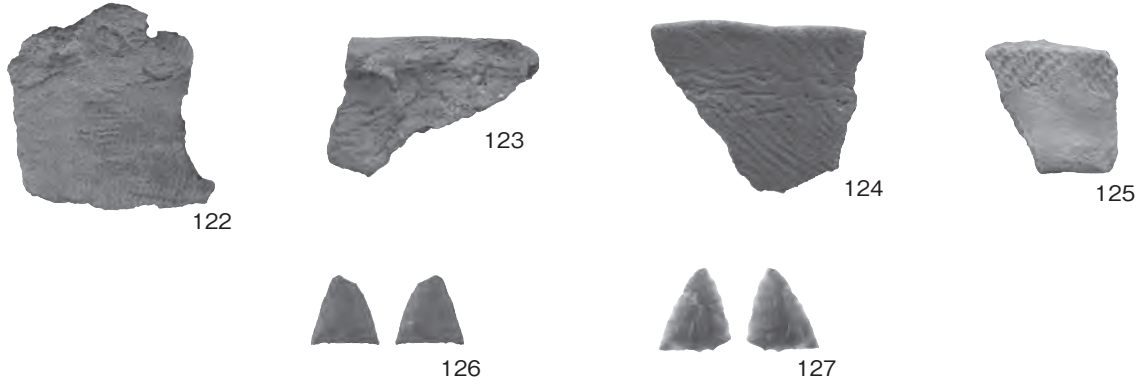
S=1/4

写真図版50 8号竖穴住居跡出土遺物(2)

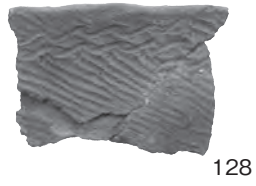
8号竖穴住居跡



9号竖穴住居跡



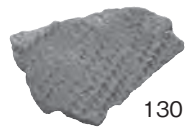
10号竖穴住居跡



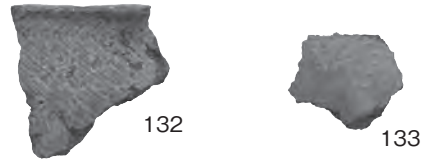
1号住居状遺構



2号住居状遺構



5号陥し穴状遺構

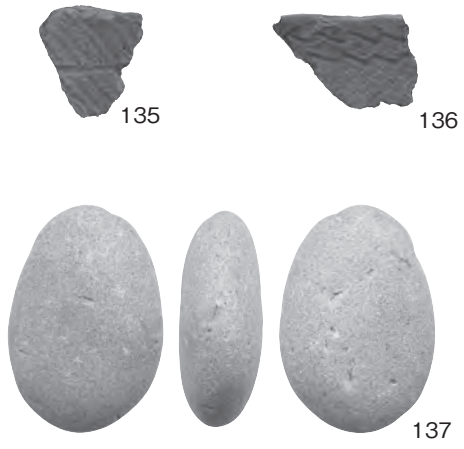


\* 126, 127 S ≒ 1/2  
他 S ≒ 1/3

写真図版51 8～10号竖穴住居跡出土遺物、1・2号住居状遺構出土遺物、陥し穴状遺構出土遺物（1）



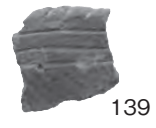
6号陥し穴状遺構



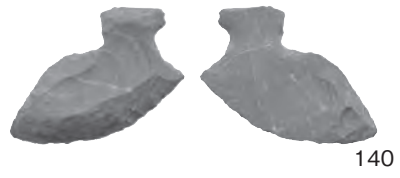
8号陥し穴状遺構



10号陥し穴状遺構



15号陥し穴状遺構



26号陥し穴状遺構



35号陥し穴状遺構



71号陥し穴状遺構



1号土坑



2号土坑

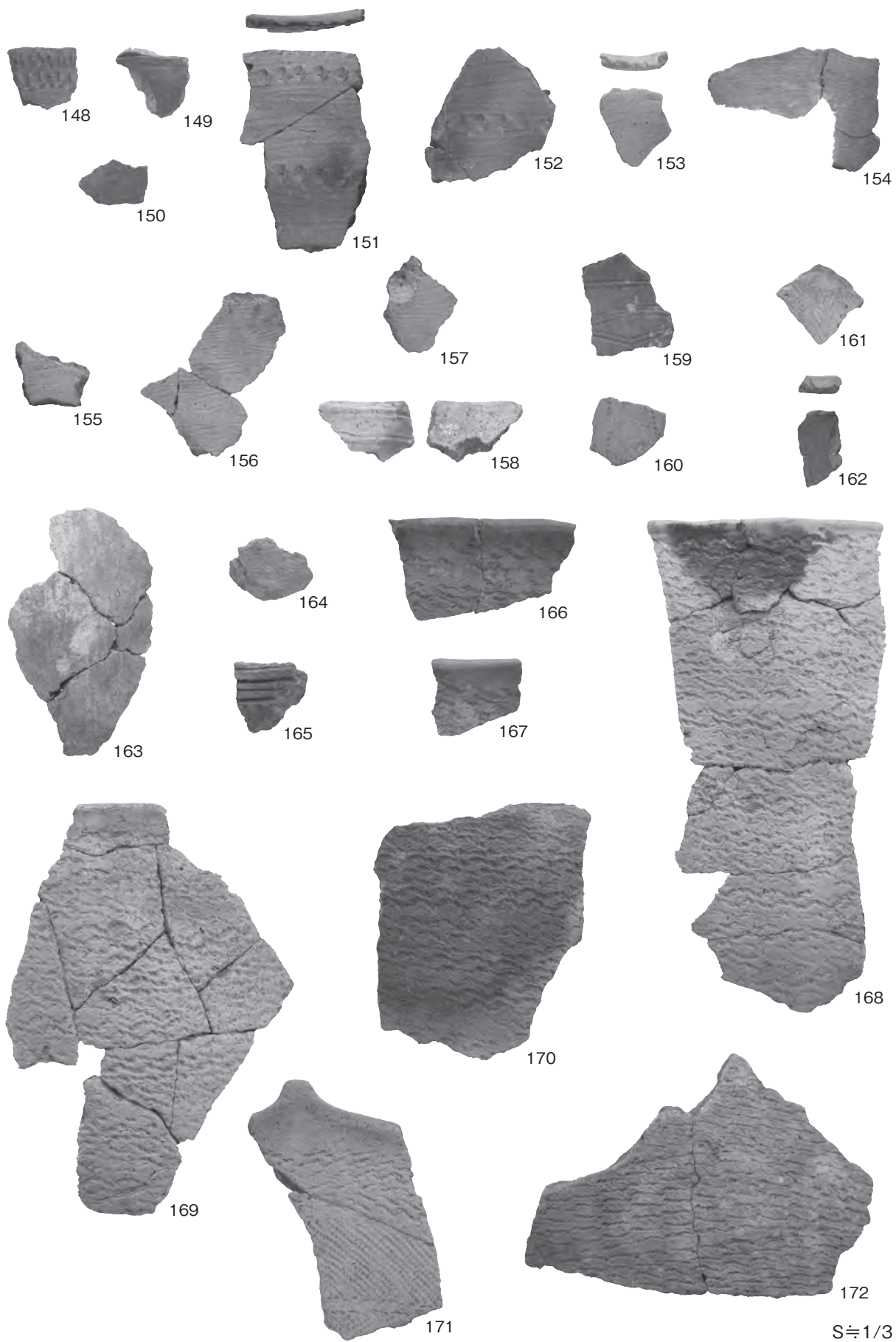


Ⅲ B 1j グリッド

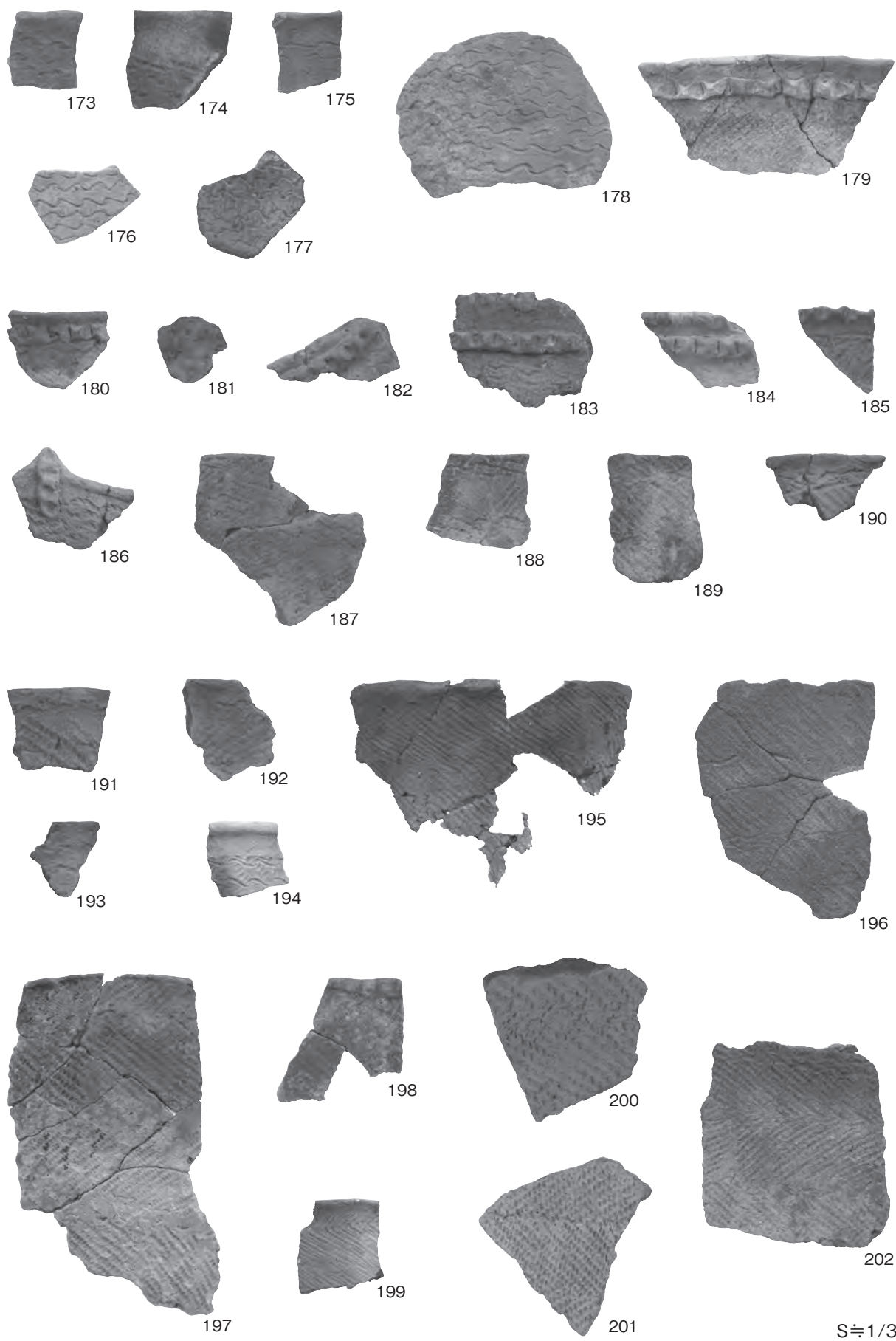


\* 140, 145 S≒1/2  
他 S≒1/3

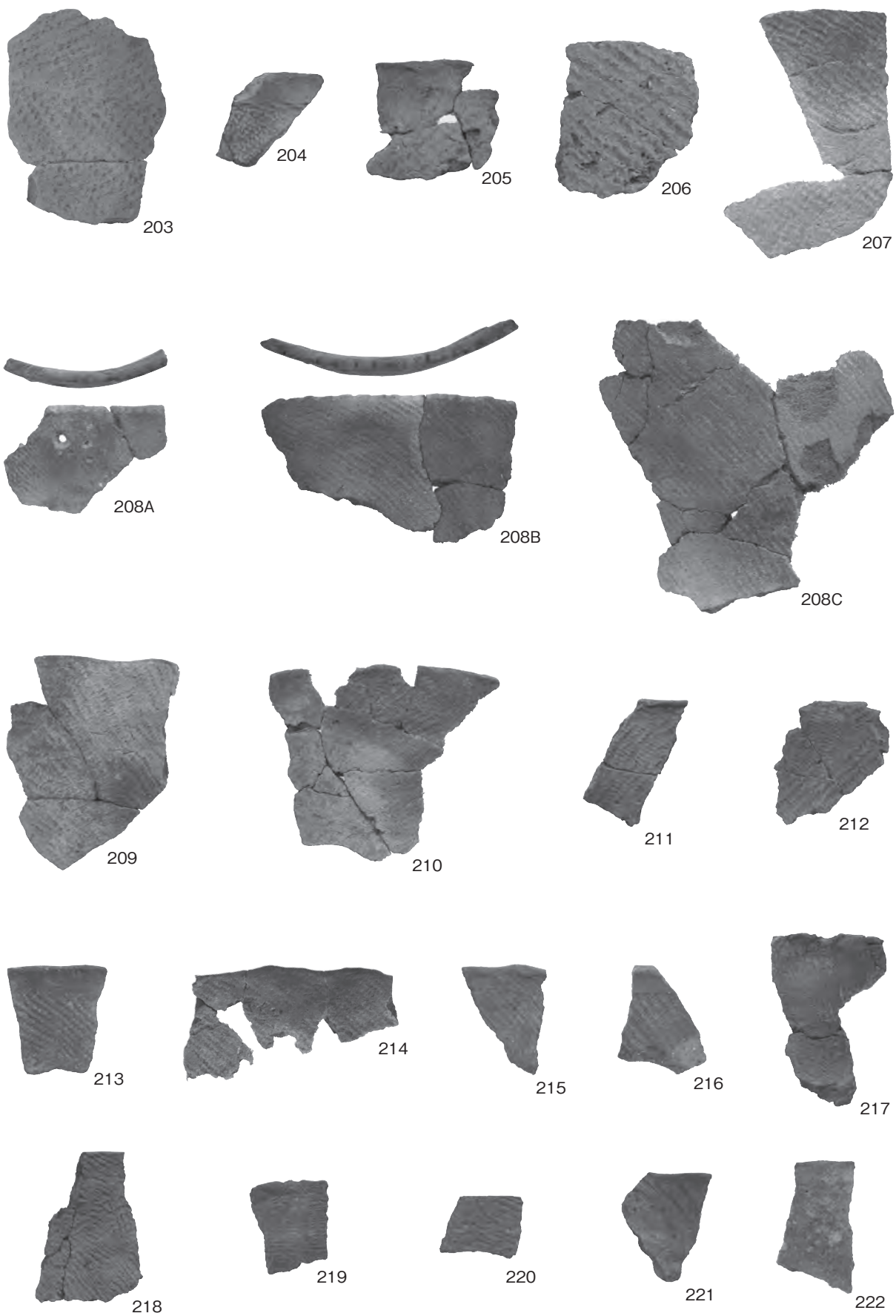
写真図版52 土坑、陥し穴状遺構出土遺物(2)



写真図版53 遺構外出土遺物（1）

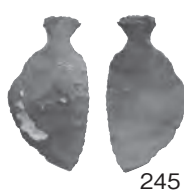
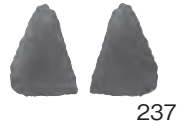
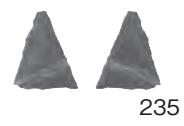
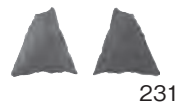
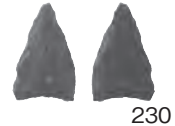
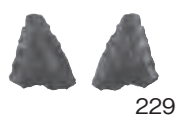
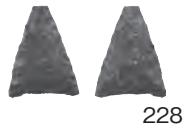
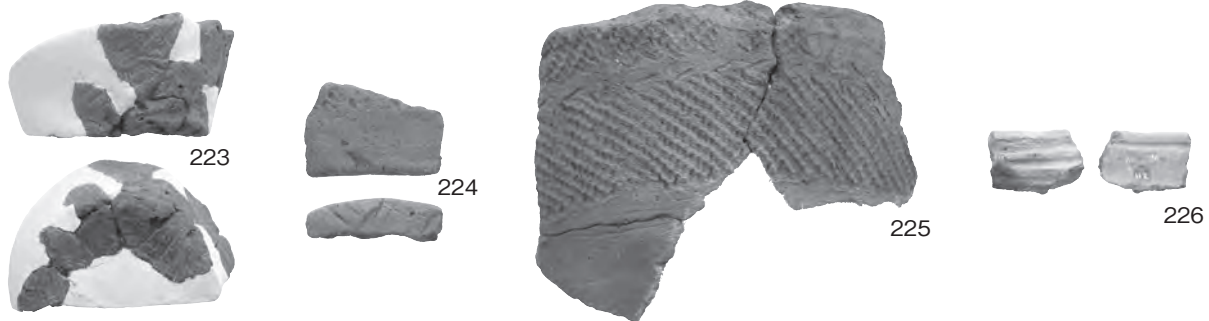


写真図版54 遺構外出土遺物 (2)



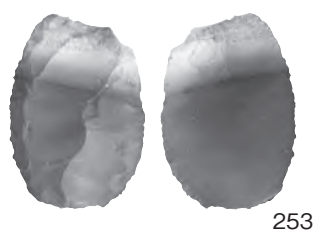
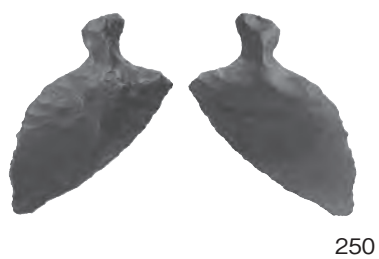
S ≐ 1/3

写真図版55 遺構外出土遺物 (3)



他 S ≒ 1/2  
\* 223~226 S ≒ 1/3

写真図版56 遺構外出土遺物 (4)



他 S≐1/2  
\*258 S≐1/3

写真図版57 遺構外出土遺物 (5)



S ≒ 1/3

写真図版58 遺構外出土遺物 (6)

## 報告書抄録

ふりがな	あしがさわ1・2いせきはつくつちようさほうこくしょ							
書名	芦ヶ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸沿岸道路関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第685集							
編著者名	菊池貴広・高橋義介							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638 - 9001							
発行年月日	2018年3月15日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あしがさわ1いせき 芦ヶ沢Ⅰ遺跡	いわてけんくじしおさないちよう 岩手県久慈市長内町 だい ちわりちない 第17地割地内	03207	JF49-1313	40度 9分 4秒	141度 45分 42秒	2016.04.06 ～ 2016.09.08	7,000㎡	三陸沿岸道路 関連発掘調査
あしがさわ2いせき 芦ヶ沢Ⅱ遺跡			JF49-1304	40度 9分 7秒	141度 45分 41秒		4,250㎡	
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
芦ヶ沢Ⅰ遺跡	集落 狩場跡	縄文時代	竪穴住居跡(前期)	10棟	土器	土器 大4箱 石器・石製品 大1箱		
			住居状遺構	2棟	石器			
			陥し穴状遺構	71基	石製品			
			土坑	3基				
			焼土遺構	14基				
			柱穴状土坑	2個				
		近現代	炭窯	3基				
芦ヶ沢Ⅱ遺跡		近現代	炭窯	2基	縄文土器 石器剥片			
要約	芦ヶ沢Ⅰ遺跡 標高80～90m前後の丘陵東斜面から、縄文時代前期前葉頃の竪穴住居跡が10棟検出している。内1棟は長軸13mを測る大型竪穴住居跡(ロングハウス)で、埋土に十和田火山を起源とする中振テフラを帯状に堆積している。規模から見て集落の中心的な役割をはたす竪穴住居跡と考えられる。また、沢沿いには溝状の陥し穴状遺構が71基分布しており、竪穴住居跡の重複関係から集落が廃絶された後に狩猟場として利用していたことが明らかとなった。							
	芦ヶ沢Ⅱ遺跡 遺構は近現代の炭窯2基を検出している。遺物は土器1点と石器剥片1点出土しているが、時期は不明である。							



---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 685 集

**芦ヶ沢 I・II 遺跡発掘調査報告書**

三陸沿岸道路関連遺跡発掘調査

印 刷 平成30年 2月20日

発 行 平成30年 3月15日

編 集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地  
電話 (019) 638 - 9001

発 行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
〒027-0029 岩手県宮古市藤の川 4 番 1 号  
電話 (0193) 62 - 1711  
(公財) 岩手県文化振興事業団  
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号  
電話 (019) 654 - 2235

印 刷 第一印刷有限公司  
〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ四丁目 6 - 40  
電話 (019) 646 - 6001

---

---

© (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2018